

粉河寺遺跡

— 長屋川通常砂防工事に伴う発掘調査報告書 —

二〇一二年二月

財団法人 和歌山県文化財センター

粉河寺遺跡

— 長屋川通常砂防工事に伴う発掘調査報告書 —

2011 年2月

財団法人 和歌山県文化財センター

序

紀の川市所在の粉河寺遺跡は、和歌山県北部を西流する紀の川と和泉山脈の間に位置しています。

西国三十三所観音霊場の第三番札所として知られる粉河寺において、これまでに実施された発掘調査事例が徐々に増加し、考古学的手法による寺院史の解明が期待されているところです。

財団法人和歌山県文化財センターでは、長屋川通常砂防工事に伴い平成 21 年度・同 22 年度に発掘調査を実施しました。小規模な調査ではありましたが、長屋川の護岸施設と考えられる鎌倉時代から江戸時代に断続的に続く石積み遺構を発見し、粉河寺の歴史的景観の一端を明らかにすることができました。

平成 22 年度に整理作業を進め、このたびその成果をまとめた発掘調査報告書を刊行することになりました。本書が県民の皆様のみならず、広く一般の方々の活用に資することができれば幸いかと存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本書の作成にあたりご指導・ご協力を賜りました粉河寺を始め、関係者各位、地元の皆様に対し厚くお礼申し上げます。

平成 23 年 2 月

財団法人 和歌山県文化財センター

理事長 鈴木 嘉 吉

例 言

- 1 本書は、和歌山県紀の川市粉河に所在する粉河寺遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、長屋川通常砂防工事に先立つもので、平成 21 年度・同 22 年度に粉河寺遺跡の発掘調査業務を行い、同 22 年度に出土遺物等整理業務を実施した。
- 3 発掘調査及び出土遺物等整理業務は、和歌山県の委託を受けた財団法人和歌山文化財センターが、和歌山県教育委員会の指導の下に実施した。
- 4 現地調査及び調査報告書の刊行に際し、紀の川市教育委員会をはじめ、関係機関および粉河寺・円解院など地元の方々からご助言・ご協力を得た。
- 5 本書は、各発掘調査・出土遺物等整理業務担当者が執筆し、土井が編集した。
- 6 図版に使用した遺構写真は、各調査担当者が撮影し、遺物写真は土井が撮影した。
- 7 発掘調査及び調査報告書の作成にあたっては、次の諸氏から多大なご指導・ご教示を賜った。
大高康正（富土市立博物館）、北野隆亮（財団法人和歌山市都市整備公社）、林 雅彦（明治大学法学部）、藤井保夫・立岡和人（紀の川市教育委員会）
- 8 発掘調査・出土遺物等整理業務で作成した図面・写真及び台帳等の記録資料は、財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が各々保管している。
- 9 本書に掲載した出土遺物は、膨大な量の中から任意に抽出したもので、各検出遺構・堆積土層の出土遺物を網羅するものではない。
- 10 出土遺物等整理業務において、主な木製品・金属製品の保存処理を財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所に委託業務として実施した。
- 11 発掘調査・出土遺物等整理業務の調査組織は、以下に示すとおりである。

調 査 組 織

事 務 局	平成 21 年度	平成 22 年度
事 務 局 長	田中 洋次	田中 洋次
管 理 課 長	富加見泰彦	富加見泰彦
埋蔵文化財課長	村田 弘	村田 弘
発掘調査業務担当	I・II 区	III 区
埋蔵文化財課	土井 孝之（主任）	富加見泰彦（管理課長）
出土遺物整理業務担当		
埋蔵文化財課		土井 孝之（主任）

凡 例

- 1 発掘調査及び出土遺物等整理業務は、『財団法人和歌山県文化財センター 発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006年4月）に準拠して行った。
- 2 遺構実測図及び地区割の基準線は、平面直角座標系第VI系（世界測地系）に基づき、値はm単位で使用している。また、図面に示した北方位は、座標北を示す。
- 3 遺構実測図の基準高は、東京湾標準潮位（T.P.）表示である。
- 4 発掘調査及び整理作業で使用した調査コードは、以下のとおりである。
09-07・022（2009年度・旧粉河町・粉河寺遺跡）
出土遺物・記録資料の整理に当って、全て上記の調査コードを使用している。
- 5 地区割の詳細については、本文の第三章第3節に記述する。
- 6 遺構番号と遺物番号は、1番からの通し番号とし、遺構番号には必要に応じて末尾に種類（性格）を付した。

例：61 下部堰基礎、111 堰基礎、136 階段状石組

なお、本書の大部分が石積遺構についての記述である。石積遺構にはⅠ・Ⅱ区各々の各遺構面での番号を付している。

- 7 本書の遺構・土層実測図は、特に縮尺を統一していないが、各々に明示している。図の表現で、遺構、任意掘削・掘り残し、攪乱でケバの表現を各々変えている。



- 8 遺物番号は、本文・実測図・写真図版において一致する。但し、遺物番号 601 以後は、写真図版のみである。
- 9 遺物実測図の縮尺は、原則としてⅠ・Ⅱ区の出土遺物は1/4で、Ⅲ区の出土遺物は1/3で、それ以外の場合は必要に応じて縮尺を明示している。遺物写真の縮尺は、特に統一していない。
- 10 調査時の土層の色調・土壌の粒径区分及び出土遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修 小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（2000年版）を使用した。

土層名で2種類以上の記載のある場合は、前者が主体で、後者が副になることを示す。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第Ⅱ章 粉河寺遺跡の歴史的環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 粉河寺の創立と沿革	2
第3節 歴史的環境	3
第4節 既往の調査	6
第Ⅲ章 発掘調査の方法と成果	10
第1節 調査現場の記録作業	10
1 写真撮影作業	10
2 実測図作成作業	10
3 基準点測量	10
第2節 出土遺物等資料の整理	10
1 出土遺物応急整理	10
2 出土遺物等整理業務	11
第3節 調査地の地区割	13
第4節 I・II区の調査成果	15
1 I・II区の基本的な層序	16
2 I・II区の検出遺構と出土遺物	20
(I区)	20
1 第Ⅰ面の調査	20
2 第Ⅱ面の調査	22
3 第Ⅲ面の調査	24
4 第Ⅳ面の調査	30
5 第Ⅴ面の調査	34
6 第Ⅴb面の調査	35
7 第Ⅰ面～第Ⅴb面の遺構と層序の関係	36
(II区)	40
1 第Ⅰ面・第Ⅰb面の調査	40
2 第Ⅲ面の調査	42
3 第Ⅳ面の調査	48
4 第Ⅴ面の調査	54
5 第Ⅴb面の調査	54
6 第Ⅵ面の調査	57
7 第Ⅵ面対応面以下の状況	58
8 第Ⅰ面～第Ⅵ面の遺構と層序の関係	59
3 小結	63
I・II区 出土遺物実測図	73

第5節 III区の調査成果	90
1 III区と既往の調査	90
2 III区の検出遺構と出土遺物	90
1) 左岸の調査	90
2) 右岸の調査	94
3 小結	95
III区 出土遺物実測図	96
第IV章 総括	98
付章 粉河寺遺跡出土遺物の保存処理報告	103
第1節 粉河寺遺跡出土遺物の保存処理	103
1 対象	103
2 木製品 (WAK10001 ~ 10004) の保存処理工程	103
3 鉄製品 (WAK10005) の保存処理工程	104
第2節 粉河寺遺跡出土柱材の樹種同定	109
1 試料	109
2 分析方法	109
3 結果	109
4 考察	109
出土遺物一覧 (凡例)	111
出土遺物一覧	112
本文中挿図・写真・表補遺	135
引用・参考文献	141
写真図版遺構・遺物	
報告書抄録	
奥付	

挿 図 目 次

図1	粉河寺遺跡と周辺の遺跡	4	図35	Ⅱ区 第IV面131～133護岸石積断面図	51
図2	既往の調査位置図	6	図36	Ⅱ区 第IV面136階段状石組断面図	51
図3	地区割模式図	13	図37	Ⅱ区 第IV面135排水溝実測図	52
図4	調査位置と区画割1（100m区画）Ⅰ～Ⅲ区	14	図38	Ⅱ区 第IV面139排水溝・140石組遺構実測図	53
図5	調査位置と区画割2（4m区画）Ⅰ・Ⅱ区	15	図39	Ⅱ区 第V面遺構全体平面図	55・56
図6	Ⅰ区の基本層序1	17	図40	Ⅱ区 第VI面主要遺構平面図	55・56
図7	Ⅰ区の基本層序2	17	図41	Ⅱ区 第Vb面150土坑実測図	54
図8	Ⅱ区の基本層序	18	図42	Ⅱ区 第VI面151・153橋脚実測図	57
図9	Ⅰ区 第Ⅰ面遺構位置全体図	21	図43	Ⅱ区 調査区南北断面土層図1	60
図10	Ⅰ区 第Ⅱ面遺構位置全体図	21	図44	Ⅱ区 調査区南北断面土層図2	61
図11	Ⅰ区 第Ⅱ面52石組遺構実測図	23	図45	Ⅱ区 調査区東壁断面土層図	62
図12	Ⅰ区 第Ⅲ面遺構全体平面図	25・26	図46	Ⅰ・Ⅱ区 各護岸石積他遺存状況の対比 （レベル数値の相関）	64
図13	Ⅰ区 第Ⅲ面61下部堺基礎実測図 （平面図・立面図）	25・26	図47	Ⅰ区 各遺構面護岸石積他断面位置の対比	64
図14	Ⅰ区 第Ⅲ面61下部堺基礎石積断面図	27	図48	Ⅱ区 各遺構面護岸石積他断面位置の対比	64
図15	Ⅰ区 第Ⅲ面62堺基礎・63排水溝実測図	27	図49	Ⅰ・Ⅱ区 遺構変遷図	65・66
図16	Ⅰ区 第Ⅲ面72門跡敷石実測図	28	図50	Ⅰ区出土遺物実測図1	73
図17	Ⅰ区 第Ⅲ面71配石土坑実測図	29	図51	Ⅰ区出土遺物実測図2	74
図18	Ⅰ区 第Ⅲ面67土坑遺物出土状況実測図	30	図52	Ⅰ区出土遺物実測図3	75
図19	Ⅰ区 第Ⅲ面68土坑実測図	30	図53	Ⅰ区出土遺物実測図4	76
図20	Ⅰ区 第IVb面遺構全体平面図 （81護岸石積立面図）	31・32	図54	Ⅰ区出土遺物実測図5	77
図21	Ⅰ区 第V面遺構全体平面図 （91護岸石積立面図）	31・32	図55	Ⅰ区出土遺物実測図6	78
図22	Ⅰ区 第IVb面81護岸石積断面図	33	図56	Ⅰ区出土遺物実測図7	79
図23	Ⅰ区 第IVb面82石列実測図	34	図57	Ⅰ区出土遺物実測図8	80
図24	Ⅰ区 第V面91護岸石積断面図	34	図58	Ⅰ区出土遺物実測図9	81
図25	Ⅰ区 第Vb面98門柱実測図	36	図59	Ⅰ区出土遺物実測図10	82
図26	Ⅰ区 調査区西壁断面土層図	37	図60	Ⅰ区出土遺物実測図11	83
図27	Ⅰ区 調査区南北断面土層図	38	図61	Ⅰ区出土遺物実測図12	84
図28	Ⅰ区 調査区東壁断面土層図	39	図62	Ⅰ区出土遺物実測図13	85
図29	Ⅱ区 第Ⅰ面遺構位置全体図	40	図63	Ⅰ・Ⅱ区出土遺物実測図	86
図30	Ⅱ区 第Ⅲ面遺構全体平面図 （111堺基礎・112大走り立面図）	40・41	図64	Ⅱ区出土遺物実測図	87
図31	Ⅱ区 第Ⅲ面111堺基礎・112大走り 石積断面図	45	図65	Ⅰ・Ⅱ区出土金属製品実測図	88
図32	Ⅱ区 第Ⅲ面129排水溝実測図	46	図66	Ⅰ・Ⅱ区出土木製品実測図	89
図33	Ⅱ区 第IV面遺構全体平面図 （131～133護岸石積立面図）	49・50	図67	調査位置と区画割3（4m区画）Ⅲ区	90
図34	Ⅱ区 第IV面131～133護岸石積区分図	49・50	図68	Ⅲ区と既往の調査位置	90
			図69	Ⅲ区 全体平面図	91
			図70	Ⅲ区 第1セクション東西断面土層図	92
			図71	Ⅲ区 第2セクション東西断面土層図	92
			図72	Ⅲ区 調査区南東壁断面土層図	93
			図73	Ⅲ区 調査区北西壁断面土層図	93

図74	Ⅲ区 出土遺物実測図1	96
図75	Ⅲ区 出土遺物実測図2	97
図76	「粉河寺境内絵図写」元禄8年(1695年)	100
図77	「粉河寺」『紀伊国名所図会 第三編 巻之一』	

天保9年(1838年)	100・101
図78 調査地と粉河寺山内の塔頭・子院の復元との関係	102
図79 「南紀補陀落山粉河寺四圍伽藍之図」	
トレース図	138

表 目 次

表1	発掘調査・出土遺物等整理工程表	1
表2	粉河寺遺跡と周辺の遺跡地名・史跡・名勝一覧 (調査履歴)	5
表3	I区 各層序別遺物数量	67
表4	Ⅱ区 各層序別遺物数量	68
表5	I区 遺物接合関係一覧	69
表6	Ⅱ区 遺物接合関係一覧	70

表7	I・Ⅱ区一括出土遺物の主要遺物個体数比率 (24分割)	71
表8	Ⅱ区出土瓦 製作技法・調整技法の比率算出	72
表9-1	「南紀補陀落山粉河寺四圍伽藍之図」 トレース図文字注記対応表1	139
表9-2	「南紀補陀落山粉河寺四圍伽藍之図」 トレース図文字注記対応表2	140

写 真 目 次

写真1	粉河寺大門	2
写真2	粉河寺中門	2
写真3	粉河寺本堂と名勝粉河寺庭園	3
写真4	産土神社跡塚群からの出土品	7
写真5	平成18年度調査 石積護岸(北東から)	8
写真6	平成18年度調査 西階段部(北から)	8
写真7	Ⅱ区 第Ⅵ面151・153橋脚断面作成	10
写真8	出土遺物登録台帳の作成	10
写真9	遺物(土器)の登録コード注記	11
写真10	遺物充填材による補強・復元	11
写真11	瓦の墨拓本取り	11
写真12	出土遺物の実測図作成(土器)	12
写真13	出土遺物の実測図作成(橋脚材)	12
写真14	遺物実測図トレース	12
写真15	遺物実測図レイアウト原稿作成	12
写真16	遺構断面デジタルトレース(レイアウト)	12
写真17	集計登録データ等入力	12
写真18	I区 第Ⅰ面検出のための掘削状況	20
写真19	I区 第Ⅰ面1土坑掘削状況(南から)	22
写真20	I区 第Ⅰ面6・7土坑掘削状況 (南から)	22
写真21	I区 第Ⅱ面 52石組遺構(北から)	23
写真22	I区 第Ⅲ面 62堀基礎・63排水溝	

	(東から)	28
写真23	I区 第Ⅲ面63排水溝 蓋石と61下部堀基礎と の関係 (北から)	28
写真24	I区 第Ⅲ面72門跡敷石 (南から)	29
写真25	I区 第Ⅲ面71配石土坑 (南西から)	29
写真26	I区 第Ⅲ面67土坑遺物出土状況 (北北東から)	30
写真27	I区 第Ⅲ面68土坑調査区南壁 断面土層 (北北西から)	30
写真28	I区 第Ⅳb面82石列 (北から)	33
写真29	I区 第7層系整地土遺物出土状況 (東北東から)	33
写真30	I区 第Ⅳb面84集石遺構 (北から)	35
写真31	I区 第Ⅴ面92石列 (北から)	35
写真32	I区 第Ⅴb面97落ち (北東から)	35
写真33	I区 第11層系堆積土遺物出土状況 (西から)	36
写真34	Ⅱ区 第Ⅰ面101上部堀基礎 (調査区西壁断面土層: 東から)	40
写真35	Ⅱ区 第Ⅰ面102溝状遺構 (東から)	41
写真36	Ⅱ区 第Ⅰ面107集石遺構 (調査区北壁断面土層: 東南東から)	41
写真37	Ⅱ区 第Ⅲ面111堀基礎石積み (H7-f6: 北から)	42

写真38	Ⅱ区 第Ⅲ面111堀基礎石積み (H7-j 6:北東から)	42	写真47	Ⅱ区 第Ⅵ面154杭列杭材打ち込み状況 (東から)	58
写真39	Ⅱ区 第Ⅲ面111堀基礎・112犬走り 南北セクション断面土層(西から)	45	写真48	Ⅱ区 第Ⅵ面杭22直下遺物出土状況 (北北西から)	58
写真40	Ⅱ区 第Ⅲ面対応礫石検出状況 (北東から)	46	写真49	Ⅲ区 第2セクション断面土層図作成 (南から)	91
写真41	Ⅱ区 第Ⅳ面対応調査区南壁断面土層 (東北東から)	47	写真50	Ⅲ区 調査区南東壁断面土層(北西から) ..	92
写真42	Ⅱ区 第Ⅳ面対応石塔出土状況 (H7-c 6調査区南壁断面:北から)	48	写真51	Ⅲ区 右岸調査区全景(北東から)	94
写真43	Ⅱ区 第Ⅳ面131~133護岸石積み (H7-i 6:北東から)	51	写真52	Ⅲ区 第4層出土 土師器小皿 (静止糸切り)	96
写真44	Ⅱ区 第Ⅳ面136階段状石組(北から)	51	写真53	Ⅲ区 第3層出土 土師器皿(灯明皿)	96
写真45	Ⅱ区 第Ⅳ面139排水溝東側溝 (石組崩落状態:北東から)	52	写真54	旧中門に至る階段位置と推定される 石積み基礎(西南西から)	101
写真46	Ⅱ区 第Ⅴb面150土坑遺物出土状況 (西から)	54	写真55	「南紀補陀落山粉河寺四圍伽藍之図」 (粉河寺藏)	138

付章 表・写真目次

表1	保存処理対象資料一覧	103	付章写真2	鉄製品(WAKI 0005) X線透過写真	106 ~ 108
表2	粉河寺遺跡の樹種同定結果	109	付章写真3	粉河寺遺跡の木材(顕微鏡写真)	110
付章写真1	保存処理前後の遺物状態	105			

写真図版目次

写真図版1 粉河寺 境内航空写真

(昭和55年頃)

写真図版2 I・II区 調査前の状況

- 1 I・II区 調査前の状況(長屋川2号橋から調査地を望む)(西南西から)
- 2 I・II区の発掘調査位置(西南西から)

写真図版3 I区 第I面遺構の調査

- 1 I区 第I面遺構全景(西南西から)
- 2 I区 第I面遺構全景(東北東から)

写真図版4 I区 第II面遺構の調査

- 1 I区 第II面遺構全景(西南西から)
- 2 I区 第II面遺構全景(東北東から)

写真図版5 I区 第III面遺構の調査

- 1 I区 第III面遺構全景(西南西から)
- 2 I区 第III面61下部堀基礎を斜め横から見た状態(西から)

写真図版6 I区 第III面遺構の調査

- 1 I区 第III面遺構全景(西南西から)
- 2 I区 第III面遺構全景(東北東から)

写真図版7 I区 第III面・第IVb面遺構の調査

- 1 I区 第III面61下部堀基礎を斜め横から見た状態(北東から)
- 2 I区 第III面61下部堀基礎と第IVb面81護岸石積との関係(北東から)

写真図版8 I区 第IVb面遺構の調査

- 1 I区 第IVb面遺構全景(西南西から)
- 2 西端を斜め横から見た状態(北東から)
- 3 西端を斜め横から見た状態(西から)
- 4 東半部の護岸石積(東北東から)

写真図版9 I区 第IVb面・第V面遺構の調査

- 1 I区 調査区西壁断面土層(北東から)
- 2 I区 第IVb面護岸石積と第V面91護岸石積の関係(東北東から)

写真図版10 I区 第V面遺構の調査

- 1 I区 第V面遺構全景(西南西から)
- 2 西端を斜め横から見た状態(西から)
- 3 91護岸石積の屈折点3(西から)
- 4 91護岸石積と94石列(北北西から)

写真図版11 I区 第V面・第Vb面遺構の調査

- 1 I区 第V面91護岸石積 北側にずれた並びの石

積み(西から)

- 2 I区 第Vb面遺構 98門柱検出状況(北北西から)

写真図版12 I区 調査区壁面他断面土層

- 1 I区 調査区西壁断面土層(東北東から:図26に対比)
- 2 I区 第Ib面20上部堀基礎崩れと第III面61下部堀基礎との層序関係(北東から:図27に対比)
- 3 I区 調査区南北断面土層(東北東から:図27に対比)
- 4 I区 調査区H7・t・u8南壁断面土層(北北西から:図6に対比)
- 5 I区 調査区東壁断面土層(第III面より上土層:西南西から)
- 6 I区 第Ib面21土坑と調査区南壁断面土層(西北西から)
- 7 I区 調査区東壁断面土層(西南西から:図28に対比)
- 8 I区 調査区H7・1・m7南壁断面土層(北北西から:図7に対比)

写真図版13 II区 調査前の状況・第I面遺構の調査

- 1 II区 調査前の状況(東から)
- 2 II区 第I面遺構全景(西から)

写真図版14 II区 第III面遺構の調査

- 1 II区 第III面遺構全景(西から)
- 2 II区 第III面遺構全景(東から)
- 3 組合式五輪塔の出土状況(南から)
- 4 青灰色粗砂礫層上位の瓦出土状況(東から)

写真図版15 II区 第III面遺構の調査

- 1 II区 第III面111堀基礎・112犬走り(東北東から)
- 2 II区 第III面111堀基礎・112犬走り(西北西から)

写真図版16 II区 第III面遺構の調査

- 1 II区 第III面111堀基礎・112犬走り(西から)
- 2 第III面111堀基礎・112犬走りの積み石を斜め横から見た状態(西北西から)
- 3 第III面111堀基礎・112犬走りの積み石を斜め横から見た状態(東北東から)
- 4 第III面111堀基礎・112犬走りの直線的な配置

- (東から)
- 5 第Ⅲ面112犬走りの積み石の無い部分
(東北東から)
- 写真図版17 Ⅱ区 第Ⅲ面遺構の調査**
- 1 Ⅱ区 第Ⅲ面111塀基礎・112犬走り
南北断面土層 (西から:図43に対応)
- 2 第Ⅲ面111塀基礎・112犬走りの積み石の状態
(北から)
- 3 第Ⅲ面111塀基礎・112犬走りの積み石の状態
(北から)
- 4 第Ⅰb面108暗渠排水溝 (北から)
- 5 第Ⅲ面129排水溝 (北から)
- 写真図版18 Ⅱ区 第Ⅳ面遺構の調査**
- 1 Ⅱ区 第Ⅳ面131～133石積護岸全景
(西北西から)
- 2 Ⅱ区 第Ⅳ面131～133護岸石積細部の状態
(部分的に崩れた石を除いた状態:北から)
- 写真図版19 Ⅱ区 第Ⅳ面遺構の調査**
- 1 Ⅱ区 第Ⅳ面131～133石積護岸全景
(東北東から)
- 2 Ⅱ区東側 第Ⅳ面131・132護岸石積 (北から)
- 3 Ⅱ区西側 第Ⅳ面131・132護岸石積
(東北東から)
- 4 Ⅱ区 第Ⅳ面135排水溝
(崩落石除去後:北から)
- 5 Ⅱ区 第Ⅳ面135排水溝
(石組崩落状態:北から)
- 写真図版20 Ⅱ区 第Ⅳ面・第Ⅴ面遺構の調査**
- 1 Ⅱ区 第Ⅳ面139排水溝東側
(崩落石除去後:北西から)
- 2 Ⅱ区 第Ⅳ面139排水溝東側
(石組崩落状態:北西から)
- 3 Ⅱ区 第Ⅳ面139排水溝西側
(崩落石除去後:南東から)
- 4 Ⅱ区H7-j6 調査区北壁断面土層の状態
(南から)
- 5 Ⅱ区 第Ⅴ面遺構全景 (東北東から)
- 写真図版21 Ⅱ区 第Ⅵ面遺構の調査**
- 1 Ⅱ区 第Ⅵ面主要遺構全景 (西から)
- 2 Ⅱ区 第Ⅵ面根固め石を伴う151・153橋脚
(北から)
- 写真図版22 Ⅱ区 第Ⅵ面遺構の調査**
- 1 Ⅱ区 第Ⅵ面151・153橋脚と木杭列の位置関係

- (東から)
- 2 Ⅱ区 第Ⅵ面151橋脚・柱材根固めの状態
(北から)
- 3 Ⅱ区 第Ⅵ面153橋脚・柱材根固めの状態
(北から)
- 4 Ⅱ区 第Ⅵ面二列平行の157・158木杭列
(西から)
- 5 Ⅱ区 第Ⅵ面ハネ構造をもつ154木杭列
(東から)
- 写真図版23 Ⅱ区 調査区壁面他断面土層**
- 1 Ⅱ区西側 調査区南壁断面土層 (東北東から)
- 2 Ⅱ区西側 調査区南壁断面土層 (西北西から)
- 3 Ⅱ区 調査区H7-f6南北断面土層
(西から:図43に対応)
- 4 Ⅱ区 調査区H7-f・g7南壁断面土層
(北から:図8に対応)
- 5 Ⅱ区 調査区H7-e5・6南北断面土層
(西から:図44に対応)
- 6 Ⅱ区 調査区H7-e5・6南北断面土層細部
(西から:図44に対応)
- 7 Ⅱ区東側 調査区東壁断面土層
(西から:図45に対応)
- 8 Ⅱ区東側 調査区南壁断面土層 (東北東から)
- 写真図版24 Ⅰ・Ⅱ区各種出土遺物**
- 写真図版25 Ⅰ区出土遺物1**
- 写真図版26 Ⅰ区出土遺物2**
- 写真図版27 Ⅰ区出土遺物3**
- 写真図版28 Ⅰ区出土遺物4**
- 写真図版29 Ⅰ区出土遺物5**
- 写真図版30 Ⅰ区出土遺物6**
- 写真図版31 Ⅰ区出土遺物7**
- 写真図版32 Ⅰ区出土遺物8**
- 写真図版33 Ⅰ区出土遺物9**
- 写真図版34 Ⅰ区出土遺物10**
- 写真図版35 Ⅰ区出土遺物11**
- 写真図版36 Ⅰ区出土遺物12**
- 写真図版37 Ⅰ区出土遺物13**
- 写真図版38 Ⅰ区出土遺物14**
- 写真図版39 Ⅰ区出土遺物15**
- 写真図版40 Ⅰ区出土遺物16**
- 写真図版41 Ⅰ区出土遺物17**
- 写真図版42 Ⅰ区出土遺物18**
- 写真図版43 Ⅱ区出土遺物1**

写真図版44 II区出土遺物2

写真図版45 II区出土遺物3

写真図版46 II区出土遺物4

写真図版47 II区出土遺物5

写真図版48 II区出土遺物6

写真図版49 II区出土遺物7

写真図版50 II区出土遺物8

写真図版51 II区出土遺物9

写真図版52 II区出土遺物10

写真図版53 II区出土遺物11

写真図版54 II区出土遺物12

写真図版55 I・II区出土金属製品・木製品

写真図版56 III区 長屋川左岸の調査

1 III区 左岸調査地全景

(第3・4層まで掘削状況：西西南西から)

2 III区 左岸調査地全景

(無遺物層まで掘削状況：北から)

3 III区 左岸調査地 第1セクションベルト断面土層(第3・4層まで掘削状況：南西から)

4 III区 左岸調査地 第2セクションベルト断面土層(無遺物層まで掘削状況：南西から)
状況：北西から)

写真図版57 III区 長屋川右岸の調査

1 III区 右岸調査地全景

(無遺物層まで掘削状況：南から)

2 III区 右岸調査地全景

(無遺物層まで掘削状況：南南東から)

3 III区 右岸調査地北西壁断面土層

(無遺物層まで掘削状況：南東から)

4 III区 調査前の状況(南西から)

5 III区 竣工後の仮設復旧状況(南西から)

写真図版58 III区出土遺物1

写真図版59 III区出土遺物2

写真図版60 III区出土遺物3

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

紀の川市粉河（旧粉河町）所在の粉河寺遺跡（図1・表1の22、以下、「図1」・「表1」を省略）は、長屋川を境に北側がその範囲とされていたが、平成16年度（2004）に和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課（以下、「県文化遺産課」とする）が実施した試掘調査により、長屋川の南まで遺構・遺物の分布が認められたため、埋蔵文化財包蔵地の範囲変更が行われた。

長屋川は、現状では川幅が狭く、河床も浅いため治水力の悪化と安全性の低下が進み、河川として十分に機能を発揮できない状況にあった。そのため、対象となる長屋川は、稀に生じる水害と北側で建設されている京奈和自動車道紀北東道路の一連の竣工に対処するため、砂防ダムの建設・川幅の拡大・河床の掘下げなどによって安全性の向上を図ることになっている。

当該地域では、昭和40年代から長屋川の上流側から砂防環境整備（後に「通常砂防」に事業変更されている）工事が、下流側から河川改修工事として実施されてきた。これらの工事は、粉河寺の古への景観との調和・融合を考慮して護岸の施工に当たっては石積みが施されている。

平成18年（2006）3月29日に県教育委員会職員が、粉河寺遺跡内の長屋川での工事着工を確認した。この和歌山県那賀振興局建設部（以下、「県建設部」とする）によって進められていた長屋川砂防環境整備工事が周知の粉河寺遺跡の範囲に該当していたため、工事を中断し県文化遺産課が急遽立会調査を行った（平成18年（2006）3月30日、4月6日）。その結果、多数の中世に属する遺物や石組遺構等が検出されたため、協議のうえ、平成18年度（2006）の発掘調査を実施することとなった。

これを受けて、長屋川砂防環境整備工事に伴う第1次発掘調査は、平成18年（2006）11月13日から平成19年（2007）1月31日にかけて、約220㎡について当文化財センターが実施した。

次いで、今後の県建設部による長屋川通常砂防（砂防環境整備）工事の施工計画に関して、当地には粉河寺遺跡が所在するため、その取扱いについて県文化遺産課と県建設部との協議がなされた。その結果、周知の埋蔵文化財包蔵地内において既往の調査成果を鑑みて本調査を実施する運びとなった。また、工事の進捗に合わせて随時、県文化遺産課が確認調査を行い、その結果を受けて遺跡の取扱いについて協議がなされることになった。

今回の長屋川通常砂防工事に伴う第2次発掘調査は、平成20年（2008）11月に実施された確認調査成果に基づいたものである。調査は、平成21年（2009）7月28日から平成21年（2009）12月18日にかけて、約431㎡を対象に340㎡について実施した。第3次発掘調査は、河床部分も含めて調査対象となっていた。そのため、増水等に関する安全面や作業の効率性を考慮して、渇水期である平成22年（2010）11月4日から平成23年（2011）1月7日にかけて、約194㎡を対象に159㎡について実施した。（引用・参考文献10『粉河寺遺跡—長屋川砂防環境整備工事に伴う発掘調査報告書—』）

表1 発掘調査・出土遺物等整理業務工程表

調査回数	年度	平成21年度												平成22年度												
		月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
第2次調査	I区 II区																									
第3次調査	III区																									
出土遺物等整理 報告書印刷期間含む																										

第Ⅱ章 粉河寺遺跡の歴史的環境

第1節 地理的環境 (図1、写真図版1)

紀の川中流域の北岸と和泉山脈の間には、緩やかな勾配をもった丘陵、段丘、氾濫原の地形面が階段状に連なっている。和泉山脈から南流する名手川と中津川の間には隆起扇状地状を呈する上位段丘面が広がるが、小河川により細かく浸食され、多数の谷底平野を形成している。粉河寺は、この段丘南西部の長屋川など小河川により形成された谷底平野末端部に位置する。この北側にも東から順に葉師谷、湯屋谷、不動谷の小さな谷底平野が連なっており、坊・院の存在が推定されている。

長屋川は、和泉山脈から派生した小丘陵の谷合いから僅かな距離をもって中津川に注ぎ込み、その中津川も僅か2kmほどで紀の川に流れ込む小河川である。この長屋川は、粉河寺境内側面を西に流れる。

中津川以西には、以東に比較して複合扇状地が隆起した段丘面の形状が良好に残されており、少ないながらもこの段丘面上に原始からの人びとの営みが垣間見られる。(引用・参考文献10『粉河寺遺跡—長屋川砂防環境整備工事に伴う発掘調査報告書—』)

第2節 粉河寺の創立と沿革 (写真1～3)

粉河寺は古くは補陀洛山と号したが、現在は風猛山粉河寺と号し、粉河観音宗の本山で西国三十三所観音巡礼の第三番札所として、また国宝絹本著色粉河寺縁起を有することですと有名である。(引用・参考文献3『名勝 粉河寺庭園 粉河寺六角堂 史跡名勝建造物緊急修復事業概報』)

粉河寺は古くから天台宗に属する寺院であったが、現在は「粉河観音宗」として独立し、単立宗教法人になっている。本尊は、「千手観音」である。(引用・参考文献4『重要文化財 粉河寺大門 修理工事報告書』)

寺伝では、宝亀元年(770)に大伴孔子古によって創立されたといわれ、「三代実録」貞観十四年(872)8月10日条に「紀伊国那賀郡人左少史正六位上伴連貞宗、父六位上伴連益継等、改本居貫隸右京」とある益継・貞宗父子が「粉河寺縁起」に記される粉河寺別当系譜と一致することや、大和朝廷における豪族大伴氏の一支族と思われる豪族が名草・那賀両郡に分布していることなどから、この地の豪族大伴氏の氏寺として創建されたとする見解もある。



写真1 粉河寺大門



写真2 粉河寺中門

平安時代以降には、観音の霊地として、また補陀洛信仰の中心地として正暦二年（991）花山法皇・永承三年（1048）関白藤原頼道を始めとして多くの人々が参詣し、伽藍が整備された。その後、承平五年（935）・応仁元年（1466）・天正十三年（1585）・元和二年（1616）・正徳三年（1713）に伽藍が焼失し、その都度伽藍の復旧・整備が行われてきた。

粉河寺の境内は、風猛山と秋葉山に囲まれた谷筋に沿って湾曲した自然地形を巧みに利用した細長い地を占めており、大門から中門を経て本堂へ至る参道を主軸としている。大門（写真1）から中門に至る壇、中門（写真2）を中心とする壇、本堂（写真3）を中心とする壇、更にその背後にある粉河産土神社の所在する壇と、順次高さに変化をもたせながらそれぞれに関係諸堂を配した伽藍配置となっている。

名勝粉河寺庭園（写真3）は、中門と本堂の壇を中心とした地域で、それぞれのほぼ中央に幅の広い石敷の参道を設けて参詣者を導く。中門と本堂の壇は、約3mの高低差があり、参道は階段とし、この段差を巧みに利用し、その法面の石垣の代わりに豪華な巨石を用いて石組とした庭園である。

西国三十三所観音巡礼の第三番札所にふさわしい巨大な本堂と広い境内と十分な均衡を保たせてなおかつ調和させた力強い豪快な作風である。この庭園は、中門を入った中壇から眺めるもので、庭園の背後に本堂があるという奇抜な、参詣者の意表をついた作庭者の意図がうかがわれる。（引用・参考文献3『名勝 粉河寺庭園 粉河寺六角堂 史跡名勝建造物緊急修復事業概報』）

粉河寺は、11世紀末には三井寺との関係を深め、聖護院（三井寺僧増誉が白河上皇より一院を賜ったことに始まる寺院で、修験者の統括的な立場にあった）の末寺となることで、安定的な寺領経営を一定度行いうるようになった。（引用・参考文献11 新谷和之「11 粉河寺」『和歌山城郭研究』）

第3節 歴史的環境（図1・表1）

旧粉河町内の遺跡は、41箇所であり紀の川流域の他市町に比べそれほど多くはないが、地勢に関係して段丘が広がる紀の川北岸に遺跡の分布が目立っている。特に、粉河寺周辺と長田観音付近で遺跡の密度が高くなる。一方、旧粉河町内では既往の発掘調査事例は、粉河寺遺跡を除いて数少ない状況にある。

周辺の遺跡について、時代別に簡単に記述する。

旧石器時代では、紀の川北岸の中津川に接する段丘上の猪垣遺跡（図1・表1の9、以下、「図1」・「表1」を省略）で国府型ナイフ形石器など少量の遺物が発見されている。

縄文時代では、粉河寺大門の北東約500mの高位段丘面南端で発見された西風山遺跡（5）がある。土器片20点、埴器片1点、叩石1点や炉跡の可能性を示す焼石が出土しており、縄文時代中期～後期と考えられている。下層からは前期の隆起線文土器が1点出土している。この他にも、紀の川南岸の荒見中筋遺跡（18）などで有舌尖頭器や石鏃が出ている。

弥生時代の明確な遺跡は認められず、遺物の採集が少数あるのみである。表1には掲載されていないが、伝粉河寺として『粉河寺大卒塔婆建立縁起』（弘仁10年（819）の「一尺五・六寸」が引用され、古



写真3 粉河寺本堂と名勝粉河寺庭園

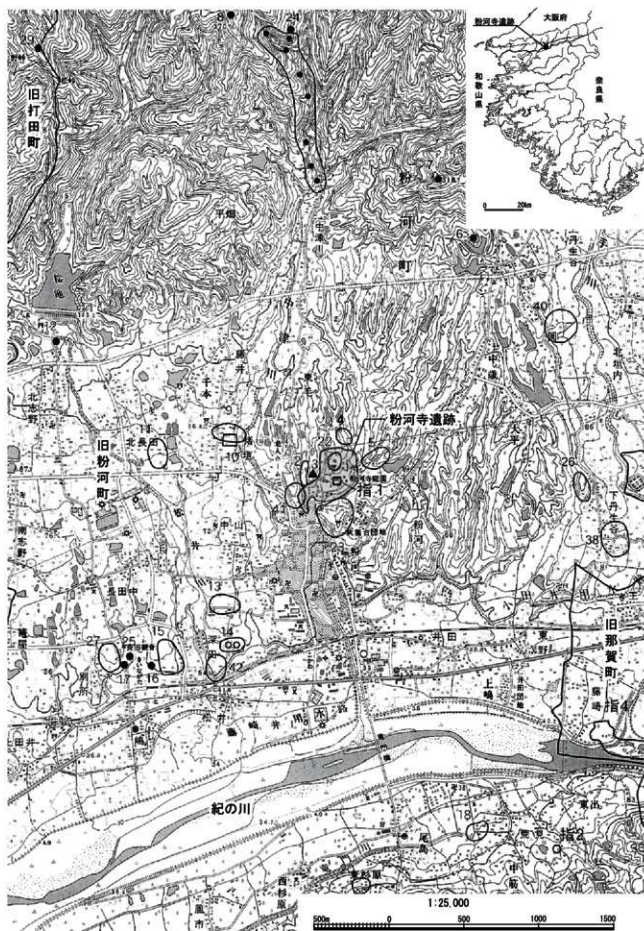


図1 粉河寺遺跡とその周辺の遺跡

『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』
和歌山県教育委員会2007年3月31日発行

表2 粉河寺遺跡と周辺の遺跡地名・史跡・名勝一覧（調査履歴）

埋蔵文化財包蔵地

遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	時代	立地	遺跡概況
紀の川市(旧粉河町)						
1	産土神社跡塚群	粉河	経塚	平安～鎌倉	山腹	石組、井戸、経塚3基
1-1	産土神社1号経塚	粉河	経塚	平安	山腹	常滑焼壺、青銅経筒(天治2年銘)、経巻(妙法蓮華経8))
1-2	産土神社2号経塚	粉河	経塚	鎌倉?	山腹	方形の盛土、常滑焼壺、片口、瓦製経筒、刀子(2)、鈴、鉄鏝、瓦器、鉄製品
1-3	産土神社3号経塚	粉河	経塚	鎌倉	山腹	緑釉陶器、鏡(3)、刀子、瓦製壺、須恵器壺、青磁片
2	不動谷遺跡	粉河	建物跡	室町～安土桃山	谷	井戸、瓦器、敷石、礎石
3	湯屋谷遺跡	粉河	出土地	安土桃山	谷	宋銭多数出土(開元通宝、洪武通宝、永樂通宝)
4	東館谷遺跡	粉河	散布地	平安?	丘陵	有孔石製模造品、瓦器
5	西風山遺跡	粉河	散布地	縄文	丘陵	縄文土器、石鏡
6	芥天山経塚	上丹生谷	経塚	江戸	山腹	
7	観音山経塚	上丹生谷	経塚	江戸	山頂	
8	中津川経塚	中津川	経塚	江戸	山麓	楕円形の盛土、一字一石経
9	猪垣遺跡	猪垣	散布地	縄文・古墳・中世	河岸段丘	ナイフ形石器、石鏝、サヌカイト、須恵器、土師器、瓦器
10	賀茂寺跡	猪垣	寺院跡	室町	河岸段丘	
11	北長田遺跡	北長田	散布地	縄文、弥生、中世	河岸段丘	中世の柱穴、サヌカイト、弥生土器、東播磨須恵器
12	松池経塚	北志野	経塚	江戸	丘陵端	径4mの円形の盛土、石碑
13	上打田遺跡	粉河	散布地	縄文	河岸段丘	石鏡
14	下打田古墳群	粉河	古墳群	古墳	河岸段丘	円墳2基、墳丘消滅
14-1	下打田1号墳	粉河	古墳	古墳	河岸段丘	円墳、箱式石棺?、須恵器(高坏、壺)
14-2	下打田2号墳	粉河	古墳	古墳	河岸段丘	円墳
15	円満寺遺跡	深田	散布地	弥生	河岸段丘	有柄石鏝(7)、土鏝(1)、石鏝(1)
16	春日塚古墳	深田	古墳	古墳	河岸段丘	円墳、横穴式石室、墳丘消滅
17	尾島古墳	別所	古墳	古墳	河岸段丘	円墳、横穴式石室、墳丘消滅
18	荒見中馬道跡	荒見	散布地	縄文	丘陵端	有舌尖頭器、サヌカイト片、石鏝
19	中津川町石	中津川	町石	江戸	山麓	12基中9基現存
20	荒見原寺	荒見	寺院跡	平安	丘陵端	瓦
(21)	新瀬八幡神社遺跡	中瀬瀬	神社跡	中世	山腹	瓦器、土師器
22	粉河寺遺跡	粉河	寺院	奈良?～	丘陵端	瓦、瓦器、土師器、井戸、塙桶
23	猿岡山城跡	粉河	城館跡	近世	丘陵端	秋葉山城
24	梅家寺経塚	中津川	経塚	江戸?	山麓	
25	長田観音寺境内古墳	別所	古墳	古墳	河岸段丘	
26	下丹生谷遺跡	下丹生谷	散布地	古墳～江戸	丘陵	須恵器、土師器、瓦、陶磁器
27	別所遺跡	別所	散布地	縄文～江戸	河岸段丘	石鏝、縄文土器、瓦器など
(28)	飯盛城跡	中瀬瀬	城館跡	中世	山頂	三段築成、礎
(29)	小飯盛城跡	中瀬瀬	城館跡	中世	山頂	不明瞭な平坦部を残す
(30)	基白山城跡	荒見	城館跡	中世	山頂	石垣、空堀
(31)	龍門山城跡	勝神	城館跡	中世	山頂	二段の曲輪、旧打田町飛地にまたがる
(32)	秋葉山城跡	中瀬瀬	城館跡	中世	山頂	
(33)	清川城跡	上瀬瀬	城館跡	中世	山腹	石垣、土塁、空堀、曲輪、通路
(35)	土井ノ森城跡	中瀬瀬	城館跡	南北朝	山腹	空堀、腰曲輪
(36)	中野南城跡	中瀬瀬	城館跡	南北朝	山頂	
(37)	芦上城跡	東川原	城館跡	中世	山頂	
38	丹生谷城跡	下丹生谷	城館跡	南北朝	河岸段丘	
(39)	名手城跡	馬宿	城館跡	南北朝	河岸段丘	
40	岡城跡	上丹生谷	城館跡	南北朝	河岸段丘	
41	矢倉城跡	粉河	城館跡	南北朝	丘陵頂	空堀
42	小川城跡	松井	城館跡	中世	河岸段丘	
紀の川市(旧打田町)						
29	吉野峠経塚	北勢田	経塚	中世～近世	山腹	石碑、封土

史跡・名勝

番号	名称	指定区分	指定種別	指定年月日	所在地	所有者(管理団体又は管理者)・備考
紀の川市(旧粉河町)						
1	粉河寺庭園	国	名勝	昭45.4.23	粉河	粉河寺
2	森田節斎翁墓地	県	史跡	昭33.4.1	荒見	個人
紀の川市(旧那賀町)						
(1)	旧名手宿本陣	国	史跡	昭45.4.2	名手市場	(紀の川市)
(2)	華岡青洲の墓碑	県	史跡	昭32.11.19	西野山	個人
4	藤崎弁天	県	名勝	昭33.4.1	藤崎	(紀の川市)

遺跡番号()付は、図1の範囲外に所在する

遺跡・史跡・名勝内での調査履歴あり

和歌山県教育委員会「和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図」2007を一部改変・補筆

くから銅鐸の存在の可能性が伝えられている。

古墳時代の集落遺跡もほとんど認められない。紀の川中流域では西側に位置する旧打田町と旧粉河町を境にその東側で古墳の数が激減する。旧粉河町内では現存する古墳は1基もなく、僅かに長田観音から深田の段丘端に下打田古墳群(14)・春日塚古墳(16)・尾鼻古墳(17)・長田観音寺境内古墳(25)と称される消滅古墳が少数存在したとされるのみである。

奈良時代以降になっても、城館跡や経塚は増加するものの、現在のところ集落遺跡についてはほとんど確認されていない。粉河寺の北には、不動谷遺跡(2)・湯屋谷遺跡(3)・薬師谷遺跡(4)・産土神社経塚群(1)などが位置するが、粉河寺の関連遺跡と捉えた方がよいであろう。

これらの遺跡の内、猪垣遺跡(9)・薬師谷遺跡・北長田遺跡(11)において開発に伴う発掘調査・確認調査が実施されている。遺物の出土を見るが、明確な遺構や遺物包含層の存在が確認されていない。

(引用・参考文献10『粉河寺遺跡—長屋川砂防環境整備工事に伴う発掘調査報告書—』)

第4節 既往の調査

粉河寺遺跡の発掘調査事例は、今回の調査を含めて以下の10地点(⑥を含む、⑨を2地点とする。)を数えることができる。

- ①産土神社経塚群発掘調査(昭和34年(1959))：引用・参考文献1・2
- ②北室院試掘調査(昭和57年(1982))：引用・参考文献1・2
- ③六角堂解体修理に伴う発掘調査(平成7年(1995))：引用・参考文献3

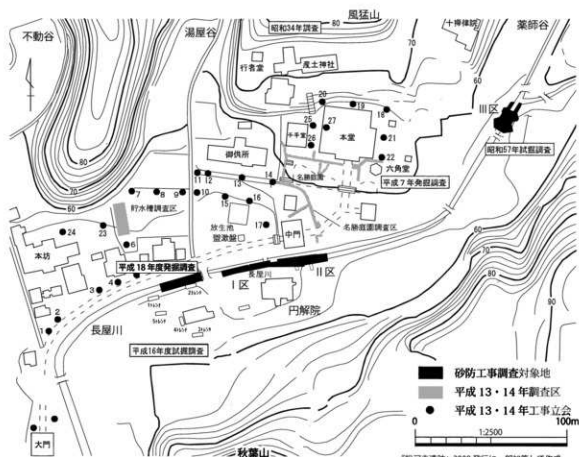


図2 既往の調査位置図

- ④防災事業に係る発掘調査・立会（平成13・14年度（2001・2002）・173㎡、立会27箇所断面土層図作成・名勝粉河寺庭園調査区トレンチ、県文化遺産課）：引用・参考文献4～7
- ⑤長屋川左岸確認調査（平成16年度（2004）・57㎡、和歌山県教育委員会）：引用・参考文献8
- ⑥長屋川砂防環境整備工事に伴う工事立会（平成18年度（2006）・県文化遺産課）：引用・参考文献9
- ⑦長屋川砂防環境整備工事に伴う粉河寺遺跡発掘調査（平成18年度（2006）・220㎡、県文化財センター）：引用・参考文献10
- ⑧長屋川砂防工事に伴う粉河寺遺跡確認調査（平成20年度（2008）・47㎡、県文化遺産課）：今回の第2次発掘調査区の確認調査
- ⑨長屋川通常砂防工事に伴う粉河寺遺跡発掘調査（平成21年度（2009）・340㎡、平成22年度（2010）・159㎡、県文化財センター）：今回の第2次・3次発掘調査

①の産土神社経塚群は、産土神社背後の雑木林に位置する。植林中に第1号経塚が、その後の整地中に第2・3号経塚と井戸が発見されている。第1号経塚の経筒は、天治2年（1125年）銘をもつ鉄製経筒に納入され、この経筒は陶製の外筒（猿投窯産）に納められていた。鎌倉時代初頭の第2号経塚は、須恵質の片口鉢を蓋にした常滑壺の中に経筒が納められ、鉄製刀子・鉄・鈴・鎌・提子、瓦器碗が副納されていた。第3号経塚は、攪乱が激しいが、常滑壺片、刀子、鏡、鉄製鍋、瓦器碗片等が出土している（写真4）。



写真4 産土神社経塚群からの出土品

②の調査では、寺域の東端付近で、古絵図（写真54 図79）に「北室院」と表示された中院谷に面した地点に、第Ⅰから第Ⅳ調査区を設定して調査を実施している。平安時代の瓦や室町時代の土師器などが出土した他、天正の兵火時の堆積と考えられる焼土層が確認されている。

③の調査では、正徳3年（1713年）に本堂が焼失した際の焼土や瓦を含む整地層が検出されている。

④の防災事業に係る調査は、初めて寺の中心部を対象とした発掘調査である。約170㎡の貯水槽および名勝粉河寺庭園指定範囲内の配管工事部を対象とした本発掘調査の他、その他の配管工事部に対して立会調査を実施している。

貯水槽調査区では、中世から近世に至る6時期の遺構面が確認され、中世から近世をとおして井戸・堀桶・溝など水場として利用されていたと考えられている。名勝庭園内の調査区では旧中門跡の可能性がある基壇、正徳期の火災層や石組暗渠が検出され、現在の名勝粉河寺庭園が正徳以後に築造されたことが明らかになるなど大きな成果が得られている。

⑤の試掘調査では、計5箇所のトレンチを設定して調査しており、2トレンチが⑦の調査区に南接する。地形的には、3・4トレンチ付近にかけては平坦面をなすが、2トレンチの手前で急激に北へ落ち込んでいることが確認されている。また、1・5トレンチでは、南北方向に延びる石積みが認められ、近世に西側へ土地の拡張がなされたようである。3トレンチでは、多量の瓦など近世の遺物と共に焼土

面や輪の羽口が検出されている。3・4トレンチで中世遺物が希薄であるのに対し、2トレンチで瓦器片など中世の遺物が多く出土していることから、南側を削った土を北側に持ち込んで整地した可能性がある。調査区が狭いこともあり、建物跡など当時の土地利用状況を推定できる遺構は見つかっていない。

なお、この調査により粉河寺遺跡の範囲が長屋川の南まで拡張されることとなった。

⑥の工事立会調査は、周知の包蔵地内での河川改修工事に伴うものである。掘削工事が既に完了していたため、掘削面を精査したにとどまるが、石積遺構と関係すると思われる集石範囲、壁面からは多量の13世紀から15世紀の範疇に収まる瓦器・土師器群が出土した。既往の調査と考え合わせて、長屋川左岸に護岸施設等の存在が指摘されている。

⑤⑥の調査を受けて、⑦の調査(写真5・6)では、平安時代から近世に至る遺物が出土した。平安時代後半の遺構はなく、長屋川左岸の斜面上に遺物の堆積が認められるのみである。鎌倉時代前半に入ると上面に遺構が認められるが、形状や用途ははっきりしない。斜面には大量の瓦器・土師器皿が堆積する。室町時代では、4段の石積み(1-1段目石積み・1-2段目石積み、2段目石積み、3段目石積み)と2箇所(東階段部・西階段部(写真6))を検出した。14世紀後半から15世紀中頃の遺物は希薄で、石積み廃絶後斜面上に遺物が堆積するのは15世紀後半である。この後再び空白期間を経て、17世紀に整地・石垣の築造がなされる。近世では、石列遺構などを検出したが、調査範囲が狭小なこともあり、全体像を復元するには至っていない。

この調査に伴う出土遺物整理については、その一部を平成18年(2006)2・3月にかけて行い、遺物洗浄・注記・接合作業を実施した。平成19年(2007)12月から平成20年(2008)2月にかけて、遺物実測、遺物・遺構実測図のトレース及び、遺物写真撮影などの報告書作成作業を実施し、その成果を『粉河寺遺跡-長屋川砂防環境整備工事に伴う発掘調査報告書-』2008.02発行としてまとめている。

③の調査では、長屋川を挟んで粉河寺中門の南側に位置する1トレンチ・2トレンチと呼称した2箇所のトレンチと、西側の平成18年度調査地に近い場所に位置する仮設水道管埋設に伴うトレンチ立会調査が実施された。三箇所のトレンチにおいて、全てを掘削していないものの、石積遺構が検出され、検出層序及び検出レベルなどから勘案して平成18年度調査で検出された石積みの内の1-1段目石積み・1-2段目石積み該当するものと考えられた。

また、平成18年度調査地と本確認調査で得られた石積遺構の位置・方向性から南方を向く中門の絵図の存在(「粉河寺境内絵図写」(元禄8年)『粉河町史 第三巻』より転載を見る)(図76)に着目し、そ



写真5 平成18年度調査 石積護岸(北東から)



写真6 平成18年度調査 西階段部(北から)

の関係に言及している。さらに堆積層序の詳細な観察・検討と出土遺物の内容から4面の遺構面が指摘され、今次の本発掘調査の指針となっている。(引用・参考文献10『粉河寺遺跡—長屋川砂防環境整備工事に伴う発掘調査報告書—』)

【引用・参考文献】

1. 粉河町 1998『粉河町史 第三巻』(編集)粉河町史編さん委員会(発行)和歌山県那賀郡粉河町
2. 粉河町 2003『粉河町史 第一巻』(編集)粉河町史専門委員会(発行)和歌山県那賀郡粉河町
3. 宗教法人粉河寺 1996『名勝 粉河寺庭園 粉河寺六角堂 史跡名勝建造物緊急修復事業概報』(編集)財団法人和歌山県文化財センター(発行)宗教法人粉河寺
4. 宗教法人粉河寺 2002.09『重要文化財 粉河寺大門 修理工事報告書』(編集)財団法人和歌山県文化財センター(発行)宗教法人粉河寺
5. 仲原知之 2002.09「附章 第三節 防災事業に係る発掘調査」『重要文化財 粉河寺大門 修理工事報告書』(編集)財団法人和歌山県文化財センター(発行)宗教法人粉河寺
6. 仲原知之 2003.08「粉河寺遺跡の遺構・遺物について—平成13・14年度の発掘調査から—」『紀伊考古学研究』第6号 紀伊考古学研究会
7. 和歌山県教育委員会 2004.03「6. 名勝粉河寺庭園／粉河寺遺跡」『和歌山県埋蔵文化財調査年報—平成14年度—』和歌山県教育委員会
8. 和歌山県教育委員会 2006.03「4. 粉河寺遺跡」『和歌山県埋蔵文化財調査年報—平成16年度—』和歌山県教育委員会
9. 和歌山県教育委員会 2008.03「9 粉河寺遺跡」『和歌山県埋蔵文化財調査年報—平成18年度—』和歌山県教育委員会
10. 佐々木宏治 2008.02『粉河寺遺跡—長屋川砂防環境整備工事に伴う発掘調査報告書—』(財)和歌山県文化財センター
11. 新谷和之 2009.03「11 粉河寺」『和歌山城郭研究』VOL.8「特集Ⅰ 2008年度調査報告 岩出市・紀の川市(北部)・かつらぎ町(旧花園村域)の城館跡」和歌山城郭調査研究会

第三章 発掘調査

第1節 調査現場の記録作業

粉河寺遺跡の調査は、長尾川通常砂防工事に先立ち発掘調査を実施し遺跡の記録保存を図ることになった。そのため、発掘調査の各作業段階で必要に応じて写真撮影及び実測図の作成を実施した。各々、下記に示す記録作業を行った。

1 写真撮影作業

記録保存としての写真撮影作業は、中判カメラ（6×7判：白黒フィルム・カラーポジフィルム）・小判カメラ（35mm判：白黒フィルム・カラーポジフィルム）・小型デジタルカメラにより、主に発掘調査の状況、検出遺構・遺物の出土状況、断面土層等を撮影した。また、速攻性に優れた小型デジタルカメラにより作業状況や作業工程をメモ用の記録画像として撮影している。これは、従来の小判カメラ35mm判でのカラーネガフィルムの代替で、メモ記録としては非常に有効な手段である。

2 実測図作成作業（写真7）

記録保存としての実測図作成作業は、各遺構面の検出遺構の遺構位置全体図（S縮尺=1/100・全体の遺構平面実測図（S縮尺=1/20 or 1/50）・遺物の出土状況図（S縮尺=1/10 or 1/20）・個別遺構の断面土層図（S縮尺=1/20）を作成した。

また、調査地区の遺存状態の良好な壁面断面土層図（S縮尺=1/20）などを記録として作成した。

当実測作業は、調査補助員：寺西朗平（平成21年）・砂山泰廣（平成22年）が担当した。



写真7 II区 第四面 151・153 橋脚図面作成

3 基準点測量

調査地の遺構図面作成等のため、平成18年度（2006）に設置した3級基準点及び紀の川市所管の地籍調査紙から国土座標第VI系（世界測地系）により各調査地内に座標軸を設置し、記録図面・遺物の取り上げを行った。地区割の詳細については、第三章第3節で記述する。

今次の調査では、地形的な制約も多く航空写真撮影及びそれに伴う図化は実施していない。

第2節 出土遺物等資料の整理

1 出土遺物応急整理

出土遺物については、調査現場で掘削時に認識できない重要な資料が存在することがあるため付着した土質分を早急に落とす必要がある。

また、調査の進捗に伴い、調査方法の判断資料として時期決定を行い、調査を円滑に進めていく必要があるため調査現場の監督員詰所において応急整理作業を実施した。一部遺物の洗浄作業・簡便な出土



写真8 出土遺物登録台帳の作成

遺物登録台帳作成(写真8)・撮影写真のアルバム収納整理について行った。当応急整理作業には、整理作業員：下田育代・北野妙美(平成21年)、岩橋澄子・久保田文子(平成22年)が担当した。

2 出土遺物等整理業務

また、第2次発掘調査の出土遺物等整理業務及び調査報告書作成については、引き続いて行われた長尾川通常砂防工事に伴う第3次発掘調査に先行して着手した。

調査で出土した遺物は、応急的な整理のみであったため、調査報告書作成に伴い一連の整理作業を行うと共に、遺構図面・遺構写真などの調査資料の整理を行い、資料登録台帳などを作成した。

出土遺物は、通常の遺物収納コンテナ(280)にして130箱と遺物収納コンテナに収納できない橋脚材等である。出土遺物の整理は、『発掘調査マニュアル(基礎編)』に準拠して、全遺物を対象に台帳登録・遺物洗浄・遺物の登録コード注記(写真9)・遺物破片点数の集計・接合作業を行った。

これらの作業を経た主要遺物を対象に、遺物充填材による補強・復元(写真10)・遺物実測(写真12・13)・実測遺物台帳登録・墨拓本取り(写真11)・実測図トレース(写真14)・トレースレイアウト(写真15)・遺物実測図の整理・遺物写真撮影・遺物写真の整理、集計登録データ等入力(写真17)を行った。さらにこれらの遺物の中から、各々の遺構・整地土・堆積層の時代・性格の理解に必要と思われる主要なものを抽出して調査報告書に掲載する図面原稿を作成した。

遺構図面の整理は、台帳登録・報告書用図面の作図・図面デジタルトレース(レイアウト)(写真16)を行い、調査報告書に掲載する図面原稿を作成した。

遺構写真・遺物写真撮影の整理は全写真を対象に、アルバム収納・記録の記載・登録番号の記載作業を行った。これらの中から、主要な遺構の調査状況の写真及び遺物写真を抽出してレイアウトし、調査報告書に掲載する写真図版原稿を作成した。

登録台帳データ入力作業遺物整理・調査報告書作成に伴う諸作業について、主に下記の整理補員・整理作業員が担当した。



写真9 遺物(土器)の登録コード注記



写真10 遺物充填材による補強・復元



写真11 瓦の墨拓本取り

整理補助員：遺物実測・遺物実測図トレース（森川真喜子）、整理事業員：遺物注記・破片点数の集計・接合作業（糸川かをる・久保田文子・橋川邦子・碓間志保・藤本美和）、遺物充填材による土器の補強・復元作業（横田映子）、墨拓本取り（藤本美和・横田映子）、遺構実測図作図・デジタルトレース・レイアウト（蜂木敦子）、遺物実測図トレース・遺物写真レイアウト（杉原陽子）、遺物実測・遺物実測図トレースレイアウト（久保田文子）、登録台帳等データ入力作業（碓間志保）

出土遺物の登録に伴う遺物破片点数の数量化は、Ⅰ・Ⅱ区の遺物について大凡の時代と主要となる土器類・その他の遺物に分けて作業を進めた。土器の種類・器種は、矛盾のない程度に簡素化している。

その遺物区分は、第三章 第4節 3小結に示した表3・4のとおりである。



写真12 出土遺物の実測図作成（土器）



写真13 出土遺物の実測図作成（縄御材）



写真14 遺物実測図トレース



写真15 遺物実測図レイアウト原稿作成



写真16 遺構図面デジタルトレース（レイアウト）



写真17 集計登録データ等入力

第3節 調査地の地区割 (図3～5・67)

発掘調査の地区割は、和歌山県内全域を統一したものがないため、当文化財センター『発掘調査マニュアル(基礎編)』(2006年4月)に準拠して、今回の一連の長屋川通常砂防工事に伴う粉河寺遺跡に関連する旧粉河町域を対象として、加えて、紀の川市(旧那賀郡)全域の調査に供するものを新たに作成した。

紀の川市旧粉河町域では、世界測地系による紀の川市発行の縮尺1/2500の新たな「紀の川市基本図」が未だ作成されていないため、座標上での区画割の設定を行った。

調査地の地区割は国土地院第VI系(世界測地系)を使用し、旧粉河町の東端(旧那賀町境)の座標ラインを基準として、将来的な調査を含めて上記した任意の範囲について区画割を行った。一部北側と南側の地域を除いた紀の川市(旧那賀郡)域を網羅する範囲(一部、岩出市域の東部を含む)の北東隅に基点(X=-185.0km, Y=-52.0km)を設けた。この基点からX軸西方向とY軸南方向にそれぞれ1kmの大区画(1km方眼)を設定した。これらの呼称は、基点からX軸西方向にI～X(ローマ数字大文字)、基点からY軸南方向に1～15(算用数字)とした(大区画呼称例 III 6)。

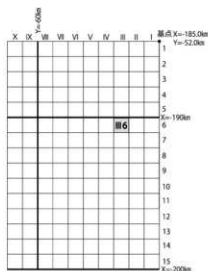
なお、大区画割の東端は、2006京奈和自動車道関連遺跡(伊都郡かつらぎ町)調査時に設定した区画割が既に旧那賀町域におよんでいる。このことから既設の区画割との重複を避けるため、今回の旧粉河町の東端(旧那賀町境)の座標ラインを基準としている。また、区画割の南側は、Y軸南方向に算用数字を加算すれば、紀の川市(旧那賀郡)全域を網羅することが可能である。

次いで、1km方眼の大区画を100等分し、100m方眼の区画割(中区画)を行っている(図4)。中区画の呼称は、各々の大区画の北東隅区画を基点として、X軸西方向にA～J(アルファベット大文字)、Y軸南方向に1～10(算用数字)とした(中区画呼称例 H 7)。

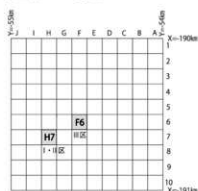
さらに、100m方眼の中区画を625等分し、4m方眼の区画割(小区画)を行っている(図5)。小区画の呼称は、各々の大区画の北東隅区画を基点として、X軸西方向にa～y(アルファベット小文字)、Y軸南方向に1～25(算用数字)とした(小区画呼称例 i 6)。

なお、さらに詳細な地点が必要な場合は、座標系の距離で地点を表示することとした。実測基準点お

大区画 1km方眼



中区画 100m方眼



小区画 4m方眼

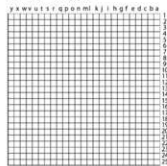
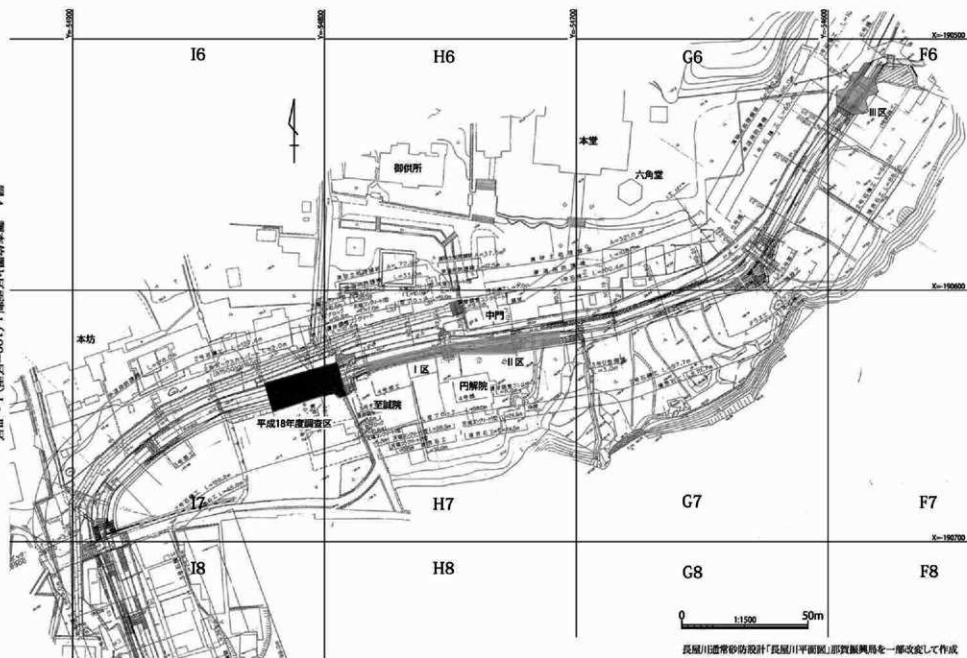


図3 地区割模式図

図4 調査位置と区割図1 (100m区画) 1～Ⅲ区



長尾川遺構防設計「長尾川平面図」那賀興興局を一部改変して作成

および遺物の取上げは、上記の地区割・区画割（小区画）を使用している。

また、標高は、東京湾標準潮位 T.P. + を使用した。

地区割・区画割（小区画）の使用例として、大区画 1 × 1 km ⇔ 中区画 100 × 100 m ⇔ 小区画 4 × 4 m（⇔ 地点名）からなり、区画呼称例 III 6 - H 7 - i 6（左の区画は、調査地Ⅱ区の第Ⅵ面 151・153 橋脚の位置を示すことになる）となる。

第4節 I・Ⅱ区の調査成果（図4～66、写真18～47、写真図版2～56）

本事業は、長屋川通常砂防工事に先立ち発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図ることにあった。対象地区は、紀の川市粉河字寺川 3287 - 2・3 番地、3288 - 1・2 番地、3289 - 1・2 番地に位置する。本年度の調査地は、『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』（平成 19 年（2007）発行 和歌山県教育委員会）では、粉河寺遺跡（紀の川市・粉河地区（旧粉河町）22）の範囲内にあたる。

調査に当たっては、掘削排土の仮置場や通路が十分確保できないため調査地を大きく 2 分割し、西側地区をⅠ区（土工Ⅰ）、東側地区をⅡ区（土工Ⅱ）と呼称して行った。且つ、場外に排土仮置き場を確保して行った。現地調査は、請負工事の方式で「粉河寺遺跡第2次発掘調査工事」として行った。

なお、Ⅱ区は、県建設部から追加変更の依頼のあった地区である。

まず、表土層及び現代整地層を重機により掘削し、以下を人力にて各層毎に掘り下げ作業を進めた。人力掘削土は、Ⅰ区（土工Ⅰ）では小車で調査区端まで運搬し重機により排土し、Ⅱ区（土工Ⅱ）ではベルトコンベアを使用して排土した。調査終了後は埋め戻しを行った。調査は、平成 21 年（2009）7 月 28 日から平成 21 年（2009）12 月 18 日にかけて、約 409 m³を対象に 340 m³について実施した。

掘削作業と併行して、検出遺構の写真撮影及び実測図作成作業を実施し、調査記録を作成した。また、現地調査と併行して出土遺物の洗浄作業等を主とした応急整理作業を行った。

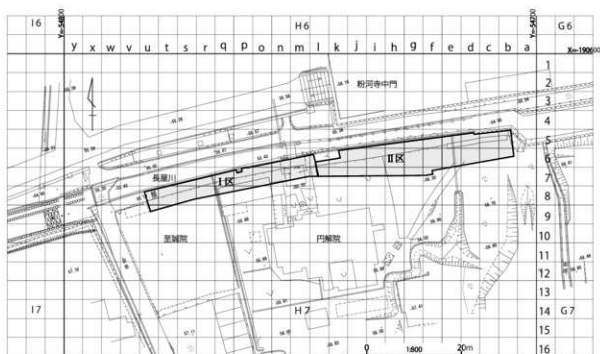


図5 調査位置と区画割2(4m区画)Ⅰ・Ⅱ区

検出遺構 (図 4～49、写真 18～47、写真図版 2～23)

検出遺構は、各地区において様相を異にするため詳細は後述するが、ここでは大要を記述する。

I区では計8面の遺構面を確認し、その内、5面について平面的な調査を行った。II区では計7面の遺構面を確認し、その内、5面について平面的な調査を行った。また、調査地が狭小であり、下位層に行くに従って湧水と崩壊が著しくなり安全上の問題が生じたため、当初に県文化遺産課から指示のあった深さ (T.P.=53.00 m) まで達しない範囲も存在する。

調査途中において南側の丘陵からの伏流水と調査遺構面が現在の長屋川より下位になるに従って著しい湧水と壁面の崩壊にみまわれ、何れの地区・遺構面においても調査に多分の支障を被る結果となった。

遺構の主だったものとして、鎌倉時代の根固め石を伴った橋脚・水制としてのハネ構造をもつ木杭列、鎌倉・室町時代の各遺構面において石積護岸・石組溝、土坑、江戸時代の塀基礎 (護岸)・石積護岸・石組溝、土坑などを検出した。また、十分な調査ではないが、II区において現地表面から約4 m下がったT.P.=53.00 m以下の河川堆積層においても鎌倉時代13世紀の遺物の出土を確認した。

出土遺物 (図 50～66、写真図版 24～56)

出土遺物の大半は、主に各地区の屋敷地側整地土や遺物の廃棄を伴う自然堆積層また、河川自然堆積層から出土した鎌倉・室町・江戸時代の土器類、鎌倉時代から江戸時代にかけての様々な瓦類で占められる。ここでは、「埋蔵文化財発見届書」並びに「埋蔵文化財保管証」に記載した主な出土遺物とその後確認できた遺物内容を箇条書きにしておくことにする。

出土遺物には、古墳時代の須恵器器台1点をはじめ、鎌倉時代から江戸時代にかけての土師器 (碗・坏・皿・甕・土釜・焙烙)、瓦器 (碗・小碗・皿・甕・小壺)、瓦質 (土釜・播鉢・火舎) 須恵器 (壺・坏・捏鉢)、陶器 (備前甕・壺・播鉢、常滑甕、丹波甕、瀬戸美濃皿・天目茶碗、唐津碗・皿・鉢)、磁器 (青磁碗・盤、白磁壺・碗・皿・瓶、染付碗、波佐見碗)、瓦 (軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鳥伏間瓦・鬼瓦・鯉・棧瓦)、石造物 (組合式五輪塔・一石五輪塔)、石製品 (滑石製石鍋・砥石・硯)、金属製品 (銭貨・長刀・和釘)、鍛冶滓 (鉄滓)、鞆の羽口、木質遺物 (蹴球・橋脚材・杭材・板材)、自然遺物 (種実) などがある。大半の出土遺物は、遺存状態が比較的良好である。

その他、特筆すべきものとして、平安時代の土師器・黒色土器・瓦、室町～江戸時代の遺物に混じって、溶解炉の破片1点・粗型と思われる土製品数点が出土している。

遺物総数は、通常の遺物収納コンテナ (28^{リットル}入) にして、130箱分である。遺物収納コンテナに収納できないII区出土の長刀 (図 65 - 486) は樹脂含浸処理により、151・153 橋脚柱材 (図 66 - 495・496) は、糖アルコール含浸処理法による保存処理を行った。

なお、整理作業の結果、古墳時代の須恵器器台を別にして、遺物の初現は平安時代後期である。但し、当該期の遺構は確認できていない。

1 I・II区の基本的な層序 (図 6～8、写真図版 12・23)

調査区の基本層序は、県文化遺産課が行った確認調査・試掘調査の層序との対応を試みたが、厳密に対応させることができなかった。また、土層の連続性を把握することに努めたが、調査区が狭小であることや石積みや石組遺構を築造するに当たって人為的埋土によって整地を行うため、厳密に各土層の連続性を把握することが困難な場合も多数存在した。このため、土層番号は、概ね県文化遺産課の確認調査の層序を基本として、鍵層になる層の総称として「第1層系」「第3層系」・・・と呼称して使用する

ことにした。連続性の対応が可能な限りにおいて、基本層の後に数字及びアルファベットの小文字を付して表現した(例:第11層系b)。よって同一の基本層名が付されていても土質等が異なる場合も生じてくる。

以下、基本層序の特徴と県文化遺産課との対比を兼ねて簡条書きにして記述する(詳細について当報告の中で記述することとする)。なお、「〇〇土」の集合を「〇〇層系」として記述を進める時もある。

基本的な層序は、大別14層に分類し、平面的な調査の進捗に加えて各調査区壁面の観察においてさらに細分した。(県文化遺産課:基本層序は大別して7層に分類し、各トレンチでさらに細分した。)

第1層系土(第1層系表土)(県文化遺産課:1層は表土及び現代掘乱土(県文化遺産課:)内は、確認調査の成果から抜粋) 第1層系土は、基本的に現代の表土及び現代掘乱土・整地土で、機械掘削対象土である。以下、「第1層系表土」「第1層系土」とする。

第2層系土(第2層系整地土)(県文化遺産課:2層は現代整地層) 第2層系土は、近代、或いは現代に近い整地土で、機械掘削対象土である。以下、「第2層系整地土」「第2層系土」とする。

第3層系土(第3層系整地土)(県文化遺産課:3層は石積遺構後に当たり、現代の長尾川左岸護岸に伴う整地及び裏込めとみられる層位) 第3層系土は、大きく上下層(第3層系a整地土・第3層系b整地土)に区分することができる整地土である。以下、「第3層系整地土」とする。当該層より以下は人力掘削対象土である。当層では比較的、瓦の廃棄量が多く見受けられる傾向にあった。

第3層系整地土の長尾川に崩れ落ちた堆積層は、認識できる範囲内で第3層系

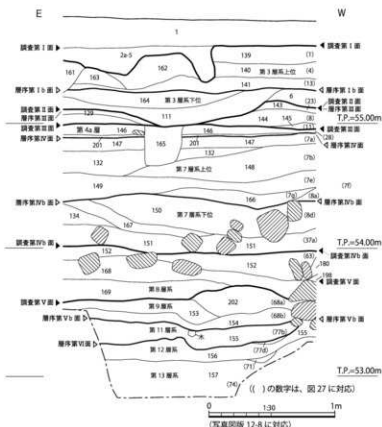


図6 I区の基本層序1(H7-t・u8調査区南壁断面土層)

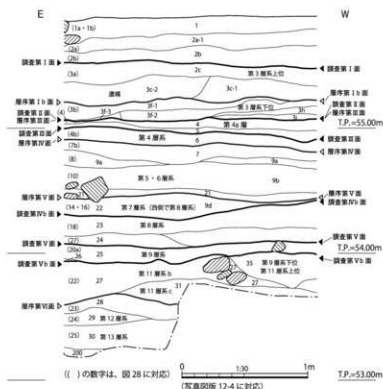


図7 I区の基本層序2(H7-ℓ・m7調査区南壁断面土層)

堆積土として遺物を取り上げている。以下、下位の整地土についても同じである。

第4層系土（第4層系整地土）（県文化遺産課：4層は検出した石積を被覆する非常に硬質な層、第1層～第4層は確実に石積に後出する層位である。）第4層系土は、調査地Ⅰ・Ⅱ区のほぼ全域に存在し、鍵層となる整地土である。以下、「第4層系整地土」とする。第4層系整地土は、単純1層ではなく、複数層の黄褐色系粗砂細礫混じりシルト（所謂、山土）である。このことから、第4層系整地土は、Ⅰ区東側で大きく上下層に（第4層系a整地土・第4層系b整地土）に区分することができる整地土である。

第4層系整地土に関連して途切れる部分もあるが、Ⅰ・Ⅱ区共に第4層系a整地土あるいは第4層系b整地土の上面に炭層あるいは焼土層が介在する。第4層系a・b整地土に関係する炭層あるいは焼土層は、層序と出土遺物から粉河寺伽藍が焼失した正徳三年（1713）に近接する年代観をもつが、確定した年代観の判断には至っていない。

第5層系土（Ⅰ区東側・Ⅱ区第5層系整地土）（県文化遺産課：5層は2トレンチのみで検出した石積遺構の一部被覆する栗石裏込めとみられる層位）Ⅰ区東側・Ⅱ区第5層系土は、整地土である。以下、「第5層系整地土」とする。

第6層系土（Ⅰ区東側・Ⅱ区第6層系整地土）（県文化遺産課：6層は石積以前の整地層で、原則水平堆積である。鎌倉時代末～室町時代に帰属するとみられる6層）Ⅰ区東側・Ⅱ区第6層系土は、整地土である。以下、「第6層系整地土」とする。調査においては、第5層系整地土と第6層系整地土は、「第5・6層系整地土」として一括して扱った。Ⅰ区東側の第5・6層系整地土は、Ⅰ区西側の第7層系a整地土より上位に位置する。

第7層系土（Ⅰ区西側・Ⅱ区第7層系整地土）（県文化遺産課：7層では5層同様に斜めに堆積する層が確認されたため、6層と分離した。鎌倉時代に遡る公算の高い7層）Ⅰ区西側・Ⅱ区第7層系土は、整地土である。以下、「第7層系整地土」とする。第7層系土は、Ⅰ区西側では大きく上下層に区分することができる。第7層系a整地土（第7層系上位）と第7層系b整地土（第7層系下位）の間に面は存在する。Ⅰ区東側では、第4層系整地土下面と第5・6層系整地土上面の間に面が確認できる。この面がⅠ区西側と東側で層序第Ⅳb面として連続する可能性がある。

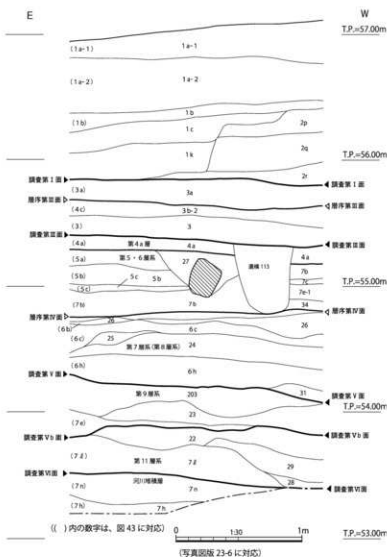


図8 Ⅱ区の基本層序（H7-f・g7調査区南壁断面土層）

第8層系土(第8層系整地土)(当該層以下、県文化遺産課の確認調査では未掘削) 第8層系土は、整地土である。以下、「第8層系整地土」とする。

第9層系土(第9層系堆積土) 第9層系土は、屋敷地側からの自然堆積土である。以下、「第9層系堆積土」とする。第9層系堆積土は、基本的に91護岸石積より南側に位置する屋敷地側堆積層である。当該層以下は、粗砂礫層や粗砂層を主体とした屋敷地側からの遺物を包含した自然堆積層と考えられる。遺物は、Ⅰ区全般に包含量が多く、Ⅰ区東端に連れて減少する傾向にある。Ⅱ区では極端に少なくなる。この傾向は、Ⅺ層系堆積土にも共通するところである。

第10層系土(第10層系堆積土) 第10層系土は、河川堆積層である。以下、「第10層系堆積土」とする。第10層系堆積土は、護岸石積より北側に存在する河川堆積層である。黄褐色粗砂礫層が主体となる。遺物は、多くはないが鎌倉時代の土師器・瓦器・瓦質土器・瓦など一連の物が、Ⅰ区で121点出土した。

第11層系土(第11層系堆積土) 第11層系堆積土は、屋敷地側堆積層で、木屑・木の葉・竹など有機分を多量に含んだ黒灰色泥沙や細粗砂が薄く何層にも堆積した状況にある。遺物は、Ⅰ区全般に包含量が多く、Ⅰ区東端で減少する傾向にある(Ⅰ区全体で、1271点が出土)。Ⅱ区では、全般に少なくなる。

第12層系堆積層 第12層系堆積層は、河川堆積層で青灰色粗砂礫層を基本とする。粗砂層が主体になる範囲も存在する。遺物は微量であるが、確実に包含している。

第13層系堆積層 第13層系堆積層は、河川堆積層で青灰色粗砂礫層もしくは黄褐色粗砂礫層を基本とする。上記二者と粗砂層の互層となる場合が主体である。遺物は、鎌倉時代の土師器皿類が少量である(Ⅰ区第12層系堆積土～第14層系堆積土合計で、51点が出土。Ⅱ区で、21点が出土)。

第14層系堆積層 第14層系堆積層は、河川堆積層で、調査の結果、第13層系堆積層以下の粗砂礫層も遺物を包含する層であることが明らかとなった。第14層系堆積層は、大礫～小礫や粗砂・細砂、もしくはこれらの互層が複雑に堆積している状況にある。大礫は、直径5～15cmの円礫が主体である。

次に、各遺構面と堆積層序との関係を見る。

第Ⅰ面(Ⅰ・Ⅱ区第2層系整地土下面) Ⅰ・Ⅱ区第2層系整地土の下面が、Ⅰ区20上部塀基礎、Ⅱ区101上部基礎の既に崩壊した状態の段階と考えられる。

第Ⅰb面(Ⅰ・Ⅱ区第3層系a整地土と第3層系b～d整地土との間) その内、第3層系b(呼称「3b」)は、県文化遺産課：仮設水道管理設トレンチ)整地土上面にも遺構面の存在を確認した。Ⅰ・Ⅱ区第3層系b～d整地土の上面が、Ⅰ区20上部塀基礎、Ⅱ区101上部基礎の屋敷地側構築面と考えられる。よって、この遺構面を第Ⅰb面とする。平面的な調査は行っていない。

第Ⅱ面(Ⅰ・Ⅱ区第4層系整地土上面)(遺産課：第Ⅰ面～4層上面) Ⅰ区第4層系整地土の上面が、Ⅰ区61下部基礎の屋敷地側第二次・第三次構築面である。Ⅱ区第4層系整地土の上面が、Ⅱ区111基礎の屋敷地側検出面である。

第Ⅲ面(Ⅰ区第4層系整地土下面)(遺産課：第Ⅱ面～5・6層上面) Ⅰ区第4層系整地土の下面が、Ⅰ区61下部基礎の屋敷地側当初構築面である。第4層系整地土に係る第Ⅲ面遺構の構築は、構築・機能・埋没を探る意味で詳細説明が必要になるため、本文中において記述する。

第Ⅳ面(Ⅰ区東側第5・6層系整地土上面)(Ⅰ区西側・Ⅱ区第7層系整地土上面)(遺産課：第Ⅲ面～7層上面) Ⅰ区東側第5・6層系整地土の上面及びⅠ区西側第7層系整地土の上面が、Ⅰ区81護岸石積の屋敷地側第二次構築面である。Ⅱ区第7層系整地土の上面が、Ⅱ区131～133護岸石積の屋敷地側

構築面である。

第Ⅳb面（Ⅰ区第7層系整地土下面・第8層系整地土上面）（遺産課：第Ⅳ面ー7層下面）第7層系整地土下面・第8層系整地土上面に遺構面は存在する。よって、この遺構面を第Ⅳb面とする。平面的な調査は行っていない。Ⅰ区第8層系整地土上面が、Ⅰ区81護岸石積の層敷地側当初構築面である。

第Ⅴ面（Ⅰ・Ⅱ区第8層系整地土下面・Ⅰ・Ⅱ区第9層系堆積土上面）Ⅰ・Ⅱ区第9層系堆積土の上面が、Ⅰ区91護岸石積、Ⅱ区141護岸石積の構築面である。

第Ⅴb面（Ⅰ・Ⅱ区第11層系堆積土上面）Ⅰ区では、第11層系堆積土の上面が、Ⅰ区98柱穴門柱の検出面である。Ⅱ区では、部分的に第11層系堆積土の上面でも遺構150土坑を検出した。

第Ⅵ面（Ⅱ区第11層系堆積土下面）Ⅱ区第11層系堆積土の下面が、第Ⅵ面である。Ⅰ区では、第Ⅵ面の調査は成し得ていない。Ⅱ区では、第Ⅵ面が151・153橋脚や木杭列の構築面である。

2 Ⅰ・Ⅱ区の検出遺構と出土遺物（図9～66、写真18～47、写真図版2～56）

今回の調査では調査区を二分割したため、検出遺構等の記述は、西側地区のⅠ区、東側地区のⅡ区の順に、また、上位の遺構面から下位にかけて記述を進める。

なお、遺構番号は、当センター『発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006年4月）に準拠して、算用数字の1から順に付した。遺構番号は、各遺構面を通して連番とし、遺構番号の後には、調査時点での遺構の性格と考えた遺構種別を付している。

以下、主立った遺構について観察内容を記述する。なお、各遺構面の厳密な時期対応については、出土遺物の検討と層序関係から導き出した結果を記述することとする。但し、十分に遺物の検討を行えなかった時期のものも有り、今後の課題も残っている。

〈Ⅰ区〉調査面積136㎡（調査対象面積180㎡）（図9・11～28、写真18～33、写真図版3～12）

Ⅰ区では計8面の遺構面を確認し、その内、5面について平面的な調査を行った。

遺構の主だったものとして、鎌倉・室町時代の各遺構面において石積護岸・石組溝、土坑、江戸時代の塀基礎・石積護岸・石組溝、土坑などを検出した。

1) 第Ⅰ面の調査（Ⅰ区第2層系整地土下面）（図9・50・65、写真18～20、写真図版3）

Ⅰ区の第1層系表土・第2層系整地土の機械掘削後の面に炭化物・焼成粘土塊を多く含む土坑が多数確認されたため、第Ⅰ面（Ⅰ区第2層系整地土下面）として平面的な調査を行った。

第Ⅰ面では、土坑16基を検出した。埋土は、炭化物・焼成粘土塊を多く含む土坑を含めて、大別3分類できる。遺構の一部は、昭和40年代まで存在した土塀基礎の構築時に削平をうけ、無くなった部分が認められる。

第Ⅰ面での検出遺構は、出土遺物・層序から江戸時代末～近代にかけてと考えられる。

1土坑（図50、写真19）1土坑は、Ⅰ区の西

側H7～s8に位置する。1土坑は、東西1.32m+α・南北1.1m・深さ0.45mで、東西に長い楕円



写真18 Ⅰ区 第Ⅰ面検出のための掘削状況
（手水舎屋根瓦と同じ）

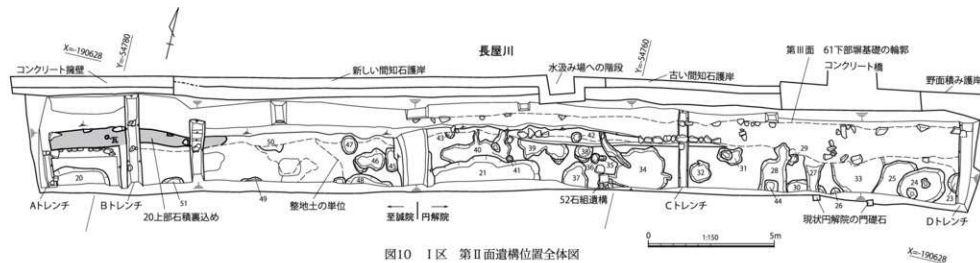
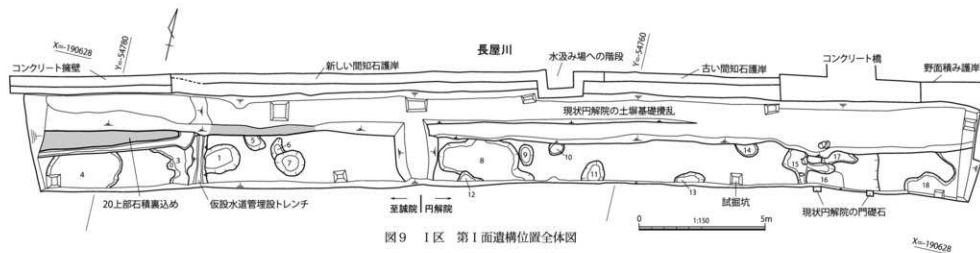




写真19 I区 第1面1土坑掘削状況 (南から)



写真20 I区 第1面6・7土坑掘削状況 (南から)

形を呈する。埋土に多量の炭化物(炭)が入り込み、10YR5/2 灰黄褐色細砂粗混シルトである。遺物は、多量の陶磁器(図50-1・6)・ガラス瓶(5合)・瓦・基石(図50-7)が出土した。遺物内容から明治以後に帰属すると思われる。

4土坑 4土坑は、I区の西端H7-u9に位置する。4土坑は、東西3m・南北1.5m+α・深さ0.1mで、東西に長い。遺物は、土師器小皿(ヘソ皿)1点・肥前系染付碗1点・多条摺り目の摺鉢2点、石塔空輪先端断片1点が出土した。古い遺物が混在するものの、19世紀に帰属するものと思われる。

7土坑(図65、写真20、写真図版55) 7土坑は、I区の西側H7-s8にあり、1土坑の東側に位置する。7土坑は、東西1.1m・南北1.0m・深さ0.45mで、東西にやや長い楕円形を呈する。埋土に多量の炭化物(炭)が入り込み、基底部に厚さ0.15mの炭層が形成されている。遺物は、土師器小皿1点・ガラス小瓶6点(同一個体)・キセル吸い口1点(図65-487)、平瓦2点、丸瓦2点(凹面:ゴザ目・コビキA)などが出土した。

その他、第I面遺構には、備前水屋甕(図50-4)などの出土した8土坑などがある。

2) 第II面の調査(I区第4層系整地土上面)(図9~11・50・51・53、写真図版4・25)

次いで、人力掘削の対象であった第3層系整地土の掘削を進めた。しかし、第3層系整地土の掘削途中に、第3層系b(呼称「3b」)は、県文化遺産課:仮設水道管理設トレンチ)整地土上面にも遺構面(第Ib面)の存在することを調査区南壁断面土層において確認した。遺構には、第II面で検出した瓦が多量に廃棄された21土坑などが該当する。既にI区の大半を第II面まで掘り下げていたために平面的な調査は行っていない。主要な遺物を取り上げ、断面写真の撮影を行い、断面土層の観察に努めた。

また、大規模な土坑においても掘り込みではなく、整地土の一単位を示している場合も見受けられた。

第II面では、土坑22基・小穴5基、溝状遺構2条を検出した。埋土は、炭化物を多く含む土坑を含めて、大別4分類できる。遺構の一部は、20上部塀基礎の構築時に削平をうけ、無くなった部分が認められる。

第II面の遺構は、出土した陶磁器や瓦をもう少し再検討する必要があるが、概ね江戸時代後期(約200年前)と考えられる。

20上部塀基礎の石積みの崩れた状態(図9・10・50・51、写真21、写真図版3・4・25) I区のH7-r7・8~u8に位置する20上部塀基礎・中込め石(本来、東側も遺存していたが、大半を機械掘削時に取り除いた)は、第I面の段階では既に崩れた状態であることが判明した。この崩れた状態の20

一方、I 区の東側半分では、調査区東壁断面土層の観察から、円解院の昭和 40 年代まで存在した土塀基礎の構築時に 20 上部塀基礎の一部が壊されていたようである。

52 石組遺構は、I 区の中央東寄り H7-p7・8 に位置する。52 石組遺構の中心には、一辺 33 cm・

T.P.=56.00m

T.P.=55.50m

斷面圖

6

1

Figure 1 consists of two main diagrams: a plan view (top) and a cross-section (bottom). The plan view shows the layout of the excavation area, including the location of the excavation (A, B, C, D, E, F, G, H, I, J, K, L, M, N, O, P, Q, R, S, T, U, V, W, X, Y, Z) and the surrounding area (A, B, C, D, E, F, G, H, I, J, K, L, M, N, O, P, Q, R, S, T, U, V, W, X, Y, Z). The cross-section shows the stratigraphic layers (1, 2a-1, 2a-2, 3a-1, 3a-2, 3b-1, 3b-2, 3b-3) and the location of the excavation (A, B, C, D, E, F, G, H, I, J, K, L, M, N, O, P, Q, R, S, T, U, V, W, X, Y, Z). The plan view also includes a scale bar (0-50cm) and a north arrow.

Excavation Plan (Top):

- Scale:** 0 to 50cm.
- North Arrow:** Indicated by a line with an arrow pointing towards the top right.
- Excavation Area:** Labeled with letters A through Z.
- Stratigraphic Layers:** 1, 2a-1, 2a-2, 3a-1, 3a-2, 3b-1, 3b-2, 3b-3.
- Excavation Location:** Indicated by a line with an arrow pointing towards the bottom left.

Cross-section (Bottom):

- Scale:** 0 to 50cm.
- North Arrow:** Indicated by a line with an arrow pointing towards the top right.
- Excavation Area:** Labeled with letters A through Z.
- Stratigraphic Layers:** 1, 2a-1, 2a-2, 3a-1, 3a-2, 3b-1, 3b-2, 3b-3.
- Excavation Location:** Indicated by a line with an arrow pointing towards the bottom left.

Legend (Right Side):

- 1 10YR3/3暗褐色細砂 礫0.2~0.5cm・3~4cm少量含む、表土現在の地表面
- 2a-1 2.5Y5/4黄褐色細砂 礫3~4cm少量、5~8cm中量含む近代の整地土か
- 2a-2 2.5Y6/6明黄褐色細砂 礫0.5~0.5cm少量含む、整地土あるいは以前の地表面か
- 2a-3 7.5YR5/3にぶい褐色細砂 5YR5/8橙色シルトを斑状に中量含む礫3cm程度少量含む炭化物を中量含む
- 3a-1 10YR6/6明黄褐色細砂 礫0.5~0.8cm少量、2~3cm・15cm程度微量含む
- 3b-3 5YR6/8橙色シルト 礫8cm程度微量含む炭化物を微量含む

图11 I区 第II面52石组遗构实测图

(第4層系a 整地土に埋没したレベル) 礎石様の73据え石を検出した。芯々間の距離は、約1.1mを測る。52石組遺構と何らかの関係を有すると考えられる。73据え石は、第Ⅲ面遺構であるが当項で記述した。

20土坑(写真図版4-1) 20土坑は、Ⅰ区の西端H7-u9に位置する。20土坑は、東西3m・南北1.5m+ α ・深さ0.53mで、第Ⅰ面遺構の4土坑の掘り残しの可能性がある土坑である。埋土は、2.5Y5/2暗灰黄色細砂主体の粗砂礫泥シルトを基本とする。遺物は、土師器皿2点、不明陶器水甕1点、青磁・白磁各1点(近世か?)、軒丸瓦2点・丸瓦9点・平瓦2点などが出土した。

44土坑(写真図版4-2) 44土坑は、Ⅰ区の東側H7-n7に位置する。44土坑は、東西0.58m・南北0.50m+ α ・深さ0.18mで、南北に長い楕円形を呈する。埋土は、10YR4/3にぶい黄褐色〜4/4褐色粗砂細礫泥シルトである。遺物は、土師器小皿1片が出土した。

3) 第Ⅲ面の調査(Ⅰ区第4層系整地土下面)(図12～19・52～53、写真23～28、写真図版5～7・27～29)

第Ⅲ面調査での遺構は、試掘調査で予測されていなかった石積遺構を検出した。これが61下部塀基礎である。この61下部塀基礎の南隣りに東西方向に並んで礎石(列)を検出した、最終の修復段階で塀を支える支柱構造になった時期があると判断できる。61下部塀基礎は、土塀以外の構造の塀をも考える必要があるために、単に「塀基礎」と呼称して使用する。

第Ⅲ面では、主に石組(石積)遺構となる61下部塀基礎(長屋川側は護岸石積の機能)・62塀基礎・63排水溝・64礎石(列)・72門跡敷石、配石(石組)を伴う71土坑、土坑5基などがある。

第Ⅲ面の遺構は、出土した土師器を始め陶磁器や瓦を再検討する必要があるが、出土遺物と層序関係から概ね江戸時代中期(18世紀)と考えられる。

61下部塀基礎(護岸石積)(図12～14・46・53、写真図版5～7・27) 第Ⅲ面に伴うと判断されていた石積遺構(県文化遺産課：仮設水道管理設トレンチでは、平成18年度調査の1-1段目石積、1-2段目石積に対応させて考えた)は、一部機械掘削後の面や先行グリッド・トレンチ調査において南面(至誠院・円解院側)と北面(長屋川側)に面をもち、一連の構築物になる石積み・石列を確認した。これが61下部塀基礎である。61塀基礎より上位に位置する20上部塀基礎に対して、下位に位置するため「61下部塀基礎」とした。

61下部塀基礎は、東端の天端石の崩壊が著しいもののⅠ区の西端H7-u8から東端H7-l6にかけて全域に連続して検出した。61下部塀基礎は、遺存状態の良い部分で長屋川側の護岸石積の高さ約1m・天端幅0.9m(約3尺)である。南側の石列は、一段ないし二段が遺存しており、その高さ関係から復元できる長屋川側の護岸石積の高さは、1.2m(4尺)である。61下部塀基礎の遺存する天端は、南側の石列を含めるとT.P.=54.95～55.10m、基底部でT.P.=53.70～54.05mとなり、Ⅰ区全体から見れば東西方向に水平を保っているようである(図46)。61下部塀基礎の天端幅は、南北方向を向く62塀基礎より東側で若干広くなり約1mの幅員をもつ部分が多い。なお、Ⅱ区第Ⅲ面111塀基礎に付随するような犬走りは認められない。また、調査区が狭小であったため、長屋川側の護岸石積の基底部まで検出できた範囲はⅠ区西端から東へ10mのみである。

61下部塀基礎の構造は、64・69礎石(列)を含め上屋構造や時代は再検討が必要であるが、現存する円解院が最初に建てられた江戸時代の中期頃のものではないかと考えている。61下部塀基礎が造られた当時は、北側の石積みも南側の石列と同じ高さまであったと思われるが、ずいぶん抜け落ちたようであ

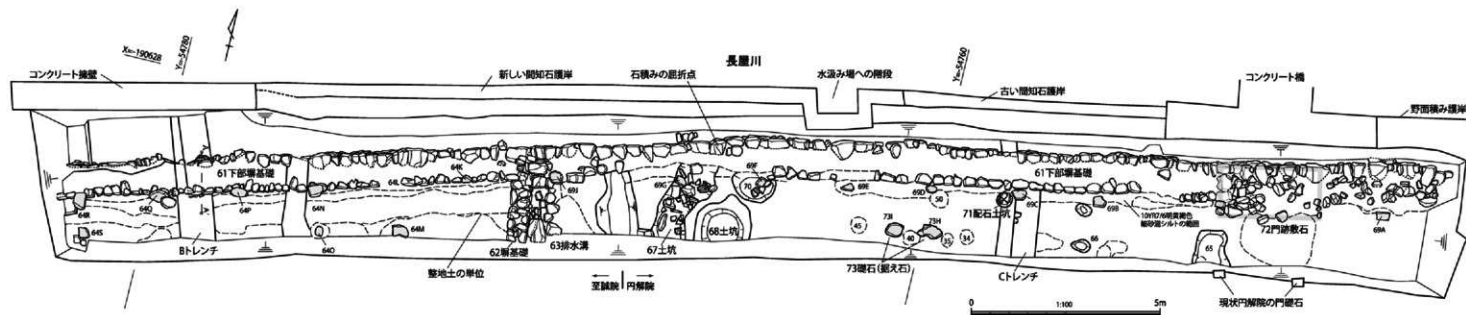


図12 I区 第三面遺構全体平面図

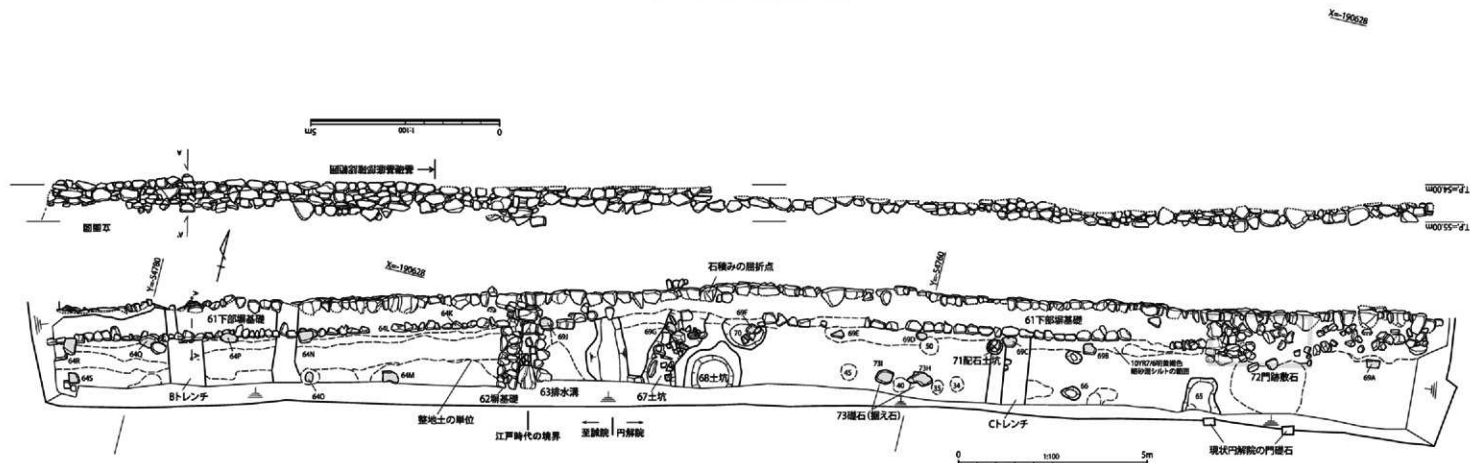


図13 I区 第三面61下部基礎実測図

る。61 下部塀基礎の長屋川側の護岸石積基礎部の積み石は、現在の長屋川の川底と同じ深さに近い T.P.=53.70 m ~ 54.00 m (調査地西側北 H 7 - s 7 での長屋川の川底は、約 T.P.=53.80 m) となり、今にも崩れ落ちそうな石積み状態が多く見受けられる。石積みの北側には、第 4 層系 ~ 第 6 層系堆積土が堆積し、多くの遺物が出土している。

第 4 層系整地土と南側石列・61 下部塀基礎及び中込めなどとの層序を検討すると、61 下部塀基礎の機能時には第 4 層系整地土の造作などから、南側石列と共に（整地地業による）修復を繰り返していた痕跡が認められる。その過程

で第 4 層系整地土が積み直された部分も認められる (図 27)。

62 塀基礎 (図 15、写真 22・23、写真図版 5・6)

62 南北方向塀基礎は、I 区の西側 H 7 - r 8 に位置する。63 排水溝と一体となるが、天端幅 0.5 ~ 0.6 m で北端 61 下部塀基礎までの南北延長 1.6 m 分を検出した。61 下部塀基礎の南側石列との取り付きは、天端石では T 字形に認識できる。

63 排水溝 (図 15・54、写真 22・23、写真図版 5・6・28) 61 下部塀基礎の途中で 63 排水溝を検出

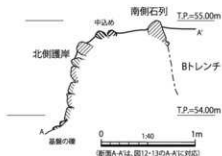
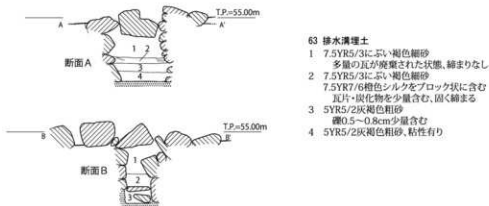


図14 I 区 第三面61下部塀基礎石積断面図



63 排水溝埋土

- 1 7.5YR5/3にぶい褐色細砂
多量の瓦が発見された状態、締まりなし
- 2 7.5YR5/3にぶい褐色細砂
7.5YR7/6褐色シルクをブロック状に含む
瓦片・炭化物を少量含む、固く締まる
- 3 5YR5/2灰褐色粗砂
礫0.5~0.8cm少量含む
- 4 5YR5/2灰褐色粗砂、粘性有り

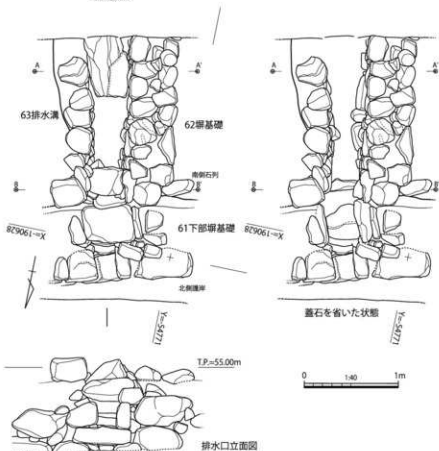


図15 I 区 第三面62塀基礎・63排水溝実測図



写真22 I区 第三面62 堀基礎・63 排水溝（東から）



写真23 I区 第三面63 排水溝 蓋石と
61 下部堀基礎との関係（北から）

した。63 排水溝は、I 区の西側H7ーr 8で62 堀基礎と一体となって構築され、ここから長屋川に排水する構造になっている。63 排水溝は、石組み内の溝幅0.25～0.5 m・深さ0.6～0.8 mで北側に従ってやや狭くなる。蓋石の無くなった部分もあるが、基本的に61 下部堀基礎の下を水が流れるように溝底に敷石が階段状に貼られ工夫されている。61 下部堀基礎より南側は、開溝状態であったと思われる。埋土の中位（図15の断面土層図の2）には7.5YR5/3にぶい褐色細砂が堅く締まりのある状態に突き固められ、その上に流水堆積を示す粗砂層の堆積が薄く認められた。その上位に廃棄に伴う溝内人為的埋土から多量の瓦（図54ー98～101）が出土した（遺物収納コンテナ9箱）。

62 堀基礎・63 排水溝の位置関係から、現在の円解院（えんげいん）と至誠院（しじょういん）の区画（当時の名称は、宝泉寺か「紀伊名所図会」1838年）からが排水溝位置で2.25 m（7尺半）西側にずれていたことが明らかとなった。

64・69 礎石（列）（図12・13、写真図版5ー2・6ー2）

64・69 礎石（列）は、一部無くなった箇所も認められるが、概ねI 区の西端H7ーu 8・9から東端H7ーm 7まで連続している。I 区の最も東端H7ーm 7、次項で説明を加える72 門跡敷石の東側の礎石Aは、門跡に近接し過ぎる嫌いがある（約1.6 m間）。64・69 礎石（列）は、62 南北堀基礎・63 排水溝から西側（64 礎石（列））では概ね2.1 m（7尺）等間隔、東側（69 礎石（列））では2.2 m（7尺強）を測る。北側の礎石に対峙する南側の位置に約1 m（3尺強）離れて64 s・64 o・64 m 礎石も存在する。

64・69 礎石（列）は、礎石の据え付けに当たって第4層系a 整地土の上位に焼土層が介在しその上に据えられている。このことから61 下部堀基礎より後出するものであり、且つ、61 下部堀基礎の修復が繰り返された最上位に位置す

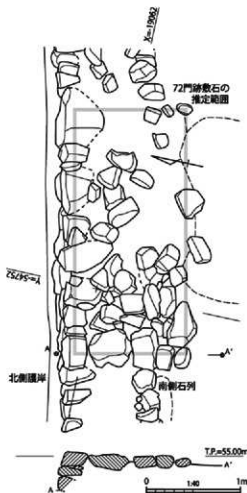


図16 I区 第三面72 門跡敷石実測図

るものと思われる。

72 門跡敷石 (図 16、写真 24、写真図版 6-2) 72 門跡敷石は、I 区の I 区の東端 H 7-m 6・7 に位置する。72 門跡敷石は、61 下部塀基礎と連続した構造で、敷石の端々で東西 2.7 m (約 9 尺)・南北 1.4 m (約 4 尺半) の範囲に大小の扁平な石が敷き並べられており、敷石の様相を呈している。西辺の敷石の遺存状態が最も良好で、南北方向にほぼ水平 (T.P.=55.00 m) を保った石並びが認められる (図 16 断面)。

72 門跡敷石の場所は、調査地の南側に現存する円解院の最近まであった門跡の礎石位置とほぼ同じであり、代々踏襲されてきた位置と考えられる。72 門跡敷石の北側 H 7-m・n 6 には、現在長屋川を渡るコンクリート製の橋が架けられている。このことから、72 遺構を「門跡敷石」と限定して呼称した。敷石の取り外しに伴って、時期を確定できるような遺物は出土していない。

71 配石土坑 (図 17・53、写真 25、写真図版 28) 71 配石土坑は、I 区の東側 H 7-o 7 に位置する。71 配石土坑は、径 0.45 m・検出面からの深さ 0.2 m の掘形で、北側に河原石 2 石を斜めに立てかけ軒丸瓦 2 点と咬み合せた状態で検出した。71 配石土坑と整地土との層序関係から 61 下部塀基礎の構築より後出する遺構である。出土遺物は、軒丸瓦 3 点 (図 53-95・96、軒丸瓦 95 は 2 破片) のみである。下から順に、東側の大振りの平石・軒丸瓦 (96)・軒丸瓦 (96)・これらを抑え込むような状態で西側の厚みのある石となる。

71 配石土坑は、意図的に埋め込まれたのか、東側に隣接して位置する 69 c 礎石との関係で見るべき所産であるのかを考えた。結果、現状に即して、71 配石土坑と呼称した。

本来の掘形は、第Ⅲ面より上位に存在した第Ⅱ面での構築の可能性も考えられるが、判断できない調査結果となった。

軒丸瓦 (95・96) は、何れも意図的に割られたかのように丸瓦部のほぼ半分が欠損する。軒丸瓦 (96) は、瓦当文様に変形の波瀾文が採用されている。和歌山県内は元より、近畿で波形文の多い地域周辺での類例を模索したが、見出すことができなかった。

その他、第



写真 25 I 区 第Ⅲ面 71 配石土坑 (西面西から)



写真 24 I 区 第Ⅲ面 72 門跡敷石 (南から)

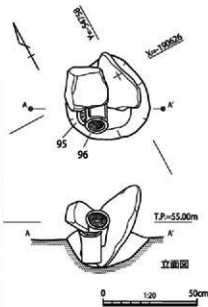


図 17 I 区 第Ⅲ面 71 配石土坑実測図

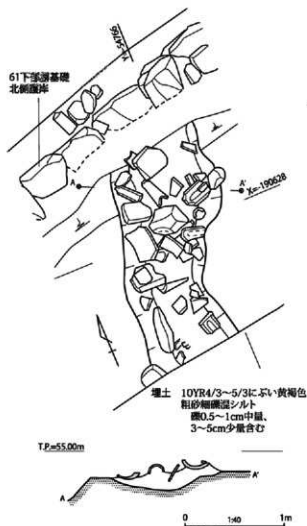


図18 I区 第Ⅲ面67土坑遺物出土状況実測図



写真26 I区 第Ⅲ面67土坑遺物出土状況(北北東から)

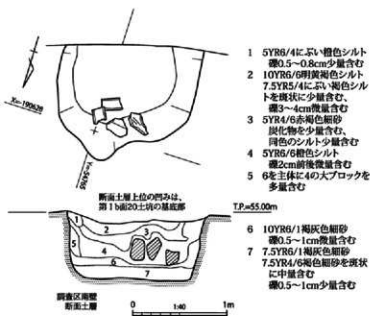


図19 I区 第Ⅲ面68土坑実測図

Ⅲ面には73礎石(据え石)、炭灰の充填された65土坑・61下部塀基礎を壊して多量の瓦が廃棄された67土坑(図18・55、写真26、写真図版29・30)・にぶい黄色細砂混シルトが埋土の主体となる68土坑(図19、写真27)などがある。

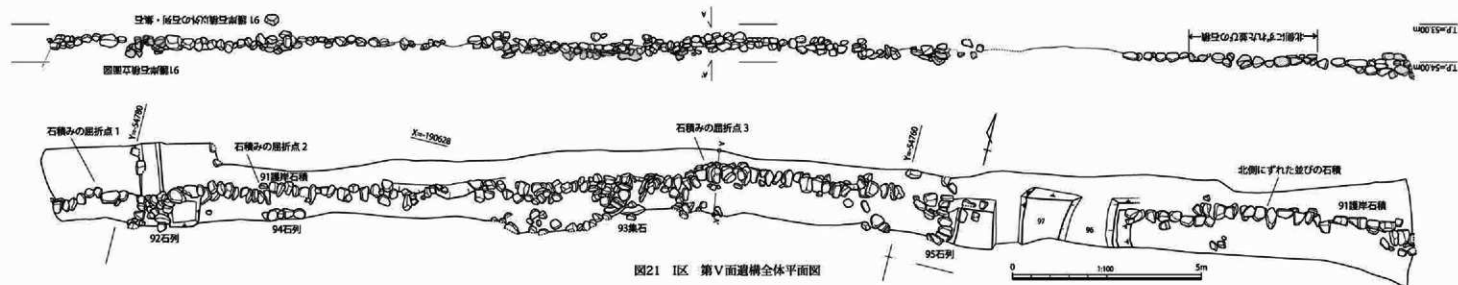
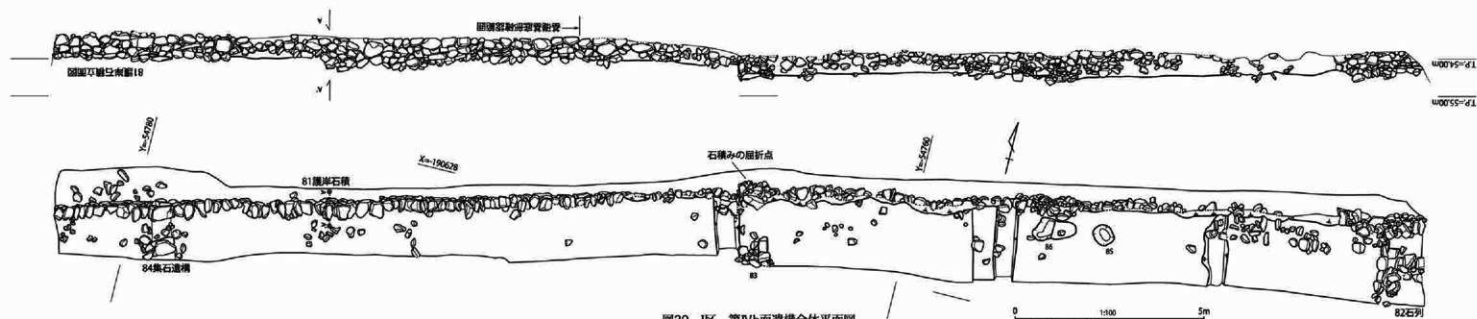


写真27 I区 第Ⅲ面68土坑調査区南壁断面土層(北北西から)

4) 第Ⅳb面の調査(1区東側第5・6層系 整地土上面、I区西側第7層系整地土上面)(図

20・22・23・56~58、写真28~30、写真図版7~9・29~32)

第Ⅲ面61下部塀基礎の積み石を取り除いて、さらに下位にある生活の跡を調査した。第Ⅳb面では、主に石組(石積)遺構となる81護岸石積・82石列遺構、集石(配石)遺構2基、土坑1基、土坑状の窪地1箇所がある。本来、第Ⅳ面は、護岸石積に対して屋敷地側に盛土のある状態が対応するが、石積み



の検出を優先し盛土を除去した状態まで掘り下げて81護岸石積を検出した。よって、南側屋敷地側は第IVb面となる。そのため、整地土の掘下げに当たっては十分な注意を払って行った。

その他、第IV面構成土を掘削する過程で第7層系整地土上位から土師器皿・土師器小皿が集中して出土した地点が各1箇所ある。

第IVb面・第IV面は、出土遺物と堆積層序関係から室町時代中期～後期に帰属するものと考えられる。

81護岸石積(図20・22・57・58、写真図版7～9・32)第IV面に対応する81護岸石積は、東側の石積みの崩壊が著しいもののI区の西端H7-u9から東端H7-87にかけて全域に連続して検出した。81護岸石積は、遺存状態の良い部分で高さ0.8m(積み石5段分)である。81護岸石積は、第III面の61下部塀基礎の南内側下位に位置するものの61下部塀基礎の石積み構築によってかなりの部分が損壊を被ったものと思われ、遺存状態が非常に悪い。特に、下流側から見て、石積みの屈折点を過ぎた地点から東側では、81護岸石積の積み石の多くが無くなり、不揃いな中込めだけが遺存しているようである。



図22 I区 第IVb面81護岸石積断面図

なお、調査区が狭小であったため、調査において第III面61下部塀基礎の取り除けなかった積み石が掘削の障害となり、81護岸石積の基底部まで検出できた範囲はI区西端から東へ約14mのみである。

また、81護岸石積の積み石の中に転用石として一石五輪塔(図58-210、写真図版32)1点が出土した。一石五輪塔は、地輪が欠損し(キャ、カ、ラ、バア)の梵字のみで紀年銘は彫り込まれていない。その他、中込めからは軒丸瓦(209)・土師器小皿(図57-197・199)などが出土した。81護岸石積の構造・時期は、なお詳細な検討が必要であるが、現時点での見通しとして、整地土(盛土)の出土遺物から室町時代中期に比定できる可能性が高い。



写真28 I区 第IVb面82石列(北から)

82石列(図23、写真28)82石列は、I区の東端H7-86・7に位置する。南北方向に積み石の認められる石組み遺構であるが、遺存状態が良好でなく、詳細を明確にすることができなかった。また、82石列の中ほどからT字形に東側に延びる積み石も検出しているが、南北方向同様にその性格を明確にできていない。最高3段分が遺存する。

その後、下位の第V面遺構の調査によって、82石列の東西方向に延びる石積みの基底部の2石が91護岸石積を構成する石材であることが判明した。



写真29 I区 第7層系整地土遺物出土状況(東北東から)

その他、第Ⅳ面には83集石・84集石遺構、85土坑、86土坑状の窪地1基がある。また、81護岸石積構築時に対応する屋敷地側に盛り上げた第7層系整地土から出土した土師器皿（図56-126～136、写真図版30）、土師器小皿（図56-110～123、写真29、写真図版29）は、元位置で遺存するのは僅かではあったが、破片数264点（46.41個体：24分割口縁部計測法による）が出土した（表7）。整地土内への廃棄とも見られるが、屋敷地側に盛土した際の地鎮的な遺構の可能性も考えている。両者の遺物群は、室町時代中期15世紀中頃～後半に帰属する資料群である。

5) 第Ⅴ面の調査（Ⅰ区第8層系整地土下面・Ⅰ区第9層系堆積土上面）（図21・24・60、写真30・31、写真図版9～11・33～36）

調査の進捗に伴い、第Ⅳ面の81護岸石積の下には人工的な構築物がないと考えていたが、さらに下位の第Ⅴ面において第Ⅳ面より古い時代の91護岸石積を検出した。事前に部分的に深く掘り下げた石積みの有無を確認していたが、下位の石積みの無い部分に当たっていたようである。第Ⅴ面では、主に石組（石積）遺構となる91護岸石積、石列遺構3箇所、集石遺構1基、落ち1箇所がある。

91護岸石積（図21・24・60、写真30、写真図版9～11） 第Ⅴ面に対応する91護岸石積は、Ⅰ区の西端H7-u9から東端H7-l7にかけて断続的に検出した。91護岸石積は、遺存状態の良い部分で高さ0.45m（積み石3段分）である。第Ⅳ面の81護岸石積によってかなりの部分が損壊を被っているように見える。特に、Ⅰ区の東側H7-m-o7では、後出する96落ち（第Ⅳ面からの土流の堆積か？）に押し流されて積み石の多くが逸失している。91護岸石積は、遺物を比較的多く包含する軟弱な第9層系堆積層の直上に据え置かれた状態のため、積み石の多くにずれが生じあまり直線的に並んでいない。

91護岸石積の東西方向の並びは、Ⅰ区のほぼ中央H7-q7で比較的大きく屈折し（写真図版10-3）、次いで西端H7-u8でも緩やかに屈折する。調査地内で3箇所の屈折点が確認できた。これは短い距離（約10～15m間隔）で護岸を積み並べることで積み石の方向に変化を持たせ、流水を制御する工法が採用されたものと考えられる。

Ⅰ区の東端H7-l-n-m7では、91護岸石積の延長で、北側にずれた並べ方（積み方）の石積みを検出した（写真図版11-1）。ずれた並べ方（積み方）の要因については、第Ⅴb面とも関係するので、

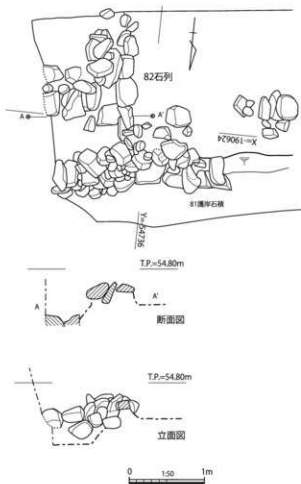


図23 Ⅰ区 Ⅳb面82石列実測図



図24 Ⅰ区 Ⅴ面91護岸石積断面図

次項で説明を加える。

第V面に関係して掘削した第9層系堆積層から遺物(図60-266~293、写真図版35)が多量に出土している。このことも、当該期に南側の屋敷地側に生活のあったことを物語っている根拠である。

91護岸石積は、下位の第9層系堆積層が鎌倉時代中期13世紀後半~後期14世紀前半、91護岸石積の北側に堆積した第10層系堆積土の出土遺物(図60-294~308、写真図版36)が室町時代14世紀末~15世紀前半、上位の第8層系整地土の出土遺物(図58-222~245、写真図版33・34)が鎌倉時代後期14世紀前半~室町時代中期15世紀前半、よって、91護岸石積は第9層系堆積土の遺物に継続する時期13世紀後半からそれより若干新しい第10層系堆積土の時期幅の中、室町時代14世紀末で考えられる。

その他、第V面には南北方向の石組みを指向する92石列(写真31:この後に、92石列は南北方向の排水溝であることが判明したが、十分な記録を取ることができなかった。結果的には、図21第V面より上位の図20第IVb面の同位置にある84集石遺構(写真30)と一連の暗渠排水溝であることが判明した。)・95石列、明確な纏まりを把握できなかった93集石、94石列(写真図版10-4)、第V面で掘削面を把握できた96落ちなどあるが、調査地が狭小であるためにその性格を明確にできなかった部分が多い。また、91護岸石積を積んでいた頃は、長屋川の流れは現在よりも1m以上深いことが確認できた。

6)第Vb面の調査(I区第11層系堆積土上面)(図25・61~63、写真31・32、写真図版11-2・3・37~42・55)

第Vb面を形成するI区第11層系堆積土には、土器を主体とした多量の遺物が包含されていた。I区第11層系堆積土は、単層でなく有機分を含む黒灰色泥砂・細砂・粗砂など複数層で構成されているため、徐々に掘下げを行った。その結果、98柱穴の検出に至った。98柱穴は、厳密には、I区第11層系堆積層中での検出である。第Vb面では、遺構として98柱穴の検出のみである。



写真30 I区 第IVb面84集石遺構(北から)



写真31 I区 第V面92石列(北から)



写真32 I区 第Vb面97落ち(北東から)

その他は、湧水が著しいと共に調査区が狭小で壁面の崩壊が進み危険度が増したため、調査を断念した。

98門柱柱穴(図25・63、写真図版11-2・55) 98柱穴は、I区東側H7-m7に位置し、第11層系堆積層上面で検出した。第V面91護岸石積の北側にずれた並べ方(積み方)の積み石を取り除いて、周囲の第11層系堆積土を少し掘り下げた地面から2基の柱穴・柱材を検出した。98柱穴の検出に伴い周囲を精査したが、2

基以上を確認することができなかった。柱材は、2本とも基底部しか遺存していない。なお、東側の柱穴を「98E柱穴」、西側の柱穴を「98W柱穴」と呼称した。

98E柱穴は、東西0.32m・南北0.4

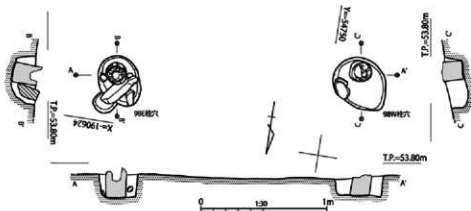


図25 I区 第Vb面98門柱実測図

m・深さ0.2mの掘形に簡素な根石をあてがって柱材(図66-493、写真図版55)が据えられていた。柱材は、径16.0cm×18.4cm・遺存高23.3cmで、基部に納が穿たれた建築部材の転用材である。98W柱穴は、東西0.4m・南北0.4m・深さ0.2mの掘形に柱材(図66-494、写真図版55)が据えられていた。柱材は、径13.5cm×15.0cm・遺存高19.5cmである。2基の柱材の芯々間の距離は、1.95m(約6尺半)である。現時点では、両材ともかなり腐朽が進んでいる。樹種は、広葉樹のクリである。

調査の進捗に伴い、長屋川の南側の土地に屋敷地が存在した可能性を考えた。第Vb面98柱穴は、II区第Vb面で検出した151・153橋脚柱材の据え付け構造と異なり簡素であること、また第V面91護岸石積との位置関係から南側の屋敷地に伴う門柱の可能性を考えている。柱材は、現状では根入れが浅過ぎるため、本来はもう少し上位から建てられたものと考えるのが妥当と思われる。門柱であれば、門柱に至る橋の橋脚位置をも考えなければならないが、現状では不明である。

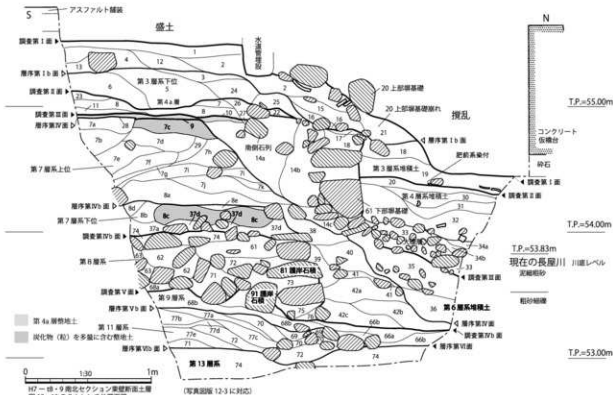
また、98柱穴の検出面となった第11層系堆積土からは多量の土器が出土した(図61-311~図63-400、写真33、写真図版37~42)。一部に上位層の遺物と思われる物もあるが、比較的纏まりのある遺物群である。遺物内容から鎌倉時代前期12世紀後半~中期13世紀後半に属する資料群と考えられる。

調査区の一部において、第V面の形成層及び最下位層の青灰色粗砂礫層まで掘削を行った。結果、最下位層の青灰色粗砂礫層にも鎌倉時代前期~中期の遺物を包含することが確認できたが、調査区が狭小で湧水が著しく壁面の崩壊が進み危険度が増したため、I区全面においてT.P.=53.00mまでの調査を断念した。



写真33 I区 第11層系堆積土遺物出土状況(西から)

7) 第I面~第Vb面の遺構と層序の関係



- 第1層表土(上位)
- 1 10YR5/4に多い赤褐色細砂 炭化物を散ら含む。φ2m程度の礫を中量含む。φ10-30mmの礫を少量含む
- 2 5YR6/6に多い赤褐色細砂 炭化物を散ら含む。φ3-5mmの礫を少量含む。φ10-20mmの礫をごく少量含む
- 4 5YR6/6褐色細砂 炭化物を少量含む。φ1-2mmの礫。φ40mm程度の礫をごく少量含む
- 12 10YR5/6赤褐色細砂 φ10mm程度の礫を少量含む。φ5mm程度の礫をごく少量含む
- 13 10YR4/3に多い赤褐色細砂 炭化物。φ50-70mmの礫を少量含む
- 20 上部礫層中込め細砂
- 21 5YR6/6に多い赤褐色細砂 炭化物を散ら含む。φ3-5mmの礫を少量含む。φ10-20mmの礫をごく少量含む
- 15 10R4/4赤褐色細砂 φ10mm程度の礫を散ら含む。しまりがなく、もろい
- 16 10R4/4赤褐色細砂 φ20-30mmの礫を少量含む。φ5mm程度の礫をごく少量含む
- 21 5YR7/3に多い褐色シルト 褐色(5YR6/8)の細砂層を境目状に多量含む。φ3mm程度のφ30-50mmの礫を少量含む
- 第2層表土(下位)
- 3 5YR5/4に多い赤褐色細砂 φ3-5mm・φ30-40mmの礫を少量含む。褐色(5YR6/8)細砂をブロック状に散ら含む
- 10R4/4赤褐色細砂 φ3-5mm・φ10mm程度の礫を少量含む。灰白色(10YR5/2)シルトをφ20-30mmのブロック状に少量含む。灰色(5YR6/8)の細砂層をブロック状に少量含む
- 2 2.5YR5/4に多い赤褐色細砂 φ5mm程度の褐色(2.5YR5/6)の細砂層を少量含む。φ30mmの礫をごく少量含む
- 24 2.5YR5/4に多い赤褐色細砂 φ3-5mmの礫を少量含む。φ30-40mmの礫を散ら含む
- 25 7.5YR5/4に多い褐色細砂 炭化物を散ら含む。φ3-5mmの礫を少量含む。φ5-8mmの礫を散ら含む
- 第3層表土(上位)
- 7 7.5YR5/3に多い褐色シルト 炭化物を散ら含む。やや粘りがある
- 8 5YR5/2灰褐色細砂 φ1-5mmの礫を少量含む。φ30-40mmの礫を少量含む
- 11 10YR2/7褐色シルト 炭化物から成り、粘りがある
- 23 7.5YR6/7褐色細砂 φ1-2mmの礫を少量含む。褐色(5YR6/8)の細砂層をブロック状に少量含む
- 28 上部礫層中込め細砂
- 18 10R5/4赤褐色細砂
- 19 10R5/4赤褐色シルト 炭化物を少量含む。φ5mm程度の礫を少量含む
- 61 下部礫層中込め 第3層表土(下位)
- 20 5YR5/4に多い赤褐色細砂 φ3-5mmの礫を少量含む。φ10-20mmの礫を多量に含む。堅く締まる
- 31 10YR6/6黄褐色細砂 炭化物。φ20-30mmの礫を少量含む
- 32 5YR6/3に多い褐色シルト 炭化物を少量含む
- 南側谷/込み
- 7 7.5YR6/6褐色シルト 灰白色(10R5/2)シルトを多量に含む
- 7 7.5YR6/4に多い褐色細砂 炭化物を散ら含む。φ3-5mmの礫を散ら含む
- 61 下部礫層中込め 第3層表土(下位)
- 33 2.5YR5/4に多い赤褐色細砂 φ80-120mmの礫を多量に含む
- 34 2.5YR5/6明赤褐色細砂 灰赤褐色(2.5YR7/4)のシルトを中量。マージング状に含む
- 42 2.5YR7/4灰赤褐色シルト 灰赤褐色(2.5YR7/4)細砂を少量含む。粘りがある
- 61 下部礫層中込め
- 146 10R5/4赤褐色細砂 はば均等で、白褐色の細砂層を均一に少量含む。φ10-20mmの礫を多量に含む
- 146 5YR6/2灰褐色細砂 灰褐色(5YR6/3)シルトを多量に含む。しまりがなく、土は粘る
- 146 7.5YR5/6明褐色細砂 φ1mm程度の礫を少量含む
- 22 5YR7/3褐色シルト 炭化物。褐色(5YR6/8)の細砂層を境目状に少量含む
- 35 10R4/4赤褐色細砂 φ5-10mmの礫を多量に含む
- 7 7.5YR5/1赤褐色細砂 φ30-50mmの礫を少量含む
- 第4層表土
- 9 7.5YR5/2灰褐色シルト 堅く締まる
- 7 7.5YR5/6褐色細砂 φ3-5mmの礫。φ30-40mmの礫を少量含む
- 7b 2.5Y4/2灰褐色細砂 φ3-5mmの礫を少量含む。φ10-30mmの礫を中量含む
- 7c 10YR5/3に多い赤褐色細砂 φ5-8mmの礫。φ10-20mmの礫を中量含む
- 7c 10R4/4赤褐色細砂 炭化物を多量に含む。礫を多量に含む

- 7d 10R4/4赤褐色細砂 φ5mm程度の礫。φ20-30mmの礫を少量含む
- 7e 2.5YR5/3黄褐色細砂 φ10-20mmの礫を少量含む
- 7f 2.5YR5/4に多い赤褐色細砂 灰赤褐色(10YR6/2)シルト。炭化物。φ10-20mmの礫を少量含む
- 7g 2.5YR5/6明赤褐色シルト φ20-30mmの礫を少量含む。明赤褐色(2.5YR6/6)の細砂を中量含む
- 7h 7.5YR5/4に多い褐色細砂 φ30mm程度の礫を散ら含む。炭化物を少量含む
- 7i 7.5YR7/6褐色シルト φ3-5mmの礫を少量含む
- 7j 5YR5/4に多い赤褐色細砂 φ3-5mmの礫を少量含む。φ10-20mmの礫を散ら含む
- 7k 7.5YR7/6褐色シルト 炭化物。φ3-5mmの礫を少量含む。堅く締まる
- 8a 5YR6/1褐色細シルト 明赤褐色(2.5YR5/6)のシルトをブロック状に多量含む
- 第5層表土(下位)
- 8b 7.5R4/1暗褐色細砂 炭化物。φ20-30mmの礫。明赤褐色のシルトを少量含む
- 8c 7.5YR5/6明褐色細砂 φ10-20mmの礫を中量含む。φ20-30mmの礫を少量含む
- 34 5YR6/2褐色細砂 炭化物。灰褐色(5YR6/2)シルトを少量含む。やや粘りがある
- 37d 7.5YR5/3に多い褐色細砂 φ3-8mmの礫。φ30-40mmの礫を少量含む。土面片を含む
- 第6層表土(上位)
- 61 5YR5/3に多い赤褐色細砂 φ30-50mmの礫を少量含む。しまりがなく、もろい
- 62 10R5/4赤褐色細砂 炭化物。灰白色シルトをブロック状に少量含む。遺物を多量に含む
- 63 11に多い褐色5YR6/4シルト 炭化物。灰白色シルトを少量含む。やや粘りがある。堅く締まる
- 64 10Y5/3灰褐色シルト 灰褐色(10Y5/3)細砂を均一に少量含む。均質で粘りがある
- 73 5YR6/3に多い褐色シルト には、褐色(5YR6/2)細砂層を境目状に少量含む。粘りがある
- 74 7.5YR6/2に多い褐色シルト には、褐色(5YR6/2)細砂層を境目状に少量含む。粘りがある
- 75 5YR6/1褐色細砂 φ20mm程度の礫を少量含む。均質である
- 76 10R5/4赤褐色細砂 φ5mm程度の礫を中量含む。φ30mm程度の礫を少量含む
- 第7層表土(下位)
- 69a 10R5/3黄褐色シルト 黄褐色(5R6/6)シルトをブロック状に少量含む。炭化物を少量含む
- 69b 10R5/3黄褐色シルト φ10-20mmの礫。木片等を少量含む
- 川床/礫層中込め
- 38 10R5/3に多い黄褐色細砂 灰褐色(10YR6/1)のシルトをブロック状に少量含む
- 39 10R5/4赤褐色シルト 炭化物を少量含む。灰白色(10R5/1)シルトを多量に含む。粘りがある
- 40 2.5YR6/3に多い褐色シルト φ50-100mmの礫を多量に含む。には、褐色(2.5YR6/3)細砂を少量含む
- 41 10R5/8赤褐色シルト φ50-100mmの礫を多量に含む。赤褐色(10R5/8)の礫を少量含む
- 42a 10Y6/1灰褐色シルト 灰褐色(5R6/6)シルトを均一に少量含む。遺物を少量含む
- 42b 5Y5/3黄褐色細砂 φ30-40mmの礫を少量含む。やや粘りがある
- 77 10Y5/1黄褐色細砂 φ10-30mmの礫を少量含む。φ50-80mmの礫を少量含む
- 第8層表土(上位)
- 69a 10R5/6赤褐色細砂 φ2-5mmの礫を多量に。φ50-70mmの礫を少量含む。黄褐色の細砂を少量含む
- 69b 7.5R4/6赤褐色細砂 φ2-5mmの礫を多量に含む。φ50mm程度の礫を少量含む
- 69 10R5/4/1黄褐色細砂
- 10R5/4/1黄褐色細砂 φ30-50mmの礫。木片等を少量含む
- 71 10Y5/3灰褐色シルト 灰褐色(10Y5/3)シルトを均一に少量含む
- 72 5YR6/3に多い褐色シルト には、褐色(5YR6/2)細砂層を境目状に少量含む。粘りあり
- 77a 7.5Y4/1黄褐色細砂 炭化物を散ら含む。暗褐色(7.5Y4/1)細砂を境目状に少量含む
- 77b 10Y6/1黄褐色細砂
- 77c 5R6/1黄褐色細砂 黄褐色(5R6/1)シルトを境目状に少量含む
- 77d 5R6/1黄褐色細砂 炭化物を中量含む
- 77e 5R6/1黄褐色細砂 炭化物を少量含む
- 第9層表土(下位)
- 72 7.5YR5/3に多い褐色シルト には、褐色(5YR6/2)細砂層を境目状に少量含む。粘りあり
- 74 7.5YR6/3に多い褐色シルト には、褐色(5YR6/2)細砂層を境目状に少量含む

図27 調査区南北断面土層図

〈Ⅱ区〉調査面積 204 m² (調査対象面積 229 m²) (図 29 ～ 45・63 ～ 66、写真 34 ～ 48、写真図版 13 ～ 23・43 ～ 55)

Ⅱ区では計 7 面の遺構面を確認し、その内、5 面について平面的調査を行った。

遺構の主だったものとして、鎌倉時代の根固め石を伴った橋脚・水制としてのハネ構造をもつ杭列、鎌倉・室町時代の各遺構面において石積護岸・石組溝、土坑、江戸時代の塀基礎 (石積護岸)・石組溝・土坑などを検出した。

遺物は、鎌倉時代から江戸時代全般に渡っているが、Ⅰ区に比較して瓦の出土数量が頗る多い。

また、特筆すべき事項として、Ⅱ区において現地表面から約 4 m 下がった T.P.=53.00 m 以下の河川堆積層においても平安時代末から鎌倉時代の遺物の出土を確認した。

1) 第Ⅰ面・第Ⅰb面の調査 (Ⅱ区第 2 層系整地土下面) (図 29・63、写真 34 ～ 36、写真図版 13・43)

第Ⅰ面は、Ⅱ区の第 1 層系表土・第 2 層系整地土機械掘削後の面である。

第Ⅰ面では、近世後期以後の溝状遺構 1 条・上部塀基礎崩れ 1 箇所、土坑 3 基、落ち 1 箇所、現在の長屋川の護岸築成時の裏込めを検出した。第Ⅰ面での検出遺構は、遺物の全てを採取していないが、江戸時代の終わり頃から近代に帰属するものと思われる。

101 上部塀基礎 (写真 34) 101 上部塀基礎は、Ⅱ区の北西端 H7-j 6 に位置する。また、Ⅱ区調査地の北西側は、電柱及び支線養生のため調査できなかったが、調査区西壁にて 101 上部塀基礎の崩れた状態を確認した。厳密には、Ⅰ区同様に 101 上部塀基礎の積み石や中込めが崩れた状態である。幅員 1.2 m・深さ 0.3 m 以上を測る。

遺物は、多くの瓦と共に近代と思われる瀬戸碗の体部細片 1 点が出土したが、図示できていない。



写真 34 Ⅱ区 第Ⅰ面 101 上部塀基礎
(調査区西壁断面土層：東から)

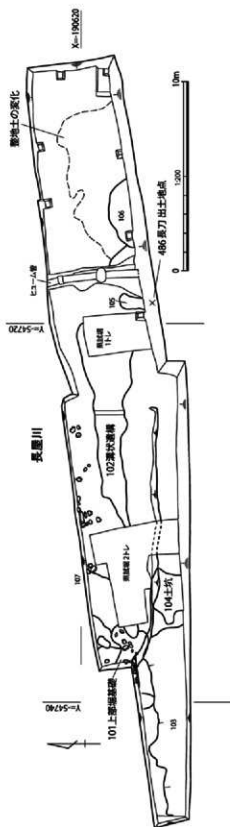


図 29 Ⅱ区 第Ⅰ面遺構位置全体図

102溝状遺構(図29、写真図版13-2・43)

102溝状遺構は、Ⅱ区の中央H7-f6~j6にかけて東西方向に位置する。102溝状遺構は、東側に連れ幅員が広くなり、延長16.5m・幅0.3~2.8m・深さ0.15mで、平面的に不整形である。先述した101上部塀基礎より後出する。

埋土は、10YR 4/1 褐灰色細粗砂を主体として締りがなく、多量の炭が混じり、基底部は硬化する。瓦が多量(写真図版43-603・604)に廃棄された状態で出土した。方向性と位置関係から、101上部塀基礎と関連する可能性が高い。

104土坑(図29、写真図版13-2・43) 104土坑は、調査区の西側H7-i7に位置する。東西3.0m・南北1.9m以上・深さ0.2mの不整形を呈する土坑である。埋土に多量の焼土と炭化材を含む。遺物は、遺物収納コンテナにして1箱分があり、軒平瓦1点・丸瓦3点などが出土した。

107集石遺構(図63、写真35) 107集石遺構は、主に調査区北壁で東西延長17m分を検出した。平面的にも精査を試み、102溝状遺構より北側に位置することが把握できたが、明確な掘形を検出することができなかった。107集石遺構は、現在の長屋川の野面積みの護岸築成時の裏込めと考えられる。遺物は、土師器小皿(図63-418・419)・瀬戸美濃碗(421)、軒平瓦(写真図版43-602)が出土した。土師器小皿は、下位層の混在とみられる。瀬戸美濃碗が107集石遺構の時期に伴い、近代に帰属するものと考えられる。

その他、第Ⅰ面では、105・106土坑、103落ちなどを検出した。

また、第Ⅰ面から第Ⅱ面に至る間で、調査区南壁断面土層において第Ⅰb面の存在を確認した。第Ⅰb面では、暗渠排水溝1条などを検出した。

108暗渠排水溝(図63、写真図版17-4) 108暗渠排水溝は、Ⅱ区の西側H7-j6・7に位置し、第Ⅲ面で検出した。側の石積みは、最高2段がそのまま遺存し、横長の石材では長辺を内側に、小振りの石材では小口を内側に揃えている。また、側の石積みと直交して蓋石が架橋されていた。

排水溝の北側は調査区外となり未掘削であるが、推定延長線上で後述する第Ⅲ面111塀基礎とT字形に接する配置になると思われる。108暗渠排水溝は、溝内埋土からの遺物はなく、掘形埋土から土師器皿2点(図63-418)、軒平瓦1点・丸瓦2点・平瓦7点、鉄釘1点が出土した。大半が下位層の遺物の混在である。軒平瓦は、図示していないが、横外区の長い近世に帰属するものである。

なお、108暗渠排水溝は、調査中も常時湧水が絶えず機能した状態であった。後述するが、108暗渠排水溝の直下に第Ⅲ面129排水溝が位置する。



写真35 Ⅱ区 第Ⅰ面102溝状遺構(東から)



写真36 Ⅱ区 第Ⅰ面107集石遺構
(調査区北壁断面土層：東南東から)

2) 第三面の調査(Ⅱ区第4層系整地土上面)(図30、写真37～42、写真図版14～17)

第三面では、長屋川側には塀基礎、その南側には建物のあった屋敷地が広がっていることが分かってきた。屋敷地側には、柱穴の並び・石組排水溝・土坑などを検出した。

主に石組(石積)遺構では、長屋川側で111 塀基礎(県試掘では、平成18年度調査の1-2段目石積みに対応させている)・112 犬走り(県試掘では、平成18年度調査の1-1段目石積みに対応させている)を検出した。南側の屋敷地では、掘立柱列(掘立柱建物か?)・土坑8基、111 塀基礎に直行する南北方向の129 石組排水溝、整地地業の整地土の単位などを検出した。

第三面の遺構は、出土した土師器を始め陶磁器や瓦をもう少し検討する必要があるが、出土遺物と層序関係から概ね江戸時代中期(18世紀)と考えられる。

なお、Ⅰ区西端及び東端からⅡ区西側にかけて第4層系a 整地土あるいは第4層系b 整地土の上位に厚さ1～5cmの炭混層の堆積を認めることができる。一部においては焼土の部分的な広がりも認めることもできる。

111 塀基礎(図30、写真37・38、写真図版15～17) 111 塀基礎は、Ⅱ区中央の東西方向H7-e6～j6に位置する。延長19m分を検出した。ヒューム管より東側は、長屋川の流れによって崩落したため検出できなかった。111 塀基礎は、遺存状態の良い部分で長屋川側の石積みの高さ1.1m(3尺半以上)・天端幅1.05～1.35m(3尺半～4尺半)である。構築時の積みの高さは、調査区南壁断面土層に残る上位の整地土との層序関係から復元できる可能性がある。現状では、111 塀基礎の積み石は、最高5段が遺存し(写真37・38)、下段の二石が112 犬走りの積み石によって隠れる状態となる。

現状石積みの高い部分でⅠ区第三面61 下部塀基礎(天端T.P.=55.00～55.10m)より約40cm高いこと(天端T.P.=55.40m)、石積み天端の残りが非常に悪いことから中込めが露出した状態で検出した。これらのことから、本来、111 塀基礎の石積みの天端そのものがⅠ区61 下部塀基礎より高位置にあったと考えるのが妥当である。111 塀基礎の遺存する天端は、現状からみると東西

端T.P.=55.40～55.40m、基底部でT.P.=54.30～54.40mとなり、Ⅱ区全体から見れば水平を保っているようである(異常値を示す調査区北西壁断面値は除く)。調査のできなかった電柱・支線の部分で積み石構造が変わる可能性がある。また、Ⅰ区のように111 塀基礎の南側の石列や塀を支える柱の礎石がないのは、後世の塀基礎の構築や整地地業のため大半が無くなった状態にあると思われる。このことによって、111 塀基礎の中込め石(多量の瓦が廃棄されている部分もある)が露出する状態となっている。



写真37 Ⅱ区 第三面111 塀基礎石積み (07-f6: 北から)



写真38 Ⅱ区 第三面111 塀基礎石積み (07-j6: 北東から)

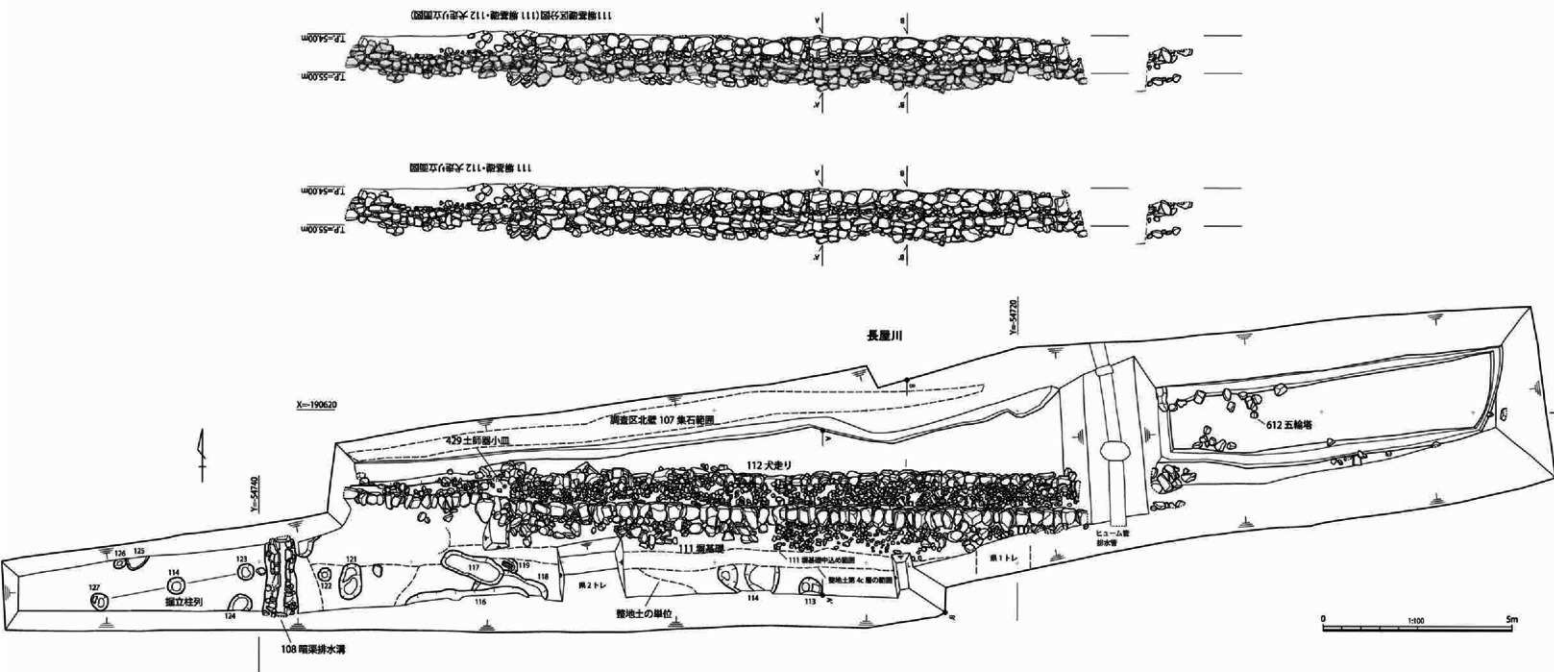


图 30 II 区 第三面遺構全体平面図

112 犬走り（写真図版 15～17）111 塀基礎の北側には、「犬走り」が造られているのが構造上の特徴になる。112 犬走りは、111 塀基礎に付随して北側 H7-e6～j6 に位置し、西端の積み石が大きく無くなった状態にある。原因は、現在の長屋川の護岸構築時（部分的に、江戸時代後期の積みが残っているものと考えられる）に第Ⅰ面 107 裏込めとして転用されたことによると判断した。

112 犬走りは、比較的遺存状態が良好で、長屋川側の石積みの高さ 0.5～0.7 m（2 尺前後）・天端幅 0.75～0.85 m（2 尺半～3 尺）である。基本的に石積みの天端を揃えるために基底部で石の積みを調整しているが、基底部も比較的良好に揃っている。最高 4 段が遺存する。112 犬走りの天端は、準大かそれよりやや大きめの丸石を敷き詰めた状態である。その丸石の隙間には、河川堆積と思われる 2.5Y6/2 灰黄色細粗砂が入り込む状態となる。111 犬走りの遺存する天端は、現状からみると東西端 T.P.=54.80～54.80 m、基底部で T.P.=54.00～54.10 m となり、Ⅱ区全体から見れば 111 塀基礎同様に水平を保っているようである（図 48：異常値を示す調査区北西壁断面値は除く）。

111 塀基礎・112 犬走りの石の積み方を南北断面土層（写真 39・写真図版 17-1）から検討した。その結果、まず、111 塀基礎の石を積みながら裏込めを入れていった状態が明らかとなった。112 犬走りも同じ造り方である。長屋川側の堆積層との層序関係から、まず、111 塀基礎が構築時の河川堆積層の上に石を積み置いた後、しばらく旧長屋川の河川堆積で溜まった細粗砂が 111 塀基礎の北面に貼り付いた状態で堆積する。次に少し時間が経てから、この河川堆積層の上に石を積み置いて 112 犬走りを造ったと考えられる。112 犬走りの構築は、長屋川の流れから 111 塀基礎を護るために、より頑丈なものにする必要が生じたものと思われる。



写真 39 Ⅱ区 第三面 111 塀基礎・112 犬走り
南北セクション断面土層（西から）

また、112 犬走りの北側に平行して幅 1 m の範囲から大量の瓦が出土している。このことから塀の上屋は瓦葺きであった可能性が考えられる。

一方、111 塀基礎・112 犬走りの北側では、江戸時代の長屋川の流れを検出した。第三面对応面では、川に土砂（主に粗砂礫層）が溜まった状態のため、まだ下位の層から瓦を主体とした遺物が出土することを確認した。大量の瓦と共に石造遺物として組合式五輪塔（供養塔）の一部（写真図版 43-612）も出土した。111 塀基礎や 112 犬走りの北側では、Ⅰ区 61 下部塀基礎と同様に江戸時代の長屋川は現在の長屋川とほぼ同じ深さであることが明らかとなった。

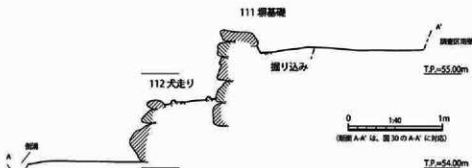


図 31 Ⅱ区 第三面 111 塀基礎・112 犬走り石積断面図

これらの111 堀基礎・112 犬走りや屋敷地は、現在ある円解院の創建時のものと考えられる。

掘立柱列（掘立柱建物か？）（写真図版12-1）

掘立柱列は、Ⅱ区の西端H7-k7に位置する。西端から127・114・123柱穴が東西方向に並んで位置する。柱穴規模は、各々径0.4m前後・深さ0.07～0.17mと比較的浅い遺存である。柱間は、西側から2.05m・1.90mを測り、やや不揃いである。掘立柱列は、南側に並んで建物になる可能性もあるが、調査地が狭いため判然としない。

その他、南側の屋敷地側では、土坑8基、111 堀基礎に直行する方向の129排水溝、柱穴様の113小穴・122小穴、111 堀基礎に関係する整地地業の単位などを検出した。

129排水溝（図32、写真図版17-5・20-4）

129排水溝は、断面土層から第Ⅰb面と考えられた108暗渠排水溝の直下に位置する。調査区南壁断面位置では、108排水溝に重なって区別し難い状態にあるが、調査区北壁断面位置（写真図版20-4）では108排水溝がやや東側上位に位置し、129排水溝が西側下位に位置する。

第Ⅱ面以下の調査における問題点

Ⅱ区では、調査地の中央東寄りH7-e5・6に西側と東側を分断する位置に円解院からの池水の排水のためのヒューム管が南北に配管されていた。このヒューム管は、池水と共に南側丘陵からの雨水・浸透水などを集め排水されるため、調査においては取り除くことができず残したままになった。そのため、調査では第Ⅱ面以下の平面的及び調査区断面での堆積層序の連続性を検討するのに支障をきたす結果となった。これに対処するために、江戸時代の旧長屋川側の調査に当たっては、以下の観察・検討を行い、様々な所見の元に作業を進めた。

なお、このヒューム管に残した部分を南北土層畔として断面土層写真（写真図版23-5・6）と断面土層図（図44）として記録した。また、この南北畔を境として、西側を「Ⅱ区西側」、東側を「Ⅱ区東側」と記述する場合もある。

旧長屋川での第Ⅲ面对応面（江戸時代）を検出するための掘削

旧長屋川に堆積する粗砂礫層の掘削は、取り敢えず、遺物の取り上げをⅠ区に対応させて考えたが、粗砂礫層から出土する瓦主体の遺物様相から見れば、室町時代に入っているように思

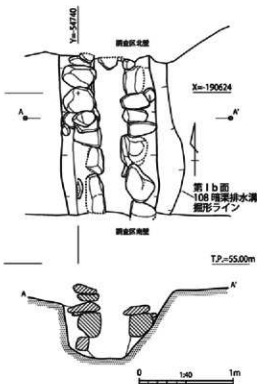


図32 Ⅱ区 第三面129排水溝実測図



写真40 Ⅱ区 第三面对応 礫石検出状況（北東から）

われた。近世の陶磁器類が殆んど出土しない、僅かながら出土している小破片の土師器類も中世的な様相が強い。僅かな備前・施釉陶器が出土している。但し、H7-d 6 南西隅下位で検出した石崩れは、112 石列の延長と思われる。これらのことは、相矛盾する要素もあるが、T.P.=54.00 ~ 54.20 m 前後（現地表の調査地北東側で約 T.P.=56.10 m、南東側で約 T.P.=57.00 m）が第Ⅲ面对応面と考えて検出した。但し、江戸時代の長屋川の河川堆積の上面と考えられる。

因みに、ヒューム管より東側北 H7-c 4 での現在の長屋川の川底は、T.P.=約 54.20 m である。調査地Ⅱ区の江戸時代河川堆積の上面とほぼ同じ深さである。Ⅰ区の江戸時代河川堆積の上面と現在の長屋川の川底との関係と同じである。

T.P.=54.20 m 前後以下の青灰色粗砂礫層に埋没する人頭大以上の礫石について（写真 40・41）

Ⅱ区東側での T.P.=54.20 m 前後以下の青灰色粗砂礫層に埋没する人頭大以上の礫石（概ね 30 ~ 50 cm 大）については、第Ⅲ面对応面以下での下位層の護岸石積の可能性を考えて、礫石を残しながら掘り下げるが、積み石の並び、積み認められない状態にあった。掘り下げにあたっては、河川堆積層の礫層の状況とⅡ区西側で検出できた第Ⅲ面对応面以下の深さを考慮しながら、面の対応を考えた。そのため、デジタルカメラでのメモ写真を途中記録として、全ての礫石を除去し、掘り下げを続行した。



写真 41 Ⅱ区 第Ⅳ面对応調査区南壁断面土層（北北東から）

人頭大以上の礫石が東西方向に点在するよう

に見える（写真 40）のは、作爲的に並びの悪い他の礫石を除いた結果と思われる。また、第Ⅲ面对応面より、-50 ~ 60 cm の深さ（T.P.=53.60 m ~ 53.70 m）になると、堆積層は濃黄褐色粗砂礫層となり、遺物量（主に瓦）は減じる傾向にある。礫石の転石要因は、旧長屋川の流れ（洪水）によるものと思われる。

礫石は、青灰色粗砂礫層に集中する。遺物（主に瓦）は、特に青灰色粗砂礫層の上半部に集中する。これらのことから、青灰色粗砂礫層及び礫石は、第Ⅲ面 111 堺基礎・112 犬走りの積み石崩れ時の旧長屋川の自然堆積層と考えられる。このことから、111 堺基礎・112 犬走りは、調査地点よりさらにⅡ区東側に続いていた可能性をもつものである。

さらに、遺物の減じた濃黄褐色粗砂礫層上面が第Ⅳ面对応面と考えられるが、護岸石積は検出できなかった。

礫石は、時代的な問題からすれば、第Ⅲ面より下位面の護岸石積の積み石崩れとも思えないこともない。しかし、上位層からの瓦の出土状況（量）の連続性から考えれば、下位面の護岸石積よりも上位面の 111 堺基礎・112 犬走りに関係する石積みとするのが妥当である。

石造物の出土（写真 42、写真図版 14-3）

組合式五輪塔火輪（笠部）（写真図版 49-669）の出土 T.P.=54.10 m は、空風輪（写真図版 14-3・43-612）T.P.=54.30 m より北西側約 1 m で、若干下位の深さから出土する。青灰色粗砂礫層からの出土であるが、部分的に酸化状態の黄褐色粗砂礫層が介在するため、火輪そのものも黄褐色化が浸透している。さらに 1 点、数 m 離れる調査区南壁断面位置において空風輪（写真 42、写真図版 49-668）の出土 T.P.=53.90

mがある。出土レベル値から見た石造物の埋没状況は、第IV面から第III面にかけての河川堆積において生じたものと考えられ、上記の礫石の検出状況との整合性をもつもので、瓦の出土状況(量)の連続性を含めて考えれば、なお有効である。

組合式五輪塔は、調査区他の範囲では出土せず、Ⅱ区東側の第III面对応面から第IV面对応面にかけて集中することから、近在に供養塔の建立されていた地点が存在する可能性がある。

検出状況から、まずⅡ区東側に接する調査地南側の範囲が第一候補にあげられる。長屋川を隔てた北側は、粉河寺の境内地になることから可能性は低い。次いで、現在の粉河寺墓だが、調査地Ⅱ区東側と長屋川を隔てて上流側の右岸に位置することから、これらの石造物との関係を考慮する必要もあろうかと思われる。



写真 42 Ⅱ区 第IV面对応以下 石塔出土状況
(07-c6 調査区南端断面:北から)

3) 第IV面の調査(Ⅱ区第7層系整地土上面)(図33～39、写真43～45、写真図版18～20)

第IV面の屋敷地側は、第7層系整地土上面に該当するが、護岸石積の下位には部分的に第9層系地積層の青灰色粗砂礫層が存在し、護岸石積はその上位に据え置いた状態となる。護岸石積は、Ⅱ区第III面111 柳基礎・112 犬走りの直下からやや北側位置の下位で検出した。

第IV面では、長屋川側に護岸石積・階段状石組、その南側の屋敷地側では石組排水溝2条・礎石様の据え石などを検出した。屋敷地側での検出とした遺構は、実際は第IV面で検出できたものでなく、下位の第V面において検出できた遺構である。第IV面において、各々の遺構は、集石あるいは無秩序な配石と認識できる程度のものであった。それは、第IV面から第III面にかけての時間の中での石積みの崩壊と整地地業による石積みの破壊が伴うものである。

Ⅱ区第IV面は、遺物量は少ないが、出土遺物と層序関係からⅠ区第IV面と同じ室町時代中期に帰属するものと考えられる。

1 3 1～1 3 3 護岸石積(図33・34、写真43、写真図版18・19)

131～133 護岸石積は、Ⅱ区中央の東西方向H7-e 6～j 6に位置する。東西延長18.5 m分を検出した。ヒューム管より東側は、長屋川の流れによって崩落したため検出できなかった。131～133 護岸石積は、遺存状態の良好な部分で長屋川側の石積みの高さ総計0.8 m・天端幅総計1.8 m前後(6尺前後)である。

131～133 護岸石積の構造は、Ⅰ区で対応する第IV b 面81 護岸石積と違いが見られる。Ⅰ区81 護岸石積では一列に積み石が積まれているが、Ⅱ区131～133 護岸石積では崩落している部分が多いものの階段状に三列の石積みを確認した。調査のできなかった電柱・支線の部分で積み石構造が変わる可能性がある。131～133 護岸石積では、各護岸の間にある石を「崩落している」と記述しているが、厳密には、崩落石なのか、各護岸の間に詰められた裏込め石であるのかを明確に区別することができていない。石の間に認められる堆積土層を詳細に観察したが、主体は暗(濃)青灰色粗砂層や淡緑灰色粗砂中ブロック

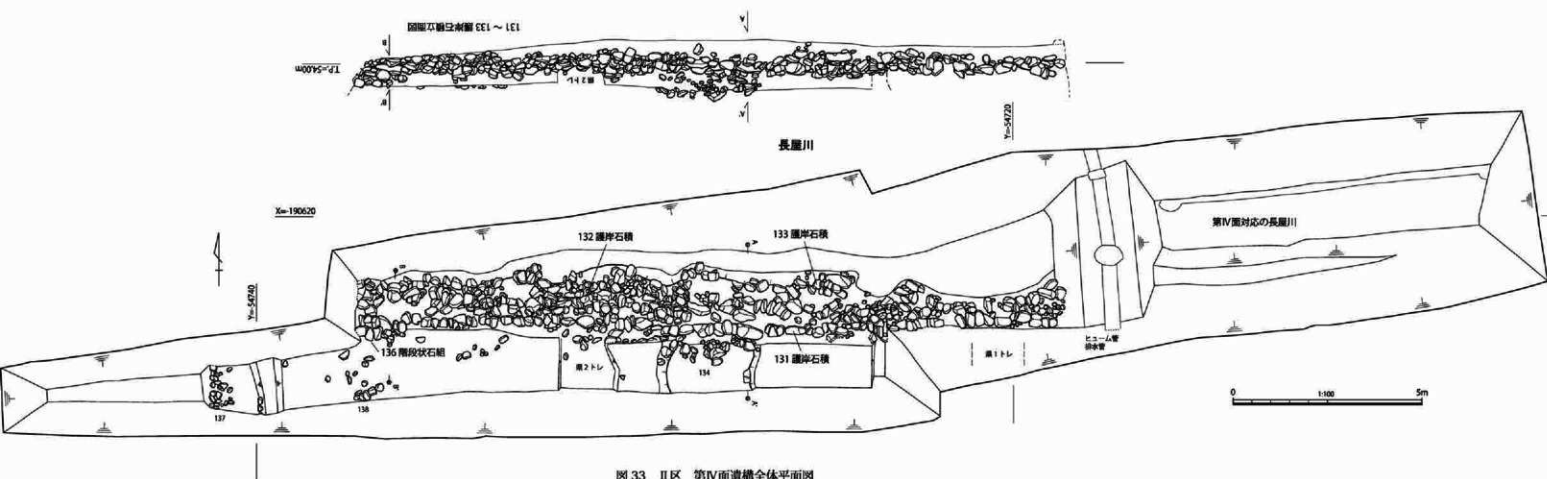


図 33 II 区 第IV面遺構全体平面図

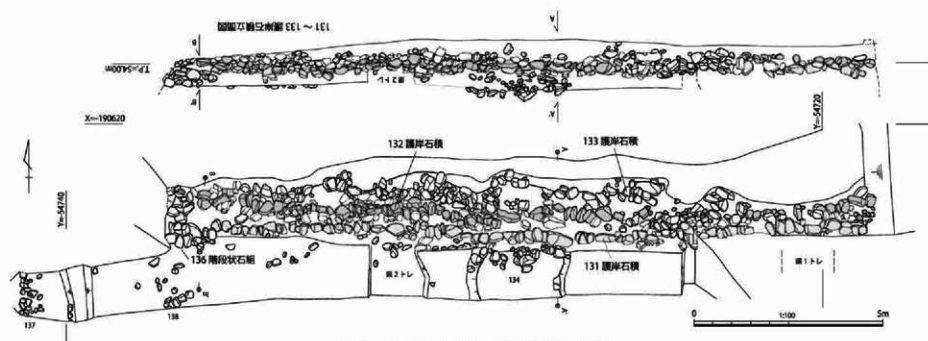


図 34 II 区 第IV面 131 ~ 133 護岸石積区分図

ク少量の堆積層を含む第9層系堆積層の青灰色粗砂細礫層が存在するのみである。

遺物は、第Ⅳ面 131～133 護岸石積直上として取上げた土師器皿 (679・680・683)・小皿 (681・682)・土釜 A (684)、瓦器碗 (685)、瓦当文様の深い軒平瓦 (686)、滑石製石鐏 (687) などが、131～133 護岸石積内として取上げた須恵器東播系埴鉢 (688) などが出土した。

写真43、写真図版18-2は、131～133護岸石積の崩れていると判断した積み石を部分的に取り除いた状態である。その結果、一列目（131護岸石積）の積み石の面の揃っている部分が検出できた。石積み目の二列目（132護岸石積）と三列目（133護岸石積）の間には、崩れたと判断した積み石がまだ少し残った状態であるが、北側の132・133護岸石積の積み・並びはさほど良好ではない。

131・132 護岸石積の積み石の間には、暗（濃）青灰色粗砂層や淡緑灰色粗砂中ブロック少量の堆積層（第9層系堆積層）がある。

136 階段状石組 (写真44・写真図版19-3)

136 階段状石組は、131 護岸石積の西端H7-
j 6 に位置する。136 階段状石組は、131 護岸石
積に連続して二段分（高さ0.6 m）の積み石が遺
存する。136 階段状石組は、後に検出した 139 排
水溝の落ち水が同位置であることから時期差を
反映したものと考えられる。

この 136 階段状石組と 139 排水溝の関係は、I 区第IV b 面 84 集石遺構と第V 面 92 石列の関係に類似する。このことから 136 階段状石組は、本来の 139 排水溝の積み石が崩落した結果、現状の在り方を示すものともみられるが、調査中に明確にすることができなかった。



写真43 II区 第IV面 131~133 護岸石積

017-i6: 北東から)

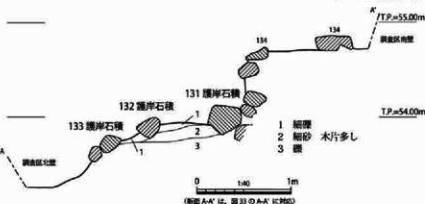


图 35 II 区 第 IV 面 131~133 護岸石積断面図



写真44 II区 第IV面136階段状石組(北から)

T.P.=55.00m



图 36 II 区 第IV面 136 阶段状石相断面图

135排水溝(図37・39、写真図版18・19-1・4・5) 135排水溝は、Ⅱ区の中央南側H7-h6小地区杭周りに位置する。135排水溝は、第Ⅳ面の屋敷地側での検出に際しては、上位に位置する石並びの不明確な134集石(写真図版18・19-1)としての認識しかもてない状態であった。北側の131護岸石積に向かって、水の流れ出す部分がU字形に二股に分かれた排水溝である。135排水溝は、溝幅0.2～0.4m・石積み遺存高約0.6m、積み石最高4段である。

遺物は、溝内から土師器皿6点・小皿2点、常滑甕1点、外面粗いタタキの施された甕2点などが出土した。

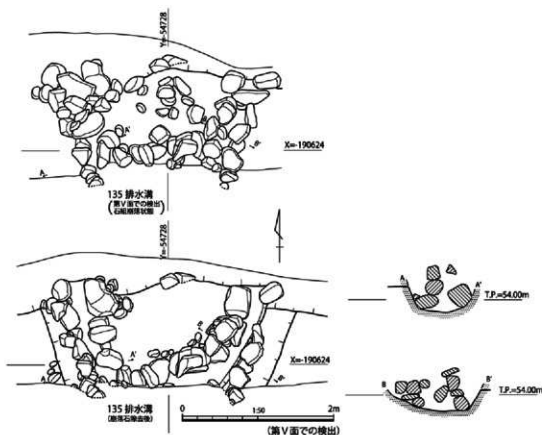


図37 Ⅱ区 第Ⅳ面 135排水溝実測図

139排水溝(図38・39、写真45、写真図版20-1・4・50) 139排水溝は、Ⅱ区の西側H7-j6・7に位置する。139排水溝は、第Ⅳ面の屋敷地側での検出に際しては、上位に位置する石並びの不明確な138集石としての認識しかもてない状態であった。北側の131護岸石積に向かって、水の流れ出す部分が135排水溝同様に二股に分かれた排水溝である。139排水溝は、溝幅0.2～0.4m・石積み遺存高約0.6m、積み石最高4段である。

遺物は、溝内から土師器皿3点・小皿6点(700)、



写真45 Ⅱ区 第Ⅳ面 139排水溝東側溝
(石組崩落状態：北東から)

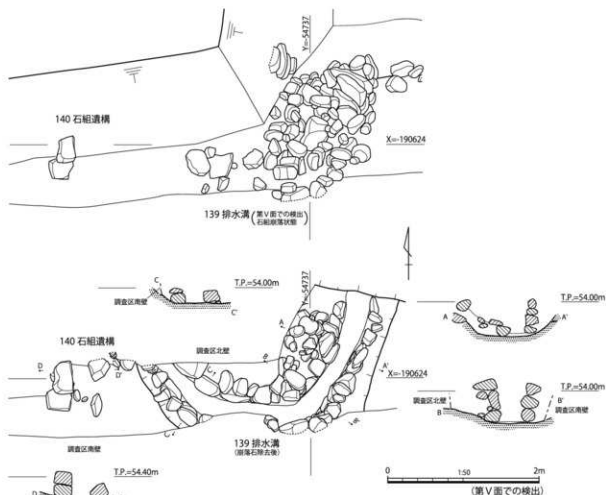


図38 II区 第IV面 139排水溝・140石組遺構実測図

軒丸瓦1点(702)・丸瓦・平瓦など、掘形埋土から底部回転糸切りの土師器小皿(699)、平瓦などが出土した。

135・139排水溝では、二股に分かれている理由や135排水溝の石積みが131護岸石積の石組みにどのような取り付くのかを明らかにできていない。理由の一つに、上部の積み石の多くが崩れてなくなっていることにある。このことも原因して135・139排水溝は、共に第V面では検出できていない。両遺構は、第V面での検出においても上部の積み石がかなり崩落した状態であった。139排水溝に至っては、東溝は第V面で、西溝は第V面からやや下がった下位で検出する結果となった。また、131護岸石積では、135・139排水溝に対応する位置に南北方向の排水の石組みは見受けられない。

140石組遺構(図38、写真図版20-4) 140石組遺構は、139排水溝の西隣に位置する。基底部の二石が検出できたのみで、東側の一石と対になり排水溝の可能性がある。写真図版20-4の調査区北壁断面に見るように、第IV面140石組遺構・第III面129排水溝・第Ib面108暗渠排水溝と、順次、右上に構築されていく様子が読み取れる。140石組遺構は、調査区南壁断面では十分に確認できなかった。

なお、ヒューム管より東側の調査地は、第IV面T.P.=53.80m(現地表の調査地北東側でT.P.=約56.10m、南東側T.P.=約57.00m)までの人力掘削・平面的な調査が可能であったが、それより下位は調査地が深くなり過ぎ危険な状態にあると共に複数の要因が絡まって一部トレンチによる第V面対応面までの深掘りに止め、平面的な調査を断念した。

4) 第V面の調査(Ⅱ区第8層系整地土下面・Ⅱ区第9層系堆積土上面)(図39、写真図版20)

第V面の屋敷地側は、Ⅱ区第8層系整地土下面に該当するが、護岸石積の下位にはⅠ区同様に第9層系堆積層が存在し、護岸石積はその上位に据え置いた状態となる。Ⅱ区での第9層系堆積層の層厚はⅠ区に比して薄く、遺物の包含量もⅠ区に比して極めて少量である。第V面では、積み石の非常に遺存度の低い護岸石積を検出した。その護岸石積の法面の一部で杭列を確認している。Ⅰ区では、第V面の91護岸石積が該当する。

141護岸石積(写真図版20) 第V面の調査では、屋敷地側の段を確認することができたが、141護岸石積は非常に残りの悪い状態である。積み石と言うより、むしろ、法面への貼り石と言ってよいほど遺存度は低い。護岸石積の屋敷地側法面の一部では杭列を確認した。杭列は、護岸の崩れを防ぐための工夫の一つと考えられる。杭列には規則性を見出していない。

その他、第V面では、顕著な遺構は認められない。

5) 第Vb面の調査(Ⅱ区第11層系堆積土上面)

Ⅱ区の第Vb面では、第11層系堆積土の上面で部分的に土坑を検出したに止まる。第11層系堆積土は、屋敷地側の下位層の堆積層で、木屑・木の葉・竹など有機分を多量に含んだ黒灰色泥砂や細粗砂が薄く何層にも堆積した状況にある。Ⅱ区での遺物量は、全般に少なくなる。

150土坑(図41、写真46、表7、写真図版53) 150土坑は、Ⅱ区の中央南寄りH7-h6に位置する。150土坑は、東西0.38m+α・南北0.6m・深さ0.15m+α(調査時に第V面以下の整地土の掘削において、土坑の上部を削平している)で、円形を呈するものと思われる。埋土は、土坑中央部で黒色泥砂を主体とし、法面には遺構ベースに影響された緑灰色細粗砂・灰色粗砂細礫が埋積する。遺物は、土師器小皿(写真図版53-769~778)が多量に出土した。

150土坑の遺物は、遺構平面の検出作業が疎かになり、大半は第V面対応以下の第11層系堆積土(第9層系堆積土を含む)として取り上げる結果となった。また、土坑の西側半部についても下位層の掘り下げに伴って削平してしまった。しかし、遺物そのものは、元の150土坑に帰属させることが可能であった。

土師器小皿は、54.91個体(破片点数377点)が出土した。概ね、口径8.4~9.8cm・器高1.6~2.3cmを分布領域とする一群である。今少し詳細にみると、口径9.0~9.4cm・器高1.6~2.0cmに集中する傾向にある。小皿は、底部外面中央部に連続ピッチのユビオサエ、口縁



写真46 Ⅱ区 第Vb面 150土坑遺物出土状況(西から)
(手前は、掘削のため無くなっている)

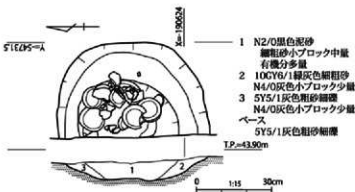
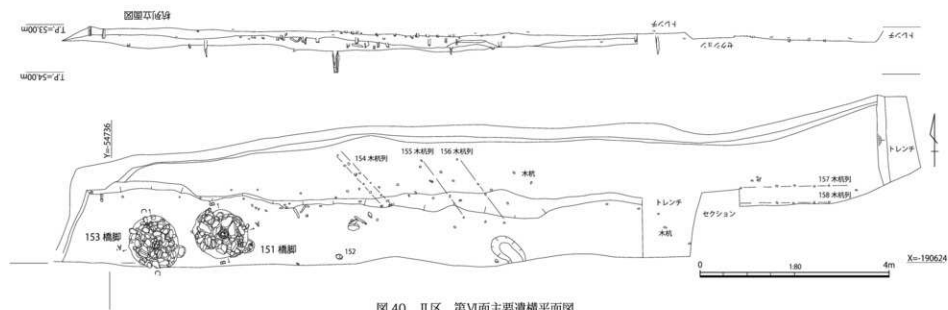
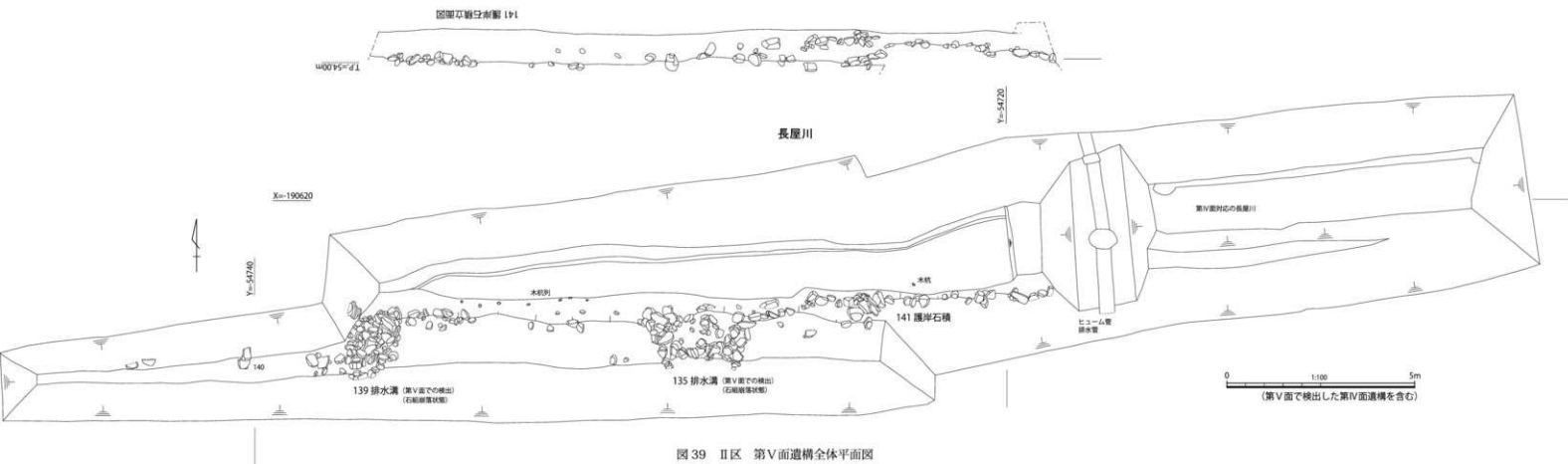


図41 Ⅱ区 第Vb面 150土坑実測図



部は強いヨコナデによる。これに伴って、土師器皿1点・瓦器碗2点(779・780)が出土した。瓦器碗(779)は、見込ミガキ幅0.1~0.15cm・ハケナデの後ジグザグ暗文、しっかりとした貼り付け高台、高台内回転糸切りが施される。瓦器碗(780)は、内面ミガキ幅0.3cmで密、外面ミガキ幅0.4cmで密である。何れも、瓦器碗としては初現期に属するものと思われる。

6) 第VI面の調査(Ⅱ区第11層系堆積土下面)(図40・42、写真47、写真図版21・22・54・55)

第VI面は、Ⅱ区第11層系堆積土下面に該当するが、Ⅰ区に比して第11層系堆積土の層厚が薄く、遺物の包含量も全般に少なくなる。

第VI面では、151・153橋脚、水制としてのハネ構造をもつ154~156杭列などを検出した。第VI面は、検出層序と出土遺物から鎌倉時代前期12世紀~中期13世紀に対応するものと思われる。

151・153橋脚(図42、写真図版21・22) 151・153橋脚は、Ⅱ区の西側H7~i6に位置し、対になる。151・153橋脚は、柱材の基部を根固め石によって固定する工法を採用し、堅固に構築されている。埋土は、暗色を呈する第9層系粘質土混じり青灰色粗砂礫である。柱材の基部40cmの遺存度は非常に良いが、上部は腐って無くなっている。

また、151・153橋脚の真南側の調査区南壁断面土層の第IV面に黄褐色粗砂細礫混じりシルトの高まりが認められる。151・153橋脚との位置関係から橋脚位置南側に対応する道遺構の可能性をも考えたが、旧長屋川から立ち上がる橋の位置関係の復元に無理がある。

151橋脚は、東西1.15m・南北1.03m・深さ0.4mの掘形の中央に柱材(写真図版22-2、図66-495)が据えられ、基部を根固め石によって固定していた。柱材は、直径19cm・基底面16×17cm・遺存高58cmで、手斧による加痕跡が明瞭に遺存する。

153橋脚は、東西1.05m・南北1.10m・深さ0.4mの掘形の中央に柱材(写真図版22-3、図66-496)が据えられ、基部を根固め石によって固定していた。柱材は、直径19cm・基底面18×19cm・

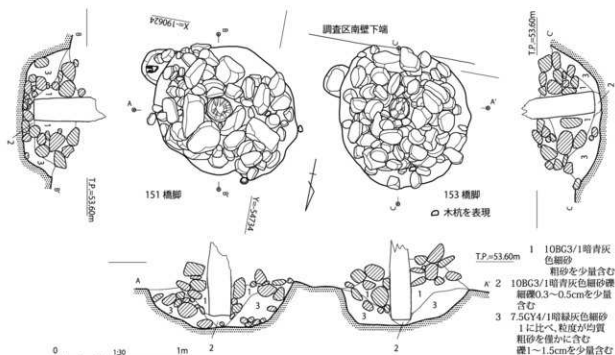


図42 Ⅱ区 第VI面 151・153橋脚実測図

遺存高 66 cmで、151 橋脚柱材同様に手斧による加痕跡が明瞭に遺存する。

2基の橋脚柱材の芯々間の距離は、1.45 m (約4尺8寸)である。現時点では、上部側の腐朽がかなり進んでいる。両材共に樹種は、ヒノキである。151・153 橋脚柱材は、糖アルコール含浸処理法による保存処理を行っている(付章)。

154～156 杭列(写真図版 22) 154～156 杭列は、Ⅱ区のほぼ中央H 7-i 6に位置し、151・153 橋脚との位置関係から、橋脚に直接水の勢いが当たらないように水制(水の勢いを制御する)としてのハネ構造をもっているものと思われる。151・153 橋脚を護るために上流側に三列以上が認められることが判明した。

杭材の取り上げ(写真 47) 154～156 杭列の杭材は、時間的な制約の中で全てを取り上げることができず、最小限に止め、観察と取り上げを行った。その結果、杭材の大半は、打ち込みの堆積層が粗砂礫層であるがために先端部の裂け、欠損が認められる。打ち込みの深い杭材で第Ⅵ面対応面から約0.7 m前後に達するものが認められる。杭材は、角杭(一辺3×4 cm→5.5×6.5 cm、検出長0.2～0.8 m)が大半を占め、一部に丸杭(径4～5.5 cm)も認められる。杭列内での部材の選択性は認められない。杭材の樹種は、主に角杭が針葉樹、丸杭が広葉樹と思われる。

また、杭材は上部の腐朽がかなり進んでいるため、第Ⅵ面対応面以下を少しずつ下位に下げるに従って杭の遺存度が高くなりその数を増していく傾向にあった。

その他、第Ⅵ面では、屋敷地側と旧長屋川側との境目で検出した高さ0.2 mの段差に沿って東西方向に並ぶ杭列を検出した。Ⅱ区の東側H 7-f 6では、二列に平行して打ち込まれた杭列(写真図版 22-4)を検出した。それ以外には、第Ⅵ面では、顕著な遺構は認められない。

7) 第Ⅵ面対応面以下の状況

第Ⅵ面対応面以下については、第Ⅵ面対応面で検出した杭列の杭材の取り上げに際して下位層を掘り下げ、下位層の状況の一端を窺うことが可能となった。第Ⅵ面対応面以下は、粗砂礫層を主体とする自然堆積層である。厳密には、大礫～小礫や粗砂・細砂、もしくはこれらの互層が複雑に堆積している状況にある。その第Ⅵ面対応面以下の河川堆積層には僅かながら遺物(写真 48)が認められ、鎌倉時代の土器を含む遺物内容から当該期の旧長屋川の埋没過程を示すものと判断できる。



写真 47 Ⅱ区 第Ⅵ面 154 杭列杭材打ち込み状況
(杭 20・21: 東から)



写真 48 Ⅱ区 第Ⅵ面杭 22 直下遺物出土状況(北北西から)

また、Ⅱ区西側においても、調査区が狭小で湧水が著しく、また、調査区東側では南側から丘陵が迫り出し掘削深度が第Ⅵ面対応面の段階で既に約3～4.5mに達しているため危険度が増してきており、T.P.=53.00mまでの全面的な調査を断念した。

8) 第Ⅰ面～第Ⅵ面の遺構と層序の関係 (図43～45、写真図版23)

ここでは、図43 Ⅱ区調査区南北断面土層図1 (H7-f 6) (以下、「Ⅱ区南北土層図1」と略)と図44 Ⅱ区調査区南北断面土層図2 (H7-e 5・6) (以下、「Ⅱ区南北土層図2」と略)との比較から記述する。なお、Ⅱ区南北土層図1は、Ⅱ区第Ⅲ面111 塀基礎・112 犬走りを検出した高さから、順次掘り下げながら断面土層図を作成した。図8 Ⅱ区の基本層序 (H7-f・g 7 調査区南壁断面土層)に近い位置にあり、各々に対応する層番である。

Ⅱ区南北土層図1の層番1・2 qは、第Ⅰ面以後の盛土及び表土層である。層番4 b・4 cは、111 塀基礎の裏込めとなり、T.P.=55.70m高さが111 塀基礎構築時の屋敷地側の地盤を構成するものと判断した。平面的な調査では県文化遺産課確認トレンチの石積みを追い過ぎ、結果的には111 塀基礎の石積みの遺存する深さを調査第Ⅲ面として検出した。但し、調査第Ⅲ面の層番4 a・4 b 上面においても一定の面を構成する可能性がある。

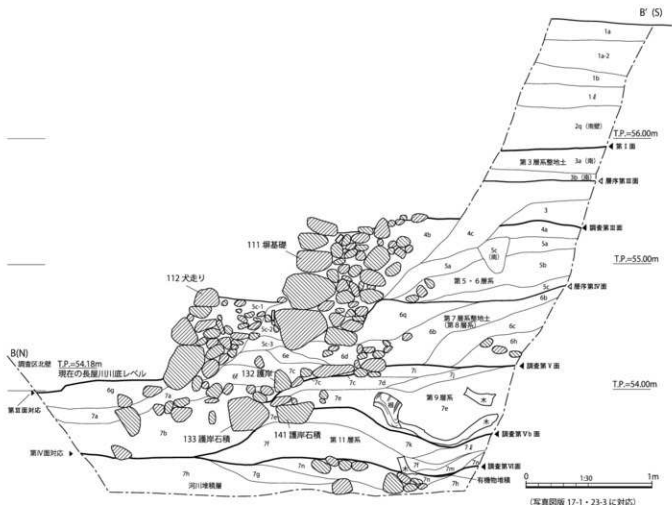
Ⅱ区南北土層図1の層番5 c-3及びⅡ区南北土層図2の4 bは、112 犬走り構築直前の河川堆積層である。層序第Ⅳ面から調査第Ⅴ面にかけては、自然堆積層と人為的な整地土が地盤を構成し第Ⅳ面131～133 護岸石積が、以下は自然堆積層が形成した上に第Ⅴ面141 護岸石積が構築されていた。

次に、Ⅱ区南北土層図2と図45 Ⅱ区調査区東壁断面土層図 (以下、「Ⅱ区東壁土層図」と略)との比較から記述する。Ⅱ区南北土層図2では、殆どの層序が南から北に向かって下降するのに対し、Ⅱ区東壁土層図では調査第Ⅰ面より上位は同じ方向性をもつが、下位の調査第Ⅰ面から第Ⅲ面対応にかけては北から南に向かって下降する。有機物を含み自然堆積と見做される層番4 aも北から南に向かって下降することからも、明らかに北から南に傾斜する河川堆積による埋積とみられる。掘削直後には、一見、不可解な状況にあったが、第Ⅲ面111 塀基礎・112 犬走りの延長がⅡ区東側では調査区南壁の中に位置する可能性が高いことから、往時の長屋川の河川堆積が調査地南側まで及んでいたものと推測される。

第Ⅲ面対応面検出の堆積層：第3層系堆積層の内、Ⅱ区東壁土層図の層番3 jには多量の瓦と礫石が包含することと上下層との関係からⅡ区第Ⅲ面111 塀基礎・112 犬走りがⅡ区東側にも延びると判断した根拠になる。図示した断面には、積み石の可能性のある大石が層番3 q・3 jにかかって一つ入る、これが写真40の礫石検出状況に対応する。

Ⅱ区東壁土層図の第Ⅲ面対応以下は、未だ全ての層番において北から南に向かって緩やかに下降することが確認できる。Ⅱ区南北土層図1・2では、やはり南から北に向かって緩やかに下降する状況にある。ヒューム管のために残した畔位置の東面 (Ⅱ区南北土層図2の反対面)では、傾斜方向は南から北に変化している。この層堆積の傾斜方向の違いは、Ⅱ区東側で生じていることになるが、調査において平面的に確認できていない。

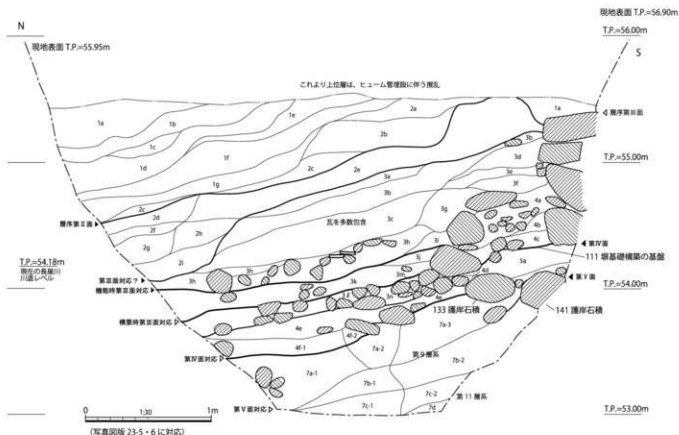
これらのことから、Ⅱ区第Ⅵ面151・153 橋脚の構築されていた鎌倉時代の旧長屋川の流れは、Ⅱ区東側では現状よりも南側に位置し、各護岸石積の方向に沿っていたものと考えるのが妥当である。



- 第1面以後の礫土・黄土
 1a 10YR5/3にぶい黄褐色細砂 木片・砂利等を含み土色は様でない
 1a-2 10YR3/1黒褐色土 細砂を多量に含む腐植土、竹根等を多く含む
 1b 10YR3/3暗褐色細砂 竹根が極めて多く入り込む
 1f 2.5Y5/6黄褐色細砂 均質な細砂、竹根が多く入り込む
 2q 2.5Y6/6明黄褐色細砂
 第3層系礫地土
 3a 2.5Y7/3浅灰色シルト 細砂・粗砂を含む、 ϕ 30~50mmの礫、炭化物を少量含む、堅く締まる
 3b 7.5YR6/2灰褐色細砂 ϕ 10mm程度の礫を中量含む、 ϕ 30~40mmの礫を少量含む、やや粘性あり、堅く締まる
 第4層系
 4c 2.5Y6/4にぶい黄色細砂
 3 2.5Y5/1黄灰色細砂 ϕ 10~20mmの礫を少量含む、 ϕ 50~100mmの礫を少量含む
 第4a層
 4a 5Y6/2灰オレンジ色細砂
 第5・6層系礫地土
 5a 10YR5/4にぶい黄褐色細砂 炭化物、 ϕ 10~20mmの礫を少量含む、 ϕ 40~50mmの礫を少量含む
 5b 2.5Y5/4黄褐色細砂 炭化物、 ϕ 30~50mmの礫を少量含む、 ϕ 5~10mmの礫を中量含む、やや粘性がある
 5c 2.5Y5/1黄灰色シルト 細砂を多量に含む、炭化物をブロック状に多量に含む部分がある、 ϕ 10~20mmの礫を少量含む、粘性がある
 112犬走り中込
 5c-1 2.5Y6/3にぶい黄色細砂 ϕ 60~80mmの礫を多量に含む、瓦片を少量含む、均質であり、やや粘性がある
 5c-2 10YR5/4にぶい黄褐色細砂 ϕ 10~20mmの礫、瓦片、有機物を少量含む、均質であり、やや粘性がある
 第7層系礫地土
 6a 5Y5/2灰オレンジ色細砂 炭化物、 ϕ 20~30mmの礫を少量含む、やや粘性があり、堅く締まる
 6b 2.5Y5/2暗灰黄色細砂 炭化物、 ϕ 20~30mmの礫を少量含む、やや粘性があり、堅く締まる
 6c 10YR5/1褐灰色細砂 ϕ 70~80mmの礫を少量含む、炭化物をわずかに含む、部分的に青灰色(5BG/1)細砂を含む、やや粘性があり、堅く締まる

- 6h 10YR5/4にぶい黄褐色細砂 炭化物をわずかに含む、粗砂、 ϕ 10~20mmの礫を少量含む、 ϕ 80~100mmの礫をわずかに含む、やや粘性があり、堅く締まる
 第IV面対応までの河川堆積・第IV面131~133護岸石積上位
 5c-3 2.5Y5/6黄褐色細砂 粗砂を多量含む
 6d 2.5Y6/1オレンジ色細砂 粗砂を中量含む、 ϕ 10~30mmの礫を少量含む、やや粘性がある
 6e 5BG/1青灰色細砂 灰白色(2.5Y7/1)シルトをブロック状に少量含む、やや粘性がある
 6f 5BG/6/1青灰色シルト 粗砂を多量に含む、 ϕ 20~30mmの礫を少量含む、 ϕ 40~50mmの礫を中量含む
 7c 5B5/1青灰色シルト 均質で、 ϕ 20~30mmの礫を少量含む
 第IV面対応河川堆積
 7a 10BG/6/1青灰色細砂 ϕ 50~60mmの礫を多量含む、 ϕ 5~30mmの礫を中量含む、やや粘性あり
 7b 5PB5/1青灰色細砂 粗砂を中量含む、 ϕ 50~80mmの礫を多量含む
 6g 5B5/1青灰色細砂 ϕ 50~80mmの礫を多量含む、粗砂、 ϕ 10~20mmの礫を中量含む
 第9層系
 7d 5BG5/1青灰色シルト 粗砂・木片を少量含む、 ϕ 20~30mmの礫を少量含む、有機質あり
 7e 5BG5/1青灰色細砂 均質な細砂
 7f 2.5Y6/3にぶい黄色シルト 粗砂、 ϕ 20~30mmの礫を少量含む、粘性がある、有機質あり
 7j 7.5GY/4/1暗緑灰色シルト 粗砂・炭化物を少量含む、 ϕ 5~10mmの礫を少量含む、 ϕ 20~30mmの礫をわずかに含む、粘性がある
 第11層系
 7f 5G5/1緑灰色粗砂 粗砂を中量含む、 ϕ 10~30mmの礫が大を占め、礫の間に粗砂・細砂が入り込む
 7k 5BG6/1青灰色細砂 粗砂、 ϕ 3~5mmの礫を少量含む、有機物・木片を少量含む
 7l 5GY4/1暗オレンジ色シルト 有機物をわずかに含み、粘性に富む
 7m 5GY4/1暗オレンジ色シルト 有機物、木片を少量含む、粗砂を少量含む、粘性に富む
 河川堆積層第12層以下
 7g 5G5/1緑灰色粗砂・礫 ϕ 10mm未満の礫と粗砂から成る、粗砂を少量含む
 7h 10BG6/1青灰色粗砂・礫 ϕ 10~30mmの礫及び粗砂から成る、 ϕ 40~50mmの礫を少量含む
 7n 5GY4/1暗オレンジ色細砂 均質な細砂

図 43 II区 調査区南北断面土層図1



第III面対応までの第3層系整地土

1a 7.7R6/4にぶい黄褐色細砂 φ10~15mmの礫を少量含む、やや粘性あり、堅く締まる

1b 10YR6/2黄褐色細砂 灰白色(10YR7/1)シルトを底状に中量含む、φ10~15mmの礫・φ40~50mmの礫を少量含む、粘性あり、堅く締まる

1c 7.5YR6/2黄褐色細砂 φ5~8mmの礫を少量含む、粘性あり

1d 10YR6/2黄褐色細砂 灰白色(10YR7/1)シルトを底状に中量含む、粗砂・φ10~15mmの礫・φ70~100mmの礫を少量含む、やや粘性あり、堅く締まる

1e 2.5Y7/1灰白色シルト φ10~30mmの礫を中量含む、炭化物をごく少量含む、粘性あり、堅く締まる

1f 2.5Y5/4黄褐色細砂 粗砂・φ10~20mmの礫・φ50~80mmの礫を少量含む、ややもろい

1g 2.5Y6/1黄褐色細砂 灰白色(10YR7/1)シルトを底状に中量含む、瓦片を含む、粗砂・φ20~30mmの礫を少量含む、土壌化

2a 2.5Y6/4にぶい黄褐色細砂 灰白色(10YR7/1)シルトを多量含む、粗砂・φ10~20mmの礫を少量含む、堅く締まる

2b 10YR6/6明黄褐色細砂 粗砂・φ5~10mmの礫・φ30~40mmの礫を少量含む、堅く締まる

2c 2.5Y6/4にぶい黄褐色細砂 灰白色(10YR7/1)シルトを多量含む、粘性あり

第III面対応までの第3層系堆積層

2d 10YR7/2にぶい黄褐色細砂 均質であるが、上辺に粗砂を含む

2e 2.5Y6/6明黄褐色細砂 φ10~20mmの礫を中量含む、φ30~40mmの礫を少量含む

2f 10YR7/2にぶい黄褐色細砂 均質な細砂

2g 2.5Y5/3黄褐色細砂 にぶい黄褐色細砂を少量含む

2h 2.5Y6/4明黄褐色細砂 粒度はシルトに近い、φ50~60mmの礫を少量含む

2i 10YR5/3にぶい黄褐色細砂 φ5~8mmの礫を中量含む、φ30~50mmの礫を少量含む、締まりがなぐもろい

3a 2.5Y6/3にぶい黄褐色細砂 φ10~20mmの礫を中量含む、粗砂を少量含む、やや粘性がある

3b 2.5Y5/4黄褐色細砂 φ5~8mmの礫を中量含む、粗砂・φ10~20mmの礫・φ50~80mmの礫を少量含む

3c 10YR5/6黄褐色細砂 粗砂を多量含む、炭化物・φ10~20mmの礫を少量含む、φ70~80mmの礫をごく少量含む、やや粘性がある

腐植土を多量に含む

3d 10YR7/2にぶい黄褐色細砂 φ10mm程度の礫を少量含む、φ60~80mmの礫を極少量含む、炭化物を僅かに含む

3e 2.5Y6/1黄褐色細砂 粒度はシルトに近い、φ3~5mmの礫・φ10mm程度の礫を少量含む、やや粘性がある

3f 7.5YR5/2黄褐色細砂 炭化物・φ3~5mmの礫・φ20~30mmの礫を少量含む、やや粘性あり、腐植土をごく少量含む

3g 2.5Y6/3にぶい黄褐色細砂 均質であり、炭化物を僅かに含む、腐植土をごく少量含む

111-112構築時 構築前後堆積

3h 10YR5/2灰黄褐色細砂 φ10~15mmの礫を中量含む、φ50~70mmの礫を少量含む、瓦片を僅かに含む、やや粘性があり、もろい

3i 10YR4/2灰黄褐色細砂 もろく、ぐずれやすい

3j 2.5Y6/3にぶい黄褐色細砂 均質な細砂

3k 2.5Y7/2灰黄褐色細砂 φ40~50mmの礫を少量含む、φ80~100mmの礫を僅かに含む

4b 7.5Y6/3にぶい黄褐色細砂 均質な粒度の細砂、水性堆積層

4c 10BG6/1青灰色粗砂 φ5~10mmの礫を少量含む、細砂を極少量含む

112 式まじり中込め

4a 10YR4/2灰黄褐色細砂 φ60~80mmの礫を多量含む

第7・8層系

3l 2.5Y5/2暗灰黄色細砂 φ5~8mmの礫を中量含む、φ50~100mmの礫をやや多量含む

3m 2.5Y6/3にぶい黄褐色細砂 粒度の均一な細砂で、礫を多量含む

3n 5B5/1青灰色細砂 植物遺体・有機物を含む、粗砂を中量含む

4d 2.5Y6/3にぶい黄褐色細砂 均一な粒度の細砂

4e 5B5/1青灰色細砂 φ10~20mmの礫を少量含む

4f-1 10YR7/4にぶい黄褐色細砂 φ10~20mmの礫を少量含む、φ70~90mmの礫をごく僅かに含む、もろく、ぐずれやすい

4f-2 10YR5/6黄褐色細砂 φ10~20mmの礫を少量含む、もろく、ぐずれやすい

5a 5B6/1青灰色細砂 灰白色(10YR7/1)シルトをブロック状に少量含む、φ20~30mmの礫を少量含む、やや粘性あり

第9層系

7a-1 10YR5/4にぶい黄褐色細砂 φ20~30mm・φ50~80mmの礫が主体である、粗砂を含む、もろく、ぐずれやすい

7a-2 10YR5/6黄褐色細砂 φ20~30mmの礫が主体で、φ50~80mmの礫を少量含む、多量の粗砂を含む

7a-3 5B6G/1青灰色粗砂 φ50~80mmの礫・φ20~30mmの礫を少量含む、もろく、ぐずれやすい

7b-1 10YR7/4にぶい黄褐色細砂 粗砂・φ10~20mmの礫・φ30~50mmの礫を中量含む、もろく、ぐずれやすい

7b-2 5B6G/1青灰色粗砂 粗砂・φ30~50mmの礫を中量含む、もろく、ぐずれやすい

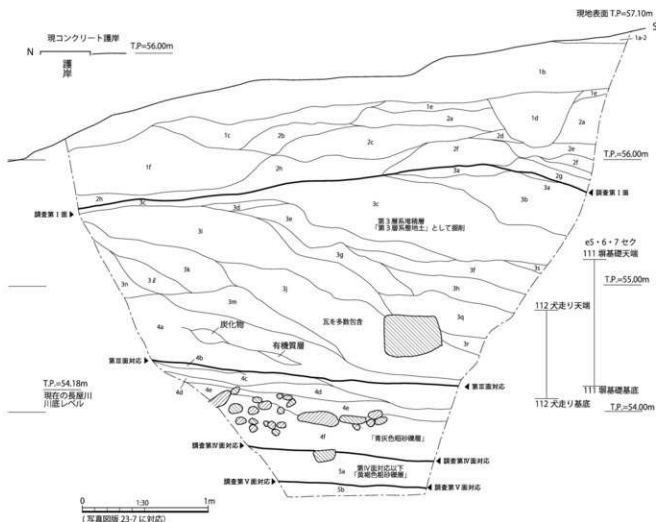
第11層系

7c-1 10YR5/4にぶい黄褐色細砂 φ40~70mmの礫を主体として粗砂を少量含む

7c-2 5B6G/1青灰色粗砂 粗砂・φ10~30mmの礫・φ70~80mmの礫を中量含む

7d 5B6G/1青灰色粗砂 φ20~30mmの礫を少量含む

図44 II区 調査区南北断面土層図2



表土(有機質層)

- 1a-2 10YR3/3黒褐色土 細砂を多量に含む腐植土、竹根を多く含む
 1b 10YR3/3暗褐色細砂 竹根が極めて多く入り込む
 1c 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂 瓦片・φ15~20mmの礫を少量含む、締まりがなくもろい
 1d 10YR3/3暗褐色細砂
 1e 10YR5/3にぶい黄褐色細砂 φ5~8mmの礫を少量含む
 1f 2.5Y4/4オリーブ褐色細砂 瓦片・φ50~70mmの礫を少量含む、φ5~15mmの礫を中量含む、締まりがなくもろい

第1面対応までの第2層系整地土

- 2a 10YR6/6明黄褐色細砂 瓦片・φ10mm程度の礫・φ50~80mmの礫を少量含む
 2b 7.5YR4/4にぶい褐色細砂 φ10~20mmの礫を少量含む、やや粘性あり、1cの土を腐植土に少量含む
 2c 7.5YR4/3褐色細砂 瓦片・炭化物・φ20~30mmの礫を少量含む
 2d 7.5YR4/3褐色細砂 瓦片・φ10mm程度の礫を少量含む
 2e 2.5Y6/6明黄褐色細砂 瓦片・炭化物・φ40~50mmの礫を少量含む、やや粘性あり、強く締まる
 2f 7.5YR5/2灰褐色細砂 粒度はシルトに近い、瓦片・炭化物を少量含む、φ50mm程度の礫を少量含む

第2面対応までの第2層系整地土

- 2h 2.5Y6/6明黄褐色細砂 瓦片・φ10~20mmの礫を少量含む、やや粘性がある
 第3面対応までの堆積層 第3層系堆積層(上半部を「第3層系整地土」として図例)
 3a 2.5Y5/4黄褐色細砂 φ20mm程度の礫・炭化物を少量含む
 3b 2.5Y5/4黄褐色細砂 φ10~20mmの礫を中量含む、φ100mm程度の礫をごく少量含む、やや強く締まる
 3c 2.5Y5/4黄褐色細砂 φ5~10mmの礫を中量含む、φ20mm程度の礫をごく少量含む、やや強く締まる
 3d 5Y6/4オリーブ黄色細砂 φ50mm程度の礫を少量含む、締まりがなくもろい
 3e 2.5Y5/4黄褐色細砂 φ5mm程度の礫を少量含む、φ20mm程度の礫をごく少量含む、やや強く締まる
 3f 2.5Y6/4にぶい黄褐色細砂 φ20mm程度の礫をやや多量に含む、やや粘性あり
 3g 2.5Y6/4にぶい黄褐色細砂 瓦片・炭化物を少量含む、φ10~20mmの礫を中量含む、強く締まる

- 3h 2.5Y5/3黄褐色細砂 φ5~8mmの礫を少量含む、強く締まる、φ50~150mmの礫を多量含む、西側に連行する111層基礎と関係する可能性あり
 3i 10YR5/4にぶい黄褐色細砂 φ5~8mmの礫を少量含む、φ50~70mmの礫をごく少量含む、強く締まる
 3j 2.5Y6/2灰黄色細砂 瓦・φ5~8mmの礫・φ30mm程度の礫・φ80~100mmの礫を多量含む、粗砂を中量含む、やや強く締まる
 3k 10YR5/4黄褐色細砂 φ10~30mmの礫を中量含む、φ50mm程度の礫をごく少量含む、やや強く締まる
 3l 2.5Y4/4オリーブ褐色細砂 瓦片・φ10~15mmの礫を少量含む、やや粘性がある
 3m 10YR6/1暗褐色細砂 瓦片・土壌片等を含む、炭化物を少量含む、粘性あり、土壌化層
 3n 2.5Y5/4黄褐色細砂 粒度はシルトに近い、φ5~8mmの礫を少量含む、やや粘性あり、強く締まる
 3q 2.5Y6/3にぶい黄褐色細砂 瓦片・炭化物を少量含む、強く締まる
 3r 10YR5/3にぶい黄褐色細砂 φ30mm程度の礫・炭化物及び粗砂を少量含む、やや粘性あり
 3s 7.5YR6/6褐色細砂 粗砂を少量含む、φ10~20mmの礫を中量含む
 4a 2.5Y5/2暗灰黄色細砂 φ3~5mmの礫を少量含む、やや粘性あり、木片等有機物を含む、層中位になるに従って細粒化する、上半は粗砂主体

第3面対応以下青灰色粗砂層

- 4b 5B5/1青灰色細砂 木片等有機物を多量に含む
 4c 10B6A/1青灰色細砂 均質で木片等有機物を少量含む、粗砂を含む
 4d 5PB4/1暗青灰色細砂 粗砂を多量含む、有機物・φ5~10mmの礫を中量含む、φ30~40mmの礫を少量含む
 4e 5PB4/1暗青灰色細砂 均質であり、粗砂をわずかに含む、φ20~30mmの礫を少量含む
 4f 5B5/1青灰色細砂 φ5~8mmの礫を中量含む、φ30~100mmの礫を多量含む
 第4面対応以下堆積層
 5a 10YR5/6黄褐色細砂 φ10~20mmの礫を多量含む、φ30~40mmの礫を少量含む、締まりがなくもろい
 第5面対応以下堆積層
 5b 5YR3/6暗赤褐色細砂 φ2~5mmの礫を多量に含む、φ10~20mmの礫をごく少量含む、φ30~50mmの礫を少量含む、締まりがなくもろい

図 45 II区 調査区東壁断面土層図

3 小結

粉河寺遺跡の調査は、長屋川通常砂防（砂防環境整備）工事に先立ち発掘調査を実施し遺跡の記録保存を図ることにあった。

平成20年度に実施された県文化遺産課による確認調査では、平成18年度調査地点と今次の調査地点との連続性・関連性を指摘されてきた。それは、今次の調査の第Ⅲ面で検出したⅠ区61下部塀基礎やⅡ区111塀基礎を平成18年度調査の1-1段目石積・1-2段目石積に対応させて考えていたことにある。調査の結果、その指摘とは異なる成果を得ることができた。Ⅰ区61下部塀基礎やⅡ区111塀基礎・112大走りは、調査地が狭小で崩落している部分があるものの比較的良好な状態で遺存していた。但し、調査の及ばなかった2号橋周辺・今次のⅠ区からⅡ区にかけて調査のできなかった範囲が、平成18年度調査遺構と今次の調査地遺構、また今次の調査Ⅰ区とⅡ区の遺構の様相の異なる接続部分が埋もれている可能性のある地点であることも判明した。

今次の調査では、特に、Ⅰ区では第Ⅲ面61下部塀基礎とそれに関係する石組遺構、Ⅱ区では第Ⅲ面111塀基礎・112大走りとこれに関係する石組遺構の存在が顕著となった。さらに、これらの石積み（石組）遺構よりも古い段階のⅠ区第Ⅳ面81護岸石積・第Ⅴ面91護岸石積、Ⅱ区第Ⅳ面131～133護岸石積・第Ⅴ面141護岸石積なども検出することができたことは、時代ごとに屋敷地と護岸石積の変遷（図49）を辿ることができ、より大きな成果と言える。また、Ⅰ区第Ⅴ面98柱穴やⅡ区Ⅵ面151・153橋脚は、『粉河寺境内絵図写』（元禄8年：1695）・『紀伊国名所図会 第三篇 巻之一』（天保9年：1838）に描かれた長屋川に架けられた橋の位置・構造を探る上で格好の資料となる。

以上のことから、代々踏襲されてきた屋敷地の区画割が遺存しており、平成18年度調査地点と今回の調査地点との石積み構造の違いは、両地点で地勢の高さが異なり、石積護岸そのものの構築形態が異なっていたものと考えられる。

出土遺物の面から、粉河寺遺跡では、中世的土器様相の主要器種となる土師器皿・小皿・土釜、瓦器碗・小碗・小皿、加えて国産陶器・輸入陶磁器などがある。これらの中世土器は、各堆積層によって偏在的な在り方を示す部分や取扱資料の多寡を考慮しなければならないが、相対的な流れの中で主要器種としての組合せの増減を捉えることが可能となる。

各々の機種組成の比率（表3・4）は、平安・鎌倉～室町時代の土師器皿・土釜・瓦器全体の中では、土師器皿・小皿がⅠ区全体で80.8%（2,791点／3,456点）、層序要素11以下の第5・6層系整地土以下に限っても80.1%（2,677点／3,313点）、更に層序要素17～20の第9層系堆積土から第11層系堆積土に限定すると72.4%（1,207点／1,666点）、Ⅱ区全体で87.4%（2,155点／2,466点）、層序要素13～16の第9層系堆積土から第11層系堆積土に限定すると90.3%（1,199点／1,328点）を占める。

次に、瓦器は主要器種に付随してⅠ区全体で6.3%（219点／3,456点）、層序要素11以下の第5・6層系整地土以下に限っても6.3%（209点／3,313点）、更に層序要素17～20の第9層系堆積土から第11層系堆積土に限定すると10.8%（180点／1,666点）、Ⅱ区全体で10.8%（266点／2,466点）、層序要素13～16の第9層系堆積土から第11層系堆積土に限定すると8.9%（118点／1,328点）を占める。

Ⅰ・Ⅱ区出土資料を基準として、粉河寺遺跡でも古い段階の一群と見られるⅠ区層序要素17～20の第9層系堆積土から第11層系堆積土、Ⅱ区層序要素13～16の第9層系堆積土から第11層系堆積土に認められる。

西	Ⅰ区				Ⅱ区	東		
現地表面	55.90m	55.80m	55.70m	55.90m	現地表面	56.00m	56.95m	56.90m
第Ⅰ面	55.55m	55.50m	55.50m	55.35m	第Ⅰ面	55.80m	55.90m	55.90m
第Ⅱ面	55.35m	55.10m	55.15m	55.05m	第Ⅱ面	55.60m		
第Ⅲ面 61下部礎基礎	W西壁 48 (55.10m) 南側石列 53.70m 護岸石積基底	t8セタ (55.00m)	o7セタ (55.10m)	E東壁 (54.95m)	第Ⅲ面 111礎基礎	W西壁 J6 (54.90m) 53.70m	t6セタ (55.40m) 54.80m 54.30m	o6・o7セタ (55.40m) 54.80m 54.10m
第Ⅳb面 81護岸石積	(54.00m) 現存天端 53.30m 護岸石積基底	(54.00m)	(54.40m)	54.20m	第Ⅳ面 131～133護岸石積	(54.50m) 53.90m	(54.20m) 53.60m	(54.30m) 53.90m
第Ⅴ面 91護岸石積	53.60m 現存天端 53.30m 護岸石積基底	(53.60m)	(53.80m)	(54.40m)	第Ⅴ面 141護岸石積	(54.10m)	(54.20m)	(54.20m) 53.90m
第Ⅴb面 98門柱			53.60～53.70m		第Ⅴb面 150土坑	53.90m		
					第Ⅴ面 151・153橋脚	53.40m		

() 付は、遺存範囲での数値

図 46 Ⅰ・Ⅱ区 各護岸石積他遺存状況の対比 (レベル数値の相関)

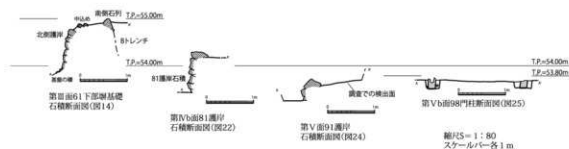


図 47 Ⅰ区 各遺構面護岸石積他断面位置の対比

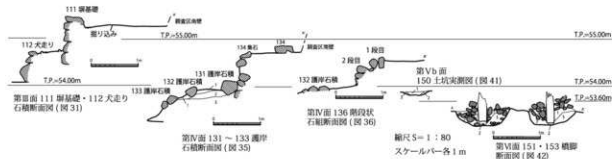


図 48 Ⅱ区 各遺構面護岸石積他断面位置の対比

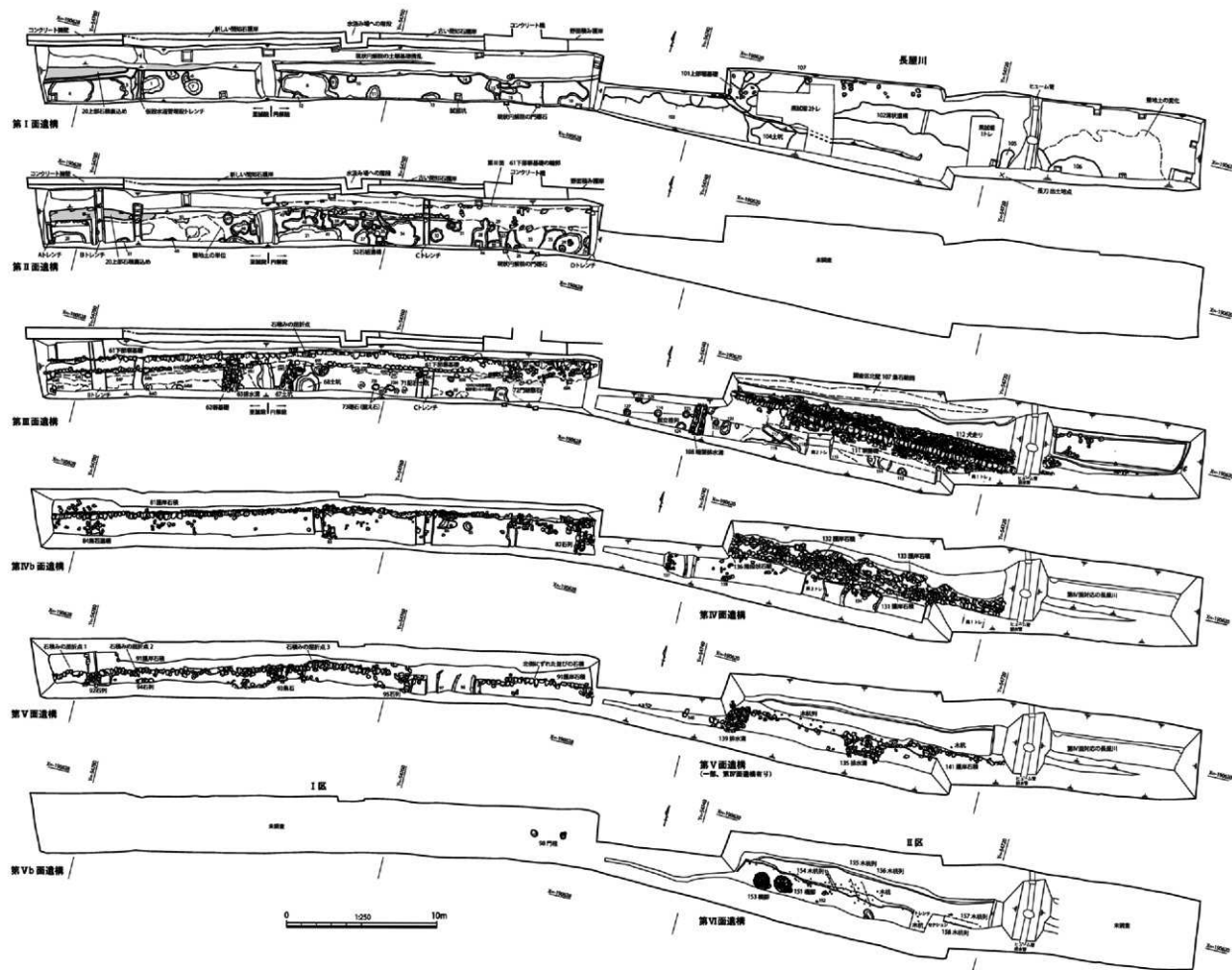


図 49 I・II区道構変遷図

各層序		大凡の層代		平安		鎌倉・室町				鎌倉				鎌倉・室町				鎌倉～江戸												合計	備考					
				黒色土器		土師器Ⅲ		瓦器				土師器Ⅰ土器Ⅱ				瓦葺土器	直造瓦土器	陶器	磁器			瓦				その他	金属製品	小計								
層序要素	層序要素 構成面 整地層・埋積層	瓶・皿	小鉢	大鉢	小皿	磁片	小鉢	鉢	小瓶	鉢	磁片	小鉢	土器Ⅰ土器Ⅱ	磁片	小鉢				土器Ⅰ土器Ⅱ	磁片	小鉢	青磁	白磁	繪付	平瓦				丸瓦	軒平瓦	軒丸瓦	その他				
1	第Ⅰ面遺構 第ⅠB面遺構	1	1	1	0	8	9	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	54	2	5	23	33	34	0	6	4	30	2	193	204	第Ⅰ面：土器器Ⅲ 第ⅠB面：25土師器Ⅲ 基礎地				
2	20土師器基礎面 第Ⅱ面土器Ⅲ土器Ⅱ 1～5段段石層直上、その他	0	0	0	4	7	11	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	16	0	0	22	12	18	0	7	2	3	1	83	95						
3	北側溝等 第Ⅱ層系埋土	0	0	0	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	1	26	1	7	1	2	0	2	0	48	51	川越埋積層				
4	北側溝等 第Ⅲ層系埋土	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	6	0	0	16	6	23	0	1	0	2	0	54	55	川越埋積層					
5	北側溝等 第Ⅳ層系埋土 大埋土	0	0	3	3	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	2	17	18	17	1	0	1	1	0	60	66	川越埋積層					
6	北側溝等 第Ⅴ層系埋土	0	0	7	4	10	21	2	0	0	1	3	3	0	0	3	1	2	3	0	0	1	10	18	0	2	0	0	0	37	64	川越埋積層				
7	第Ⅲ層系整地土	0	0	0	3	11	14	0	0	2	2	4	0	0	6	6	0	1	21	1	4	5	30	29	3	5	1	6	0	106	130					
8	第Ⅲ面遺構	0	0	0	1	7	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	19	8	0	0	1	1	0	33	41	第Ⅲ面：52石砌込遺構地					
9	第ⅣA層系整地土 第ⅣA層系整地土 第Ⅳ層系整地土下位	0	0	7	4	18	29	0	0	0	0	0	2	0	1	3	0	0	8	1	4	1	14	34	1	8	1	1	1	74	106					
10	第Ⅲ面遺構	0	0	4	1	8	13	1	0	0	0	1	2	1	2	5	2	0	8	0	1	2	30	74	8	21	1	1	1	149	166	第Ⅲ面：61下埋跡遺構地				
小計		1	1	22	20	72	114	3	0	2	5	10	7	1	10	18	6	4	128	5	17	113	173	262	14	52	11	47	5	837	980					
11	第Ⅳ面遺構 第Ⅳ面61埋跡石層直上 第ⅣB面遺構	0	0	9	9	22	40	1	0	0	0	1	1	0	0	1	6	2	3	1	0	0	29	10	1	3	2	1	0	58	100	第Ⅳ面：81埋跡石層直上				
12	第Ⅴ・6層系整地土	0	0	7	9	28	44	2	0	0	2	4	1	1	7	9	1	1	3	1	0	0	20	14	0	0	0	1	0	41	98					
13	第Ⅴ面61下埋跡基礎 埋跡石層直上 第Ⅶ層系上位 遺構か?	0	0	26	260	185	471	0	0	0	2	2	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	2	47					
14	第ⅣB面以下 第Ⅶ層系整地土	0	0	91	66	173	330	1	1	1	6	9	18	1	26	45	10	8	11	6	0	0	37	30	2	1	1	0	0	106	490					
15	第ⅣB面以下 第Ⅷ層系整地土	0	0	207	166	166	559	12	0	0	1	13	12	1	78	91	0	8	0	2	0	0	5	6	0	2	0	3	0	26	689					
16	第Ⅳ面遺構 第ⅣB面遺構	0	0	6	6	14	26	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	5	32	第Ⅳ面：91埋跡石層直上 第ⅣB面：98門柱柱穴				
17	第ⅣB面以下 第Ⅷ層系埋土	0	0	105	66	90	261	14	2	0	10	26	10	5	10	25	3	5	0	0	1	0	6	7	1	0	0	2	0	25	337					
18	第Ⅷ層系埋土	0	0	31	21	30	82	3	0	0	1	4	8	2	4	14	2	0	3	0	0	0	10	5	0	1	0	0	0	21	121	主に河川埋積				
19	第Ⅷ層系埋土 第Ⅷ層系埋土 第Ⅷ層系埋土	0	0	307	234	295	836	73	2	0	57	132	52	3	184	239	4	6	2	5	2	0	30	11	0	1	0	3	0	64	1271					
20	第Ⅷ層系埋土より下位 第Ⅷ層系埋土 第Ⅷ層系埋土	0	0	10	5	13	28	10	0	0	8	18	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	4	51	主に河川埋積				
小計		0	0	799	842	1036	2677	116	5	1	87	209	103	13	311	427	27	31	23	16	3	1	140	84	4	8	3	12	0	352	3665					
合計		1	1	821	882	1108	2791	119	5	3	92	219	110	14	321	445	33	35	151	21	20	114	313	346	18	60	14	59	6	1169	4646					

大凡の時代		各層序		平安		鎌倉・室町				鎌倉				鎌倉・室町				鎌倉～江戸												合計	備考	
層序要素	層序要素 遺構面 敷地面・堆積層	黒色土器		土師器Ⅲ				瓦器				土師器Ⅱ土産				瓦質土器	須恵質土器	陶器	磁器			瓦					その他	金銀製品	小計			
		横・皿	小計	大皿	小皿	破片	小計	横	小瓶	鉢	破片	小計	土器A	土器B	破片				小計	青磁	白磁	染付	平瓦	丸瓦	軒平瓦	軒丸瓦						その他
1	第1直達溝 第1b直達溝	0	0	0	3	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3	0	0	1	7	9	4	4	2	2	1	34	37	第1面・102溝状遺構の敷層は除外 河川側敷地面	
2	第3層系埋地土 第3b層系埋地土 河川敷	0	0	4	0	6	10	2	0	0	3	5	0	0	0	0	1	0	4	2	0	0	63	70	5	8	2	2	0	157		172
3	第4a層系埋地土	0	0	8	22	43	73	3	0	1	4	8	0	0	1	1	1	0	0	0	13	6	0	0	0	0	0	0	21	103		
4	第3層系埋地土 第3a面112大足り之前	0	0	0	4	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	4	19	2	5	4	0	0	36	40		
5	第3直達溝 112大足り石列内一括 111家基礎中込の西	0	0	11	21	60	92	7	0	0	3	10	0	0	2	2	8	3	10	1	2	0	103	69	11	5	5	5	0	222	326	
6	第5・6層系埋地土	0	0	27	79	260	366	3	2	0	44	49	0	0	13	13	3	3	4	0	4	0	79	33	1	0	0	1	0	128	556	
7	第3直達溝対峙以下 青灰色粗砂礫層	0	0	0	2	0	2	1	0	0	0	1	1	0	0	1	2	0	2	0	1	0	27	9	0	0	0	0	0	41	45	
8	第3直達溝対峙 黄灰色粗砂礫層	0	0	0	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	5	0	0	0	162	99	4	8	2	2	1	285	288		
9	第7層系埋地土下半 第7層系埋地土	0	0	107	74	172	353	30	0	0	29	59	2	0	12	14	2	7	2	0	0	53	18	5	1	0	1	0	89	515		
10	第3直達溝対峙以下 青灰色粗砂礫層	1	1	25	9	16	50	10	0	0	6	16	0	0	1	1	6	0	5	0	2	0	209	82	2	7	4	2	0	319	387	
11	第3直達溝対峙以下 青灰色粗砂礫層 黄褐色粗砂礫層	0	0	41	26	36	103	9	0	0	9	18	0	0	1	1	2	0	1	0	0	16	5	0	0	0	0	0	25	147		
12	第3直達溝及び関係	0	0	26	20	48	94	11	0	0	3	14	1	0	2	3	1	5	1	0	0	31	15	1	1	0	2	0	57	168	131～133溝岸石礫地	
13	第3直達溝対峙 第11層系埋地土	0	0	15	10	10	35	18	0	0	5	23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	58	
14	第3直達溝対峙以下 第9層系埋地土 第11層系埋地土	1	1	112	461	363	936	25	2	0	23	50	3	0	3	6	0	1	0	0	1	0	8	2	0	0	0	0	0	12	1008	第3直達溝含む150土器地
15	第3直達溝対峙以下 第11層系埋地土より下位	0	0	2	6	4	12	4	0	0	4	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	21		
16	第3直達溝	0	0	3	11	5	19	2	0	0	3	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	26	151・153溝岸埋砂地
合計		2	2	381	748	1026	2155	125	4	1	136	266	7	0	35	42	27	23	38	4	10	1	776	437	35	39	19	19	2	1429	3894	

表4 II区 各層序別遺物数量

表5 I区 遺物接合関係一覧

登録番号	取上区画	遺構番号 層位	遺構面 堆積層	遺物接合関係	登録 番号	取上区画	遺構番号 層位	遺構面 堆積層
81	I区 H7-s8	20土層基礎崩れ 北側落ち	第2層系堆積土	●肥前系磁器 碗	57	I区 H7-t8	南北サブトレ 新しい土層基礎 裏込め崩れ	第II面
85	I区 H7-s7・8	20土崩れより 北側落ち	第3層系堆積土 第2層系混	●肥前系磁器 草花文 碗	85	I区 H7-s7・8	石崩れより 北側落ち	第3層系堆積土 第2層系混
115	I区 H7-1・u8	南北セクション 北側落ち	第3層系堆積土	●肥前系磁器 内四方文 碗	80	I区 H7-s8	上部土層基礎 裏込め崩れ	第2層系
120	I区 H7-t8	61下部基礎 北側落ち	第4層系堆積土	●肥前系磁器 胡蝶草文 瓶	81	I区 H7-s8	土層基礎崩れ 北側落ち	第2層系堆積土
124	I区 H7-r7・8	61下部基礎 より北側落ち	第3層系堆積土	同一個体	57	I区 H7-t8	南北サブトレ 20新しい土層基礎 裏込め崩れ	第II面
				●肥前系磁器 碗「くらわんか」 コンニャク印判	66	I区 H7-t8	南北サブトレ 北側 セクション断面	土層図の19
82	I区 H7-t8・9	南北サブトレ 土層基礎より南	第7層系整地層一部	実143 ●青磁盤	179	I区 H7-t8	整地層	県第7層系整地土 上位
168	I区 H7-q7・8	南北サブトレ 遺構有りか?	第7層系整地層一部 第5・6層整地土 除去面	同一個体か? ●土釜A朝土	280	I区 H7-o7	整地層	第IVb面以下 第7層系整地土
241	I区 H7-t8	南北サブトレ	第IVb面以下 第8層系整地土	下位層へ 土師器皿	243	I区 H7-t8	南北サブトレ 61護岸石積 北側落ち	第10層系堆積土 青灰色粗砂礫混
251	I区 H7-u8・9	整地層	第IVb面以下 第8層系整地土 第IV層から -5cm~30cm	●土師器小皿	252	I区 H7-u8・9	堆積層	第IVb面以下 第9層系堆積土
261	I区 H7-r7・8	整地層	第IVb面以下 第8層系整地土	土釜A胴部	266	I区 H7-r8	堆積層	第9層系堆積土 青灰色粗砂細礫混 シルト
266	I区 H7-r8	堆積層	第9層系堆積土 青灰色粗砂細礫混 シルト	●土釜B 下位層へ	269	I区 H7-r8	堆積土	第11層系堆積土 上位
348	I区 H7-n7	堆積層	第11層系b堆積土 下位	(本来は下位層へ) ●土釜A接合 ●平瓦接合	326	I区 H7-n7	堆積層	第11層系b堆積土 粗砂細礫混 混在状態、整地土? 遺物多量
				●土釜 同一個体	325	I区 H7-m7	堆積層	第11層系b堆積土 粗砂細礫混混在状態 整地土? 遺物多量
347	I区 H7-n7	堆積層	第9層系堆積土下位 第11層系堆積土上位	下位層へ ●高台付土師皿 接合	326	I区 H7-n7	堆積層	第11層系b堆積土 粗砂細礫混 土釜A
298	I区 H7-n7	堆積層	第9層系堆積土下位 第11層系堆積土上位 混在状態、整地土?	●高台付土師皿 接合 ○土釜A同一個体	326	I区 H7-n7	堆積層	第11層系b堆積土 粗砂細礫混 土釜A
299	I区 H7-m7	堆積層	第9層系堆積土下位 第11層系堆積土上位 混在状態	○土釜A、同一個体	326	I区 H7-n7	堆積層	第11層系b堆積土 粗砂細礫混
330	I区 H7-m7	堆積層	第11層系b堆積土 調査区南壁断面 土層そうじ	●瓦器碗接合	325	I区 H7-m7	堆積層	第11層系b堆積土 粗砂細礫混混在状態 整地土?、遺物多量
					333	I区 H7-m7	堆積層	第11層系b堆積土 下位 遺物写真
299	I区 H7-m7	堆積層	第9層系堆積土下位 第11層系堆積土上位	●土師器小皿接合	325	I区 H7-m7	堆積層	第11層系b堆積土 粗砂細礫混

●報告書掲載遺物 ○報告書未掲載遺物

表6 II区 遺物接合關係一覽

登録番号	取上区画	遺構番号 層位	遺構面 堆積層	遺物接合関係	登録番号	取上区画	遺構番号 層位	遺構面 堆積層
485	Ⅱ区 H7-f6	112石列(大走り) 灰黄色細粒砂 石列直上石列検出	第Ⅲ面	← ○常滑体部断片	486	Ⅱ区 H7-h・i6	整地層 112石列北懸 腐植土含む	第3層系整地土
528	Ⅱ区 H7-h6	111番基礎 基礎・中込め内	第Ⅲ面	須恵器●	535	Ⅱ区 H7-g6・7	整地層	第4a層系整地土
537	Ⅱ区 H7-g6・7	整地層	第5・6層系整地土 一部、第7層系含む 炭混層含む	→	591	Ⅱ区 H7-g6・7 東半	整地層 屋敷地側 南北サ ブトレより西側	第7層系整地土
				変類部 一断体 ○内面円文 外面粗いたタキ	595	Ⅱ区 H7-g6・7	整地層 屋敷地側 南北サ ブトレより西側	第7層系整地土
					633	Ⅱ区 H7-h7 杭回り	135排水溝 敷石 排水溝内埋土 屋敷地側	第Ⅳ面
					625	Ⅱ区 H7-e・f6	堆積層 南北セクより西側	第Ⅳ面対応以下 141護岸石積より 下位 第9層系より下位
					600	Ⅱ区 H7-h6・7	整地層 屋敷地側	第7層系整地土
					612	Ⅱ区 H7-h7 杭回り	135配石 配石内堆積土 第Ⅳ面134直下	第Ⅳ面
537	Ⅱ区 H7-g6・7	整地層	第5・6層系整地土 一部、第7層系含む 炭混層含む	●瓦質火倉壁 筒一断体 土師器●	595	Ⅱ区 H7-g6・7	整地層 屋敷地側 南北サ ブトレより西側	第7層系整地土
612	Ⅱ区 H7-h7 杭回り	135配石 配石内堆積土 第Ⅳ面134直下	第Ⅳ面	東堆系須恵瓦控鉢●	635	Ⅱ区 H7-h6・7 東半	製地層 屋敷地側	第Ⅴ面対応以下 第7層系整地土下半
614	Ⅱ区 H7-g6・7 東半	整地層 屋敷地側	第7層系整地土 第Ⅳ面139配石含む	平瓦(未抽出)	602	Ⅱ区 H7-j6・7	整地層 屋敷地側	第7層系整地土
620	Ⅱ区 H7-f6	堆積層 131~132崖岸石 横直下 南北断面 土層	第Ⅳ面対応以下 第9層系堆積土	互替地底部位● 太ミガキ 暗文ジグザグ	621	Ⅱ区 H7-j6・7 東半	139配石 配石内 屋敷地側	第Ⅳ面 第7層系整地土含む
640	Ⅱ区 H7-g6・7 西半	堆積層 屋敷地側	第Ⅴ面対応以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土	平瓦(未抽出)	647	Ⅱ区 H7-i6	153柱(材) 柱材根固めの右周辺	第Ⅴ面 第11層系堆積土より 下位
619	Ⅱ区 H7-f6	堆積層 川側 南北断面土層	第Ⅳ面対応以下 青灰色粗砂	土師器小皿 回転糸切り	620	Ⅱ区 H7-f6	堆積層 131~133崖岸石 横直下 南北断面 土層	第Ⅳ面対応以下 第9層系堆積土
642	Ⅱ区 H7-j6・7	整地層 屋敷地側 139排水溝含む?	第Ⅴ面対応以下 第7層系整地土下半 部、第9層系系 統土含む	平瓦(未抽出) 粗いビキA 凸面粗いコビキA状 の板ナデ	643	Ⅱ区 H7-j6・7	堆積層 屋敷地側	第Ⅴ面対応以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土
640	Ⅱ区 H7-g6・7 西半	堆積層 屋敷地側	第Ⅴ面対応以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土		648	Ⅱ区 H7-k7	整地層 屋敷地側	第Ⅴ面対応以下 第7層系整地土下半 一部、第9層系系 統土含む
660	Ⅱ区 H7-k7	堆積層 屋敷地側	第Ⅴ面対応以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土		654	Ⅱ区 H7-g6・7 西半	堆積層 屋敷地側	第Ⅴ面対応以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土 一部第7層系整地土
649	Ⅱ区 H7-h7 杭回り	135排水溝 石積み石間 石積み石間	第Ⅳ面	須恵器底部外区● 粗い平行タキ	585	Ⅱ区 H7-e・f6	堆積層 131・132崖岸石 横直下 南北セクより西側	第Ⅳ面対応以下 青灰色粗粒砂礫層 第9層系堆積土

●報告書掲載遺物 ○報告書未掲載遺物

表7 I・II区一括出土遺物の主要遺物の個体数比率(24分剖口縁部計測法による)

地区	出土遺構・層位 出土遺物登録番号	遺物 種類	24 分剖数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	破片数計 個体数計	合計	破片数比率 個体数比率
I区 H7-r8	第Ⅱ面61下部礫基礫 用石列直下 灰黄色シルト一帯 (一括集計:出土遺 物登録200-209-206)	土師器 中皿	破片数	1				2																		1	4	破片数	1.5%	
		分剖数	0	2	0	0	0	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23	0	154	264	3.3%	
		土師器 小皿	破片数	28	65	57	40	27	19	7	1	3	1	2							1				1	2	4	1	260	98.5%
		分剖数	28	130	171	140	138	114	49	8	0	30	11	24	0	0	0	0	17	0	0	20	42	22	92	24	44.87	46.41	96.7%	
I区 H7-u8~9	第Ⅳb面以下 整地層 第9層系整地土 第9層系整地土下位 第Ⅳb面から5cm 〜30cm (一括集計:出土遺 物登録251-253-254- 367)	土師器 大皿	破片数	23	48	44	20	12	4	3	1	3		2	1											1	162	破片数	48.9%	
		分剖数	23	96	132	80	60	24	21	8	27	0	22	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	24	22.04	334	39.1%	
		土師器 中皿	破片数			3	1	2	1	1																	8	破片数	2.4%	
		分剖数	0	0	9	4	10	6	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1.5	2.7%		
		土師器 小皿	破片数	10	24	27	28	22	7	5	2	8	2	1	3		2	1						2	1	1	146	破片数	43.7%	
		分剖数	10	48	81	112	110	42	35	16	72	20	11	36	0	28	15	0	0	40	21	0	0	24	30.04	53.3%				
		瓦 板	破片数			3	1							1		1											6	破片数	1.8%	
		分剖数	0	0	9	0	5	0	0	0	0	10	0	13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1.54	2.7%		
		土師器 土器A	破片数	3	3	3	1	1																			11	個体数	3.3%	
		分剖数	3	6	9	4	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1.12	56.32	2.0%	
		土師器 土器B	破片数	1																							1	破片数	0.3%	
		分剖数	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.08	0.1%		
I区 H7-m7	堆積層 第9層系堆積土下位 第11層系堆積土上位 第11層系b堆積土 第11層系c堆積土下位 第11層系c堆積土: 粗砂礫層 (個別集計:出土遺 物登録299-325-330- 333-346-358)	土師器 大皿	破片数	18	18	15	7	5	0	3	2															2	70	破片数	42.9%	
		分剖数	18	36	45	28	25	0	21	16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	48	9.87	163	37.5%		
		土師器 高台付 大皿	破片数			2				1																	3	破片数	1.8%	
		分剖数	0	0	6	0	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.54	2.0%		
		土師器 小皿	破片数	3	8	12	14	9	3	2	6	1	1	1	1		1		1								63	破片数	38.7%	
		分剖数	3	16	36	56	45	18	14	48	9	10	11	12	0	15	0	18	0	0	18	0	0	0	0	0	12.95	49.1%		
		瓦 板	破片数	6	7	4	1	4	1																		23	破片数	14.1%	
		分剖数	6	14	12	4	20	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2.58	26.35	9.8%	
		土師器 土器A	破片数	1	1	1	1																				4	破片数	2.5%	
		分剖数	1	2	3	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.41	1.6%		
		土師器 大皿	破片数	19	18	19	7	1	1	2		1														1	69	破片数	43.1%	
		分剖数	19	36	57	28	5	6	14	0	1	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	24	8.29	160	36.3%			
I区 H7-n7	堆積層 第9層系堆積土下位 第11層系堆積土上位 第11層系c堆積土: 粗砂礫層 第11層系b堆積土下位 第11層系c堆積土: 粗砂礫層 (個別集計:出土遺 物登録299-326-335- 347-348)	土師器 小皿	破片数	7	5	6	12	9	2	2		1	1	2													49	破片数	30.6%	
		分剖数	7	10	18	48	45	12	14	0	9	10	22	24	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9.12	40.0%		
		瓦 板	破片数	2	5	5	2	1	1																		16	破片数	10.0%	
		分剖数	2	10	15	8	5	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1.91	8.4%		
		土師器 土器A	破片数	3	8	6	3	1	1	2	1																25	破片数	15.6%	
		分剖数	3	16	18	12	5	6	14	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3.41	22.81	14.9%	
		土師器 土器B	破片数	1																							1	破片数	0.6%	
		分剖数	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.08	0.4%		
		土師器 大皿	破片数	6	15	11	7	3		1		1															44	破片数	41.9%	
		分剖数	6	30	33	28	15	0	7	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5.33	29.5%		
		土師器 高台付 大皿	破片数	2																							2	破片数	1.9%	
		分剖数	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.16	105	0.9%	
I区 H7-o~p7	堆積層 第9層系堆積土下位 第11層系堆積土上位 第11層系b堆積土 第11層系c堆積土下位 第11層系c堆積土: 粗砂礫層 (個別集計:出土遺 物登録327-336-361- 369)	土師器 小皿	破片数	2	2	7	3	5	3	2	4	1													1	1	31	破片数	29.5%	
		分剖数	0	4	6	28	15	30	21	16	36	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	22	0	24	8.83	8.83	48.9%			
		瓦 板	破片数	2	2	3	3		1	1	1																13	破片数	12.4%	
		分剖数	2	4	9	12	0	6	7	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	11.1%		
		土師器 土器A	破片数	2	2	4	5																				13	個体数	12.4%	
		分剖数	2	4	12	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1.58	18.06	8.7%		
		土師器 土器B	破片数	1		1																				2	破片数	1.9%		
		分剖数	1	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.16	0.9%		
		土師器 大皿	破片数	1																							1	破片数	0.3%	
		分剖数	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.08	378	0.1%	
		土師器 小皿	破片数	58	89	87	71	21	24	7	8	3	1		2	1	1	2								2	377	破片数	99.7%	
		分剖数	58	176	261	284	105	144	49	64	27	10	0	24	0	14	0	16	0	36	0	0	0	0	0	48	54.91	54.99	99.9%	
地区	出土遺構・層位 出土遺物登録番号	遺物 種類	24 分剖数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	破片数計 個体数計	合計	破片数比率 個体数比率

※ 各々、出土遺物登録番号の太字番号が主体

粉河寺遺跡の器種組成で見る限り、皿が高比率を占める段階は第11層系堆積土資料から第7層系堆積土の資料に到る段階である。

2006（平成18）年度第1次調査の土師器皿・土釜・瓦器を比較した場合、第1次調査の土師器皿が全体に対して81.1%（9,355点／11,356点）、瓦器が14.8%（1,705点／11,356点）、土釜が4.1%（476点／11,356点）と報告されている。今次の調査より、瓦器の比率が高い傾向にあり、土師器皿は出土範囲や層位によってばらつきが認められる傾向にある。

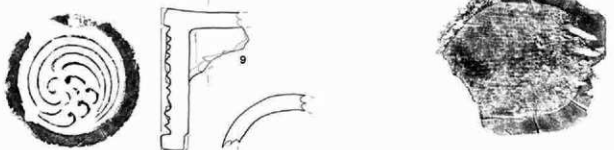
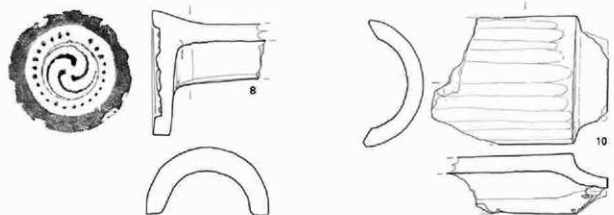
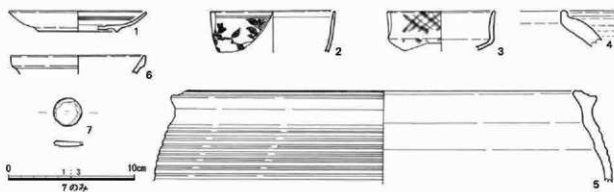
第1次・第2次調査ともに瓦器小椀・小皿が極めて微量である点において器種構成の変異が認められる。また、片岩を多量に含む地元産胎土の土釜A類・B類が普遍的に認められる。瓦器椀と共に、地元における当該期の土器生産の在り方を考える上において重要な器種である。

出土遺物の内、瓦についても平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦他が多量に出土した。上位層の江戸時代の検出面においても、大半の瓦が鎌倉～室町時代に属するものである。近世瓦と判断できるものは数少ない状況にあった。一部では、平安時代後期と見做される瓦も出土したが、土器類との相関を整理するところまでは及ばなかった。

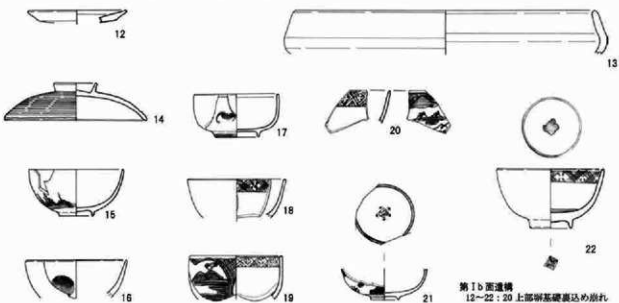
表8 II区出土瓦 製作技法・調整技法の比率算出

調査年度 調査範囲	瓦の産地	平瓦														丸瓦													
		調整							凸線							調整							凸線						
		調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整
1	第11層系堆積土 第10層系堆積土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2	第9層系堆積土 第8層系堆積土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3	第7層系堆積土 第6層系堆積土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
4	第5層系堆積土 第4層系堆積土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5	第3層系堆積土 第2層系堆積土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6	第1層系堆積土 第0層系堆積土	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
数量の合計		13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

軒丸瓦														軒平瓦														その他の瓦						備考																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																					
調整							凸面							調整							凸面							調整			凸面																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																								
調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整		調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整



第1面・第1b面透視 1・6・7:1土坑、2・3・5・8・10:21土坑
4:8土坑、9:61下部研基礎直上層



第1b面透視
12~22:20上部研基礎裏込め座れ

図50 I区出土遺物実測図1

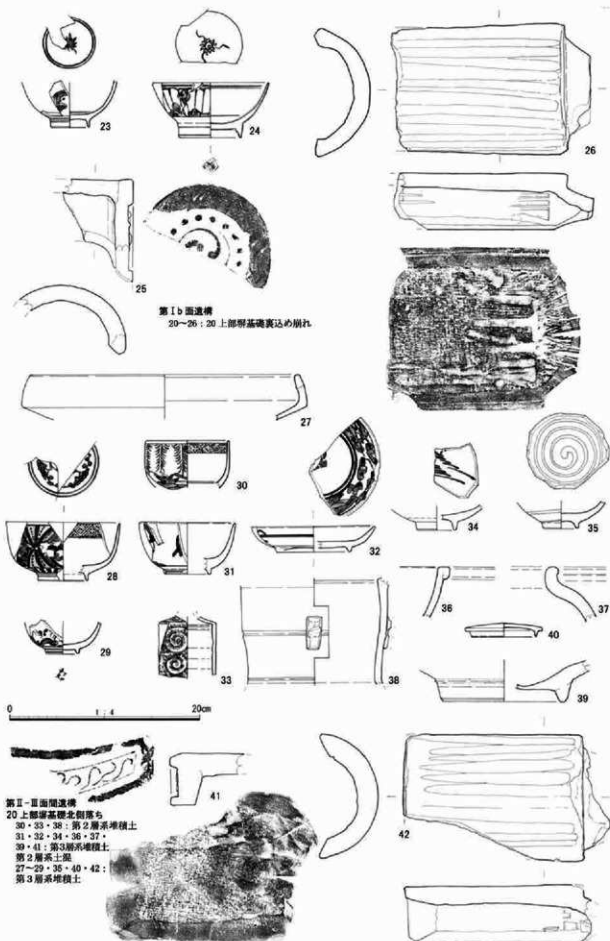
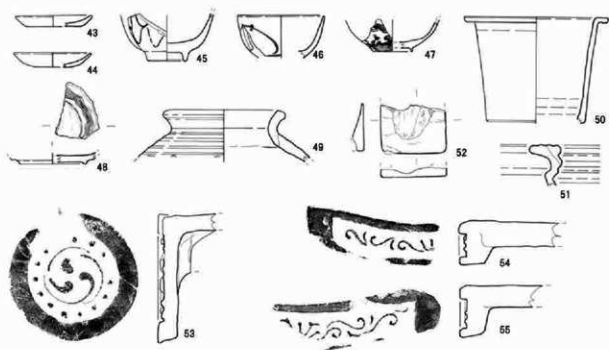
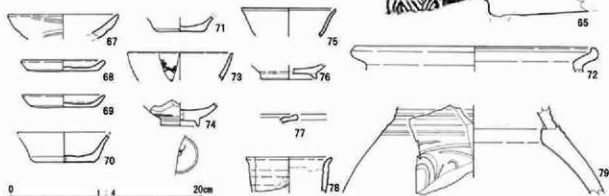
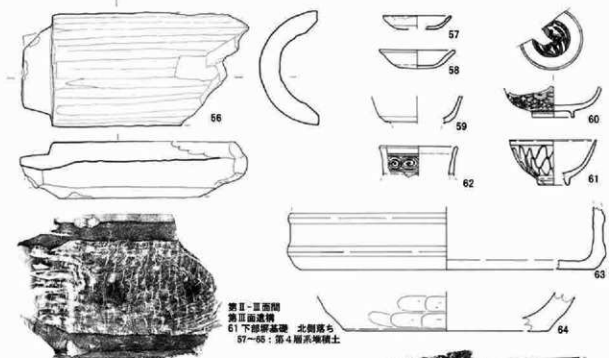


図 51 I 区出土遺物実測図 2



43~56：第3層系堆地土



第Ⅱ面遺構 77：44土坑
第Ⅲ面遺構關係 67~76・78・79：第3層系堆地土

圖 52 I 区出土遺物実測図 3

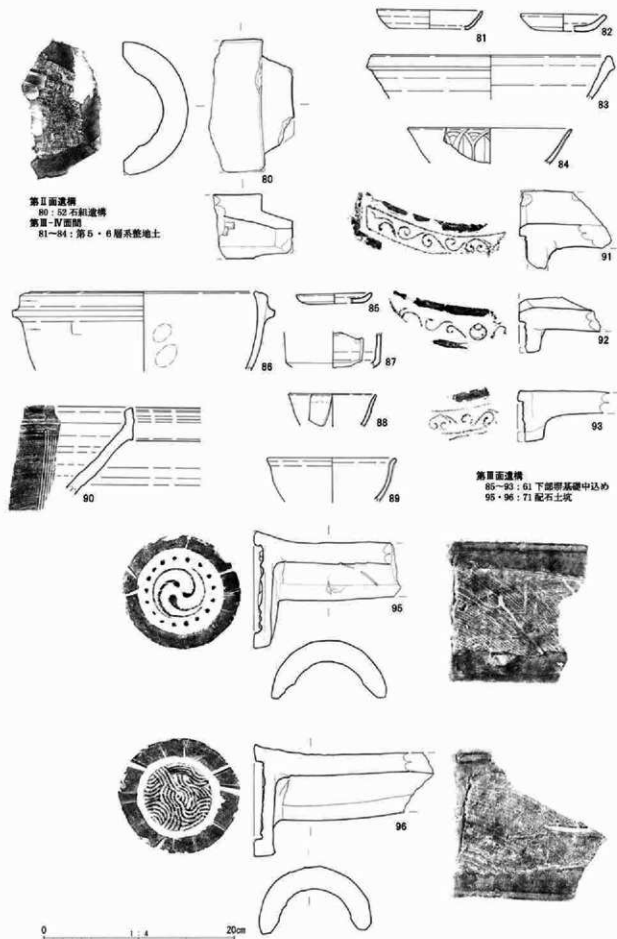


図 53 Ⅰ区出土遺物実測図 4

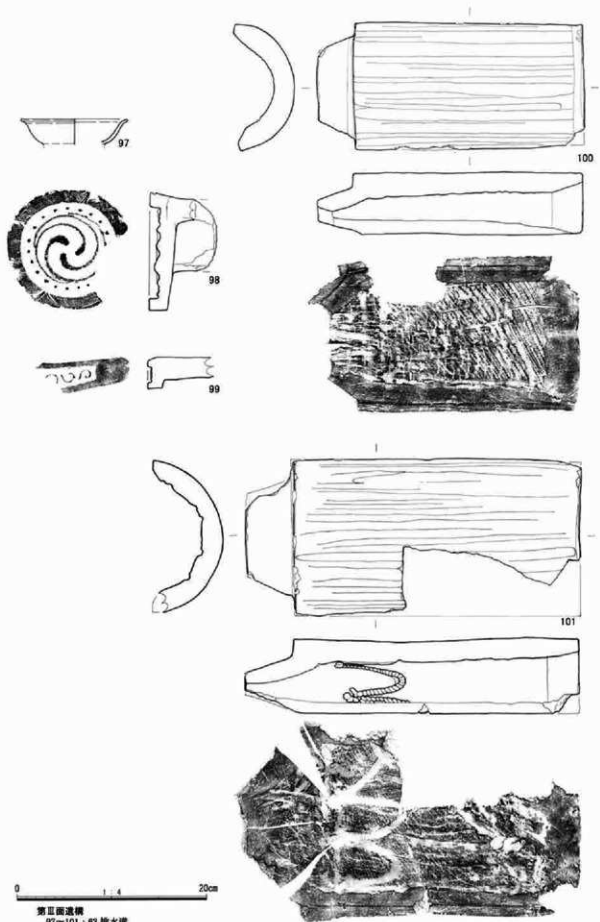


图 54 I 区出土文物实例图 5

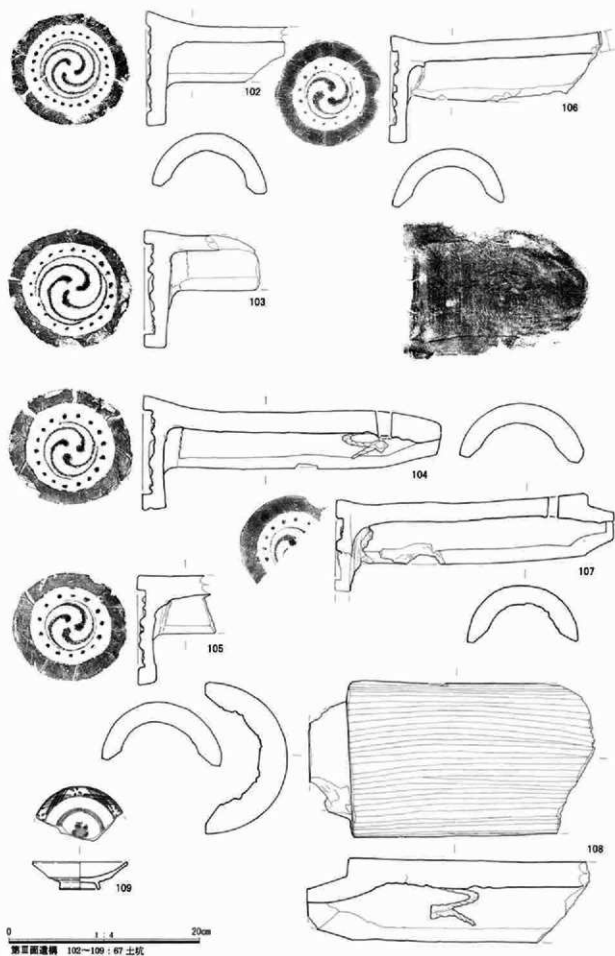
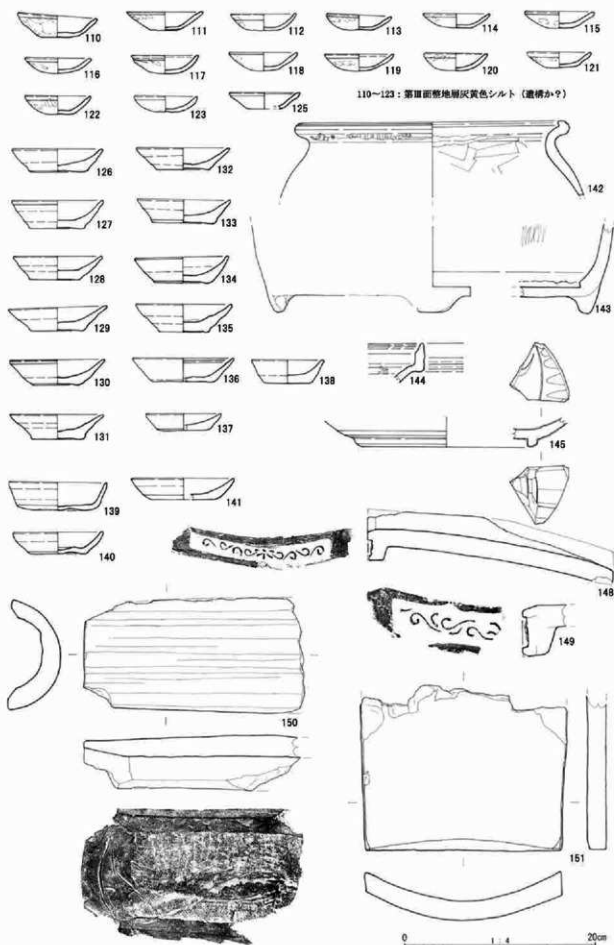


图 55 1 区出土文物实测图 6



125~145・148~151: 第Ⅶ層系整地土上位

図 56 I 区出土遺物実測図 7

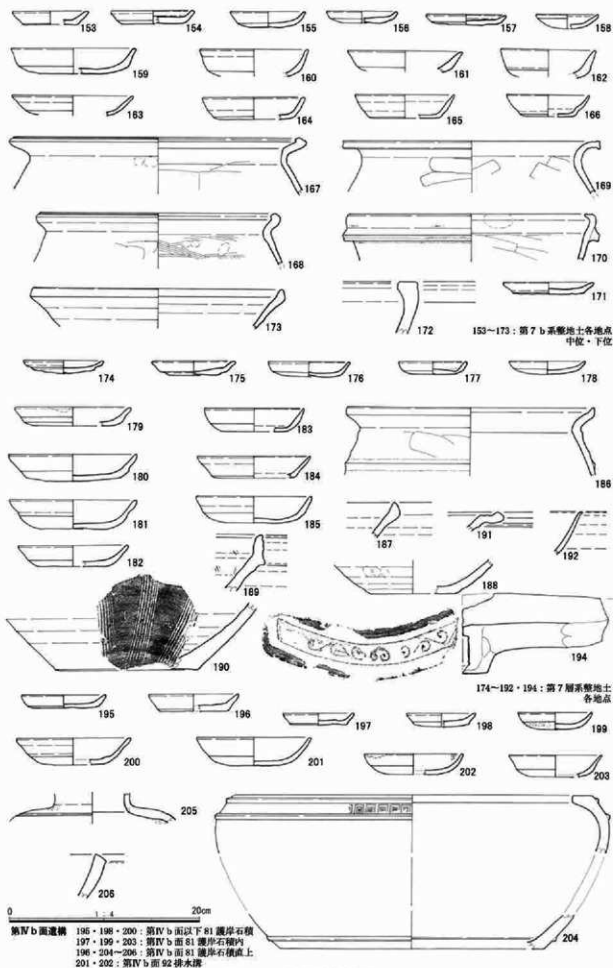


图 57 I 区出土遺物実測图 8

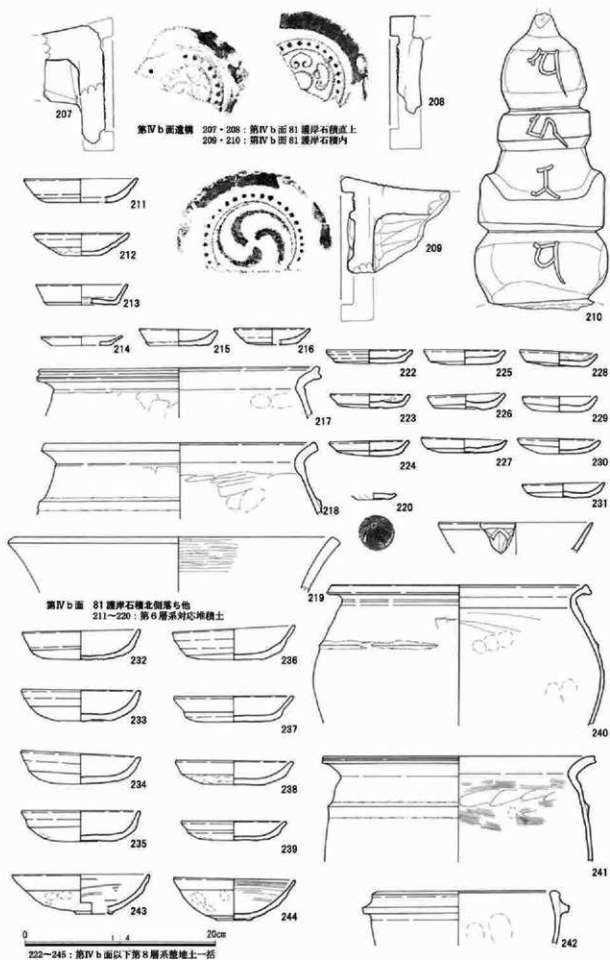


图 58 I 区出土遺物実測図 9

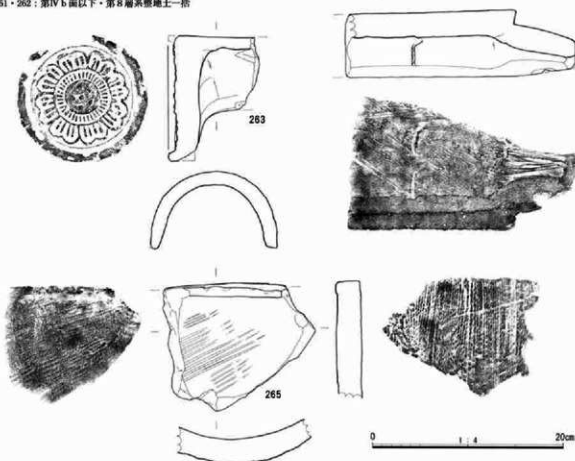
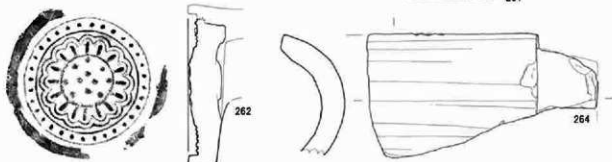


图 59 I 区出土文物实测图 10

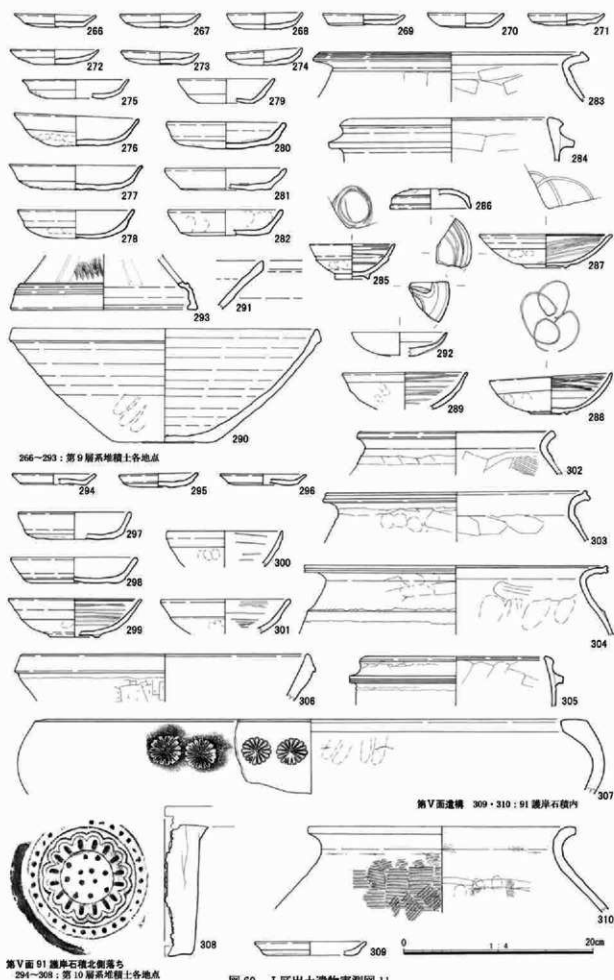
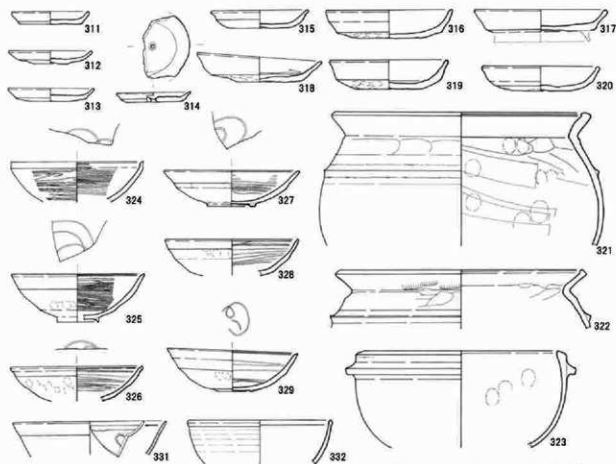
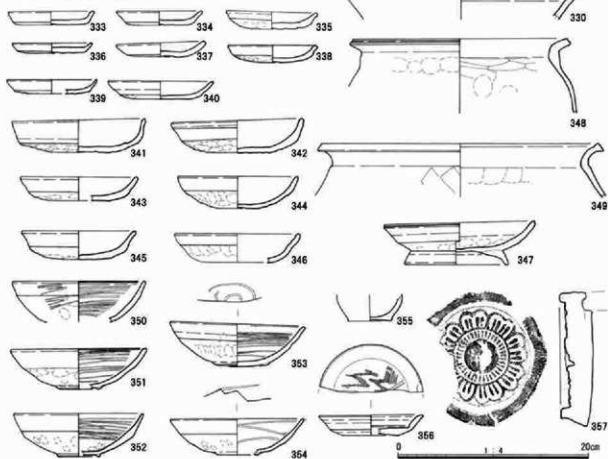


图 60 I 区出土遺物実測図 11



311~332：第 11 层系堆横土各地点



333~367：第 11 层系 b 堆横土 147-m7 一拓

图 61 I 区出土文物实例图 12

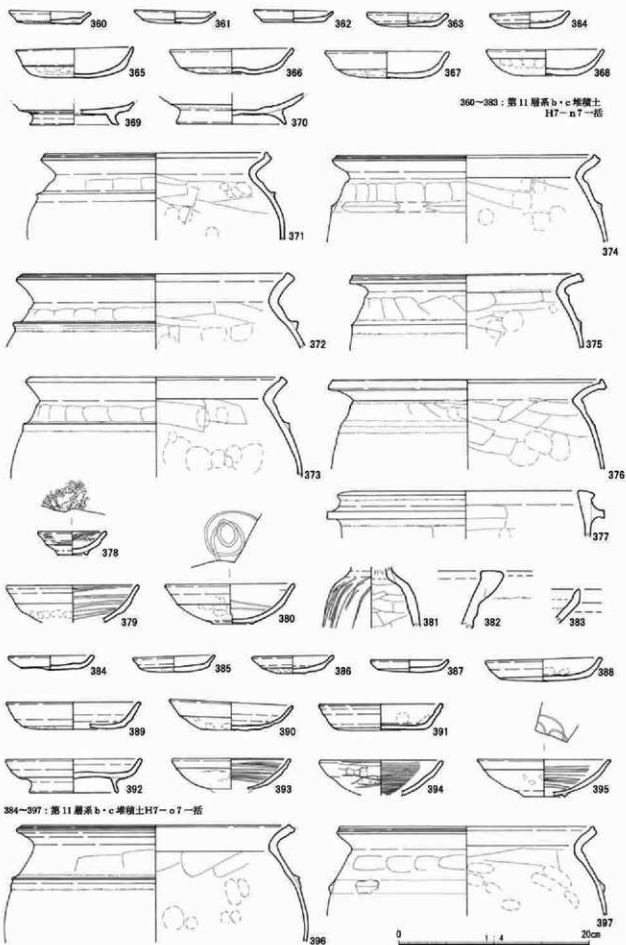
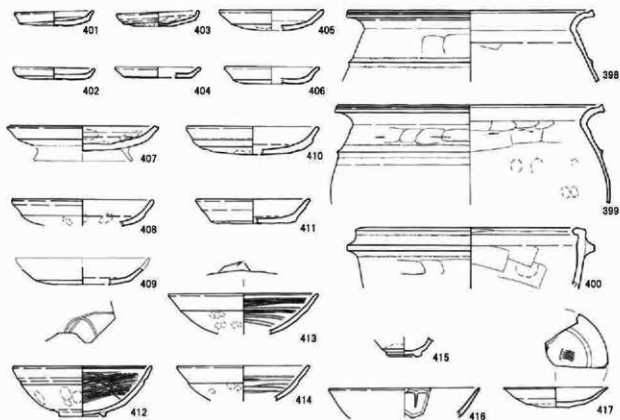
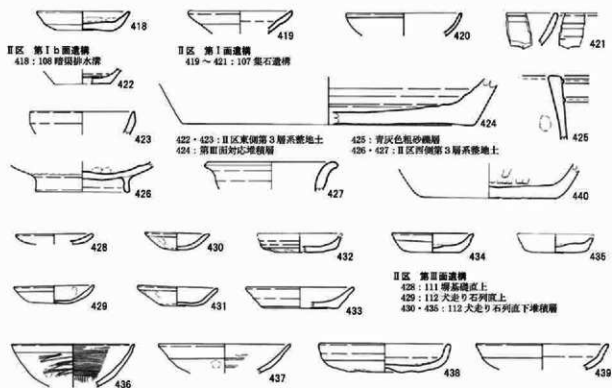


图 62 I 区出土遺物実測図 13



I 区
 398~400: 第11層系b・c堆積土 H7~o7一括 (399・400: 第V面 97 集石遺構)
 401~403・405・406・408・410~415・417: 第11層系堆積土より下位堆積層
 404・407・416: 第V面遺構 96 落ち込み (第9層系堆積土)
 409: 第V面遺構 98W柱穴



II 区 第II面遺構
 431: 112 大走り石列北側
 432・434・436・438~440: 111 明基礎中込め
 433: 129 排水溝埋土上位
 437: 112 大走り石列内一括

0 1:4 20cm

図 63 I 区・II 区出土遺物実例図

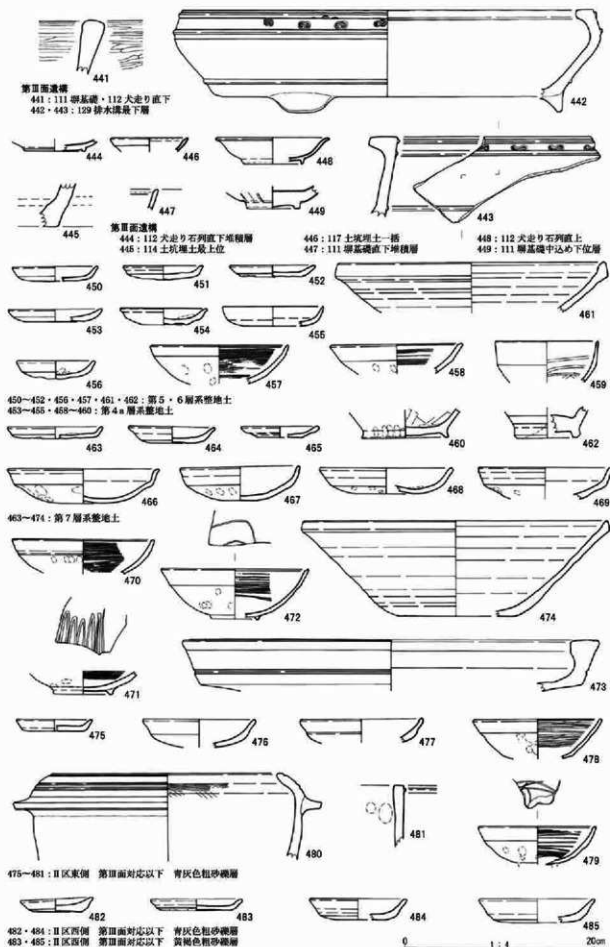
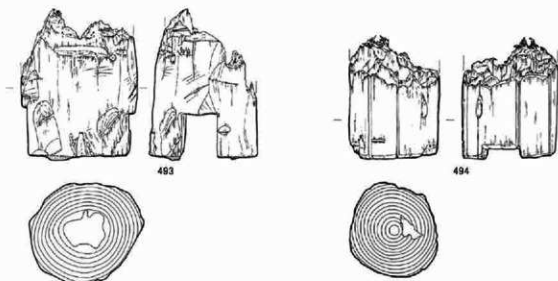
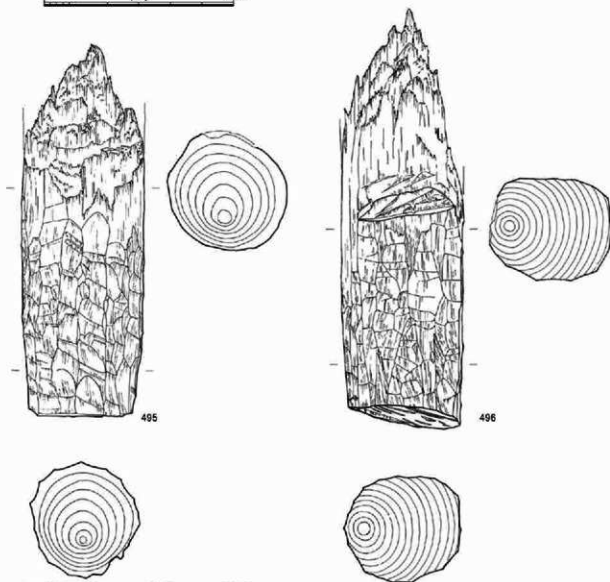


图 64 II区出土遺物実測図



I 区 第Vb面遺構 493 : 98E柱穴柱材、494 : 98W柱穴柱材

0 1 : 5 30cm



II 区 第VI面遺構 495 : 151橋脚材、496 : 153橋脚材

図 66 I・II区出土木製品実測図

第5節 III区の調査成果

1 III区と既往の調査(図67・68)

調査対象地区は、紀の川市粉河寺川地内(3281c番地他)、粉河寺本堂への東口及び業師橋の下流側に位置する。平成22年度の調査地区は、『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』(平成19年(2007)発行 和歌山県教育委員会)では、粉河寺遺跡の東端にあたる。

調査地の東側では、粉河町町史編さん事業に関わって1982(昭和52)年、トレンチ調査(図68)が実施されている。当該地は、粉河寺の所蔵となった「南紀補陀落山粉河寺四開伽藍之図」(本文中挿図・写真・表補遺138頁:写真55・図79)(以下、「四至伽藍之図」と略する)にある文字注記では、かつて所在した塔頭を「北室院」、その南隣の区画を「遮那院」としている。

調査地と既往の調査の関係については、小結で記述することとする。

今次の調査に当たっては、掘削排土の仮置場や通路が十分確保できないため調査地を大きく2分割し、左岸地区・右岸地区と呼称して行った。表土層及び現代整地層を重機により掘削し、以下を人力にて層毎に掘り下げた。調査は、左岸と右岸、さらに長屋川の河床についても実施した。

基本的に人力掘削土は、小車で調査区端まで運搬し重機により排土した。調査終了後は、カゴマットにより仮設の護岸を復旧し埋め戻しを行った。

調査は、平成22年(2010)11月4日から平成23年(2011)1月7日にかけて、116㎡(対象面積194㎡)について実施した。I・II区と同様に、地形的な制約も多く航空写真撮影及びそれに伴う図化は実施していない。

掘削作業と併行して、写真撮影及び実測図作成作業を実施し、調査記録を作成した。また、現地調査と併行して出土遺物の洗浄作業等を主とした応急整理作業を行った。

2 III区の検出遺構と出土遺物

1) 左岸の調査(図70～72、写真49・50写真図版56)

左岸調査区の基本層序は、南東壁及び長屋川に直交する方向に設定した土層観察用畔(第1・2セクションベルト)の断面土層からみると、遺物を多量に包含する第3層系堆積土、第4層系堆積土、遺物を僅かにしか包含しない第5・6層系堆積土の大別3区分することが可能である。下記に

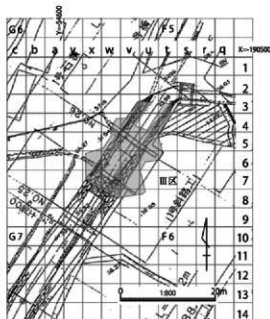


図67 調査位置と区画割 3(4m区画)III区



(『粉河町史』第一巻から転載・加筆)
図68 III区と既往の調査位置

列記する（ ）内の数字（図70～72の土層の通し番号）は、現地調査において便宜的に使用した番号である。

基本的な層序（図72）

第1層：現代の耕作土（1・3）旧耕作土を含める。

第2層：現代の耕作土に伴う床土（2）

第3層系堆積土：灰茶褐色粗砂（5）

平安時代後期の遺物を主体として、鎌倉・室町時代の遺物を一定量包含する。

第4層系A堆積土：茶褐色粗砂1（6a）

平安時代後期の遺物を主体として、鎌倉・室町時代の遺物を僅かに包含する。

第4層系B堆積土：茶褐色粗砂2・暗茶褐色シルト（6c・7）平安時代後期の遺物を主体として、鎌倉・室町時代の遺物を僅かに包含する。

第5層系堆積土：黒褐色粗砂（8）

平安時代から室町時代の遺物を僅かに含む。層序と遺物取り上げの関係が不明瞭である。

第6層系堆積土：灰黄色粗砂（10）時期不明の遺物細片を僅かに含む。

第7層系堆積土：黄色砂礫土（17）基本的に基盤層で、遺物は出土しない。

河床：礫混砂層 近現代の瓦・陶磁器が出土する。

左岸の遺構と遺物を包含する堆積土

左岸の調査区において遺構を検出することはできなかった。長屋川の川縁であるということから東側平坦地から押し出された土砂が堆積する状況を確認するとどまった。

護岸の積み石等についても現有の護岸を設置する際にほとんどが取り除かれたと考えられ、その痕跡として僅かに裏込めの礫が散見できる状態であった。セクションベルト（土層観察用畔）を除去した段階で調査区南東壁を観察すると、北東—南西方向にほぼ水平に堆積する土砂で構成されており、堆積状況から整地土であると考えられる。

第3・4層系堆積土には平安時代～室町時代に至る遺物が多く含まれることが確認でき、第5・6層系堆積土にも僅かに遺物が含まれる。堆積層序と遺物の出土状況から、東側平坦地には複数期にわたる遺構が存在する可能性が高いと考えられる。

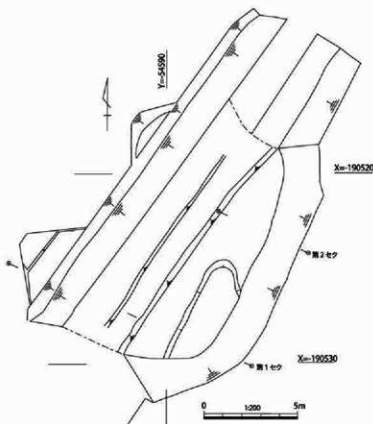


図69 III区 全体平面図



写真49 III区 第2セクション断面土層図作成（南から）

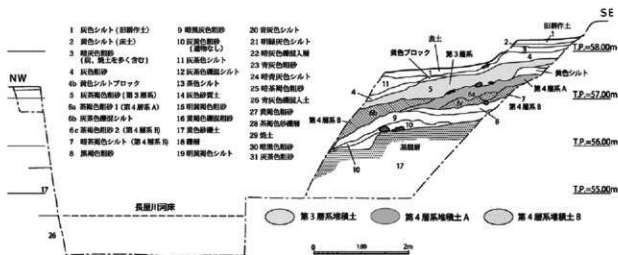


図 70 III区 第1セクション東西断面土層

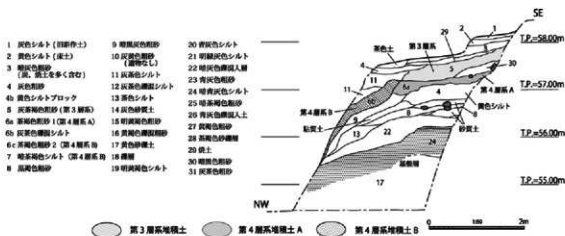


図 71 III区 第2セクション東西断面土層

これらのことから、東側平坦地において各々第4層系堆積土・第3層系堆積土上面に対応する生活面及び構築物が存在したものと考えられる。



写真 50 III区 調査区南東壁断面土層 (北西から)

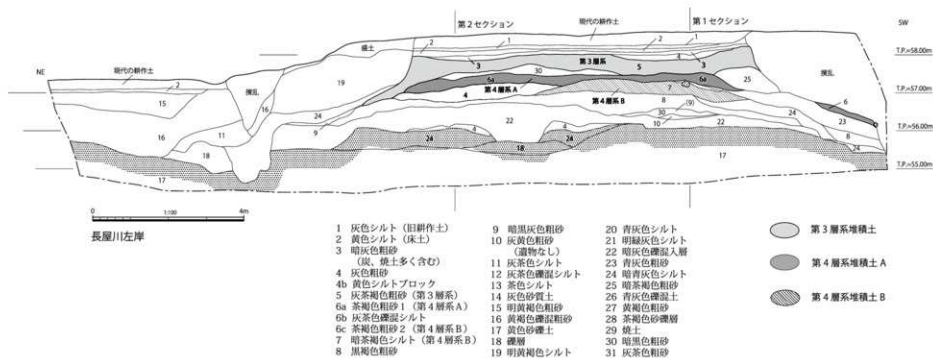


図 72 Ⅲ区 調査区南東壁断面土層図

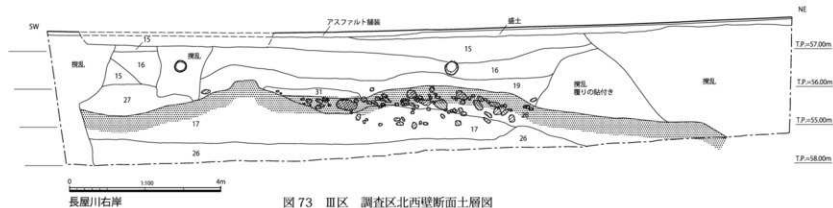


図 73 Ⅲ区 調査区北西壁断面土層図

2) 右岸の調査 (図 73、写真 51、写真図版 57)

右岸調査区の基本層序は、北西壁断面土層からみると以下のようになる。

基本的な層序 (図 73)

右岸の層序は左岸と著しく異なる。その要因は現有護岸の建設時に掘削がおよんでいることに起因する。従って、左岸で検出した各層とは対比させることができず、第5・6層系堆積土が左岸と連続する基盤層であることを確認するにとどまった。

第1層：黄茶色粗砂

第2層：明褐色シルト

第3層系堆積土：黄褐色礫混粗砂 (16)・明黄褐色シルト (19)

第4層系堆積土：茶褐色砂礫層 (28)

第5層系堆積土：黄色砂礫層 (17) 基本的に基盤層で、遺物は出土しない。左岸の第7層系堆積土基盤層に対応する。

第6層系堆積土：青灰色礫混土 (26) 基本的に基盤層で、遺物は出土しない。

右岸の遺構と遺物を包含する堆積土

右岸の調査区では、遺構・遺物は検出できなかった。要因として、右岸では前述のように左岸で認められた遺物包含層第3・4層系堆積土がこれまでの工事によって削平されていると想定するよりも、長屋川を挟んで左岸と右岸で塔頂の構成が異なっていたため堆積層の形成においても相違があったとみた方が妥当である。

右岸の第4層系堆積土：茶褐色砂礫層 (28) は、遺物を含まないが大きな礫で径50cm、小さなもので10～20cm大の礫が認められる。しかし、規則性はなく護岸の積み石の遺存とは考え難い。この礫は、旧護岸の裏込めの状況を示しているのかもしれないが確証を得るには至っていない。



写真 51 III区 右岸調査区全景 (北東から)

河床の調査

現長屋川の河床の調査は、下流でT.P.=53.20m、上流でT.P.=54.90mまで掘り下げ実施した。その結果、第7層系堆積土基盤層を振り込む状態で再堆積した土砂礫から近・現代の瓦、陶磁器が出土した。これより下位層は、湧水と護岸崩落の危険が予測されたため調査を断念した。そのため河床の下位層については、遺物の有無について確認できていない。

出土遺物 (図 74・75、写真 52・53、写真図版 58～60)

左岸調査区の第3・4層系堆積土に含まれる遺物は、平安時代後期11世紀～室町時代15世紀にかけてのものが混在した状態で検出されている。遺物は、第3・4層から集中して出土した。また、河床の堆積層からは少量の遺物が出土した。第2次調査I・II区では、鎌倉・室町時代の土器類、室町時代から江戸時代にかけての様々な瓦類で占められているが、第3次調査III区においては近現代の瓦、陶磁器を検出したに止まった。

出土遺物は、出土層位から第3層と第4層に区分されている。第3層からは、平安時代の様相を呈する土器群と共に鎌倉・室町時代の土器が一定量を占める。

第4層からは、図示したものはないが、鎌倉・室町時代の遺物の出土は希薄である。

出土遺物は、平安時代後期とみられる底部糸切りの土師器小皿(498～507)・皿(508・509)・大皿(510・511)、底部未調整の土師器杯(516)・皿(512～515)・大皿(518～520)・高台付大皿(521)、黒色土器A類杯(517)、土師器碗(522～524)、黒色土器A類碗(525)、白磁壺(527)、鎌倉時代とみられる瓦器小碗(534)・碗(535)、底部未調整の土師器小皿(536・537)、室町時代とみられる底部未調整の土師器小皿(529)・皿(530～532)・口縁部内面にタール状の煤の付着の認められる皿(538)、口縁部外面に印花文の施された瓦質火舎(539)などがある。

また、土製品では、第3層から土師質紡錘車(528)などがあるが、所属時期を明確にできていない。

遺物総数は、通常の遺物収納コンテナ(容量28ℓ入)にして8箱分である。



写真52 Ⅲ区 第4層出土 土師器小皿
(503 静止糸切り)



写真53 Ⅲ区 第3層出土 土師器皿
(538 煤明皿)

3 小結

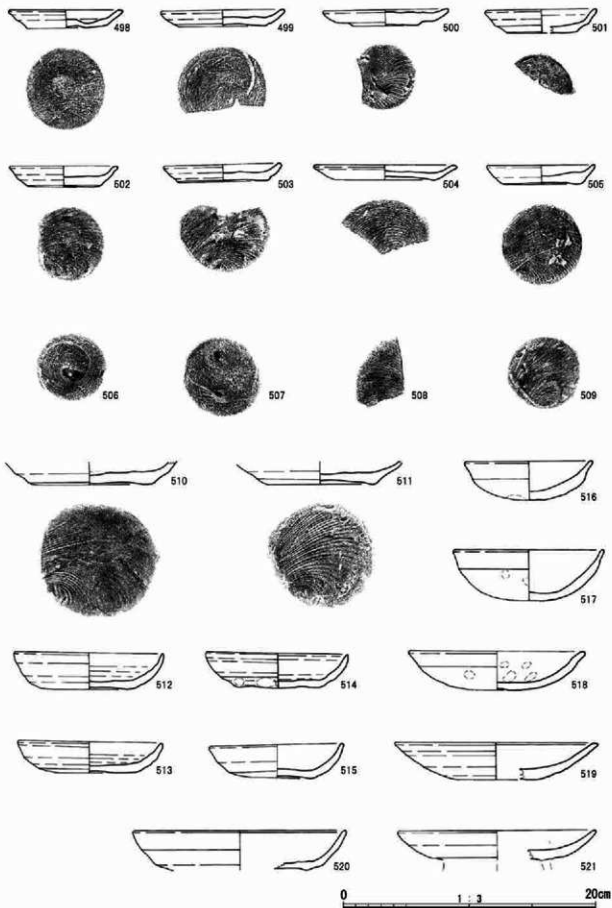
今次の第3次調査Ⅲ区は、「粉河寺境内絵図写」(元禄8年:1695)(図76)・『粉河町史』第三巻2003に描かれた長屋川に架けられた小さい橋(薬師橋)と小路に隣接する場所にあたとみられる。

遺構は、調査区の大半が長屋川の河川内ということで検出できなかったが、11世紀～15世紀の良好な遺物を含む堆積土を調査することができた。このことにより調査区の東側平坦地には当該期に対応する生活面・構築物が存在した蓋然性は極めて高いことが予想されるにいった。

平坦地南側には、山裾から川べりに向かって直線的に延びる石積み(排水溝)が存在することから、代々屋敷地を画するものと考えられる。「四至伽藍之図」にある「北室院」と「遮那院」との境界に該当する排水溝を踏襲するものとみられる。長屋川の左岸の地目は、昭和40年代までは水田として機能しており、各々の水田区画が往時の塔頭の区画を踏襲する可能性が高いとみて大過ない。

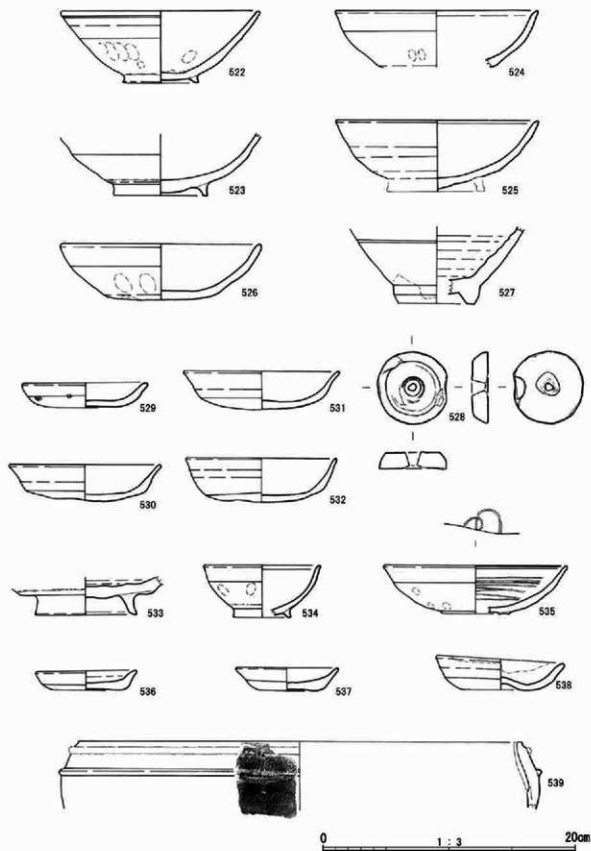
これまでの調査で、粉河寺創建時とされる奈良時代に関わる遺構・遺物は、まとまった状態では確認されておらず、今回の調査でも検出できていない。今次の調査では、平安時代11世紀の遺物がまとまって出土しており、既往の調査で出土した遺物の主体が鎌倉・室町時代であることと比較すると古相を呈するものと思われる。

『粉河町史』で報告されている「北室院」に関係する調査での遺物群は、第4層と称する焼土層の下位層から鎌倉・室町時代の土器群を主体としている『粉河町史』86・87頁)。これは、今次の調査の第3層系堆積土の鎌倉・室町時代の土器群に符合するものと思われる。なお、今次の調査地の南側にかつて架けられていた橋(図68)は、長屋川の左岸の塔頭への通路を踏襲した名残と思われる。



498~502・505・506・510~518・520・521：第3層（505・514・515・518：遺構下段）
503・504・507~509・519：第4層（川浜面）

图 74 III区 出土遺物実測図 1



522・523・525～539：第3層（528・538・539：遺構下段）
524：第4層（川左面）

図 75 III区出土遺物実測図 2

第IV章 総括

今次の粉河寺遺跡の調査では、様々な時代の護岸石積遺構に伴って多くの生活遺物が出土した。ここでは、出土遺物をとおして見た堆積層序と検出遺構及び検出遺構から見た粉河寺遺跡の変遷の一端等について記述することで総括とする。

出土遺物をとおして見た堆積層序と検出遺構

出土遺物は、出土遺物登録に伴う内容確認そのものの作業工程で、堆積層序と遺構の重複関係を踏まえて検討を行ってきた。一つには、Ⅰ区第Ⅲ面 61 下部塀基礎・63 排水溝などに前後する遺構に伴って出土した肥前系陶磁器や瓦の扱いにおいて、その変遷を辿ることができた。

その中で、最小限出土資料としての重要性を維持するため、検出遺構については得られた情報を詳述するように心がけ、出土遺物については遺構及び堆積層一括遺物や遺構内同一層位における分布・出土位置・接合関係等の客観的な事実の記載を重視して行った。このような過程で導き出された結果から、護岸石積の変遷など多くのことが判明してきている。

まず、肥前系陶磁器(表3 分類項目:「陶器」「磁器染付」)の出土傾向は、表3ではⅠ区第Ⅰ面～第Ⅲ面遺構(層序要素1～10)において認められ、上位層になるに従って数量が増し、当然下位層になるに従ってその数量を減じる。混在して出土した土師器類や中世陶磁器は、瓦類と共に上位層にあって古い鎌倉～室町時代の中世の様相を示す遺物群である。Ⅰ区第Ⅲ面遺構(層序要素1～10)までに近世の肥前系陶磁器が含まれ、層序要素11以下の遺物群には含まれない。このことから、Ⅰ区第Ⅲ面遺構を近世においた所以でもある。

Ⅰ区第Ⅲ面遺構の61 下部塀基礎中込めから出土した肥前系施釉陶器そば猪口(図53-87)・肥前系施釉陶器碗(図53-88)などが、遺物として近世の中で古い段階に位置付けられる。また、61 下部塀基礎の下限は、第Ⅲ面 61 下部塀基礎を構築するに当たっての第Ⅲ面第4層系整地土からの遺物群(図52-67～76・78・79)に求められる。67 土坑から出土した肥前系青磁染付(図55-109)は、61 下部塀基礎の機能喪失後の状況を表す。混在して廃棄されていた瓦類(図55-102～108)は、殆どが彫りの深い三つ巴文の瓦当に、凹面は爪痕様刺し子痕を伴うコビキAによって成形されたものである。67 土坑は、Ⅰ区第Ⅲ面 61 下部塀基礎の一部を破壊して掘削されることから、61 下部塀基礎の機能喪失から67 土坑掘削までには幾ばくかの期間を有するところである。以上のことを踏まえて、第Ⅲ面 61 下部塀基礎の構築から機能していた一定の期間を江戸時代中期(18世紀)に位置付けた。

Ⅱ区では、遺物による近世の状況は良好な資料に恵まれず、Ⅰ区から連続して認められる屋敷地第4 a 層系整地土を基準にして第Ⅲ面遺構の対応を見ることができた。

Ⅰ区第Ⅳ面に係る調査は、調査第Ⅳb面において行っている。第Ⅳ面(層序第Ⅳ面・層序第Ⅳb面)81 護岸石積は、第Ⅳ面に伴う整地層灰黄色シルト(遺構か?)出土の土師器小皿(図56-110～123)・中国製染付(写真図版29-124)や第7層系整地土上位出土の土師器小皿(図56-125)・皿(図56-126～136)などによって下限を推し量ることができる。上限は、第Ⅳb面遺構からの出土遺物(図57-58)や第Ⅳb面以下第8層系整地土出土遺物(図58-59)によって把握できる。

次いで、古代的土器様相の終焉から中世的土器様相の遺物群に移り変わる節目において、坏形態(図74-516・517)の存在などによって、古代的土器様相との併行関係を探る手掛かりを得ることができた。出土遺物の側面からみると、Ⅲ区第3・4層出土遺物群の大半は、古代的様相の強い黒色土器A類碗の

伴う最終段階として位置付けられる。

それに続く、中世的土器様相の出現する平安時代後期から鎌倉時代にかけて、土師器皿に伴う様々な器種の変化が見られるようになり、鎌倉時代中期から室町時代にかけて、主要器種としての土師器皿・小皿、瓦器碗、土釜、陶磁器の組合せを一連の流れとして捉えることができた。ただ、遺物資料の中には、平安時代末～鎌倉時代前期（初現期の瓦器を伴う段階）に位置付けられる良好な資料はなく、一時の衰退期があるようにも見受けられる。今次の調査では、瓦器碗との組合せになる瓦器小皿の類が2点のみ（数量表には入れていない）で、極端な少なさを示す。瓦器小皿についても少ない傾向にある。この偏在的な在り方は、2006年度第1次調査においても看取される。

検出遺構から見た粉河寺遺跡の変遷の一端

粉河寺遺跡の中世の塔頭・子院の消長は、周辺に存在する根来寺遺跡などの城郭寺院の幾つかの坊・院の調査資料を重ね合わせることによって、より内容分析を深めるものである。即ち、粉河寺遺跡の出現、各塔頭の消長を考える関係の中から、今次の調査地の塔頭がどのようにして成立してくるのかを導き出すことにもある。

I・II区の調査においては、現存する円解院の前身建物が江戸時代中期に溯ることが明らかとなったと考えて大過ない。また、西側に位置する至成院においても同様と考えられる結果を得た。但し、『紀伊名所図会』（1838年）では、現在の至成院の屋敷地に「宝泉寺」の記述が見られる。

さらに、粉河寺遺跡の平安時代後期以降の塔頭・子院の在り方は、山内での大規模な調査例が少ない中で坊院変遷の追える一つの基準的な資料となるものである。粉河寺遺跡の塔頭では、平安時代後期、鎌倉時代、室町時代前半、江戸時代中期にかけて、時代が新しくなるに従って屋敷地を長屋川側に拡張している様が見取れる。

今次の調査地は、区画溝（排水溝）・通路を伴う複数の屋敷地によって構成され、江戸時代中期に大きく変化する段階を導き出すことができています。このことは、当該期の塔頭・子院の質的な構造変化、土地利用の变革を意味するものと考えられる。当該期の粉河寺の様相は、『粉河寺境内絵図写』（図76）、『紀伊国名所図会』『粉河寺』の項にみられる境内絵図（図77）によって推し量ることが可能となるであろう。前者には、個々の塔頭名の記載がないが、調査地I・II区に該当する部分に三つの長方形が描かれ、即ち三区画の坊院屋敷地があったものと推定できる。調査においても、I区の西側で第Ⅲ面61下部塀基礎に組み込まれる南北方向の62塀基礎・63排水溝で屋敷地が区切られる。また、II区の西側において、南北方向の第Ⅲ面129排水溝で屋敷地が区切られる。仮に西側・中央・東側の屋敷地と考えた場合、両側の屋敷地は調査区外になるためその規模は不明、中央の屋敷地はI区63排水溝からII区129排水溝までの東西約30mを測ることが可能となる。また、II区129排水溝より新しい第Ib面108暗渠排水溝やそれより古い第Ⅳ面140排水溝などの存在によって、江戸時代中期に前後しても中央と東側の屋敷地が区画されていたことが窺える。但し、II区の排水溝には塀基礎が伴っていないことから東側屋敷地は、中央屋敷地に対する附属的な屋敷地区画であった可能性も考えられる。

他に、II区の最終基盤層である粗砂礫層（河川堆積）に土器破片が少量包含することが確認された。調査時には平安時代に属するものと思われたが、鎌倉時代の土師器皿であることが判明した。河川堆積による遺物の包含は、鎌倉時代中期以降のように屋敷地との関係が判別できるものではなく、屋敷地形成以前の長屋川の自然形状を表すものである。

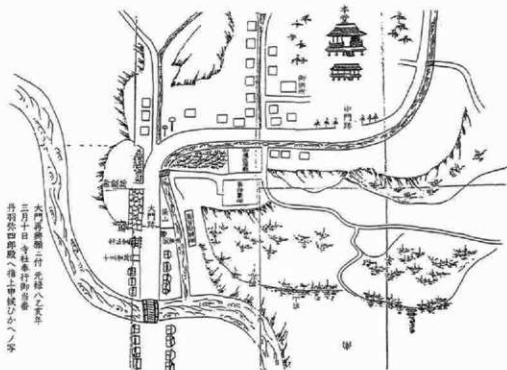


図 76 「粉河寺境内絵図写」元禄 8 年（1695 年）

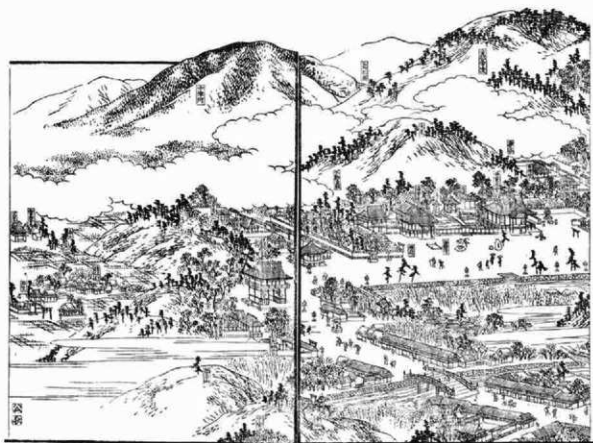


図 77 「粉河寺」『紀伊国名所図会 第三篇 巻之一』天保 9 年（1838 年）

Ⅱ区東側の堆積層序と記録に遡る中門跡

長屋川を挟むⅡ区東側の対岸には、現在、茶屋（土産物屋）の建物が建つが、もう一つ北側に目をやると、粉河寺本堂がほぼ真北に位置する。

調査途上において、茶屋（土産物屋）の南側の石垣積みに、積みの異なる部分を確認した。写真54は、現在の中門の南側を長屋川に沿って上流に向かう道路から撮影したものである。現状の石垣の積みが丸い川原石であるのに対し、基底部の石材は結晶片岩や砂岩の板石を横積みしたものである。明らかに変化のある石積みの幅は、約2.4m（8尺）を測る。変化のある石積みは、現在の



写真54 旧中門に至る階段位置と推定される石積み基礎
(西南西から)

中門南北中軸線から33～35.4m東側に位置し、階段の石積み基礎と考えられる。

階段位置と推定した石積み基礎のほぼ真北延長には、粉河寺本堂が建つ。このことは、「粉河寺境内絵図写」（元禄8年：1695年）（図76）に描かれた「中門跡」の階段位置を指し示すものと考えた。

推測の域を脱しきれないが、南面する中門が位置することから長屋川右岸が今よりも南側に迫出した地形が考えられる。そのため、Ⅱ区東側において北から南に下降する層序の堆積が生じたものと考えた。



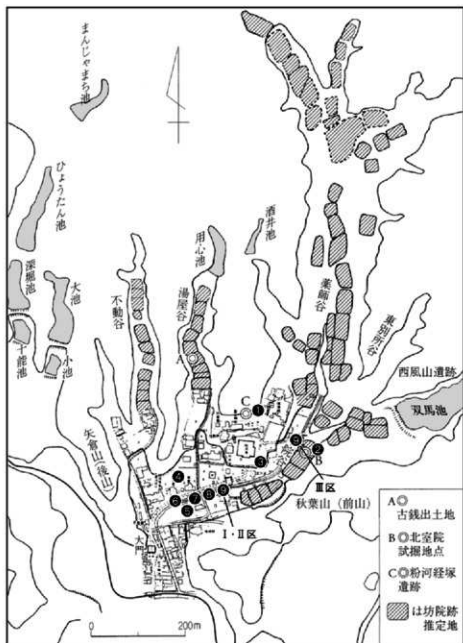


図 78 調査地と粉河寺山内の塔頭・子院の復元との関係
 (①～⑨の数字は、第Ⅱ章第4節に対応、『粉河町史』第一巻から転載・加筆)

粉河寺遺跡の全体像

また、Ⅲ区を含めた長屋川周辺の全体的な塔頭の消長を考えるには、粉河寺遺跡の周囲の丘陵部に立地する所謂、城郭寺院に伴う諸構造の盛衰を具体的に把握する作業も必要となってくる。一方、過去に産土神社裏山から出土した粉河産土神社経塚資料などを絡めた視点も必要であることは、言うまでもないことである。

今次の調査で得られた遺構・遺物に関すること以外で、これらの成果とは裏腹に、粉河寺の縁辺部がどのような状況にあったかを踏まえた記述ができなかった。

付章 粉河寺遺跡出土遺物の保存処理報告

(財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所 保存科学室 伊藤幸司)

出土遺物の中には木製品及び金属製品があり、これらを空気中に長期保存すると元の形がわからないほど変形収縮が起こり資料価値を失うことになる。これを防ぎ、形状を保持するには保存処理を行う必要がある。当文化財センター独自では保存処理に伴う機器等の設備および専門知識がないことから専門業者に委託する必要があった。

そのため、出土遺物の内、柱材4点・長刀1点の保存処理が必要と考え、協議のうえ、「粉河寺遺跡出土遺物整理に伴う保存処理委託業務」として、財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所 保存科学室に委託して実施した。木製品に関しては、併せて樹種同定を実施した。

調査報告の一貫として、保存処理委託業務の完了報告書の内容と結果を本調査報告書に掲載する。

(土井)

第1節 粉河寺遺跡出土遺物の保存処理

1 対象

保存処理の対象とした資料は、表1のとおりである。

保存処理番号	名称	数量	備考	押図番号
WAK10001	09-W1 柱材	1	350 98E 門柱	図 66-493
WAK10002	09-W2 柱材	1	351 98W 門柱	図 66-494
WAK10003	09-W3 柱材	1	670 151 橋脚	図 66-495
WAK10004	09-W4 柱材	1	671 153 橋脚	図 66-496
WAK10005	09-I1 長刀	1	673 柄金具あり	図 65-486

表1 保存処理対象資料一覧

2 木製品(WAK10001～10004)の保存処理工程

糖アルコール含浸処理法により次の工程で保存処理を実施した。

2-1 事前調査・記録

保存処理前の状態の観察とともに、記録のため外観の写真撮影をおこなった。

2-2 洗浄・金属イオン除去作業

温水に浸漬し、砂や汚れを除去した。柱材については、鉄分による黒色化を出来る限り除去するためEDTA-3Naを用いて金属イオン除去処理を行い、この後、温水でEDTA-3Naの抽出・除去を十分に行った。

2-3 含浸処理

含浸容器に糖アルコール水溶液（以下、含浸処理液）を満たして加熱、そこへ木製品を浸漬して、木製品に含まれている水分を徐々に含浸処理液に置き換えた。

含浸処理液の初期濃度は20%で、最終含浸濃度は76～77%である。

2-4 取上げ・洗浄

含浸処理液から取り上げ、木製品の表面に付着している含浸処理液を熱湯で洗浄したのち表面の水分を除去した。

2-5 固化・乾燥

木製品にしみ込んだ含浸処理液を結晶させるため、表面を糖アルコール粉末で覆い、結晶化を促進した。この工程では、結晶化促進室内で 50℃と室温（0～10℃）の間を繰り返し上下することにより安定的な結晶化・乾燥を図った。

2-6 洗浄・表面処理

遺物表面を覆った糖アルコール粉末を除去、洗浄した後、水分を拭取り乾燥した。

2-7 接合・復元

指示のあった部分についてはセルロース系接着剤（商品名：セメダインC）を用いて接合した。補填の指示のあった部分をエポキシ樹脂（商品名：クイック5）により充填し、アクリル絵の具で彩色した。

2-8 処理後観察

処理後の木製品の経時変化を観察したところ、異常は認められなかった。

3 鉄製品（WAK10005）の保存処理工程

3-1 事前調査・記録

保存処理前の状態の観察とともに、記録のため外観の写真撮影、X線透過画像撮影をおこなった。

3-2 クリーニング・脱水処理

アルコールに浸漬し、表面に付着している砂などを除去するとともに、金属が錆びる原因のひとつである水分を除去した。

3-3 錆落とし

資料上、また保存上取り除く必要のある錆についてはハンドグラインダー・メスなどを用いて物理的に取り除いた。

3-4 脱塩処理および防錆処理

鉄製品については、錆びる原因である塩分を高温高圧脱酸素水法で除去した。

柄金具（銅合金製）については、錆化を抑止するためベンゾトリアゾールのアルコール溶液へ浸漬した。

3-5 樹脂含浸処理

金属が錆びる原因のひとつである酸素との接触を出来る限り防ぎ、傷んでいる遺物自体の強度を向上させるため、減圧下で合成樹脂含浸をおこなった。

使用した合成樹脂は非水溶性アクリルエマルジョン（商品名：パラロイド NAD10）と非水溶性アクリル樹脂（商品名：パラロイド B72）である。

3-6 処理後記録・保管

処理後の記録のため写真撮影をおこない、低湿度状態で経過観察をおこなった。

付章写真1 保存処理前後の遺物状態



(1) WAK 10001-1



(2) WAK 10001-2



(3) WAK 10002-1



(4) WAK 10002-2



(5) WAK 10003-1



(6) WAK 10003-2



(7) WAK 10004-1



(8) WAK 10004-2



(9) WAK 10005-1



(10) WAK 10005-2

(処理前)

(処理後)



(11)WAK10005-1



(12)WAK10005-2



(13)WAK10005-3



(14)WAK10005-4



(15)WAK10005-5



(16)WAK10005-6



(17)WAK10005-7



(18)WAK10005-8



(19)WAK10005-9



(20)WAK10005-10



(21)WAK10005-11



(22)WAK10005-12



(23)WAK10005-13



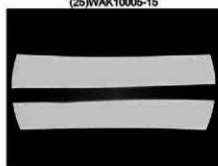
(24)WAK10005-14



(25)WAK10005-15



(26)WAK10005-16



(27)WAK10005-17



(28)WAK10005-18



(29)WAK10005-19

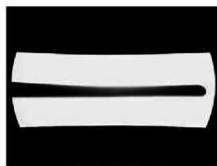


(30)WAK10005-20

付章写真2-3 鉄製品 (WAK10005) X線透過写真



(31)WAK10005-21



(32)WAK10005-22

第2節 粉河寺遺跡出土柱材の樹種同定

粉河寺遺跡から出土した柱材（門柱・橋脚）保存処理に伴い、柱材の素材を明らかにするための樹種同定を実施する。

1 試料

試料は、門柱2点（09-W1・2柱材）と橋脚2点（09-W3・4柱材）の合計4点である。

2 分析方法

木製品の木取りを確認した上で、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。なお、接合部品がある場合には、接合面内からブロック試料を採取し、ブロックから新鮮な3断面の切片を作製する。切片は、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレバートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

3 結果

樹種同定結果を表1に示す。木製品は、針葉樹2分類群（モミ属・スギ）と広葉樹3分類群（コナラ属アカガシ亜属・エノキ属・ムクロジ）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

表2 粉河寺遺跡の樹種同定結果

番号	遺物番号	器種	木取り	樹種
09-W1柱材	350 98E	門柱	芯持丸木	クリ
09-W2柱材	351 98W	門柱	芯持丸木	クリ
09-W3柱材	670 151	橋脚	削出多角形(芯無)	ヒノキ
09-W4柱材	671 153	橋脚	削出多角形(芯有)	ヒノキ

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか〜やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型〜トウヒ型で、1分野に1〜3個。放射組織は単列、1〜10細胞高。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は3〜4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1〜15細胞高。

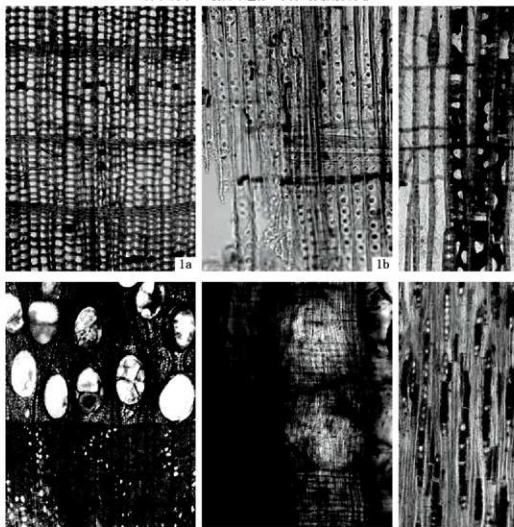
4 考察

門柱は、いずれも芯持丸木で、2点とも落葉広葉樹のクリである。クリは、重硬で強度・耐朽性が高く、柱材としては適材といえる。一方、橋脚は、いずれも分割材を削り出しており、横断面が多角形になる。09-W3柱材は芯外しの分割材から加工されているが、09-W4柱材には樹芯が認められる。これらの橋脚は、2点とも針葉樹のヒノキであった。ヒノキは、木理が通直で割裂性・耐水性が高く、加工は容易である。分割加工が容易であること、耐水性が高いこと等から橋脚に利用されたことが推定される。

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 平井信二, 1996, 木の大百科. 朝倉書店, 642p.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p.
[Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井 智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

付写真3 粉河寺遺跡の木材 (顕微鏡写真)



出土遺物一覧

凡例

・出土遺物登録番号の付け方

出土遺物登録番号は、遺構種類や区画に関係なく、掘削に伴って順次現場で取り上げ、遺物カードを入れている。Ⅰ区は1番～、Ⅱ区は401番～、Ⅲ区は701番～から登録番号を付した。Ⅰ区・Ⅱ区とⅢ区は調査年次が異なるが、同年度の繰越事業であるため1冊の出土遺物登録台帳原本にまとめた。また、出土遺物登録台帳をパソコンでExcel 2007 ファイルデータに入力して、層序要素毎の遺物点数の集計作業に利用した。この元データは、調査報告書完成後に遺物コンテナ収納台帳と共に和歌山県教育委員会に提出した。

・出土遺物への一般的な注記方法

出土遺物には、ポスターカラー（白絵の具）もしくは墨（黒絵の具も有り）で、調査時の調査コード（09-07-022）＋出土遺物登録番号を面相筆を使用して二段書きで注記した。その後、ラッカー薄め液で適度に希釈した速乾性ニス塗布した。

・実測遺物登録番号の付け方

膨大な量の遺物の中から必要に応じて任意的に抽出した遺物に対して、最終的に実測図を作成したり、遺物写真を撮影した物に対して、実測遺物登録番号の付与（遺物に水色の●タックシールに番号を記して貼り付けた）と同時に、実測遺物登録台帳を作成し必要な事項を記載した。これもパソコンでExcel 2007 ファイルデータに入力して、後の「出土遺物一覧」として当項目に掲載した。

なお、写真のみの掲載になった遺物には「登録のみ」として登録し、ピンクの●タックシールに番号を記して貼り付けた。（「タックシール」の正式名称は、コクヨ「タックタイトル」タ-70-41 N ラベル寸法 φ8mm）

・報告書掲載遺物のコンテナ収納に当っては、挿図の遺物番号を白の○タックシールに番号を記して貼り付けた。収納は、ビニール袋（若しくは、チャック付ポリ袋）に梱包すると同時に、挿図番号の「図〇〇-〇〇〇〇」若しくは写真図版番号の「写真図版〇〇-〇〇〇（写真のみ）」と記載したラベルを添えている。報告書掲載遺物は、凡そ挿図番号順に遺物収納コンテナに収納した。これらは、和歌山県教育委員会に提出した「遺物収納コンテナ台帳」の登録やコンテナの側に貼り付けたコンテナラベルに記載している。

・「出土遺物一覧」では、遺物の法量・胎土などの観察項目の記載は極力省いた。当然、遺物実測図の原図記載に当たっては、記録として全て観察記録している。なお、瓦器のミガキ・暗文幅の記載に当たっては単位を「cm」で統一した。

・最小限必要なものについて「出土遺物一覧」表中の法量・重量の記載で、（ ）付は残存値を表している。

遺物番号	発掘番号	写真図版	実測図版	出土位置	地区区分	遺構番号・種類	遺構位置	遺物種類	部類	部位	保存率	備考
1	図50	—	4	24	I区 H7-a8	第1面	I土坑 埋土一拵	陶器陶片	土	口縁部→底面 (高合部)	約25%	透明釉。体部内面及び口縁部内面上部に金線有り。 反転復元。共存にガラスetc.
2	図50	図版25	7	39	I区 H7-a7-8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	染付 陶器陶片	陶	口縁部→体部	約20%	内面に淡い藍色の真珠光による磨擦痕。口縁部内面 上部の釉が剥ぎ取られる。反転復元。
3	図50	図版25	3	39	I区 H7-a7-8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	陶器陶片	鉄	口縁部→底面	約20%	透明釉。鉄砂より鋭利な痕。反転復元。
4	図50	—	1	22	I区 H7-a8	第1面	8土坑 埋土一拵	陶器陶片	木曜土	口縁部→肩部	不明	埋土は暗褐色細砂質シルト。口縁部内外面及び及 肩部内面に直径約0.3-1cm程度の割罫多数有り。 断面：南目、コビキA[瓦当部から見て左側→右 手側へ]。凸面：腰へラミガキの腹へラミ玉割部→ 瓦当部へ。
5	図50	図版25	2	56	I区 H7-a8	第1面	21土坑 埋土一拵	陶器陶片	木曜土	口縁部→体部	約7%	上からの残り。体部外面に7条以上の割罫、焼痕、 反転復元。
6	図50	—	6	24	I区 H7-a8	第1面	1土坑 埋土一拵	白磁 陶器陶片	磁	口縁部	約10%	反転復元。共存にガラスetc. 大分府分産：白磁類 71号。
7	図50	—	13	24	I区 H7-a8	第1面	1土坑 埋土一拵	石製品	基石	—	約95%	片足の縁部が割損。長径、重量4g。共存にガラス etc.
8	図50	図版25	10	56	I区 H7-a8	第1面	21土坑 埋土一拵	瓦	軒丸瓦	瓦当部→ 丸瓦部	約100%	上からの残り。三巴向かって左巻き。縁文26個。 凸面：南目、コビキA[瓦当部から見て左側→右 手側へ]。凸面：腰へラミガキの腹へラミ玉割部→ 瓦当部へ。
9	図50	図版25	11	9	I区 H7-a7-p7	機械掘削時	61下層部遺構 基土層	瓦	軒丸瓦	瓦当部→ 丸瓦部	約95%	瓦当：変形逆書文(向かって右巻き)。瓦当文様は 現在所蔵の土師の土師丸瓦と同形式。凸面：コ ビキA[瓦当部から見て右側→左側へ]。凸面：平 滑な腰へラミガキ玉割部。
10	図50	図版25	9	39	I区 H7-a7-8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	瓦	丸瓦	丸瓦部→ 玉割部	約85%	凸面：南目。瓦当部逆書文(向かって右巻き)。瓦 当文様は現在所蔵の土師の土師丸瓦と同形式。 凸面：コビキA[瓦当部から見て右側→左側へ]。 凸面：平滑な腰へラミガキ玉割部。
11	—	図版25	12	13	I区 H7-a7-8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	瓦	瓦	右目・左 目・角	約55%	凸面：腰へラミガキ玉割部。
12	図50	—	15	57	I区 H7-a8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	土師器	小皿	口縁部→底面	約8%	白色粘土土。反転復元。磨滅が著しく保存率が低い。 ためけが不明。
13	図50	図版25	16	57	I区 H7-a8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	土師器	土師器	口縁部→底面	約6%	口縁部外面上部から底面にかけて縁が厚く付着する。 反転復元。
14	図50	図版25	18	57	I区 H7-a8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	陶器陶片	土師器	口縁部→底面 (高合部)	約55%	外面に口縁部を有する細い割罫17条。透明釉。口 縁部内外面並に金線有り。反転復元。
15	図50	図版25	24	74	I区 H7-a8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	染付 陶器陶片	陶	口縁部→底面 (高合部)	約75%	体部内面・底面・裏面。外内面に細かい貫入多 数有り。口縁部→底面は反転復元。
16	図50	図版25	28	57	I区 H7-a8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	染付 陶器陶片	陶	口縁部→体部	約20%	体部内面・底面・裏面。外内面に細かい貫入多 数有り。口縁部→底面は反転復元。
17	図50	図版25	25	57	I区 H7-a8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	染付 陶器陶片	陶	口縁部→底面 (高合部)	約24%	体部内面・底面・裏面。外内面に細かい貫入多 数有り。口縁部→底面は反転復元。
18	図50	—	19	57	I区 H7-a8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	青磁土	陶	口縁部→底面 (高合部)	約10%	体部内面・底面・裏面。外内面に細かい貫入多 数有り。口縁部→底面は反転復元。
19	図50	図版25	21	57	I区 H7-a8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	染付 陶器陶片	陶	口縁部→底面	約50%	体部内面・底面・裏面。外内面に細かい貫入多 数有り。口縁部→底面は反転復元。
20	図50	図版25	20	57	I区 H7-a8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	染付 陶器陶片	陶	口縁部	不明	体部内面・底面・裏面。外内面に細かい貫入多 数有り。口縁部→底面は反転復元。
21	図50	—	23	74	I区 H7-a8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	染付 陶器陶片	陶	体部→底面 (高合部)	約70%	体部内面・底面・裏面。外内面に細かい貫入多 数有り。口縁部→底面は反転復元。
22	図50	図版25	26	80	I区 H7-a8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	青磁土	陶	口縁部→底面 (高合部)	約75%	体部内面・底面・裏面。外内面に細かい貫入多 数有り。口縁部→底面は反転復元。
23	図51	図版25	27	70	I区 H7-a8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	染付 陶器陶片	陶	体部→底面 (高合部)	約45%	体部内面・底面・裏面。外内面に細かい貫入多 数有り。口縁部→底面は反転復元。
24	図51	図版25	22	57	I区 H7-a8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	染付 陶器陶片	陶	口縁部→底面 (高合部)	約43%	体部内面・底面・裏面。外内面に細かい貫入多 数有り。口縁部→底面は反転復元。
25	図51	図版25	30	80	I区 H7-a8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	瓦	軒丸瓦	瓦当部→ 丸瓦部	約50%	瓦当：三巴(向かって左巻き)。縁文26個。凸面：南 目、コビキA[瓦当部から見て左側→右側へ]。凸 面：腰へラミガキの腹へラミ玉割部→瓦当部へ。 凸面：平滑な腰へラミガキ玉割部。
26	図51	図版25	29	92	I区 H7-a7-8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	瓦	丸瓦	丸瓦部→ 玉割部	約80%	凸面：南目。瓦当部逆書文(向かって右巻き)。瓦 当文様は現在所蔵の土師の土師丸瓦と同形式。 凸面：コビキA[瓦当部から見て右側→左側へ]。 凸面：平滑な腰へラミガキ玉割部。
27	図51	—	41	115	I区 H7-a7-a8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	土師器	土師器	口縁部→底面	約7%	口縁部外面上部から底面にかけて縁が厚く付着する。 断面：南目、コビキA[瓦当部から見て左側→右 手側へ]。凸面：腰へラミガキの腹へラミ玉割部→ 瓦当部へ。
28	図51	図版25	45	91	I区 H7-a7-8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	染付 陶器陶片	陶	体部→底面 (高合部)	約20%	体部内面・底面・裏面。外内面に細かい貫入多 数有り。口縁部→底面は反転復元。
29	図51	図版25	44	111	I区 H7-mc a8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	染付 陶器陶片	陶	体部→底面 (高合部)	約40%	体部内面・底面・裏面。外内面に細かい貫入多 数有り。口縁部→底面は反転復元。
30	図51	図版25	32	81	I区 H7-a8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	染付 陶器陶片	陶	口縁部→底面 (高合部)	約20%	体部内面・底面・裏面。外内面に細かい貫入多 数有り。口縁部→底面は反転復元。
31	図51	図版25	39	85	I区 H7-a7-8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	染付 陶器陶片	陶	口縁部→底面 (高合部)	約15%	体部内面・底面・裏面。外内面に細かい貫入多 数有り。口縁部→底面は反転復元。
32	図51	図版25	38	85	I区 H7-a7-8	第1面	21土坑 8土坑の下層埋土	染付 陶器陶片	陶	口縁部→底面	約30%	体部内面・底面・裏面。外内面に細かい貫入多 数有り。口縁部→底面は反転復元。

遺物番号	探出番号	写真図版	実寸図版	実寸スケール	地区	遺構位置	遺構番号・種類	遺物種類	素材	部位	保存率	備考
33	図51	図版26	33	81	I区 H7-7-56	第1土層 第2層系堆積土	20上部築基礎 北側面	染付 肥前系	瓦	胴部一部位	約25%	体部外周及び胴部一輪部に鉄線草文。胴部内部に明確なカンナ痕有り。反転後。出土層級120Ⅰ区H7-7-56。第2層系堆積土。617下部築基礎北側面と接合。
34	図51	—	37	90	I区 H7-7-47	第1土層 第3層系堆積土	20上部築基礎 北側面	染付 肥前系	瓦	体部一部位 (集合部)	約40%	透明釉。鉄砂による草文。外周面下部へ高台内縁部。反転後。
35	図51	図版26	42	73	I区 H7-7-46	第1土層 第3層系堆積土	20上部築基礎 北側面	染付 肥前系	瓦	体部一部位 (集合部)	約60%	内外面514/540オーブ模様の地に乳濁色の渦巻文。量付付着部で目。内外共に細かな貫入多数有り。断面のみ。
36	図51	—	36	85	I区 H7-7-47	第1土層 第3層系堆積土	20上部築基礎 北側面	染付 肥前系	瓦	口縁部	不明	口縁部上端面筋の拭き取り。外周面筋有り。図51-39。第2層系堆積土と同一個体の可能性有り。断面のみ。
37	図51	図版26	34	98	I区 H7-7-47	第1土層 第3層系堆積土	20上部築基礎 北側面	無釉陶器 灰土	瓦	口縁部	不明	口縁部外周に自然釉面点状に付着。発掘層：中世6前期(竈門編：V前期中)。断面のみ。
38	図51	図版26	31	81	I区 H7-7-56	第1土層 第2層系堆積土	20上部築基礎 北側面	染付 肥前系	瓦	把手付円底鉢	約30%	体部外周中に凹線1条。凹線上に縦位置の把手を貼付け。75/94/2段面の発現。反転後。
39	図51	—	35	98	I区 H7-7-47	第1土層 第3層系堆積土	20上部築基礎 北側面	染付 肥前系	瓦	底面 (集合部)	約20%	見込の厚みが非常に薄い。量付一高台内縁部。図51-36。第2層系堆積土と同一個体の可能性有り。反転後。
40	図51	—	43	91	I区 H7-7-7	第1土層 第3層系堆積土	20上部築基礎 北側面	染付 肥前系	瓦	底面 (集合部)	約90%	透明釉。身の受部露出。内面に量付け部露出状態で細かな貫入多数有り。
41	図51	図版26	40	99	I区 H7-7-7	第1土層 第3層系堆積土	20上部築基礎 北側面	瓦	軒平瓦	瓦部一部位 〜平瓦部	約30%	瓦部：均整草文。中心部不明。外縁部：右。凹線：右。ヘラツギ平瓦部へ瓦当部。左にて瓦部不明。左にて瓦部不明。凸面：横ヘラツギ瓦部から見て右へ左へ。
42	図51	図版26	46	124	I区 H7-7-7	第1土層 第3層系堆積土	617下部築基礎 北側面	瓦	瓦部一部位 〜玉縁部	約70%	凸面：ゴザ目。点状模様のしこ。ゴザ目不明。縦タタキ。凸面：横ヘラツギ瓦部(瓦部→玉縁部へ)。	
43	図52	—	47	33	I区 H7-7-7	第3層系堆積土	—	土師器	小皿	口縁部一部位	約20%	反転後。断面のみ。
44	図52	—	48	45	I区 H7-16	第3層系堆積土	第1面1・3土層。土師器	土師器	小皿	口縁部一部位	約20%	反転後。断面のみ。調整不明。
45	図52	図版26	49	42	I区 H7-7-16	第3層系堆積土	第1面1・3土層。土師器	土師器	小皿	口縁部一部位	約20%	体部外周一帯露出。見込の輪内に白色砂少量付着。量付付着。反転後。
46	図52	図版26	50	49	I区 H7-7-16	第3層系堆積土	北側面 付着部	染付 肥前系	瓦	口縁部一部位	約20%	体部外周草花文。反転後。
47	図52	図版26	51	49	I区 H7-7-16	第3層系堆積土	北側面 付着部	染付 肥前系	瓦	口縁部一部位 (集合部)	約30%	体部外周一帯露出。見込の輪内に白色砂少量付着。量付付着。反転後。
48	図52	図版26	52	42	I区 H7-7-16	第3層系堆積土	第1面1・3土層。土師器	土師器	小皿	口縁部一部位	約20%	見込の厚みが非常に薄い。量付一高台内縁部。図51-36。第2層系堆積土と同一個体の可能性有り。反転後。
49	図52	図版26	53	31	I区 H7-7-16	第3層系堆積土	—	無釉陶器 灰土	瓦	口縁部一部位	約15%	体部外周に口縁部露出する上と同一個体の可能性有り。断面のみ。
50	図52	—	54	47	I区 H7-7-16	第3層系堆積土	第1面1・3土層。土師器	土師器	小皿	口縁部一部位	約25%	体部外周に使用部の磨滅状残有り。反転後。
51	図52	図版26	55	34	I区 H7-7-16	第3層系堆積土	—	無釉陶器 灰土	瓦	口縁部	不明	輪郭からムラ有り。断面のみ。
52	図52	—	60	32	I区 H7-7-16	第3層系堆積土	—	石目器	瓦	口縁部	不明	表面面筋の割れ目。瓦部。とした面部分は土師器として再利用の可能性有り。板状。重量156g。
53	図52	図版26	56	34	I区 H7-7-16	第3層系堆積土	—	瓦	軒平瓦	瓦部一部位 〜瓦部	約90%	瓦部：三凹(向かって右を右・胴部露出・尾や短い)。瓦部15段。凹線：右。ヘラツギ瓦部から見て右へ左へ。凸面：横ヘラツギ瓦部へ瓦当部。左にて瓦部不明。凸面：横ヘラツギ瓦部から見て右へ左へ。
54	図52	図版26	58	33	I区 H7-7-16	第3層系堆積土	—	瓦	軒平瓦	瓦部一部位 〜瓦部	約50%	瓦部：均整草文。中心部不明。外縁部：右。凹線：右。ヘラツギ平瓦部へ瓦当部。左にて瓦部不明。左にて瓦部不明。凸面：横ヘラツギ瓦部から見て右へ左へ。
55	図52	図版26	57	41	I区 H7-7-16	第3層系堆積土	—	瓦	軒平瓦	瓦部一部位 〜瓦部	約50%	瓦部：均整草文。中心部不明。外縁部：右。凹線：右。ヘラツギ平瓦部へ瓦当部。左にて瓦部不明。左にて瓦部不明。凸面：横ヘラツギ瓦部から見て右へ左へ。
56	図52	図版26	59	31	I区 H7-7-16	第3層系堆積土	—	瓦	瓦部一部位 〜瓦部	約95%	凸面：右。点状模様のしこ。ゴザ目不明。縦タタキ。凸面：横ヘラツギ瓦部(瓦部→玉縁部へ)。	
57	図52	図版27	61	67	I区 H7-16	第4層系堆積土	702下部築基礎 北側面	土師器	小皿	口縁部一部位	約30%	灯明台に使用。口縁部内外面上端部に漆がタール状に付着する。反転後。
58	図52	図版27	62	122	I区 H7-16	第4層系堆積土	617下部築基礎 北側面	土師器	小皿	口縁部一部位	約30%	南北サブトレントより裏面。反転後。
59	図52	—	64	122	I区 H7-16	第4層系堆積土	617下部築基礎 北側面	白磁	坪	体部一部位	約15%	南北サブトレントより裏面。透明釉は右や左のみ有り。内外共に細かな貫入多数有り。反転後。
60	図52	図版27	65	120	I区 H7-16	第4層系堆積土	617下部築基礎 北側面	染付 肥前系	瓦	口縁部一部位 (集合部)	約40%	外周に牡丹草文を結ぶ草花文を3単位に記す。量付付着部で目。内外共に細かな貫入多数有り。断面のみ。
61	図52	図版27	66	118	I区 H7-16	第4層系堆積土	617下部築基礎 北側面	染付 肥前系	瓦	口縁部一部位 (集合部)	約60%	外周に一度目文・二度目文を結ぶ口縁部外周上端と体部下部に縁線1条。量付付着部で目。内外共に細かな貫入多数有り。反転後。
62	図52	図版27	67	118	I区 H7-16	第4層系堆積土	617下部築基礎 北側面	染付 肥前系	瓦	口縁部	約15%	体部外周に一度目・二度目文を結ぶ口縁部外周上端と体部下部に縁線2条。口縁部一帯一帯に貫入多数有り。反転後。
63	図52	図版27	63	120	I区 H7-16	第4層系堆積土	617下部築基礎 北側面	瓦	瓦部一部位	火割	約10%	体部下部に突座2条。外周面筋は右や左のみ有り。断面のみ。
64	図52	—	70	126	I区 H7-16	第4層系堆積土	617下部築基礎 北側面	瓦	瓦部一部位	火割	約17%	石積壁より70cm。外周は一見焼けたヘラツギ。底面ヘラツギ。内面は丁寧なナデ。反転後。
65	図52	図版27	68	118	I区 H7-16	第4層系堆積土	617下部築基礎 北側面	瓦	軒平瓦	瓦部一部位 〜瓦部	不明	瓦部：水波文。外縁部：右。凹線：右。ヘラツギ平瓦部へ瓦当部。左にて瓦部不明。凸面：横ヘラツギ瓦部(瓦部→瓦当部へ)。
66	—	図版27	69	77	I区 H7-16	第4層系堆積土	617下部築基礎 北側面	瓦	軒平瓦	瓦部一部位 〜瓦部	不明	外周に横平で虎文による波線が縁から。ヘラツギ瓦部。断面は右や左のみ有り。断面に向かって。

粉河寺遺跡 出土遺物一覽 I・II・III区

残存率は、主に図示できた部位での割合

No. 3

[illegible]

粉河寺遺跡 出土遺物一覽 I・II・III区

経営者は、主に問屋で売れた部材での割合

No. 4

[illegible]

粉河寺遺跡 出土遺物一覽 I・II・III区

残存率は、主に図示できた部位での割合

No. 5

[illegible]

粉河寺遺跡 出土遺物一覽 I・II・III区

陳永賢攝

No. 6

図解は、主に図示できた建物と残存率														
建物 番号	写真 図版 番号	写真 図版	実測建物 面積㎡	国土交通省 面積㎡	地区 取上区分	遺構 敷地面積	遺構 延床面積	遺構番号・種類 遺構番号	遺構種類	種類	部位	残存率	備考	
167	図57-南図31	172	192	192	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫A	口蔵部一併部	約15%	口蔵部内面以下に復元・付着。胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
168	図57-南図31	170	223	223	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫A	口蔵部一併部	約15%	胎土は粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
169	図57-南図31	171	181	181	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫A	口蔵部一併部	約20%	胎土は粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
170	図57-南図31	173	181	181	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫B	口蔵部一併部	約15%	口蔵部内面以下に復元・付着。胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
171	図57-南図31	179	229	229	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	瓦葺	瓦葺	口蔵部一併部	約25%	口蔵部は厚い土壁で内蔵・外蔵に上り、胎土の多い。	
172	図57-南図31	181	209	209	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	瓦葺	瓦葺	口蔵部一併部	不明	口蔵部は厚い土壁で内蔵・外蔵に上り、胎土の多い。	
173	図57-南図31	174	181	181	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	瓦葺	瓦葺	口蔵部一併部	約20%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
174	図57-南図32	184	168	168	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	約30%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
175	図57-南図32	196	288	288	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	約25%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
176	図57-南図32	197	280	280	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	約25%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
177	図57-南図32	199	293	293	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	約30%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
178	図57-南図32	196	295	295	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	約70%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
179	図57-南図32	182	168	168	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	約40%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
180	図57-南図32	191	295	295	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	約80%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
181	図57-南図32	192	280	280	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	約38%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
182	図57-南図32	194	297	297	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	約25%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
183	図57-南図32	195	275	275	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	約20%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
184	図57-南図32	183	82	82	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	約10%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
185	図57-南図32	193	295	295	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	約30%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
186	図57-南図32	185	168	168	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	約20%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
187	図57-南図32	187	168	168	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	不明	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
188	図57-南図32	188	82	82	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部	不明	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
189	図57-南図32	200	275	275	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	不明	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
190	図57-南図32	189	82	82	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	約15%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
191	図57-南図32	186	82	82	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	不明	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
192	図57-南図32	202	297	297	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	不明	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
193	図57-南図32	201	295	295	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	不明	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
194	図57-南図32	190	104	104	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	約80%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
195	図57-南図32	213	240	240	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	約30%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
196	図57-南図32	203	175	175	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	約35%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
197	図57-南図32	215	315	315	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	約25%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
198	図57-南図32	214	249	249	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	約20%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
199	図57-南図32	212	303	303	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	約45%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
200	図57-南図32	210	240	240	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	約20%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
201	図57-南図32	216	349	349	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	約20%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
202	図57-南図32	219	370	370	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	約45%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	
203	図57-南図32	211	276	276	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	図57-18-9	土庫	土庫	口蔵部一併部	約15%	胎土に粉粒が多く、口蔵部が強く、壁の厚みは約10cm、土壁タイプ。	

粉河寺遺跡 出土遺物一覽 I・II・III区

経営者は、主に顧客である部材での割合

7

[illegible]

遺物 番号	探検 番号	写真 図版	発掘調査 図版番号	出土 位置	地区 区分	遺構 位置	遺構 番号・種類 遺構位置	遺物 種類	素材	部位	保存率	備考
240	第58	図版34	249	249	I区 H7-u8・9	第70号面以下 第9号基壇地	第70号面から -5~30cm	土師器	土器A	口縁部一部	約40%	体部外面：工具によるナズ。体部内面：ユビオサエ 当て真鍮。工具によるナズ。銅は極めて細粒化し た起る付。口縁部地面以下深く保存。内面は 磨ける。
241	第58	図版34	250	251	I区 H7-u8・9	第70号面以下 第9号基壇地	第70号面から -5~30cm	土師器	土器A	口縁部一部	約20%	体部内面：ハケナデ6本/5 mm。ユビオサエ。銅は極めて細粒化した起る付。 口縁部地面以下深く保存。口縁部内面は付着 した起る付。口縁部地面以下深く保存。内面は 磨ける。
242	第58	図版34	251	251	I区 H7-u8・9	第70号面以下 第9号基壇地	第70号面から -5~30cm	土師器	土器B	口縁部一部	約10%	口縁部内面：ハケナデ。体部内面：ハケナデ。ユビ オサエ。使用による二次焼成有り。地面 面。
243	第58	図版34	253	253	I区 H7-u8・9	第70号面以下 第9号基壇地	第70号面から -5~30cm	瓦器	横	口縁部一部	約25%	外面ミガキ無し。内面ミガキ。0.1cm、やや粗 い。起り付け高台は残っている感じ。かなり歪 変。反転復元。
244	第58	図版34	252	253	I区 H7-u8・9	第70号面以下 第9号基壇地	第70号面から -5~30cm	瓦器	横	口縁部一部	約95%	外面ミガキ無し。内面ミガキ。0.1cm、やや粗 い。起り付け高台は残っている感じ。かなり歪 変。反転復元。
245	第58	図版34	256	251	I区 H7-u8・9	第70号面以下 第9号基壇地	第70号面から -5~30cm	青磁 龍象蓋系	蓋	口縁部	約5%	口縁部内面：龍象文(片取)。太厚分：龍象 蓋系(蓋縁)15b。反転復元。
246	第59	図版34	264	260	I区 H7-u8	第70号面以下 第9号基壇地	——	土師器	小皿	口縁部一部	100%	底部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる。外面 緑色。起り付け高台は残っている感じ。かなり歪 変。反転復元。
247	第59	——	265	260	I区 H7-u8	第70号面以下 第9号基壇地	——	土師器	小皿	口縁部一部	約90%	底部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる。外面 緑色。起り付け高台は残っている感じ。かなり歪 変。反転復元。
248	第59	——	266	259	I区 H7-u8	第70号面以下 第9号基壇地	——	土師器	小皿	口縁部一部	約30%	口縁部内面：ハケナデ。体部内面：ハケナデ。ユビ オサエ。使用による二次焼成有り。地面 面。
249	第59	——	267	256	I区 H7-u8・9	第9号基壇地	——	土師器	小皿	口縁部一部	約37%	口縁部内面：ハケナデ。体部内面：ハケナデ。ユビ オサエ。使用による二次焼成有り。地面 面。
250	第59	——	268	272	I区 H7-u8・9	第70号面以下 第9号基壇地	——	土師器	小皿	口縁部一部	約50%	口縁部内面：ハケナデ。体部内面：ハケナデ。ユビ オサエ。使用による二次焼成有り。地面 面。
251	第59	——	260	244	I区 H7-u8	第70号面以下 第9号基壇地	——	土師器	小皿	口縁部一部	約25%	口縁部内面：ハケナデ。体部内面：ハケナデ。ユビ オサエ。使用による二次焼成有り。地面 面。
252	第59	——	259	256	I区 H7-u8・9	第9号基壇地	——	土師器	小皿	口縁部一部	約20%	底部から口縁部にかけて外反りに立ち上がる。磨 減著しいため調整不詳。反転復元。
253	第59	——	261	259	I区 H7-u8	第70号面以下 第9号基壇地	——	土師器	小皿	口縁部一部	約25%	かなり歪つて緩な作り。磨減著しいため調整不詳。 磨減著しいため調整不詳。反転復元。
254	第59	図版34	258	261	I区 H7-u8・9	第70号面以下 第9号基壇地	——	土師器	小皿	口縁部一部	約50%	口縁部面以下で反つ。磨減著しいため調整不詳。
255	第59	図版34	262	256	I区 H7-u8・9	第9号基壇地	——	土師器	小皿	口縁部一部	約25%	底部に造成後内面面方から穿ちた穿孔有り(浅 14孔)宛の磨減性はあるように見えるが全体像が 不明。反転復元。
256	第59	——	263	259	I区 H7-u8	第70号面以下 第9号基壇地	——	土師器	高台付皿	底部一高台部	不明	磨減著しいため調整不詳。反転復元。
257	第59	図版34	270	256	I区 H7-u8・9	第9号基壇地	——	土師器	瓦器	口縁部一部	約20%	外面ミガキ無し。胎土精良で磨減。反転復元。
258	第59	図版34	269	259	I区 H7-u8	第70号面以下 第9号基壇地	——	瓦器	横	口縁部一部	約25%	外面ミガキ。0.1cm、一部の縁で一旦に 見える。外面ミガキ無し。見聞文は遺構状で 0.15~0.2cm、やや粗い。ハケナデ。反転復元。 と著し。高台付は縁で残る。反転復元。
259	第59	図版34	272	256	I区 H7-u8・9	第9号基壇地	——	土師器	小皿	口縁部一部	不明	体部内面ミガキのように見えるが不明。口縁36cm 程度が。胎土きめ細い。磨減の。
260	第59	図版34	273	241	I区 H7-u8	第70号面以下 第9号基壇地	——	青磁 東北サブレンテ	横	口縁部一部	約50%	内外共に無文。高台付及び内面に施す模様の 磨減。反転復元。
261	第59	図版34	254	251	I区 H7-u8・9	第70号面以下 第9号基壇地	第70号面から -5~30cm	土師器	土器B	口縁部一部	約25%	体部内面下半に使用による磨減。底部外面にも磨 減有り。口縁部内面方(左)面。反転復元。 1.5cm。磨減有り。反転復元。
262	第59	図版34	257	367	I区 H7-u8	第9号基壇地 下位	——	瓦	軒丸瓦	瓦当部	約90%	瓦当：蓮文(蓮葉八重)。二重葉縁内に蓮文32。 中層：蓮子4・8個。中層の突出は外区と同じライ ンで描けている。瓦瓦部。
263	第59	図版34	276	259	I区 H7-u8	第70号面以下 第9号基壇地	——	瓦	軒丸瓦	瓦当部	約90%	瓦当：蓮文(蓮葉八重)。中層蓮文は蓮子1・5 個。外面：コビキ・布目。瓦瓦部：丸瓦部(丸瓦部)。 反転復元。
264	第59	図版34	275	260	I区 H7-u8	第70号面以下 第9号基壇地	——	瓦	丸瓦	瓦当部	不明	外面：コビキ・布目・布目。瓦瓦部：丸瓦部(丸瓦部)。 反転復元。
265	第59	図版34	274	260	I区 H7-u8	第70号面以下 第9号基壇地	——	瓦	平瓦	瓦当部	不明	外面：コビキ・布目。瓦瓦部：丸瓦部(丸瓦部)。 反転復元。
266	第60	図版35	291	294	I区 H7-u8・9	第70号面以下 第9号基壇地	——	土師器	小皿	口縁部一部	約90%	口縁部や外反りに立ち上がる。磨減著しいため 調整不詳。
267	第60	図版35	286	262	I区 H7-u8・9	第70号面以下 第9号基壇地	——	土師器	小皿	口縁部一部	約90%	底部は連続ビツのユビオサエの傾向あり。
268	第60	図版35	287	294	I区 H7-u8	第70号面以下 第9号基壇地	——	土師器	小皿	口縁部一部	約80%	口縁部面以下で反つ。磨減著しいため調整不詳。 調整不詳。
269	第60	図版35	288	266	I区 H7-u8	第70号面以下 第9号基壇地	——	土師器	小皿	口縁部一部	約80%	口縁部面以下で反つ。磨減著しいため調整不詳。 調整不詳。
270	第60	図版35	289	252	I区 H7-u8・9	第70号面以下 第9号基壇地	——	土師器	小皿	口縁部一部	約100%	口縁部や内面ミガキに割れ方(外)に立ち上がる。磨 減著しいため調整不詳。出土登録251(I区H7-u8・9 第70号面以下第9号基壇地)と適合。
271	第60	——	290	294	I区 H7-u8	第70号面以下 第9号基壇地	——	土師器	小皿	口縁部一部	約55%	底部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる。磨 減著しいため調整不詳。反転復元。
272	第60	図版35	285	289	I区 H7-u8	第70号面以下 第9号基壇地	——	土師器	小皿	口縁部一部	約70%	外面に上がりにはみえ。体部と底部の境目が区別 できない。
273	第60	図版35	293	289	I区 H7-u8	第70号面以下 第9号基壇地	——	土師器	小皿	口縁部一部	約90%	底部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる。磨 減著しいため調整不詳。反転復元。
274	第60	図版35	292	252	I区 H7-u8・9	第70号面以下 第9号基壇地	——	土師器	小皿	口縁部一部	約90%	口縁部面以下で反つ。磨減著しいため調整不詳。 調整不詳。
275	第60	——	283	289	I区 H7-u8	第70号面以下 第9号基壇地	——	土師器	中皿	口縁部一部	約16%	口縁部外反りに立ち上がる。磨減著しいため調整 不詳。反転復元。
276	第60	図版35	277	158	I区 H7-u8	第70号面以下 第9号基壇地	——	土師器	小皿	口縁部一部	約55%	口縁部面以下で反つ。磨減著しいため調整不詳。 調整不詳。
277	第60	——	279	360	I区 H7-u8	第70号面以下 第9号基壇地	——	土師器	小皿	口縁部一部	約30%	底部から口縁部にかけて外反りに立ち上がる。反 転復元。

遺物 番号	探検 番号	写真 図説	実測 図説	出土 位置	地区 区分	遺構 位置	遺構 番号・種類	遺物 種類	素材	部位	検出 率	備考
278	第60	—	278	252	I区 H7-U8・9	第Ⅶ面以下 第9層灰砂層	—	土師器	皿	口縁部～底部	約30%	口縁部強いヨコナデにより段違いに凹凸感有り、 反転復元。
279	第60	第60-35	284	359	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	—	土師器	皿	口縁部～底部	約35%	口縁部やや歪つ、底部の器壁面から形跡に特徴有 り、反転復元。
280	第60	第60-35	280	277	I区 H7-P7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	—	土師器	皿	口縁部～底部	約50%	底部強いユビオサエ、胎土褐色さびみ(二次焼成か)
281	第60	第60-35	282	300	I区 H7-Q7・8	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	—	土師器	皿	口縁部～底部	約25%	口縁部に斜め方向のナデ有り、底部と底部の境目 が明確、反転復元。
282	第60	第60-35	281	289	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	—	土師器	皿	口縁部～底部	約25%	口縁部に歪つたユビオサエ有り、比較的角鋭い感 有、反転復元。
283	第60	—	294	273	I区 H7-Q7・8	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	—	土師器	土釜A	口縁部～底部	約15%	口縁部強いヨコナデにより強い段違いの凹凸有、内 外両面イタナツ、口縁部断面以下窪付、反転復元。
284	第60	第60-35	295	289	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	—	土師器	土釜D	口縁部～底部	約20%	口縁部は実地を折り返した作り、内外両面イタナ ツ、磨き付け、丁寧な作り、内面窪付、反転復元。
285	第60	第60-35	298	289	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	—	瓦器	小瓶	口縁部～底部	約60%	内面ミガキ幅：0.1cm、やや短、口縁部内面に割 け、口縁部を要した残り(片断有り)、約5mm幅で埋 め有り(使用済み)、一部反転復元。
286	第60	第60-35	299	289	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	—	瓦器	甕?	口縁部～底部	約20%	内面ミガキ幅：0.1～0.2cm、やや短、口縁部強い ヨコナデ、底部に波状の凹凸有り、第60-285(第 292)と器の幅とセツト類似、内面約20%反転復 元の位置に窪き口縁、縁みの有無不明、反転復元。
287	第60	第60-35	297	300	I区 H7-Q7・8	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	—	瓦器	瓶	口縁部～底部	約25%	内面ミガキ幅：0.1～0.3cm、やや短、外周縁部 歪有り、ミガキは足元から断面に連続する可能性 有。
288	第60	第60-35	296	270	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	91溝岸石橋 北側溝	瓦器	瓶	口縁部～底部	約98%	内面ミガキ幅：0.1cm、やや短、足元は連続縁 有、ミガキの間に皮肉状に真によるナデ調整有 り、僅しムラ有り(裏面側)。
289	第60	—	271	265	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	—	瓦器	瓶	口縁部～底部	約20%	口縁部外周ユビオサエ(階級線)有り、口縁部内面 に波状の凹凸有り、反転復元。
290	第60	第60-35	300	283	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	—	瓦器	土師器	口縁部～底部	約20%	口縁部外周ユビオサエ(階級線)有り、口縁部内面 に波状の凹凸有り、反転復元。
291	第60	—	301	289	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	—	瓦器	土師器	口縁部～底部	約20%	口縁部外周ユビオサエ(階級線)有り、口縁部内面 に波状の凹凸有り、反転復元。
292	第60	第60-35	302	289	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	—	瓦器	土師器	口縁部～底部	約20%	口縁部外周ユビオサエ(階級線)有り、口縁部内面 に波状の凹凸有り、反転復元。
293	第60	第60-35	305	289	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	—	瓦器	土師器	口縁部～底部	約20%	口縁部外周ユビオサエ(階級線)有り、口縁部内面 に波状の凹凸有り、反転復元。
294	第60	—	310	279	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	91溝岸石橋 北側溝	土師器	小皿	口縁部～底部	約40%	口縁部外周ユビオサエ(階級線)有り、口縁部内面 に波状の凹凸有り、反転復元。
295	第60	第60-35	308	329	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	91溝岸石橋 北側溝	土師器	小皿	口縁部～底部	約40%	口縁部外周ユビオサエ(階級線)有り、口縁部内面 に波状の凹凸有り、反転復元。
296	第60	第60-35	309	312	I区 H7-Q7・8	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	91溝岸石橋 北側溝	土師器	小皿	口縁部～底部	約45%	口縁部外周ユビオサエ(階級線)有り、口縁部内面 に波状の凹凸有り、反転復元。
297	第60	第60-35	307	271	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	91溝岸石橋 北側溝	土師器	小皿	口縁部～底部	約40%	口縁部外周ユビオサエ(階級線)有り、口縁部内面 に波状の凹凸有り、反転復元。
298	第60	第60-35	306	257	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	91溝岸石橋 北側溝	土師器	小皿	口縁部～底部	約30%	口縁部外周ユビオサエ(階級線)有り、口縁部内面 に波状の凹凸有り、反転復元。
299	第60	第60-35	316	318	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	91溝岸石橋 北側溝	土師器	小皿	口縁部～底部	約25%	口縁部外周ユビオサエ(階級線)有り、口縁部内面 に波状の凹凸有り、反転復元。
300	第60	—	315	257	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	91溝岸石橋 北側溝	土師器	小皿	口縁部～底部	約20%	口縁部外周ユビオサエ(階級線)有り、口縁部内面 に波状の凹凸有り、反転復元。
301	第60	—	317	279	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	91溝岸石橋 北側溝	土師器	小皿	口縁部～底部	約5%	口縁部外周ユビオサエ(階級線)有り、口縁部内面 に波状の凹凸有り、反転復元。
302	第60	—	312	266	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	91溝岸石橋 北側溝	土師器	土釜A	口縁部～底部	約10%	口縁部外周ユビオサエ(階級線)有り、口縁部内面 に波状の凹凸有り、反転復元。
303	第60	第60-35	314	257	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	91溝岸石橋 北側溝	土師器	土釜D	口縁部～底部	約15%	口縁部外周ユビオサエ(階級線)有り、口縁部内面 に波状の凹凸有り、反転復元。
304	第60	第60-35	311	318	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	91溝岸石橋 北側溝	土師器	土釜A	口縁部～底部	約10%	口縁部外周ユビオサエ(階級線)有り、口縁部内面 に波状の凹凸有り、反転復元。
305	第60	第60-35	313	312	I区 H7-Q7・8	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	91溝岸石橋 北側溝	土師器	土釜A	口縁部～底部	約10%	口縁部外周ユビオサエ(階級線)有り、口縁部内面 に波状の凹凸有り、反転復元。
306	第60	—	318	279	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	91溝岸石橋 北側溝	土師器	土釜A	口縁部～底部	約10%	口縁部外周ユビオサエ(階級線)有り、口縁部内面 に波状の凹凸有り、反転復元。
307	第60	第60-35	319	257	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	91溝岸石橋 北側溝	土師器	土釜A	口縁部～底部	約10%	口縁部外周ユビオサエ(階級線)有り、口縁部内面 に波状の凹凸有り、反転復元。
308	第60	—	321	268	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	91溝岸石橋 北側溝	土師器	土釜A	口縁部～底部	約10%	口縁部外周ユビオサエ(階級線)有り、口縁部内面 に波状の凹凸有り、反転復元。
309	第60	—	321	268	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	91溝岸石橋 北側溝	土師器	土釜A	口縁部～底部	約10%	口縁部外周ユビオサエ(階級線)有り、口縁部内面 に波状の凹凸有り、反転復元。
310	第60	第60-35	322	312	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	91溝岸石橋 北側溝	土師器	土釜A	口縁部～底部	約10%	口縁部外周ユビオサエ(階級線)有り、口縁部内面 に波状の凹凸有り、反転復元。
311	第61	第61-37	330	310	I区 H7-Q7	第9層灰砂層 青灰色粗砂層	91溝岸石橋 北側溝	土師器	土釜A	口縁部～底部	約50%	口縁部外周ユビオサエ(階級線)有り、口縁部内面 に波状の凹凸有り、反転復元。

遺物 番号	発掘 番号	発見 日	出土 層位	地区 区分	遺構 番号・種類	遺構 位置	遺物 種類	種類	部位	保存率	備考
312	第61	第637	331	310	I区 H7-7-8	第11層系堆積土 瓦葺そうじ	土師器	小皿	口縁部～底部	約30%	底部から口縁部にかけてやや凹み立ち上がる。胎土は堅硬(高温焼成)。反転復元
313	第61	第637	329	264	I区 H7-7-8	第11層系堆積土	土師器	小皿	口縁部～底部	約55%	底部壁面直り。底部外面に針葉樹系の炭痕跡あり。反転復元
314	第61	第637	332	255	I区 H7-7-8、9	第11層系堆積土	土師器	小皿	口縁部～底部	約35%	底部中央部に穿孔あり(焼成後に外面面から穿孔)。底部外面の炭痕跡は灯明芯の跡か。反転復元
315	第61	第637	327	308	I区 H7-7-8	第11層系堆積土	土師器	皿	口縁部～底部	約30%	口縁部外周ぎみに立ち上がる。対応する口縁部内外面にケム状の付着層。磨滅著しいため調整不明瞭。反転復元
316	第61	第637	324	248	I区 H7-7-7	第11層系堆積土	土師器	皿	口縁部～底部	約25%	底部面から口縁部にかけて内周ぎみに立ち上がる。底部外周面をユビオサエ。しかし基本的に丁寧な作り。一部高温焼成か。反転復元
317	第61	第637	328	292	I区 H7-7-7	第11層系堆積土	土師器	高台付皿	口縁部～底部	約60%	口縁部直縁のヨコナデ。高台部欠損
318	第61	第637	323	248	I区 H7-7-7	第11層系堆積土	土師器	皿	口縁部～底部	約85%	底部外周面をユビオサエ。内面にへう状痕
319	第61	第637	325	255	I区 H7-7-8、9	第11層系堆積土	土師器	皿	口縁部～底部	約40%	底部面をユビオサエ。底部以下の磨滅は厚い。反転復元
320	第61	第637	326	343	I区 H7-7-8、9	第11層系堆積土	土師器	皿	口縁部～底部	約30%	口縁部内周ぎみに立ち上がる。反転復元
321	第61	第638	333	267	I区 H7-7-8	第11層系堆積土 土台	土師器	土釜A	口縁部～底部	約20%	体部内外面イタナシ。体部内外面に付着層。体部外面下部に口部状の凹痕跡がある。底部約350-240(実249)土釜Aと類似。反転復元。出土登録354(1区H7-7-8 第11層系堆積土)と接合
322	第61	—	334	248	I区 H7-7-7	第11層系堆積土	土師器	土釜A	口縁部～底部	約15%	口縁部直縁以下に保存層。片岩を多量に含む地元。反転復元
323	第61	第638	335	266	I区 H7-7-8	第9層系堆積土 青灰色粗砂礫層	土師器	土釜B	口縁部～底部	約25%	側面直下より下に厚く付着層。反転復元
324	第61	第638	336	302	I区 H7-7-7	第11層系堆積土 南北サプトレンテ 地境	瓦葺	板	口縁部～底部	約20%	外周とガキ幅:0.1cm位。やや短。内面とガキ幅:0.1cm位。短。口縁部直縁面直下。反転復元
325	第61	第638	337	292	I区 H7-7-7	第11層系堆積土	瓦葺	板	口縁部～底部	約20%	内面とガキ幅:0.1cm位。やや短。口縁部内面土上部に炭痕跡あり。貼り付け高台は丁寧な作り。反転復元
326	第61	第638	339	364	I区 H7-7-8	第11層系堆積土	瓦葺	板	口縁部～底部	約30%	内面とガキ幅:0.1-0.2cm。やや短。重ね焼き痕あり。口縁部内面土上部に中継平な炭痕。内面は青灰色の土を施す。焼くようあり。反転復元
327	第61	—	341	355	I区 H7-7-7、8	第11層系堆積土	瓦葺	板	口縁部～底部	約25%	内面とガキ幅:0.1-0.2cm位。やや短。重ね焼き痕あり。焼くようあり。口縁部の立ち上がり外方に突きやみのため磨滅が低い。一見しっかりした貼り付け痕。反転復元
328	第61	第638	340	307	I区 H7-7-8、9	第11層系堆積土	瓦葺	板	口縁部～底部	約20%	内面とガキ幅:0.1-0.15cm。短。口縁部内面土上部に炭痕跡あり。重ね焼き痕あり。反転復元
329	第61	第638	338	308	I区 H7-7-8	第11層系堆積土	瓦葺	板	口縁部～底部	約60%	内面とガキ幅:0.1-0.15cm位。短。高台ほどとどまらず。焼くようあり。重ね焼き痕あり。一部反転復元
330	第61	第638	342	292	I区 H7-7-7	第11層系堆積土	瓦葺	板	口縁部	約5%	口縁部直縁面直下。右回り。反転復元
331	第61	第638	343	292	I区 H7-7-7	第11層系堆積土	瓦葺	板	口縁部	約10%	大半が分断。腹面系系青磁焼12段?。反転復元
332	第61	第638	344	355	I区 H7-7-7、8	第11層系堆積土	白磁	板	口縁部～底部	約10%	内外共に細かに貫入あり。外周直にケムナシ有り。貼り付けのため11?に付着に不十分なり。大半が分断?。口縁部直縁面直下。反転復元
333	第61	—	355	299	I区 H7-7-7	第11層系堆積土	土師器	小皿	口縁部～底部	約45%	底部と体部の境目が明確。磨滅著しい。磨滅著しいため調整不明瞭。反転復元
334	第61	—	356	299	I区 H7-7-7	第11層系堆積土	土師器	小皿	口縁部～底部	約30%	口縁部やや内周ぎみに立ち上がる。見込は平坦な丁寧な作り。反転復元
335	第61	第638	351	346	I区 H7-7-7	第11層系堆積土	土師器	小皿	口縁部～底部	約100%	磨滅の磨滅に厚い部分有り。非常に磨滅な作り。口縁部直縁は外側下方へ巻き込む
336	第61	第638	356	299	I区 H7-7-7	第11層系堆積土	土師器	小皿	口縁部	約95%	口縁部直縁。底部内面平坦な丁寧な作り。底部外面約1/4の範囲に二重に付着層
337	第61	第638	353	346	I区 H7-7-7	第11層系堆積土	土師器	小皿	口縁部～底部	約60%	底部から体部外面にかけて粘土の接合痕あり。丁寧な作りだが口縁部やや歪つ
338	第61	—	354	330	I区 H7-7-7	第11層系堆積土	土師器	小皿	口縁部～底部	約60%	口縁部外周ぎみに立ち上がる。底部外周面をユビオサエ。反転復元
339	第61	第638	357	325	I区 H7-7-7	第11層系堆積土	土師器	小皿	口縁部～底部	約45%	全体に磨滅が薄い。磨滅著しいため調整やや不明瞭。反転復元。出土登録299(1区H7-7-7 第9層系堆積土)と接合。第11層系堆積土と接合
340	第61	第638	352	333	I区 H7-7-7	第11層系堆積土	土師器	中皿	口縁部～底部	約40%	丁寧な作り。底61-341-342(実345)土師器とセット関係になる。底部外面に粘土の接合痕あり。反転復元
341	第61	第638	345	346	I区 H7-7-7	第11層系堆積土	土師器	小皿	口縁部～底部	100%	底面直縁面直下。磨滅著しい。口縁部直縁は外側下方へ巻き込む
342	第61	第638	346	346	I区 H7-7-7	第11層系堆積土	土師器	小皿	口縁部～底部	100%	底面直縁面直下。磨滅著しい。口縁部直縁は外側下方へ巻き込む
343	第61	—	349	299	I区 H7-7-7	第11層系堆積土	土師器	小皿	口縁部～底部	約30%	口縁部は内周ぎみに立ち上がり。磨滅はやや厚い。反転復元
344	第61	第638	347	325	I区 H7-7-7	第11層系堆積土	土師器	小皿	口縁部～底部	約40%	口縁部の磨滅が著しい。全体の丁寧な作り。反転復元
345	第61	第638	348	325	I区 H7-7-7	第11層系堆積土	土師器	小皿	口縁部～底部	約35%	口縁部は外周ぎみに立ち上がる。底部底面の磨滅が厚い。反転復元
346	第61	第638	350	330	I区 H7-7-7	第11層系堆積土	土師器	小皿	口縁部～底部	約25%	口縁部は内周ぎみに立ち上がり。底部はやや厚い。反転復元
347	第61	第638	359	325	I区 H7-7-7	第11層系堆積土	土師器	高台付皿	口縁部～高台部	約60%	口縁部直縁面に炭痕の磨滅文様あり。高台内は磨滅なユビオサエ。反転復元
348	第61	第638	360	299	I区 H7-7-7	第11層系堆積土	土師器	土釜A	口縁部～底部	約15%	口縁部直縁面にヨコナデの磨滅文様の磨滅あり。磨滅に準じたものかユビオサエと有り。反転復元
349	第61	第638	361	299	I区 H7-7-7	第11層系堆積土	土師器	土釜A	口縁部～底部	約15%	口縁部直縁面にヨコナデの磨滅文様の磨滅あり。磨滅に準じたものかユビオサエと有り。反転復元

粉河寺遺跡 出土遺物一覽 I・II・III区

読者達は、主に関係のある野放での割合

11

建物 番号	探検 番号	写真 図説	実測地盤面 標高(単位:m)	三次元測 定標高(単位:m)	地区 取上区画	遺構の 敷地面積 ・埋蔵深度	遺構番号、種類 ・遺構位置	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
350	Ⅷ-61	Ⅷ図39	365	330	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土	——	瓦葺	竈	口縁部→体部	約20%	内面より平年輪:0.2cm位、極めて粗。内面と平年輪:0.1~0.2cm位、細。口縁部内壁上に横溝丁字状線有り、反転復元。
351	Ⅷ-61	Ⅷ図39	363	333	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 下位	——	瓦葺	竈	口縁部→底部	約30%	内面と平年輪:0.1~0.2cm位、やや粗い。重なる様相有り。見込面文から断面にかけて腐蝕状を呈するが、反転復元。
352	Ⅷ-61	Ⅷ図39	366	299	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土上段 第11層系堆積土上段	——	瓦葺	竈	口縁部→底部	約25%	内面と平年輪:0.1~0.15cm位、やや粗。焼しが著しく土師質の状態。僅し以上程の瓦葺の様相があり、形勢・調整法は土師土と考え可い。反転復元。
353	Ⅷ-61	Ⅷ図39	362	325	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 瓦砂礫堆積面	——	瓦葺	竈	口縁部→底部	約70%	内面と平年輪:0.1~0.2cm位、やや粗。左縁口縁端部の約1/4に有り、口縁部底側、外部外周逆接ピッチのユビダナ有り。反転復元。
354	Ⅷ-61	Ⅷ図39	364	325	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 瓦砂礫堆積面	——	瓦葺	竈	口縁部→底部	約40%	内面と平年輪:0.2cm位、極めて粗い。重なる様相有り。貼り付け痕あり。口縁部底側に瓦葺。反転復元。出土登録330[Ⅰ区H7-m7] 第11層系堆積土と接合
355	Ⅷ-61	Ⅷ図39	367	323	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 瓦砂礫堆積面	——	唐草模様の土管	胴部・体部	体部→底部	底部約50%	縦断面垂直方向で、ウロ口断面向左に歪み、反転復元。
356	Ⅷ-61	Ⅷ図39	368	325	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 瓦砂礫堆積面	——	黄銅同軸瓦葺	皿	口縁部→底部	約45%	底面に華蓋式文様有り(所謂「扇蓋」)。底面上に直交し、大半分間隔同様に長径方向に10個、反転復元。
357	Ⅷ-61	Ⅷ図39	370	325	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 瓦砂礫堆積面	——	瓦葺	軒丸瓦	瓦当部	約80%	ノミ傷付露出。顔目収縮後、中央に深くけたれ籠有り。且当文面の上に向斜めの凸線有り。
358	—	Ⅷ図39	369	358	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土	——	瓦	平瓦類	不明	不明	表面・裏面、凸面・橋手タタキ、凸面の橋手タタキの内装が主。
359	—	Ⅷ図39	371	325	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 瓦砂礫堆積面	——	石製品	基石石	——	約90%	長さ78cm、幅4.5cm、厚さ1.0cm、重量(64g)、石材:紅花石片岩
360	Ⅷ-62	Ⅷ図40	381	326	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 瓦砂礫堆積面	——	土師器	小皿	口縁部→底部	約80%	底辺2-363[Ⅲ37]と土師器小皿と同様の製作工程、断面に接合の跡のため容易に分離可能。断面外縁に粘土の接合痕有り。
361	Ⅷ-62	Ⅷ図40	382	326	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 瓦砂礫堆積面	——	土師器	小皿	口縁部→底部	約50%	断面外縁に粘土の接合痕有り。やや磨滅著しいため調整不可。
362	Ⅷ-62	Ⅷ図40	383	326	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 瓦砂礫堆積面	——	土師器	小皿	口縁部→底部	約70%	全体に丁寧な作りで変色少ない。やや磨滅著しいため調整不可。
363	Ⅷ-62	Ⅷ図40	379	326	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 瓦砂礫堆積面	——	土師器	小皿	口縁部→底部	約98%	土師器土と同時の製作工程で観察できる。丁寧な作りだが口縁部や中腰で
364	Ⅷ-62	Ⅷ図40	380	348	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 下位	——	土師器	小皿	口縁部→底部	約95%	底辺2-363[Ⅲ37]と土師器小皿と同様の製作工程
365	Ⅷ-62	Ⅷ図40	372	326	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 瓦砂礫堆積面	——	土師器	皿	口縁部→底部	100%	内面水分の多く倉んだ皮具痕を宛ててナデ・ヨコナデを施す製作工程が見えつき、丁寧な作りだが口縁部やや歪つ
366	Ⅷ-62	Ⅷ図40	373	326	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 瓦砂礫堆積面	——	土師器	皿	口縁部→底部	約90%	底辺2-365[Ⅲ37]と土師器皿と同様の製作工程が観察できる。全体に磨滅が深い。
367	Ⅷ-62	Ⅷ図40	374	326	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 瓦砂礫堆積面	——	土師器	皿	口縁部→底部	約70%	底辺2-365[Ⅲ37]と土師器皿と同様の製作工程が観察できる。全体に磨滅が深い。
368	Ⅷ-62	Ⅷ図40	375	347	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土下位 第11層系堆積土上段	——	土師器	皿	口縁部→底部	約55%	口縁部、口縁端部の磨耗はやや著しく、断面→底部の磨耗は全くなき。
369	Ⅷ-62	Ⅷ図40	377	347	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 上位	——	土師器	高台付鉢	体部→高台部	約70%	製作工程は底辺2-365-368[Ⅲ37]-375]土師器皿と同様。未接合破片有り。高台付土器な貼り付け、反転復元。出土登録365[Ⅰ区H7-m7] 第11層系堆積土と接合痕有りとの接合
370	Ⅷ-62	Ⅷ図40	378	326	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 瓦砂礫堆積面	——	土師器	高台付鉢	体部→高台部	約50%	高台は磨滅残り付け。一部反転復元。出土登録381[Ⅰ区H7-m7] 第9層系堆積土下位、第11層系堆積土上位と接合
371	Ⅷ-62	Ⅷ図41	391	326	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 瓦砂礫堆積面	——	土師器	土釜A	口縁部→底部	口縁部約50%	底面破片も50%以上遺存するが、接合部はほぼ完全な状態。口縁部断面外面以下に入ス入付。反転復元。出土登録299[Ⅰ区H7-m7] 堆積層 第9層系堆積土下位、第11層系堆積土上位と接合
372	Ⅷ-62	Ⅷ図41	396	326	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 瓦砂礫堆積面	——	土師器	土釜A	口縁部→底部	口縁部約50%	口縁部の丁寧な作りで散々に腐蝕・形態化し土師の貼り付けが随所で窺う。口縁部の一部に入ス入付。張り及び磨滅の跡から見て堆積期の土釜としては比較的新々とも。片割・表石・右翼・右翼土を伴った含むワケ土ともどもは該期の主土と判断して可い。反転復元。出土登録348[Ⅰ区H7-m7] 堆積層 第11層系堆積土下位と接合
373	Ⅷ-62	Ⅷ図41	394	326	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 瓦砂礫堆積面	——	土師器	土釜A	口縁部→体部	口縁部約40%	胴の形状は異なるが、底辺2-371(底391)、底辺2-374(底395)と同様の製作工程。口縁部やや歪つ、口縁部以下に浅溝(口縁部以下に浅溝)付。反転復元。
374	Ⅷ-62	Ⅷ図41	395	326	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 瓦砂礫堆積面	——	土師器	土釜A	口縁部→体部	約30%	胴は途切れ途切れに貼り付けられ、極めて面状な作り。胎土に片割・チャート・表石・右翼を極めて多量含み、反転復元。出土登録398[Ⅰ区H7-m7] 堆積層 第9層系堆積土下位、第11層系堆積土上位と接合。出土登録299[Ⅰ区H7-m7] 堆積層 第9層系堆積土下位、第11層系堆積土上位と接合。出土登録347[Ⅰ区H7-m7] 堆積層 第9層系堆積土上位と接合。出土登録348[Ⅰ区H7-m7] 堆積層 第9層系堆積土上位と接合。
375	Ⅷ-62	Ⅷ図41	393	326	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 瓦砂礫堆積面	——	土師器	土釜A	口縁部→体部	口縁部約50%	胴の張り付けが随所で窺う。口縁部以下に浅溝(口縁部以下に浅溝)付。胎土に片割・チャート・表石・右翼、反転復元。
376	Ⅷ-62	Ⅷ図41	392	326	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 瓦砂礫堆積面	——	土師器	土釜A	口縁部→体部	約40%	胴は極めて形態化(所謂「ミミズ型」状)。胎土に片割・チャート・表石・右翼を極めて多量含む、反転復元。
377	Ⅷ-62	Ⅷ図41	397	326	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 瓦砂礫堆積面	——	土師器	土釜B	口縁部→体部	口縁部約30%	胴は極めて形態化(所謂「ミミズ型」状)。胎土に片割・チャート・表石・右翼を極めて多量含む、反転復元。
378	Ⅷ-62	Ⅷ図40	386	326	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 瓦砂礫堆積面	——	瓦葺	小竈	口縁部→高台部	約30%	内面と平年輪:0.1~0.2cm位、やや粗。見込面に重なる様相を呈するが、反転復元。外周と平年輪:0.1~0.2cm位、やや粗。反転復元。
379	Ⅷ-62	—	385	326	Ⅰ区 H7-m7	第11層系堆積土 瓦砂礫堆積面	——	瓦葺	竈	口縁部→体部	約20%	内面より平年輪:0.1cm位、やや粗。内面と平年輪:0.55[Ⅲ37]と土師器皿。底辺2-363[Ⅲ37]と土師器皿。

建物 番号	併設 番号	写真 図説	実測位置 (北緯・東経)	地理 取上区画	遺構 範囲・基礎位置	遺構番号・種類 遺構位置	遺物種類	素材	部位	残存率	備考	
380	0602	図解40	384	326	I区 H7-n-7	第11層系土壌土 紅砂粘硬土	瓦器	横	口縁部～高台部	約30%	内面ミガキ幅：0.1～0.3cm位。箱、内部に先施の焼て紙へ巻かれた布で包つてあり、外周は黒色漆を塗りかへ、僅しにうろ覚えの模様？。一反板反復。	
381	0602	図解40	387	326	I区 H7-n-7	第11層系土壌土 紅砂粘硬土	瓦器	蓋	腹部～底部	約50%	外面ミガキ 0.1cm位。中々細。タテ方向の粗いヘナツ。内部はレジビグザム状保存？。腹部内部の漆皮が剥離。反応良好。	
382	0602	図解40	388	326	I区 H7-n-7	第11層系土壌土 紅砂粘硬土	――	瓦質	火舎(釜)	口縁部	不明	I区縁部内面に粘土の凝着痕有り。中々細なたため網不規則。断面のみ。測定値42～44cm。
383	0602	――	389	326	I区 H7-n-7	第11層系土壌土 紅砂粘硬土	――	瓦質 重層土	塔形	口縁部	不明	裏目耳葉1段後の破断か？。断面のみ。
384	0602	図解42	403	327	I区 H7-n-7	第11層系土壌土 紅砂粘硬土	――	土師器	小皿	口縁部～底部	約95%	一連の大皿と同様の製作工程。図62・390(案398)土師器と同様。底面には黄ぬきコオエで外面側に突出する。口縁部の歪み有り。
385	0602	図解42	404	369	I区 H7-o-7	V第5面 第11層系土壌土	97集石遺構	土師器	小皿	底面	100%	全体に歪み強い。見込の一部にスス灰の黒色物の付着有り。
386	0602	図解42	405	361	I区 H7-o-p-7	第9層系土壌土下位 第11層系土壌土上位 第11層系土壌土上位	――	土師器	小皿	口縁部～底部	約80%	I区縁部は強いコソデにより腹部が肥厚する。
387	0602	図解42	406	327	I区 H7-n-7	第11層系土壌土 紅砂粘硬土	――	土師器	小皿	ほぼ完整	約97%	全体に歪み強い。一連の大皿と同様の製作工程。粘土積立。
388	0602	図解42	401	369	I区 H7-o-7	第11層系土壌土	97集石遺構	土師器	中皿	口縁部～底部	約95%	口縁部内面にスナチナ有り。見込に地持の圧痕有り。内面部分に完全に黒褐色化する。ススの付着に伴って変色。
389	0602	図解42	400	361	I区 H7-n-7	第9層系土壌土下位 第11層系土壌土上位 第11層系土壌土上位	――	土師器	口縁部～底部	約20%	全体に歪み強い。一部と体部の項目は比較的確確。胎土積立。反応良好。底面に強いヘナツ様の模様の形成。反応良好。	
390	0602	図解42	398	361	I区 H7-o-p-7	第9層系土壌土下位 第11層系土壌土上位 第11層系土壌土上位	――	土師器	口縁部～底部	約55%	全体に歪みの歪みが一定。図62・390(案398)土師器と同様の製作工程。底面に強いヘナツ様の模様の形成。反応良好。	
391	0602	図解42	399	361	I区 H7-n-7	第11層系土壌土 紅砂粘硬土	――	土師器	口縁部～底部	約50%	全体に歪みの歪みが一定。図62・390(案398)土師器と同様の製作工程。底面に強いヘナツ様の模様の形成。反応良好。	
392	0602	図解42	402	361	I区 H7-o-p-7	第9層系土壌土下位 第11層系土壌土上位 第11層系土壌土上位	――	土師器	高台付口	口縁部～高台部	約25%	口縁部内外の磨った丁寧な作りだが、見込、底面の白く凸立つ。黄ぬきは外周より腹部にかけて、胎土積立。反応良好。
393	0602	図解42	407	327	I区 H7-n-7	第11層系土壌土 紅砂粘硬土	――	瓦器	横	口縁部～底部	約20%	内面ミガキ幅：0.1cm位。中々細。外部は黒色漆を塗り、見込線状凸出。反応良好。
394	0602	――	408	361	I区 H7-o-p-7	第9層系土壌土下位 第11層系土壌土上位 第11層系土壌土上位	――	瓦器	横	口縁部～底部	約10%	内面ミガキ幅 0.15cm位。極めて密。口縁部内部に強く凹む。外面ミガキ幅 0.1cm位。磨かれた肌。口縁部外面に凹凸位の軽いヘナツパターン？。反応良好。
395	0602	図解42	409	361	I区 H7-o-p-7	第9層系土壌土下位 第11層系土壌土上位 第11層系土壌土上位	――	瓦器	横	口縁部～高台部	約20%	内面ミガキ幅 0.1～0.2cm。中々細。内面部分に一連の土師器と同様の製作工程が認められる。サシム有り。反応良好。
396	0602	図解42	411	361	I区 H7-o-p-7	第9層系土壌土下位 第11層系土壌土上位 第11層系土壌土上位	――	土師器	土器A	口縁部～底部	約25%	胎土敷いた餅を貼り付けているのがやや多く、外周に強く凹みスス付。内面は口縁部から体部上にかけて極めて黒褐色化している。反応良好。
397	0602	図解42	410	361	I区 H7-o-p-7	第9層系土壌土下位 第11層系土壌土上位 第11層系土壌土上位	――	土師器	土器A	口縁部～底部	約40%	胎土の貼付けが殆どで幾分か大皿が割れて黒くなっている。口縁部の底面外面以下にスス付。底面に片寄多量。反応良好。
398	0603	――	412-1	361	I区 H7-n-7	第9層系土壌土下位 第11層系土壌土上位 第11層系土壌土上位	――	土師器	土器A	口縁部～底部	約30%	I区縁部内面から体部外面にかけて非常に強くスス附着。胎土化した低い筒。透疹良好。
399	0603	――	412-2	369	I区 H7-n-7	V第5面 第11層系土壌土	97集石遺構	土器A	口縁部～底部	約25%	胎土敷いた極く弱い餅を貼り付けているのがやや多い。内径大スス付。図62・390(案398)411。	
400	0603	――	413	369	I区 H7-n-7	V第5面 第11層系土壌土	97集石遺構	土器B	口縁部～底部	約15%	底面に丁寧な作り。側部端より下に深く凹着。口縁部は内面に斜りに返し直さず様の外ヘナツ。反応良好。	
401	0603	図解42	418	363	I区 H7-p-7	第11層系土壌土 下位の第11層系土壌土	――	土師器	小皿	口縁部～底部	約95%	全体に丁寧に作られているが口縁部はややつ。底面は一連の出凸反復有り。
402	0603	図解42	420	363	I区 H7-n-7	第11層系土壌土 下位の第11層系土壌土	塔形器	土師器	小皿	口縁部～底部	約65%	一連の製作工程と同様である。底面にハバツ工具の軽いつまり有り。
403	0603	図解42	419	363	I区 H7-n-7	第11層系土壌土 下位の第11層系土壌土	――	土師器	皿	口縁部～底部	約90%	I区縁部にコソナすに塗した後に、底面部分にスス付。見込にコソナの方の黒いコソナ有り。
404	0603	――	416	327	I区 H7-n-p-7	V第5面 第9層系土壌土	96床も込み	土師器	小皿	口縁部～底部	約15%	底面にはピオオス塗す。口縁部は外反して立ち上り隅角部を丸く収める。底面には強いヘナツ様の形成。反応良好。
405	0603	――	430	324	I区 H7-46	第13層系土壌土 青灰色土壌土	――	土師器	中皿	口縁部～底部	約15%	底面から体部にかけて歪みを帯びて内湾し口縁部に強いヘナツコソデにより内湾部が肥厚する。反応良好。
406	0603	――	427	341	I区 H7-18	下位灰黒炭色 炭砂互層	南北トレンチ 堆積層	土師器	皿	口縁部～底部	約15%	全体に丁寧に作られている。形態は一眼60～286(案209)灰層層に類する。胎土はよく水張りされている。反響のたため網。口縁部は斜め外方に反び、縁部に沿って平ら。裏面は不規則。見込不安定方のナツ。反応良好。
407	0603	――	415	332	I区 H7-n-p-7	V第5面 第9層系土壌土	96床も込み	土師器	高台付口	口縁部～底部	約25%	I区縁部に強めのコソナす塗す。縁部を丸く収める。口縁部は強いコソデにより内湾部が肥厚する。反応良好。
408	0603	図解42	424	342	I区 H7-p-7	最下位 青灰色粗砂層	南北トレンチ 堆積層	土師器	皿	口縁部～底部	約15%	I区縁部に強めのコソナす塗す。縁部を丸く収める。口縁部は強いコソデにより内湾部が肥厚する。反応良好。
409	0603	図解42	414	338	I区 H7-m-7	V第5面下位 第11層系土壌土	98軒六 北半部	土師器	体部～底部	約10%	底面に強いヘナツコソデにより内湾部が肥厚する。反応良好。	
410	0603	図解42	417	363	I区 H7-n-7	第11層系土壌土 下位の第11層系土壌土	――	土師器	口縁部～底部	約50%	全体に丁寧に作られている。形態は一眼60～286(案209)灰層層に類する。胎土はよく水張りされている。反響のたため網。口縁部は斜め外方に反び、縁部に沿って平ら。裏面は不規則。見込不安定方のナツ。反応良好。	
411	0603	図解42	423	342	I区 H7-16	最下位 青灰色粗砂層	南北トレンチ 堆積層	土師器	口縁部～底部	約25%	I区縁部に強めのコソナす塗す。縁部を丸く収める。口縁部は強いコソデにより内湾部が肥厚する。反応良好。	
412	0603	図解42	428	341	I区 H7-18	下位灰黒炭色 炭砂互層	南北トレンチ 堆積層	瓦器	横	口縁部～高台部	約20%	内面ミガキ幅 0.1～0.2cm位。内面部分に強く凹む。口縁部内面に完全に黒褐色化する。外面ミガキ幅 0.1cm位。磨かれた肌。口縁部外面に凹凸位の軽いヘナツパターン？。反応良好。

測点番号	探検番号	写真図	実測地層図	地質図上の位置	遺構の位置	遺構番号・種類	遺構の種類	部材	部材	残存率	備考	
413	第3区画	図42	421	363	Ⅱ区 H7-p7	第11層の灰緑土 下位の第11層土 堆積土	瓦葺	椀	口縁部一部位	約40%	内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。2段の連続ピッチ 立ち上がり。内面底面に傾斜により若干の傾斜あり。 反転後。	
414	第3区画	図42	425	342	Ⅱ区 H7-p8	堆積土 東北トレンチ 堆積土	瓦葺	椀	口縁部一部位	約20%	内面ミナ平幅: 0.1~0.2m 短。斜壁面傾斜により口 縁部立ち上がり。傾斜により若干の傾斜あり。 反転後。	
415	第3区画	図42	426	342	Ⅱ区 H7-p8	堆積土 東北トレンチ 堆積土	瓦葺	椀	口縁部一部位	約50%	内面ミナ平幅: 0.1~0.2m 短。斜壁面傾斜により口 縁部立ち上がり。傾斜により若干の傾斜あり。 反転後。	
416	第3区画	図42	429	332	Ⅱ区 H7-p7	第V区 第9層灰緑土	96号立ち込み	瓦葺	椀	口縁部一部位	約5%	口縁部傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
417	第3区画	図42	422	363	Ⅱ区 H7-p7	第11層の灰緑土 下位の第11層土 堆積土	——	白磁	皿	口縁部一部位	約15%	内面ミナ平幅: 0.1~0.2m 短。斜壁面傾斜により口 縁部立ち上がり。傾斜により若干の傾斜あり。 反転後。
418	第3区画	図43	431	503	Ⅱ区 H7-p6	第1b区	106号排水溝 排水溝一筋	土葺	小皿	口縁部一部位	約90%	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
419	第3区画	図43	433	427	Ⅱ区 H7-p6	第1区	107号土 集石遺構内	土葺	小皿	口縁部一部位	約10%	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
420	第3区画	図43	434	427	Ⅱ区 H7-p6	第1区	107号土 集石遺構内	土葺	小皿	口縁部一部位	約10%	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
421	第3区画	図43	435	427	Ⅱ区 H7-p6	第1区	107号土 集石遺構内	土葺	小皿	口縁部一部位	不明	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
422	第3区画	図43	440	419	H7-p6 a-b	第1区以下 第3層灰緑土 a-b	107号土 集石遺構内	土葺	小皿	口縁部一部位	約20%	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
423	第3区画	図43	439	414	Ⅱ区 H7-p5	第3層灰緑土 a-b	107号土 集石遺構内	土葺	小皿	口縁部一部位	約20%	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
424	第3区画	図43	446	474	Ⅱ区 H7-p5	第3層灰緑土 a-b	107号土 集石遺構内	土葺	小皿	口縁部一部位	約15%	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
425	第3区画	図43	450	457	Ⅱ区 H7-p5	第3層灰緑土 a-b	107号土 集石遺構内	土葺	小皿	口縁部一部位	不明	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
426	第3区画	図43	461	469	Ⅱ区 H7-p5	第3層灰緑土 a-b	107号土 集石遺構内	土葺	小皿	口縁部一部位	約55%	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
427	第3区画	図43	460	495	Ⅱ区 H7-p6	第3層灰緑土 a-b	107号土 集石遺構内	土葺	小皿	口縁部一部位	約10%	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
428	第3区画	——	486	417	Ⅱ区 H7-p6	第3層灰緑土 a-b	107号土 集石遺構内	土葺	小皿	口縁部一部位	約15%	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
429	第3区画	図43	494	507	Ⅱ区 H7-p6	第3層灰緑土 a-b	107号土 集石遺構内	土葺	小皿	口縁部一部位	約90%	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
430	第3区画	図43	492	473	Ⅱ区 H7-p6	第3層灰緑土 a-b	107号土 集石遺構内	土葺	小皿	口縁部一部位	約25%	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
431	第3区画	図43	487	471	Ⅱ区 H7-p6	第3層灰緑土 a-b	107号土 集石遺構内	土葺	小皿	口縁部一部位	約80%	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
432	第3区画	図43	476	528	Ⅱ区 H7-p6	第3層灰緑土 a-b	107号土 集石遺構内	土葺	小皿	口縁部一部位	約20%	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
433	第3区画	図43	506	515	Ⅱ区 H7-p6	第3層灰緑土 a-b	107号土 集石遺構内	土葺	小皿	口縁部一部位	約10%	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
434	第3区画	図43	478	423	Ⅱ区 H7-p6	第3層灰緑土 a-b	107号土 集石遺構内	土葺	小皿	口縁部一部位	約90%	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
435	第3区画	図43	495	513	Ⅱ区 H7-p6	第3層灰緑土 a-b	107号土 集石遺構内	土葺	小皿	口縁部一部位	約25%	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
436	第3区画	図43	479	521	Ⅱ区 H7-p6	第3層灰緑土 a-b	107号土 集石遺構内	土葺	小皿	口縁部一部位	約20%	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
437	第3区画	図43	496	514	Ⅱ区 H7-p6	第3層灰緑土 a-b	107号土 集石遺構内	土葺	小皿	口縁部一部位	約10%	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
438	第3区画	図43	475	526	Ⅱ区 H7-p6	第3層灰緑土 a-b	107号土 集石遺構内	土葺	小皿	口縁部一部位	約30%	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
439	第3区画	図43	477	530	Ⅱ区 H7-p6	第3層灰緑土 a-b	107号土 集石遺構内	土葺	小皿	口縁部一部位	約15%	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
440	第3区画	図43	481	521	Ⅱ区 H7-p6	第3層灰緑土 a-b	107号土 集石遺構内	土葺	小皿	口縁部一部位	約30%	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
441	第3区画	図43	497	567	Ⅱ区 H7-p6	第3層灰緑土 a-b	107号土 集石遺構内	土葺	小皿	口縁部一部位	不明	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。
442	第3区画	図43	507	526	Ⅱ区 H7-p6	第3層灰緑土 a-b	107号土 集石遺構内	土葺	小皿	口縁部一部位	約10%	口縁部の傾斜により立ち上がり。内面ミナ平幅: 0.1m 中や短。反転後。

遺物 番号	発掘 番号	写真 図版	実測寸法 (cm)	目録寸法 (cm)	地区 地上区画	遺構 地盤地層 遺構層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	素材	部位	保存率	備考
443	図64	図版46	508	525	Ⅱ区 H7-J6・7	第Ⅱ面	129排水溝 溝内溝下層	瓦質 (角火焼)	火倉 (角火焼)	口縁部→底部	不明	直線的に斜め外方に立ち上る体部から内面すく口縁部へ、断面外面に1条、口縁部に2条の突帯を貼付け有り。口縁部の突帯部に横手のスリヤス。内外両面に磨減みのため調整不明。断面・外面・側面のみ
444	図64	図版45	493	473	Ⅱ区 H7-J6	青灰色磁彩磨土	112石列直下 地層	無釉陶器 甕戸受皿	灰黒土	腹部→ 底部(高台部)	高台部 約20%	平坦な底部から内溝で立ち上る体部、内外両面に粗い突帯有り。高台部内面に内溝状の刻線あり(突帯は直線的)。反転復元
445	図64	図版46	504	428	Ⅱ区 H7-K6・7	第Ⅱ面	114土坑 埋土最上層	無釉陶器 甕戸	変	腹部→底部	不明	腹部外面を回転す。へう工具による磨減の跡有り。断面のみ。口縁部はナサのみ。一部はたがひ有り、断面のみ
446	図64	図版46	505	487	Ⅱ区 H7-J7	第Ⅱ面	117土坑 埋土一筋	白磁	皿	口縁部→底部	口縁部 約15%	体部から口縁部にかけて緩やかに内溝して口縁部は斜め外方に延びる。口縁部内面は磨減を呈すか、反転復元
447	図64	図版45	485	552	Ⅱ区 H7-J6	第Ⅱ面	111磨き直下 地層	白磁	小皿	口縁部	不明	口縁部は緩やかに内溝で立ち上る。内外両面に粗い突帯多量あり。口縁部内→内面部分にかけて磨減。断面に黒色の塗布物有り、断面のみ。太宰府分館対応可
448	図64	図版46	498	485	Ⅱ区 H7-J6	灰黄色磁彩磨土	112石列大走り 石列直上石列埋 出	白磁	皿	体部→底部 (高台部)	約20%	丸みをもって底部から体部へ。口縁部は外反する。内溝「短反」の跡。見込は磨減。軸の延びは均一。太宰府分館：白磁皿1.3、反転復元
449	図64	図版45	480	526	Ⅱ区 H7-J6	第Ⅱ面 第5・6層系磨 土	111磨き直 中込め下位層	青磁 甕蓋	甕蓋	体部→底部 (高台部)	高台部 約60%	見込の体部側に磨減の軌跡有り。断面外面に浅い磨減。基本的な変付から断面にかけて磨減であるが、軸の延び、内面に粗い突帯多量あり。太宰府分館：磨減系高台部皿1.3、一部、反転復元
450	図64	図版47	518	537	Ⅱ区 H7-J6・7	第5・6層系磨 土 一部第7層系食 器	——	土師器	小皿	口縁部→底部	約25%	磨減の浅い底部から口縁部へ。底部はやや緩なユビオサ。見込は丁寧なユビオサ。反転復元
451	図64	図版47	516	537	Ⅱ区 H7-J6・7	第5・6層系磨 土 一部第7層系食 器	——	土師器	小皿	口縁部→底部	約30%	底部は緩なユビオサの後ユビオサ。底部から緩く外反する口縁部へ。口縁部を斜め外方に磨減出す。反転復元
452	図64	図版47	517	537	Ⅱ区 H7-J6・7	第5・6層系磨 土 一部第7層系食 器	——	土師器	小皿	口縁部→底部	約30%	底部と腹部の境目は不明瞭な変付外方に延びる口縁部へ。底部は緩なユビオサ。全体に磨減す。磨減の浅い底部から口縁部へ。断面は丁寧なユビオサ。反転復元
453	図64	図版47	512	532	Ⅱ区 H7-J6・7	第4層系磨土	——	土師器	小皿	口縁部→底部	約10%	口縁部は斜め外方に延び、腹部はヨコナサ。そのための磨減は低い。内外両面に磨減みのため調整不明。反転復元
454	図64	図版47	510	536	Ⅱ区 H7-J6・7	第4層系磨土	——	土師器	小皿	口縁部→底部	約20%	丸みのある底部からやや外反する口縁部へ、底部へ口縁部外反の調整は緩やか。磨減のため不明。反転復元
455	図64	図版47	511	532	Ⅱ区 H7-J6・7	第4層系磨土	——	土師器	中皿	口縁部→底部	約10%	丸みのある底部からやや内溝する口縁部へ、磨減の浅い底部から口縁部へ。断面は丁寧なユビオサ。反転復元
456	図64	図版47	523	537	Ⅱ区 H7-J6・7	第5・6層系磨 土 一部第7層系食 器	——	瓦器	小皿	口縁部→底部	約30%	丸みのある底部から外延する口縁部へ、内面は緩しいため磨減強く調整不明。反転復元
457	図64	図版47	522	537	Ⅱ区 H7-J6・7	第5・6層系磨 土 一部第7層系食 器	——	瓦器	横	口縁部→底部	約20%	内面とギキ不明瞭だが、幅0.1cm程度。極めて密、口縁部内面に部分的に磨減。内外両面に磨減したため調整不明。反転復元
458	図64	図版47	513	532	Ⅱ区 H7-J6・7	第4層系磨土	——	瓦器	横	口縁部→底部	約15%	内面とギキ幅0.1-0.2cm。やや粗。口縁部内面に浅い磨減。体部外延ユビオサ後口縁部ヨコナサ。磨減のため調整不明。反転復元
459	図64	図版47	514	535	Ⅱ区 H7-J6・7	第4層系磨土	——	瓦器	横	口縁部→底部	約20%	内面とギキ幅0.3cm程度。断面及び磨減のため本来の形がみえにくい。反転復元
460	図64	図版47	515	534	Ⅱ区 H7-J6・7	第4層系磨土	——	瓦器	鉢	腹部→底部 (高台部)	約50%	外方に延び高台部を磨減出すため高台の側部部に磨減したユビオサがある。内面は磨減し、外面は磨減減したため調整不明。反転復元
461	図64	図版47	524	537	Ⅱ区 H7-J6・7	第5・6層系磨 土 一部第7層系食 器	——	瓦器 東屋系	控鉢	口縁部→底部	口縁部 約15%	内外両面にヨコナサが磨減。断面は内面は底状工具による左上りのナサ調整。口縁部内面方向に延び、反転復元
462	図64	図版47	525	541	Ⅱ区 H7-J6・7	第5・6層系磨 土 一部第7層系食 器	——	白磁	甕 底部 (高台部)	約40%	外方に延び高台部、高台部外延から断面にかけて磨減が磨減有り。軸にみう有り。変付は使用による磨減減にて平直。反転復元	
463	図64	図版47	534	600	Ⅱ区 H7-J6・7	第7層系磨土	——	土師器	小皿	口縁部→底部	約30%	全体にやや平直。磨減が低い。平坦な底部から緩く外反する口縁部へ。口縁部内面は磨減減したため調整不明。反転復元
464	図64	図版47	533	614	Ⅱ区 H7-J6・7	第7層系磨土	139配石内食器	土師器	小皿	口縁部→底部	約80%	全体にやや平直。断面内面ユビオサの後ナサにより平直になる。口縁部は緩く外反する。見込から口縁部の面にかけて丁寧なナサにより平直になる。変成は良好
465	図64	図版47	536	600	Ⅱ区 H7-J6・7	第7層系磨土	——	土師器	小皿	口縁部→底部	約20%	全体に磨減の浅い。口縁部は緩しに斜め外方に延びる。底部は回転系有り。軸は極めて磨減。反転復元
466	図64	図版47	530	600	Ⅱ区 H7-J6・7	第7層系磨土	——	土師器	皿	口縁部→底部	約45%	丸みのある底部。体部から緩く外溝する口縁部へ。口縁部はヨコナサ。腹部は斜め外方に磨減出す。底部から体部外延にかけて単位の大きなユビオサ。全体に著しく平直。軸は極めて磨減。反転復元
467	図64	図版47	529	602	Ⅱ区 H7-J6・7	第7層系磨土	——	土師器	皿	口縁部→底部	約95%	丸みのある底部。体部から緩く外溝する口縁部へ。口縁部は緩い2段のヨコナサ。底部から体部外延にかけて単位の連続したユビオサ。内外両面に磨減減したため調整不明。反転復元
468	図64	図版47	531	540	Ⅱ区 H7-J6・7	第7層系磨土 下位	——	土師器	皿	口縁部→底部	約20%	丸みのある底部。体部から緩く外反する口縁部へ。口縁部は緩く外反するユビオサの後水分の多く含んだ底状工具をあてがってナサを施す。見込にも軸の延びが磨減減する。反転復元
469	図64	図版47	532	595	Ⅱ区 H7-J6・7	第7層系磨土	——	土師器	皿	口縁部→底部	約10%	体部は直線的に外方に延び緩く外溝する口縁部へ。口縁部は緩い3段のヨコナサ。内外両面に磨減減したため調整不明。反転復元
470	図64	図版47	537	614	Ⅱ区 H7-J6・7	第7層系磨土	139配石内食器	瓦器	横	口縁部→底部	約10%	内面とギキ幅1.0cm程度。密。体部は緩やかに内溝する口縁部へ。口縁部は緩く外反する口縁部へ。内外両面に磨減減したため調整不明。反転復元
471	図64	—	541	602	Ⅱ区 H7-J6・7	第7層系磨土	——	瓦器	横	体部→底部 (高台部)	高台部 約50%	見込のミギキ幅：0.25cm。見込にシジググ磨減。内面のミギキ幅0.1-0.15cm程度。密。反転復元

粉河寺遺跡 出土遺物一覽 I・II・III区

保存率は、主に開示された資料での割合

15

測点番号	探頭番号	写真図版	深度(探頭位置)	地層取上位置	遺構位置 跡部・地層位置	遺構番号・種類 遺構位置	遺物種類	部類	部位	残存率	備考	
472	図64	図版47	538	600	Ⅱ区 H7-h6-7	第7層系礫地土	——	瓦葺	竈 竈口部～底部 (高倉部)	約20%	内面より約40cmの中程、見込短文(漢字)確認。 体部から壁の中へ内面にて竈口へ続く。竈口部 3コヨコによりやや配する。竈口部はやや内 壁で穴縁様の凹凸みを見る。反転復元	
473	図64	図版47	542	595	Ⅱ区 H7-g5-7	第7層系礫地土	——	瓦葺	火倉部 竈口部～底部	約10%	壁部から竈口部直上の中程から内面側に立上 り始める。竈口部は壁に近づく。壁部は 断面に穴縁1つ。内面は横位のへらより平。底部は いへつくり状です。反転復元。出土品第532目 H7-h6-7 磨蝕した、黒い、石質の板土。一説、 7層系倉庫・瓦葺部壁との同一物	
474	図64	図版47	543	614	Ⅱ区 H7-h6-7 Ⅲ区	第7層系礫地土 第Ⅲ区	139粒心配石	遺棄物 系(高倉部)	投石	竈口部～底部	約25%	見込から内面直下内半にかけて用による竈口部 あり。この口部内面より見出し。反転復元。第Ⅲ区 2枚の板土。土の表面に、黒い、磨蝕した、 厚板状の、第7層系礫地土と接合
475	図64	図版49	562	554	Ⅲ区 H7-a5-6	第Ⅲ区面対沁以下 黄灰色粗砂礫層	——	土器類	小皿	竈口部～底部	約30%	平らな面部から斜め外方に内面側に延びる口部へ 続く。内外面共に磨滅のため調整不明確。反転復 元
476	図64	図版49	561	554	Ⅲ区 H7-a5-6	第Ⅲ区面対沁以下 黄灰色粗砂礫層	——	土器類	小皿	竈口部～底部	約15%	細片のみある体部から内面にて口部へ続く。内 外面共に磨滅のため調整不明確。反転復元
477	図64	図版49	560	554	Ⅲ区 H7-a5-6	第Ⅲ区面対沁以下 黄灰色粗砂礫層	——	土器類	竈口部～底部	約10%	丸みのある体部から内面にて口部へ続く。内 外面共に磨滅のため調整不明確。反転復元	
478	図64	図版49	566	554	Ⅲ区 H7-a5-6	第Ⅲ区面対沁以下 黄灰色粗砂礫層	——	瓦葺	竈 竈口部～底部	約20%	体部外面は横いばりエサにより歪つ。体部から 内面にて口部へ続く。内外面共に磨滅のため 調整不明確。内面より第2部2～3cmのやや。反転復 元	
479	図64	図版49	567	562	Ⅲ区 H7-c5-6	Ⅲ区面対沁以下 黄灰色粗砂礫層 粗砂礫層	——	瓦葺	竈 竈口部～底部	約15%	傾しより有り(重ね板有り)。体部から内面 にかけてやや斜に口部縁に近づく。内面にて口 部へ続く。内外面共に磨滅のため調整不明確。 内面より第4部1～0.15cmの中程。高倉部内 反転復元	
480	図64	図版49	568	555	Ⅲ区 H7-c5-6	Ⅲ区面対沁以下 黄灰色粗砂礫層	——	瓦葺	羽釜 竈口部～底部	約15%	壁や中に内溝する体部から。著しく内溝する口部 へ続く。口部部直上3分の2の位置に土器上立 り。口部部直上より斜に口部へ続く。内外面 共に磨滅のため調整不明確。壁により口部部 直上より下を折れ。壁より下側に僅かに付着す る。反転復元	
481	図64	図版49	557	497	Ⅲ区 H7-b5-6	Ⅲ区面対沁以下 黄灰色粗砂礫層	調査区東側 ポテンシャル 破壊層	瓦葺	火倉 竈口部～底部	不明	口部部部直上1分の2の位置。体部部直上は丁寧 な調整が施され、内外面共に磨滅のため調整 不明確。内外面共に磨滅のため調整不明確。著 しい調整が施され、内外面共に磨滅のため調 整不明確。反転復元	
482	図64	図版49	576	566	Ⅲ区 H7-I-6-g	Ⅲ区面対沁以下 黄灰色粗砂礫層	——	土器類	小皿	竈口部～底部	約70%	壁の厚い底面体部からやや反する口部部へ続 く。全体に丁寧な作り。内外面共に磨滅のため 調整不明確。反転復元
483	図64	図版49	575	575	Ⅲ区 H7-g2	黄褐色粗砂礫層	——	土器類	小皿	竈口部～底部	約35%	平らな面部から壁や中に外反する口部部へ続く。全 体に丁寧な作りで磨滅が著しい。内外面共に 磨滅のため調整不明確。反転復元
484	図64	図版49	573	570	Ⅲ区 H7-ne	Ⅲ区面対沁以下 黄灰色粗砂礫層	——	土器類	中皿	竈口部～底部	約20%	やや丸みのある底面体部から内面にて口部部の ため反転復元。口部部直上より口部部へ続く。 内外面共に磨滅のため調整不明確。反転復元
485	図64	図版49	572	575	Ⅲ区 H7-g2	黄褐色粗砂礫層	——	土器類	中皿	竈口部～底部	約15%	磨滅の著しい底面体部から。やや内溝する口部部 へ続く。内外面共に磨滅のため調整不明確。反 転復元
498	図74	図版58	Ⅱ-6	710	Ⅲ区2区 F8-v6	第3層	土器類	小皿	竈口部～底部	約58%	静止水切による扁平な底面から斜め外方に直線的 に延びる口部へ続く。口部部直上より直に壁へ。見 込より壁に近づく。全体に丁寧な磨滅のため調 整不明確。反転復元	
499	図74	図版58	Ⅱ-7	710	Ⅲ区2区 F8-v6	第3層	土器類	小皿	竈口部～底部	約60%	口部部直上より直に壁へ続く。口部部直上より直 に壁へ続く。全体に丁寧な磨滅のため調整不 明確。反転復元	
500	図74	図版58	Ⅱ-8	710	Ⅲ区2区 F8-v6	第3層	土器類	小皿	竈口部～底部	約60%	口部部直上より直に壁へ続く。口部部直上より直 に壁へ続く。全体に丁寧な磨滅のため調整不 明確。反転復元	
501	図74	図版58	Ⅱ-11	710	Ⅲ区2区 F8-v6	第3層	土器類	小皿	竈口部～底部	約25%	口部部直上より直に壁へ続く。口部部直上より直 に壁へ続く。全体に丁寧な磨滅のため調整不 明確。反転復元	
502	図74	図版58	Ⅱ-14	710	Ⅲ区2区 F8-v6	第3層	土器類	小皿	竈口部～底部	約45%	静止水切による扁平な底面から斜め外方にやや内 反する口部へ続く。口部部直上より直に壁へ。内 外面共に磨滅のため調整不明確。反転復元	
503	図74	図版58	Ⅱ-23	713	Ⅲ区2区 F8-v6	第4層	土器類	小皿	竈口部～底部	約60%	全体に磨滅の著しい丁寧な作り。静止水切による扁平 な底面から斜め外方にやや内反する口部部へ続 く。反転復元	
504	図74	図版58	Ⅱ-25	713	Ⅲ区2区 F8-v6	第4層	土器類	小皿	竈口部～底部	約30%	全体に磨滅の著しい丁寧な作り。静止水切による扁平 な底面から斜め外方にやや内反する口部部へ続 く。反転復元	
505	図74	図版58	Ⅱ-31	721	Ⅲ区2区 F8-v6	第4層	土器類	小皿	竈口部～底部	約70%	静止水切による扁平な底面から斜め外方に直線的 に延びる口部へ続く。口部部直上より直に壁へ。内 外面共に磨滅のため調整不明確。反転復元	
506	図74	図版58	Ⅱ-4	708	Ⅲ区2区 F8-v6	第3層	土器類	小皿	竈口部～底部	約100%	底部に壁へ。底面より壁部からやや内反する口部部へ 続く。口部部直上より直に壁へ。内外面共に磨滅 のため調整不明確。反転復元	
507	図74	図版58	Ⅱ-26	713	Ⅲ区2区 F8-v6	第4層	土器類	小皿	底部	約100%	底部に静止水切による扁平な底面から斜め外方に直線的 に延びる口部へ続く。口部部直上より直に壁へ。内 外面共に磨滅のため調整不明確。反転復元	
508	図74	図版58	Ⅱ-28	713	Ⅲ区2区 F8-v6	第4層	土器類	小皿	底部	約25%	底部に静止水切による扁平な底面から斜め外方に直線的 に延びる口部へ続く。口部部直上より直に壁へ。内 外面共に磨滅のため調整不明確。反転復元	
509	図74	図版58	Ⅱ-29	713	Ⅲ区2区 F8-v6	第4層	土器類	小皿	底部	約100%	底部に静止水切による扁平な底面から斜め外方に直線的 に延びる口部へ続く。口部部直上より直に壁へ。内 外面共に磨滅のため調整不明確。反転復元	
510	図74	図版58	Ⅱ-16	710	Ⅲ区2区 F8-v6	第3層	土器類	大皿	底部	約100%	静止水切による扁平な底面から斜め外方に直線的 に延びる口部へ続く。口部部直上より直に壁へ。内 外面共に磨滅のため調整不明確。反転復元	
511	図74	図版58	Ⅱ-18	710	Ⅲ区2区 F8-v6	第3層	土器類	大皿	底部	約100%	静止水切による扁平な底面から斜め外方に直線的 に延びる口部へ続く。口部部直上より直に壁へ。内 外面共に磨滅のため調整不明確。反転復元	
512	図74	図版58	Ⅱ-36	723	Ⅲ区2区 F8-v6	第3層	土器類	皿(坪)	竈口部～底部	約90%	図74-512(第53土層)皿(坪)と均形。底部はゴザ エ・ツノの形で調整。内外面共に磨滅のため調 整不明確。古代平安の形	
513	図74	図版58	Ⅱ-35	723	Ⅲ区2区 F8-v6	第3層	土器類	皿(坪)	竈口部～底部	約90%	全体に丁寧な作りで磨滅が著しい。丸みのある体部から斜め 外方に直線的に延びる口部へ続く。口部部直上より直 に壁へ続く。全体に丁寧な磨滅のため調整不明確。反 転復元	
514	図74	図版58	Ⅱ-3	708	Ⅲ区2区 F8-v6	第3層	土器類	小皿	竈口部～底部	約70%	突出した扁平な底面から内面にて上より口部部へ 続く。体部から口部部にかけて丁字の3段のツノが あり。口部部直上より直に壁へ。内外面共に磨滅 のため調整不明確。反転復元	

資料名、主に出土された品類と、その位置												
遺物 番号	探検 番号	写真 図説	出土遺物 出土遺物	地区 敷上図面	遺構 敷上図面	遺構番号・種類 敷上図面	遺物種類	種類	部位	検出率	備考	
515	図74	図版59	Ⅱ-5	709	Ⅱ区1区 F6-u6	第3層	遺構下段	土師器	皿	口縁部→底部	約75%	やや上げ直ぐみの底部から内面して立ち上る口縁部へ続く、底部から口縁部にかけて丁寧な段のコンナゲが見える
516	図74	図版59	Ⅱ-39	723	Ⅱ区2区 F6-u6	第2セクションへA 第3層	――	土師器	鉢(杯)	口縁部→底部	約50%	丸みのある底部・底部から斜め外方に広がる口縁部へ続く、全体に磨きあげた面が確認できる。口縁部には、古代平安の模範、一部反転復元
517	図74	図版59	Ⅱ-40	723	Ⅱ区2区 F6-u6	第2セクションへA 第3層	――	黒色土師器	杯	口縁部→底部	約50%	製作技法は図74-516(実39)とほぼ同じで、形状は図74-516(実39)とほぼ同じで、口縁部には、古代平安の模範、一部反転復元
518	図74	図版59	Ⅱ-32	721	Ⅱ区1区 F6-u7	第1セクションへA 第3層	――	土師器	大皿	口縁部→底部	約50%	丸みのある底部から内面して立ち上る口縁部へ続く、全体に磨きあげた面が確認できる。口縁部には、古代平安の模範、一部反転復元
519	図74	図版59	Ⅱ-22	713	Ⅱ区2区 F6-u6	第4層	――	土師器	杯	口縁部→底部	約25%	磨きあげた面が確認できる。口縁部には、古代平安の模範、一部反転復元
520	図74	図版59	Ⅱ-10	710	Ⅱ区2区 F6-u6	第3層	――	土師器	大皿	口縁部→底部	約10%	丸みのある底部から内面して立ち上る口縁部へ続く、全体に磨きあげた面が確認できる。口縁部には、古代平安の模範、一部反転復元
521	図74	図版59	Ⅱ-12	710	Ⅱ区2区 F6-u6	第3層	――	土師器	高台付大皿	口縁部→底部	約5%	磨きあげた面が確認できる。口縁部には、古代平安の模範、一部反転復元
522	図75	図版59	Ⅱ-19	710	Ⅱ区2区 F6-u6	第3層	――	土師器	鉢	口縁部→底部 (高台部)	約60%	全体に磨きあげた面が確認できる。口縁部には、古代平安の模範、一部反転復元
523	図75	図版59	Ⅱ-15	710	Ⅱ区2区 F6-u6	第3層	――	土師器	鉢or碗	体部→底部 (高台部)	約30%	磨きあげた面が確認できる。口縁部には、古代平安の模範、一部反転復元
524	図75	図版59	Ⅱ-24	713	Ⅱ区2区 F6-u6	第4層	――	土師器	鉢	口縁部→底部	約10%	磨きあげた面が確認できる。口縁部には、古代平安の模範、一部反転復元
525	図75	図版59	Ⅱ-20	710	Ⅱ区2区 F6-u6	第3層	――	黒色土師器	鉢	口縁部→底部	約50%	磨きあげた面が確認できる。口縁部には、古代平安の模範、一部反転復元
526	図75	図版59	Ⅱ-30	714	Ⅱ区1区 F6-u6	第3層	――	土師器	鉢	口縁部→底部	約50%	全体に磨きあげた面が確認できる。口縁部には、古代平安の模範、一部反転復元
527	図75	図版59	Ⅱ-1	704	Ⅱ区1区 F6-u6	第3層	サブトレント	白磁	鉢or碗	体部→底部 (高台部)	約35%	底部から内面にかけて磨きあげた面が確認できる。口縁部には、古代平安の模範、一部反転復元
528	図75	図版60	Ⅱ-34	721	Ⅱ区1区 F6-u7	第1セクションへA 第3層	――	土師器	鉢or碗	口縁部→底部	約100%	丁寧な仕上げ。口縁部には、古代平安の模範、一部反転復元
529	図75	図版60	Ⅱ-17	710	Ⅱ区2区 F6-u6	第3層	――	土師器	小皿	口縁部→底部	約95%	磨きあげた面が確認できる。口縁部には、古代平安の模範、一部反転復元
530	図75	図版60	Ⅱ-41	723	Ⅱ区2区 F6-u6	第2セクションへA 第3層	――	土師器	皿	口縁部→底部	約60%	図75-532(実37)とほぼ同じで、口縁部には、古代平安の模範、一部反転復元
531	図75	図版60	Ⅱ-38	723	Ⅱ区2区 F6-u6	第2セクションへA 第3層	――	土師器	皿	口縁部→底部	約60%	図75-532(実37)とほぼ同じで、口縁部には、古代平安の模範、一部反転復元
532	図75	図版60	Ⅱ-37	723	Ⅱ区2区 F6-u6	第2セクションへA 第3層	――	土師器	皿	口縁部→底部	約80%	図74-513(実35)とほぼ同じで、口縁部には、古代平安の模範、一部反転復元
533	図75	図版60	Ⅱ-9	710	Ⅱ区2区 F6-u6	第3層	――	土師器	高台付大皿	口縁部→底部 (高台部)	約75%	磨きあげた面が確認できる。口縁部には、古代平安の模範、一部反転復元
534	図75	図版60	Ⅱ-21	710	Ⅱ区2区 F6-u6	第3層	――	瓦葺	小皿	口縁部→底部 (高台部)	約25%	底部から内面にかけて磨きあげた面が確認できる。口縁部には、古代平安の模範、一部反転復元
535	図75	図版60	Ⅱ-42	723	Ⅱ区2区 F6-u6	第2セクションへA 第3層	――	瓦葺	小皿	口縁部→底部 (高台部)	約20%	ミガキ幅0.1~0.15cm。底、見込に連続した模文。外周ミガキなし。口縁部には、古代平安の模範、一部反転復元
536	図75	図版60	Ⅱ-13	710	Ⅱ区2区 F6-u6	第3層	――	土師器	小皿	口縁部→底部	約90%	磨きあげた面が確認できる。口縁部には、古代平安の模範、一部反転復元
537	図75	図版60	Ⅱ-43	724	Ⅱ区2区 F6-u6	第3層	――	土師器	小皿	口縁部→底部	約60%	磨きあげた面が確認できる。口縁部には、古代平安の模範、一部反転復元
538	図75	図版60	Ⅱ-2	708	Ⅱ区1区 F6-u6	第3層	遺構下段	土師器	皿(灯)	口縁部→底部	約100%	大きく凹んだ底部から立ち上る口縁部へ続く、口縁部には、古代平安の模範、一部反転復元
539	図75	図版60	Ⅱ-33	721	Ⅱ区1区 F6-u7	第1セクションへA 第3層	――	瓦葺	火舎	口縁部→体部	不明	内面して立ち上る口縁部・口縁部、口縁部外面上位に2段の文、安土郡に付文、全体に磨きあげた面が確認できる
601	――	図版43	432	415	Ⅱ区 H7-u7	第1層	104土坑 上位・下位	瓦	軒瓦	瓦当部→ 早瓦部	約40%	瓦当：古墳唐文・中心飾り・花文・青銅模範 側面：横へうナデ。凸面：横へうナデ。底面：横へうナデ
602	――	図版43	436	427	Ⅱ区 H7-u7	第1層	107土坑 上位・下位	瓦	軒瓦	瓦当部→ 早瓦部	約50%	瓦当：古墳唐文・中心飾り・花文・青銅模範 側面：横へうナデ。凸面：横へうナデ。底面：横へうナデ
603	――	図版43	437	407	Ⅱ区 H7-u6	第1層	102溝状遺構	瓦	軒瓦	瓦当部→ 早瓦部	約70%	瓦当：古墳唐文・中心飾り・花文・青銅模範 側面：横へうナデ。凸面：横へうナデ。底面：横へうナデ
604	――	図版43	438	407	Ⅱ区 H7-u6	第1層	102溝状遺構	瓦	軒瓦	瓦当部→ 早瓦部	約70%	瓦当：古墳唐文・中心飾り・花文・青銅模範 側面：横へうナデ。凸面：横へうナデ。底面：横へうナデ
605	――	図版43	441	437	Ⅱ区 H7-u5南半	第1層	102溝状遺構	瓦	軒瓦	瓦当部→ 早瓦部	約70%	瓦当：古墳唐文・中心飾り・花文・青銅模範 側面：横へうナデ。凸面：横へうナデ。底面：横へうナデ
606	――	図版43	442	437	Ⅱ区 H7-u5南半	第1層	102溝状遺構	瓦	軒瓦	瓦当部→ 早瓦部	約50%	瓦当：古墳唐文・中心飾り・花文・青銅模範 側面：横へうナデ。凸面：横へうナデ。底面：横へうナデ

遺物 番号	発掘 番号	写真 番号	実測 図番号	出土 位置	地区 区分	遺構 番号・種類	遺構 位置	遺物 種類	素材	部位	収容率	備考
607	—	図版43	443	413	Ⅱ区 H7-c5、6	第3層系整地土 伊賀焼色粗砂層	—	瓦	軒丸瓦	瓦当部	約60%	瓦当：三巴(左巻き・尾長い)・珠文22個(横定)遺存13個
608	—	図版43	444	429	Ⅱ区 H7-b5、6	第3層系整地土 上位	—	瓦	軒丸瓦	瓦当部～ 丸瓦部	約20% 不明	瓦当：三巴(左巻き・尾長い)・珠文30個前後(横定)遺存7個、内面：コビキ焼入・布目・龍タタキ・凸面：龍へうミガキ
609	—	図版43	445	437	Ⅱ区 H7-c5南半	第3層系整地土 上位・下位	—	瓦	梵字瓦 (鳥伏瓦)	瓦当部	約40%	瓦当：梵字(バツク)・界線有り・凸面：龍へうミガキ
610	—	図版43	447	436	Ⅱ区 H7-b5、6	青灰色粗砂層 1区(1)遺存対品のみ	—	瓦	丸瓦	丸瓦部～ 玉縁部	約100%	内面：コビキ焼入・布目・爪痕様刺し子痕・吊り結痕・凸面：龍へうミガキ
611	—	図版43	448	441	Ⅱ区 H7-c5南半	青灰色粗砂層 1区(1)遺存対品のみ	—	瓦	軒丸瓦	丸瓦部	不明	内面：コビキ焼入・布目・爪痕様刺し子痕・磨タタキ・凸面：龍へうミガキ、瓦当との接合面に「カキヤブリ」痕
612	—	図版43	449	496	Ⅱ区 H7-c5	青灰色粗砂層上位 Ⅱ区対品	—	石塔	組合式 五輪塔	空室輪	約100%	449、丸、(3)、(4) (7)
613	—	図版44	451	449	Ⅱ区 H7-c5、6	青灰色粗砂層 上位	—	瓦	平瓦	平瓦部	約40%	内面：龍へうナデ、凸面：龍へうナデ
614	—	図版44	452	448	Ⅱ区 H7-c5、6	青灰色粗砂層 上位	—	瓦	丸瓦	丸瓦部～ 玉縁部	約70%	凸面：コビキ焼入・布目・吊り結痕・一部磨タタキ
615	—	図版44	453	461	Ⅱ区 H7-c5、6	青灰色粗砂層 上位	—	瓦	軒平瓦	瓦当部～ 平瓦部	約30%	瓦当：均整唐草文・界線無し・内面：龍へうミガキ・瓦当上縁に面取り有り・凸面：龍へうナデ
616	—	図版44	454	453	Ⅱ区 H7-c5、6	青灰色粗砂層 上位	—	瓦	軒平瓦	瓦当部～ 平瓦部	約50%	瓦当：均整唐草文・中心飾り・菊文・界線無し・内面：龍へうナデ・瓦当上縁に面取り有り・凸面：龍へうミガキ
617	—	図版44	455	462	Ⅱ区 H7-c5、6	青灰色粗砂層 上位	—	瓦	軒平瓦	瓦当部～ 平瓦部	約50% 不明	瓦当：均整唐草文・中心飾り・菊文・界線無し・瓦当上縁に面取り有り・内面：布目・龍へうナデ、凸面：龍へうナデ
618	—	図版44	456	460	Ⅱ区 H7-c5、6	青灰色粗砂層 上位	—	瓦	軒丸瓦	瓦当部	約50%	瓦当：三巴(左巻き・尾長い)・珠文22個(横定)遺存13個、凸面：龍へうミガキ
619	—	図版44	457	457	Ⅱ区 H7-c5、6	青灰色粗砂層 上位	—	瓦	丸瓦	丸瓦部	約90%	内面：コビキ焼入・布目・吊り結痕・凸面：龍へうミガキ
620	—	図版44	458	458	Ⅱ区 H7-c5、6	青灰色粗砂層 上位	—	瓦	丸瓦	丸瓦部～ 玉縁部	約70% 100%	内面：コビキ焼入・布目・磨タタキ・凸面：龍へうミガキ
621	—	図版44	459	459	Ⅱ区 H7-c5、6	青灰色粗砂層 上位	—	土製品	消解炉	不明	不明	
622	—	図版44	462	476	Ⅱ区 H7-g5	第3層系整地土 粗砂層含む	—	瓦	丸瓦部～ 玉縁部	瓦当部	約98% 100%	内面：コビキ焼入・布目・凸面：龍目・龍へうミガキ
623	—	図版44	463	476	Ⅱ区 H7-g5	第3層系整地土 粗砂層含む	—	瓦	軒平瓦	瓦当部～ 平瓦部	約30%	瓦当：均整唐草文・界線無し・内面：龍へうミガキ・瓦当上縁に面取り有り・凸面：龍へうナデ
624	—	図版44	464	467	Ⅱ区 H7-g5	第3層系整地土 粗砂層含む	—	瓦	軒平瓦	瓦当部～ 平瓦部	約50%	瓦当：均整唐草文・中心飾り・菊文・界線無し・内面：龍へうミガキ・瓦当上縁に面取り有り・凸面：龍へうナデ
625	—	図版44	465	469	Ⅱ区 H7-f5、6	第3層系整地土 粗砂層含む	—	瓦	軒平瓦	瓦当部～ 平瓦部	約40% 不明	
626	—	図版44	466	476	Ⅱ区 H7-g5	第3層系整地土 粗砂層含む	—	瓦	軒丸瓦	瓦当部～ 丸瓦部	約90% 不明	
627	—	図版44	467	491	Ⅱ区 H7-g6	第3層系整地土 灰緑土含む	112石列北側	瓦	軒丸瓦	瓦当部～ 丸瓦部	約100% 不明	
628	—	図版44	468	482	Ⅱ区 H7-g6	第3層系整地土 粗砂層含む	—	瓦	軒丸瓦	瓦当部	約50%	
629	—	図版45	469	423	Ⅱ区 H7-g6	第3層系 中込め	111溝基礎 中込め	瓦	丸瓦	丸瓦部～ 玉縁部	不明	
630	—	図版45	470	423	Ⅱ区 H7-g6	第3層系 中込め	111溝基礎 中込め	瓦	丸瓦	丸瓦部～ 玉縁部	不明	
631	—	図版45	471	423	Ⅱ区 H7-g6	第3層系 中込め	111溝基礎 中込め	瓦	軒平瓦	瓦当部	約30%	
632	—	図版45	472	521	Ⅱ区 H7-g6	第3層系 中込め内	111溝基礎 中込め内	瓦	軒平瓦	瓦当部～ 平瓦部	不明	
633	—	図版45	473	423	Ⅱ区 H7-g6	第3層系 中込め	111溝基礎 中込め	瓦	軒平瓦	瓦当部～ 平瓦部	約40% 不明	
634	—	図版45	474	521	Ⅱ区 H7-g6	第3層系 中込め	111溝基礎 中込め	瓦	軒丸瓦	瓦当部	約60%	
635	—	図版45	482	423	Ⅱ区 H7-g6	第3層系 中込め内	111溝基礎 中込め内	土製品	餅物 磁器?	不明	不明	
636	—	図版45	483	423	Ⅱ区 H7-g6	第3層系 中込め内	111溝基礎 中込め内	土製品	餅物 磁器?	不明	不明	
637	—	図版45	484	423	Ⅱ区 H7-g6	第3層系 中込め内	111溝基礎 中込め内	土製品	餅物 磁器?	不明	不明	
638	—	図版45	488	468	Ⅱ区 H7-g6	第3層系整地土 灰緑土含む	112石列北側 敷地層	瓦	丸瓦	丸瓦部～ 玉縁部	約60% 100%	
639	—	図版45	489	486	Ⅱ区 H7-h、i6	第3層系整地土 灰緑土含む	112石列北側 敷地層	瓦	軒丸瓦	瓦当部～ 丸瓦部	約95% 不明	
640	—	図版45	490	483	Ⅱ区 H7-h6	第3層系整地土 灰緑土含む	112石列北側 敷地層	瓦	軒丸瓦	瓦当部	約90%	
641	—	図版45	491	471	Ⅱ区 H7-f6	青灰色粗砂層 上位	112石列北側 堆積層	土製品	餅物 磁器?	不明	不明	
642	—	図版46	499	545	Ⅱ区 H7-g6、i6	第3層系 中込め	112石列大走り 石列内一筋	瓦	軒平瓦	瓦当部～ 平瓦部	約50% 不明	
643	—	図版46	500	524	Ⅱ区 H7-h6	第3層系 中込め	112石列大走り 石列内一筋	瓦	軒平瓦	瓦当部～ 平瓦部	約50% 不明	
644	—	図版46	501	524	Ⅱ区 H7-h6	第3層系 中込め	112石列大走り 石列内一筋	瓦	軒平瓦	瓦当部～ 平瓦部	約60% 不明	
645	—	図版46	502	527	Ⅱ区 H7-h6	第3層系 中込め	112石列大走り 石列内一筋	瓦	軒平瓦	瓦当部～ 平瓦部	約50% 不明	
646	—	図版46	503	527	Ⅱ区 H7-h6	第3層系 中込め	112石列大走り 石列内一筋	瓦	軒丸瓦	瓦当部～ 丸瓦部	約40% 不明	
647	—	図版46	509	516	Ⅱ区 H7-j6、7	第3層系 中込め	129排水溝 石筋内	瓦	丸瓦	丸瓦部～ 玉縁部	100%	

粉河寺遺跡 出土遺物一覽 I・II・III区

残存率は、主に開示できた部位での割合

No. 18

建物番号	採掘番号	写真図版	実測地盤面高(海抜)	目録上の地盤面高(海抜)	地区取上げ区画	遺構位置 敷地面・基礎位置	遺構番号、種類 遺構位置	遺物種類	部材	残存率	備考
648	—	図版7-519	542	—	Ⅱ区 H7-h6・7	第5・6層系雑物土 一部第7層系含む	——	土師器	皿	口縁部～底部 約30%	—
649	—	図版7-520	518	—	Ⅱ区 H7-h6・7	第5・6層系雑物土 下層	——	土師器	皿	口縁部～底部	不明
650	—	図版7-521	549	—	Ⅱ区 H7-h5・7 東側	第5・6層系雑物土	——	土師器	皿	口縁部～底部	約20%
651	—	図版7-526	533	—	Ⅱ区 H7-h6・7	敷地上段 第5層系雑物土	——	白磁	小鈴	胴部?～肩部?	不明
652	—	図版7-527	537	—	Ⅱ区 H7-h6・7	第5・6層系雑物土 一部第7層系含む	——	白磁	口蓋片	口縁部～腰部	不明
653	—	図版7-528	538	—	Ⅱ区 H7-h6・7	第5・6層系雑物土 一部第7層系含む	——	白磁	甕	体部	不明
654	—	図版7-535	602	—	Ⅱ区 H7-h6・7	第7層系雑物土	——	土師器	小皿	口縁部～底部	約15%
655	—	図版7-539	597	—	Ⅱ区 H7-h6・7	第7層系雑物土 一部第5・6層系含む	——	瓦器	瓶	口縁部～体部	約20%
656	—	図版7-540	597	—	Ⅱ区 H7-h6・7	第7層系雑物土 一部第5・6層系含む	——	瓦器	瓶	口縁部～体部	約20%
657	—	図版7-544	613	—	Ⅱ区 H7-h6・7 東半	第7層系雑物土 下位	——	土師器	皿	口縁部～底部	約20%
658	—	図版7-545	613	—	Ⅱ区 H7-h6・7 東半	第7層系雑物土 下位	——	土師器	皿	口縁部～底部	約15%
659	—	図版8-546	595	—	Ⅱ区 H7-g6・7	第7層系雑物土	無軸陶器 備前	甕	体部	不明	—
660	—	図版8-547	600	—	Ⅱ区 H7-h6・7	第7層系雑物土	——	瓦	平瓦	平瓦部	不明
661	—	図版8-548	607	—	Ⅱ区 H7-h6・7	第7層系雑物土 粘土	——	瓦	丸瓦	不明	粗目目、凸面、中輪子1.3cm、張り不足
662	—	図版8-549	600	—	Ⅱ区 H7-h6・7	第7層系雑物土	——	瓦	軒平瓦	瓦当部～ 平瓦部	約50% 不明
663	—	図版8-550	597	—	Ⅱ区 H7-h6・7	第7層系雑物土 一部第5・6層系含む	——	瓦	軒平瓦	瓦当部～ 平瓦部	約40% 不明
664	—	図版8-551	615	—	Ⅱ区 H7-j6・7 西半	第7層系雑物土	——	瓦	軒平瓦	瓦当部～ 平瓦部	不明
665	—	図版8-552	611	—	Ⅱ区 H7-j6・7	第7層系雑物土	——	瓦	軒平瓦	瓦当部～ 平瓦部	不明
666	—	図版8-553	613	—	Ⅱ区 H7-h6・7 東半	第7層系雑物土 下位	——	石製品	硯?	硯の磨き部分か? 不明	硯の磨き部分か?、石材：頁岩、重量15g
667	—	図版8-554	537	—	Ⅱ区 H7-h6・7	第5・6層系雑物土 一部第7層系含む	——	磁器類	壺	胴部(?)～体部	不明
668	—	図版8-555	578	—	Ⅱ区 H7-c6	第Ⅲ区対峙以下 青灰色粗砂礫層	——	石製品	組合式 五輪式	空風輪軸	約100%
669	—	図版8-556	556	—	Ⅱ区 H7-d5・6	第Ⅲ区対峙以下 青灰色粗砂礫層	——	石製品	組合式 火輪軸	火輪軸	約60%
670	—	図版8-558	497	—	Ⅱ区 H7-b5・6	第Ⅲ区対峙以下 青灰色粗砂礫層	調査区東端 東北トレンチ 堆積層	白磁	碗反り 皿	口縁部～体部	口縁部 約20%
671	—	図版8-559	497	—	Ⅱ区 H7-b5・6	第Ⅲ区対峙以下 青灰色粗砂礫層	調査区東端 東北トレンチ 堆積層	瓦	軒平瓦	瓦当部～ 平瓦部	不明
672	—	図版8-563	554	—	Ⅱ区 H7-d5・6	第Ⅲ区対峙以下 青灰色粗砂礫層	——	土師器	皿	口縁部～底部	約20%
673	—	図版8-564	562	—	Ⅱ区 H7-e5・6	第Ⅲ区対峙以下 青灰色粗砂礫層 と 粗砂礫層	——	土師器	皿	底部	底部 約20%
674	—	図版8-565	555	—	Ⅱ区 H7-c5・6	第Ⅲ区対峙以下 青灰色粗砂礫層	——	土師器	皿	口縁部～底部	約15%
675	—	図版8-569	555	—	Ⅱ区 H7-c5・6	第Ⅲ区対峙以下 青灰色粗砂礫層	——	白磁	甕	底脚 (高部?)	不明
676	—	図版8-570	556	—	Ⅱ区 H7-d5・6	第Ⅲ区対峙以下 青灰色粗砂礫層	——	瓦	丸瓦	丸瓦部～ 玉輪部	不明
677	—	図版8-571	555	—	Ⅱ区 H7-c5・6	第Ⅲ区対峙以下 青灰色粗砂礫層	——	瓦	軒平瓦	瓦当部～ 平瓦部	約50% 不明
678	—	図版8-574	570	—	Ⅱ区 H7-h6	第Ⅲ区対峙以下 青灰色粗砂礫層	——	土師器	皿	口縁部～底部	口縁部 約15%
679	—	図版8-577	565	—	Ⅳ区 H7-a・16	Ⅳ区Ⅰ法 131渡岸石橋 渡岸石橋面上	——	土師器	皿	口縁部～底部	約25%
680	—	図版8-578	565	—	Ⅳ区 H7-g・16	Ⅳ区Ⅰ法 131渡岸石橋 渡岸石橋面上	——	土師器	皿	口縁部～底部	約25%
681	—	図版8-579	574	—	Ⅳ区 H7-f6	Ⅳ区Ⅱ法 粗砂礫層 渡岸石橋面上	——	土師器	小皿	口縁部～底部	約5%
682	—	図版8-580	565	—	Ⅳ区 H7-e・16	Ⅳ区Ⅱ法 131渡岸石橋 渡岸石橋面上	——	土師器	小皿	口縁部～底部	約10%
683	—	図版8-581	565	—	Ⅳ区 H7-f6	Ⅳ区Ⅱ法 133渡岸石橋 渡岸石橋面上	——	土師器	皿	口縁部～底部	約5%
684	—	図版8-582	573	—	Ⅳ区 H7-j・16	Ⅳ区Ⅱ法 131～133渡岸石橋 粗砂礫層上	——	土師器	土釜	口縁部	約5%

遺物 番号	検出 番号	写真 図説	実測 図説	出土 位置	地区 区分	遺構 番号・種類 敷土区分	遺構 番号・種類 敷土区分	遺物 種類	器種	部位	検出 率	備考
685	—	図版50	582	565	Ⅱ区 H7-e・f6	Ⅳ区 遺構131	131階層石積 遺構石積上	瓦器	椀	口縁部～底部	約20%	内面ミガキ幅：0.1cm・やや粗、磨減きのため調整や不明
686	—	図版50	584	572	Ⅱ区 H7-f6	Ⅳ区 遺構131	131階層石積 遺構石積上	瓦	軒平瓦	瓦当部～ 平瓦部	約25%	瓦当部：均整度悪く、縁線有り。図面：コビキ幅不明・布目、凸面：ハタケ工具による縦方向のナデ
687	—	図版50	585	565	Ⅱ区 H7-e・f6	Ⅳ区 遺構131	131階層石積 遺構石積上	石製品	滑石製石 石鍋	口縁部～底部	口縁部 約10%	口縁部縁面取り、体部内面・底方向にノミで彫られている（幅：0.6cm）。内外共に保残良好
688	—	図版50	586	583	Ⅱ区 H7-g6	Ⅳ区 遺構131	131階層石積 遺構石積上	遺器類 更紗器	投針	口縁部～底部	口縁部 約15%	口縁部の中や内縁ぎみ、第三期第1段縁の発端か？
689	—	図版50	587	612	Ⅱ区 H7-h7 杭廻り	Ⅳ区 遺構135	135配石 配石内縁上	土師器	皿	口縁部～底部	約95%	口縁部2段のヨコナデ、底部～底部にかけて多数のユビオサエ有り、全体的に磨減有り。出土倉庫635日 607-f6・7中半、第Ⅱ区対峙以下第7層崩壊土 下半、屋敷地掘削地盤と接合
690	—	図版50	588	634	Ⅱ区 H7-h7 杭廻り	Ⅳ区 遺構135	135排水溝 西側石積 排水溝内埋土	土師器	皿	口縁部～底部	約25%	口縁部内反ぎみに立ち上がる、口縁部短い、底部に多数のユビオサエ有り
691	—	図版50	589	634	Ⅱ区 H7-h7 杭廻り	Ⅳ区 遺構135	135排水溝 西側石積 排水溝内埋土	土師器	皿	口縁部～底部	約20%	口縁部縁めのヨコナデ、口縁部やや肥厚する、底部に多数のユビオサエ有り
692	—	図版50	590	634	Ⅱ区 H7-h7 杭廻り	Ⅳ区 遺構135	135排水溝 西側石積 排水溝内埋土	土師器	皿	口縁部～底部	約10%	口縁部の中や肥厚する、底部に多数のユビオサエ有り、やや斜なり
693	—	図版50	591	650	Ⅱ区 H7-h7 杭廻り	Ⅳ区 遺構135	135排水溝 西側石積 排水溝内埋土	土師器	小皿	口縁部～底部	約20%	口縁部の中や外反ぎみで緩やかに立ち上がる、口縁部短い
694	—	図版50	592	612	Ⅱ区 H7-h7 杭廻り	Ⅳ区 遺構135	135配石 配石内縁上	土師器	小皿	口縁部～底部	約40%	口縁部短く内湾して立ち上がる、底部内面中央部や内反ぎみ
695	—	図版50	593	599	Ⅱ区 H7-h7 杭廻り	Ⅳ区 遺構134	134黒石直下の 135配石	瓦器	椀	口縁部～ 底部(裏面合部)	約15%	内面ミガキ幅：0.1cm・やや粗、口縁部内面上部に浅い波線有り
696	—	図版50	594	612	Ⅱ区 H7-h7 杭廻り	Ⅳ区 遺構135	135配石 配石内縁上	瓦器	椀	口縁部～底部	約10%	内面ミガキ幅：0.1～0.15cm・密、口縁部内面上部に浅い波線有り
697	—	図版50	595	612	Ⅱ区 H7-h7 杭廻り	Ⅳ区 遺構135	135配石 配石内縁上	瓦	平瓦	平瓦部	不明	図面：布目・コビキA、凸面：布目・コビキ幅A、縁状正直度有り（幅：0.3cm）
698	—	図版50	596	599	Ⅱ区 H7-h7 杭廻り	Ⅳ区 遺構134	134黒石直下の 135配石	石製品	滑石製石 石鍋	口縁部～底部	不明	外縁全体的に保残良好、器部は意図的にノミで削り取られている
699	—	図版50	597	638	Ⅱ区 H7-j6・7	Ⅳ区 遺構139	139排水溝 排水溝上	土師器	小皿	口縁部～底部	約25%	口縁部縁めのヨコナデ、底部の磨減有り、底部は脱落欠損
700	—	図版50	598	632	Ⅱ区 H7-j6・7	Ⅳ区 遺構139	139排水溝 排水溝上	土師器	皿	口縁部～底部	約40%	底部～口縁部にかけて緩やかに立ち上がる、口縁部上縁面には口縁部が明瞭の可能性有り、底部に漸く平すの底面有り
701	—	図版50	599	621	Ⅱ区 H7-j6・7 中半	Ⅳ区 遺構139	139排水溝 配石内 屋敷地掘削	瓦器	椀	口縁部～底部	約5%	内面ミガキ幅：0.1cm・やや粗、縁しにムラ有り（黒い痕跡）、磨減のため調整不明
702	—	図版50	600	632	Ⅱ区 H7-j6・7	Ⅳ区 遺構139	139排水溝内埋土 屋敷地掘削	瓦	軒平瓦	瓦当部	約25%	瓦当・床文26個が（推定）遺存10個
703	—	図版51	601	580	Ⅱ区 H7-d6	Ⅳ区 遺構131	131階層石積 遺構石積上	瓦質	経典？	底部	約20%	底部縁めのヨコナデ、体部は比て底部の磨減やや薄、胎土精良
704	—	図版51	602	593	Ⅱ区 H7-e6	Ⅳ区 遺構131	131階層石積 遺構石積上	土師器	皿	口縁部～底部	約20%	底部～口縁部にかけて緩やかに立ち上がる、底部～底部にかけて多数のユビオサエ有り、胎土精良
705	—	図版51	603	601	Ⅱ区 H7-h6	Ⅳ区 遺構131	131階層石積 遺構石積上	土師器	皿	口縁部～底部	約20%	底部～口縁部にかけて緩やかに立ち上がる、底部～底部にかけて多数のユビオサエ有り、胎土精良
706	—	図版51	604	603	Ⅱ区 H7-h6	Ⅳ区 遺構131	131階層石積 遺構石積上	土師器	皿	口縁部～底部	約25%	口縁部や外反ぎみに立ち上がる、底部多数のユビオサエ有り、胎土精良
707	—	図版51	605	587	Ⅱ区 H7-g6	Ⅳ区 遺構131	131階層石積 遺構石積上	土師器	皿	口縁部～底部	約15%	南北セク西壁に近いトレンチ、底部～口縁部にかけて緩やかに立ち上がる、口縁部短い、胎土精良
708	—	図版51	606	596	Ⅱ区 H7-h6	Ⅳ区 遺構131	131階層石積 遺構石積上	土師器	高台付皿 (高台部)	口縁部～底部	約5%	底部～口縁部にかけて緩やかに立ち上がる、口縁部の中や内反ぎみに立ち上がる、口縁部縁面や肥厚、丁寧な作り、胎土精良
709	—	図版51	607	586	Ⅱ区 H7-g6	Ⅳ区 遺構131	131階層石積 遺構石積上	土師器	小皿	口縁部～底部	約98%	南北セク西壁に近いトレンチ、口縁部や内反ぎみに立ち上がる、口縁部内面の1/3及び口縁部の外面の一部に磨減
710	—	図版51	608	596	Ⅱ区 H7-h6	Ⅳ区 遺構131	131階層石積 遺構石積上	土師器	皿	口縁部～底部	約30%	口縁部や外反ぎみに立ち上がる、口縁部やや歪つ、胎土精良
711	—	図版51	609	587	Ⅱ区 H7-g6	Ⅳ区 遺構131	131階層石積 遺構石積上	土師器	小皿	口縁部～底部	約25%	南北セク西壁に近いトレンチ、底部～口縁部にかけて緩やかに立ち上がる、口縁部の中や内反ぎみに立ち上がる、底部は磨減が深い
712	—	図版51	610	596	Ⅱ区 H7-h6	Ⅳ区 遺構131	131階層石積 遺構石積上	土師器	皿	口縁部～底部	約20%	口縁部や外反ぎみに立ち上がる、口縁部内面に磨減、保残、底部に多数のユビオサエ有り、胎土精良
713	—	図版51	611	594	Ⅱ区 H7-e6	Ⅳ区 遺構131	131階層石積 遺構石積上	瓦器	椀	口縁部～底部	約15%	内面ミガキ幅：0.1～0.2cm・やや粗、口縁部内面上部に浅い波線有り
714	—	図版51	612	601	Ⅱ区 H7-h6	Ⅳ区 遺構131	131階層石積 遺構石積上	瓦器	椀	口縁部～底部 (高台部)	約25%	内面ミガキ幅：0.2cm・やや粗、見込縁：連続縁状、貼り付け縁：低く扁平な定形部、体部内面に湾り異なる正直度有り

遺構・遺物・土師器・瓦器・土師器・瓦器・土師器・瓦器・土師器・瓦器・土師器・瓦器												
遺物 番号	探検 番号	写真 図版	発掘調査 図版番号	出土遺物 図版番号	地区 取上区画	遺構 番号・種類 遺構位置	遺物種類	素材	部位	保存率	備考	
715	—	図版51	613	593	Ⅱ区 H7-g-6	第7層対峙以下 黄褐色砂砂礫層 黄灰色泥砂礫層	川側 南東セウ ションより西側 堆積層	瓦器	横	口縁部～底部 (高台部)	約15%	内面ミガキ幅：0.15cm・やね、口縁部内面上部に に沈着有り、浅しムラ有り(重傷破損有り)
716	—	図版51	614	601	Ⅱ区 H7-h-6	第7層対峙以下 黄灰色砂砂礫層 第11層灰土層 土	131～133遺構石礫 層下 堆積層	瓦器類 更張土	掘削	口縁部～底部	約20%	
717	—	図版51	615	594	Ⅱ区 H7-g-6	第7層対峙以下 黄褐色砂砂礫層 黄灰色泥砂礫層	131～133遺構石礫 層下 堆積層	黄磁 筒型甕	皿	口縁部～底部	約30%	見込に磨き文。同型甕あり
718	—	図版51	616	585	Ⅱ区 H7-e-16	第7層対峙以下 黄褐色砂砂礫層 黄灰色泥砂礫層	131・132遺構石礫 層下 堆積層	更張土	盤	底部	約20%	底部外面縁に平行タタキ、底部磨き文、出土遺物 643目録H7-g-16 図版135 磨き文・磨き石と同一 内・磨き石と同一一体
719	—	図版51	617	601	Ⅱ区 H7-h-6	第7層対峙以下 黄褐色砂砂礫層 第11層灰土層 土	131～133遺構石礫 層下 堆積層	瓦	平瓦	平瓦部	不検	図面：コビキ入・ホビ、凸入・溝目
720	—	図版51	618	604	Ⅱ区 H7-h-6	第7層対峙 第9層以下 第11層灰土層 黄灰色泥砂礫層 以下含む	—	土師器	皿	口縁部～底部	約15%	口縁部強めのヨコナデ、底部～口縁部にかけて磨き かきに外反ぎみに立ち上がる。底部は面取削り、胎 土精良
721	—	図版51	619	608	Ⅱ区 H7-h-6	第7層対峙 第9層以下 第11層灰土層 黄灰色泥砂礫層 以下含む	—	土師器	皿	口縁部～底部	約20%	口縁部強めのヨコナデで外反ぎみに立ち上がる。部 部～底部にかけて強めのユビオサ工有り
722	—	図版51	620	625	Ⅱ区 H7-e-16	第7層対峙以下 141層砂土層より下 部 第9層より下位	—	土師器	皿	口縁部～底部	約5%	底部～口縁部にかけて磨きかきに立ち上がる。全体的 に磨き深く通く高平な作り
723	—	図版51	621	608	Ⅱ区 H7-h-6	第9層以下 第7層対峙 第11層灰土層 黄灰色泥砂礫層 以下含む	—	土師器	皿	口縁部～底部	約80%	口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。口縁部やや平 滑な内面を呈する。口縁部磨きや厚
724	—	図版51	622	608	Ⅱ区 H7-h-6	第9層以下 第7層対峙 第11層灰土層 黄灰色泥砂礫層 以下含む	—	土師器	小皿	口縁部～底部	約50%	口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。外面磨きで調 整不的確
725	—	図版51	623	604	Ⅱ区 H7-h-6	第7層対峙 第9層以下 第11層灰土層 黄灰色泥砂礫層 以下含む	—	土師器	小皿	口縁部～底部	約30%	口縁部は磨きかきに外反して立ち上がる。口縁部内 面上部にヌケナデ痕あり。胎土精良
726	—	図版51	624	604	Ⅱ区 H7-h-6	第7層対峙 第9層以下 第11層灰土層 黄灰色泥砂礫層 以下含む	—	瓦器	横	口縁部～底部 (高台部)	約30%	内面ミガキ幅：0.1cm・磨、外面ミガキ幅：0.1cm・ やね、底に磨き文・磨き文・口縁部内面上部に沈着。しっ り付け高台で断面は逆台形を呈する
727	—	図版51	625	606	Ⅱ区 H7-g-6	第7層対峙 黄褐色砂砂礫層 上面	堆積層	瓦器	横	口縁部～底部 (高台部)	約25%	内面ミガキ幅：0.1cm・磨、外面ミガキ幅： 0.1～0.15cm・磨。口縁部内面上部に沈着。磨 き文・磨き文・0.1～0.15cm・シグが磨文、しっ り付け高台で断面は逆台形を呈する
728	—	図版51	626	608	Ⅱ区 H7-h-6	第9層以下 第7層対峙 第11層灰土層 黄灰色泥砂礫層 以下含む	川側 堆積層	瓦器	横	口縁部～底部	約5%	内面ミガキ幅：0.1～0.15cm・磨、外面ミガキ幅0.1 cm・磨。口縁部内面上部に沈着有り
729	—	図版51	627	626	Ⅱ区 H7-h-6・7 西半	第7層対峙以下 第7層灰土層 土	—	土師器	皿	口縁部～底部	約30%	口縁部強めの2段のヨコナデ、底部磨きのユビオサ 工有り
730	—	図版51	628	642	Ⅱ区 H7-h-6・7 東半	第7層対峙以下 第7層灰土層 土	—	土師器	皿	口縁部～底部	約20%	底部～口縁部にかけて磨きかきに立ち上がる。口縁部 強めのヨコナデで磨、全体的に磨き深い
731	—	図版51	629	651	Ⅱ区 H7-h-6・7 東半	第7層対峙以下 第7層灰土層 土	屋敷地側 敷地層	土師器	小皿	口縁部～底部	約60%	底部～口縁部にかけて外反して立ち上がる。内面丁 家ナデが外面は磨な作り
732	—	図版51	630	642	Ⅱ区 H7-h-6・7 東半	第7層対峙以下 第7層灰土層 土	139排水溝含む 敷地層	土師器	小皿	口縁部～底部	約80%	底部～口縁部にかけて磨きかきに立ち上がる。底部強 いユビオサのたけや磨、内面丁家ナデが 海面は磨な作り、全体的に磨き深い
733	—	図版51	631	622	Ⅱ区 H7-g-6・7 東半	第7層対峙以下 第7層灰土層 土	屋敷地側 敷地層	土師器	皿	口縁部～底部	約25%	口縁部やや内湾ぎみに立ち上がる。口縁部磨き している。底部は面取削り
734	—	図版51	632	622	Ⅱ区 H7-g-6・7 東半	第7層対峙以下 第7層灰土層 土	屋敷地側 敷地層	瓦器	横	口縁部～底部	約10%	内面ミガキ幅：0.15cm・やね、口縁部内面上部に に沈着有り
735	—	図版52	633	652	Ⅱ区 H7-h-6・7 東半	第7層対峙以下 第7層灰土層 土	屋敷地側 敷地層	土師器	皿	口縁部～底部	約25%	口縁部3段のヨコナデでやや外反ぎみに立ち上 がる。底部外反磨な作り、全体的に磨き深い
736	—	図版52	634	652	Ⅱ区 H7-h-6・7 東半	第7層対峙以下 第7層灰土層 土	屋敷地側 敷地層	土師器	皿	口縁部～底部	約40%	口縁部強めのヨコナデで外反して立ち上がる。口 縁部磨きや厚、全体的に磨き深い
737	—	図版52	635	640	Ⅱ区 H7-h-6・7 西半	第7層対峙以下 第7層灰土層 土	屋敷地側 敷地層	土師器	皿	口縁部～底部	約20%	口縁部2段のヨコナデでやや内湾ぎみに立ち上 がる。全体的に磨き深い、丁寧な作り
738	—	図版52	636	640	Ⅱ区 H7-h-6・7 西半	第7層対峙以下 第7層灰土層 土	屋敷地側 敷地層	土師器	皿	口縁部～底部	約10%	口縁部2段のヨコナデで外反ぎみに立ち上がる。全 体的に丁寧な作り
739	—	図版52	637	642	Ⅱ区 H7-h-6・7 東半	第7層対峙以下 第7層灰土層 土	屋敷地側 敷地層	土師器	小皿	口縁部～底部	約70%	口縁部強めのヨコナデでやや内湾ぎみに立ち上 がる。底部は面取削り。出土遺物643目録H7-h-6・7 第7層対峙以下 第9層灰土層・第11層灰土層・ 屋敷地側敷地層)と接合

遺物 番号	発掘 番号	写真 図版	実測図 縮尺	出土 位置	地区 敷上図	遺構 番号・種類	遺構 位置	遺物 種類	素材	部位	保存率	備考
740	—	図版52	638	640	Ⅱ区 H7-16、7 西半	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土	屋敷地側 境溝	土師器	小皿	口縁部～底部	約45%	口縁部は浅めのヨコナデでやや外反みに立ち上がる。 口縁部内や底部まで、底部は回転糸切り
741	—	図版52	639	643	Ⅱ区 H7-16、7	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土	屋敷地側 境溝	土師器	皿	口縁部～底部	約5%	口縁部2段のヨコナデで外反みに立ち上がる、口 部～底部にかけて器壁深い、底部は回転糸切り
742	—	図版52	640	653	Ⅱ区 H7-16、7 西半	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土	屋敷地側 境溝	土師器	皿	口縁部～底部	約10%	口縁部2段のヨコナデで外反みに立ち上がる、丁 事なり、底部は回転糸切り
743	—	図版52	641	654	Ⅱ区 H7-16、7 西半	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土	屋敷地側 境溝	土師器	小皿	口縁部～底部	約95%	口縁部やや内湾みに立ち上がる、内面は丁寧なナ デが外縁は浅くなり、全体的に器壁深い
744	—	図版52	642	651	Ⅱ区 H7-16、7 西半	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土	屋敷地側 境溝	土師器	小皿	口縁部～底部	約60%	底部～口縁部の項目が明確でない、全体的に器壁 深い、浅くなり
745	—	図版52	643	652	Ⅱ区 H7-16、7 東半	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土	土器張り有り 境溝	土師器	小皿	口縁部～底部	約30%	口縁部外反みに立ち上がる、底部多数ユビオサ ナ有り、丁寧なり
746	—	図版52	644	640	Ⅱ区 H7-16、7 西半	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土	屋敷地側 境溝	土師器	小皿	口縁部～底部	約50%	口縁部浅めのヨコナデで外反して立ち上がる、口 部短く器壁浅い、底部多数のユビオサナ有り
747	—	図版52	645	652	Ⅱ区 H7-16、7 東半	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土	土器張り有り 境溝	土師器	小皿	口縁部～底部	約40%	口縁部浅めのヨコナデ、口縁部は外方に折れ曲 るようになり立ち上がる、内面丁寧なナデ、底部外 多数のユビオサナ有り
748	—	図版52	646	654	Ⅱ区 H7-16、7 西半	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土	屋敷地側 境溝	土師器	高台付皿	口縁部～底部 (高台付)	約60%	高台はしっかり作りで逆台部を呈する、全体 的に丁寧なり
749	—	図版52	647	640	Ⅱ区 H7-16、7 西半	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土	屋敷地側 境溝	土師器	高台付皿	口縁部～底部 (高台付)	約15%	口縁部浅めのヨコナデで外反し、立ち上がり が緩やかで底部と口縁部の境目が明確でない、や や浅くなり
750	—	図版52	648	654	Ⅱ区 H7-16、7 西半	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土	屋敷地側 境溝	土師器	土器A	口縁部～底部	口縁部 約15%	口縁部断面に凹状の筋あり、底部内面イタナ デが、口縁部外面上部より以下に僅かな、粘土 貼
751	—	図版52	649	654	Ⅱ区 H7-16、7 西半	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土	屋敷地側 境溝	瓦器	椀	口縁部～底部	口縁部 約15%	内面ミガキ幅：0.1cm 極めて、外面ミガキ幅： 約0.1cm 底、口縁部内面上部に浅く残る
752	—	図版52	650	640	Ⅱ区 H7-16、7 西半	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土	屋敷地側 境溝	瓦器	椀	口縁部～底部	口縁部 約15%	内面ミガキ幅：0.1cm 前、外面ミガキ幅：0.15cm 約15% 底、口縁部内面上部に浅く残る
753	—	図版52	651	659	Ⅱ区 H7-k-7 南北ツイ 南側	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土	土器張り 境溝	土師器	皿	口縁部～底部	約75%	口縁部浅めのヨコナデで外反して立ち上がる、口 部短く、底部外ユビオサナ多数有り未調査
754	—	図版52	652	659	Ⅱ区 H7-k-7 南北ツイ 南側	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土	土器張り 境溝	土師器	皿	口縁部～底部	約25%	口縁部浅めのヨコナデで外反みに立ち上がる、口 部短く、全体的に浅くなり
755	—	図版52	653	672	Ⅱ区 H7-16	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土	調査区南壁面 境溝	土師器	皿	口縁部～底部	約30%	口縁部浅めのヨコナデでやや内湾して立ち上がる、 底部内面浅めのユビオサナ有り
756	—	図版52	654	660	Ⅱ区 H7-k-7	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土	屋敷地側 境溝	土師器	皿	口縁部～底部	約30%	口縁部浅めのヨコナデ、内湾みに立ち上がり口 部短く外反する、口縁部浅め
757	—	図版52	655	658	Ⅱ区 H7-17	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土 一部ナデが 土下位含む	屋敷地側 境溝	土師器	皿	口縁部～底部	約40%	口縁部浅めのヨコナデで外反して立ち上がる、底部 内面に多数のユビオサナ有り、底部外未調査
758	—	図版52	656	659	Ⅱ区 H7-k-7 南北ツイ 南側	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土	土器張り 境溝	土師器	高台付皿 (高台付)	口縁部～底部 (高台付)	約80%	口縁部浅めのヨコナデで外反して立ち上がる、 しっかりとした高台が傾斜付き、丁寧なり、 高台内未調査
759	—	図版52	657	658	Ⅱ区 H7-17	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土 一部ナデが 土下位含む	屋敷地側 境溝	土師器	皿	口縁部～底部	約99%	口縁部外反して立ち上がる、口縁部短く、内面は丁 事なナデが底部外ユビオサナ多数有り未調査
760	—	図版52	658	656	Ⅱ区 H7-16	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土 調査区南壁面 境溝	川俣 境溝	土師器	小皿	口縁部～底部	約60%	底部～口縁部にかけて緩やかに立ち上がる、口縁部 短くややゆるい、底部短く、底部は回転糸切 り、浅くなり(へろ起し跡のもの)
761	—	図版52	659	659	Ⅱ区 H7-k-7 南北ツイ 南側	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土	土器張り 境溝	土師器	小皿	口縁部～底部	約90%	口縁部外反みに立ち上がり極めて短く器壁浅い、 底は回転糸切り、粘土貼
762	—	図版52	660	658	Ⅱ区 H7-17	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土 一部ナデが 土下位含む	屋敷地側 境溝	土師器	小皿	底部	約100%	口縁部文、底は回転糸切り、粘土貼
763	—	図版52	661	660	Ⅱ区 H7-k-7	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土	屋敷地側 境溝	土師器	小皿	口縁部～底部	約50%	底部～口縁部にかけて緩やかに立ち上がる、底部中 央付近縁部に器壁深い箇所有り、底は回転糸切り
764	—	図版52	662	658	Ⅱ区 H7-17	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土 一部ナデが 土下位含む	屋敷地側 境溝	土師器	皿	底部～底部	約25%	底部～口縁部にかけて緩やかに立ち上がる、口縁部 短く、底部～底部にかけて器壁深い、底は回転糸切 り、丁寧なり
765	—	図版52	663	660	Ⅱ区 H7-k-7	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土	屋敷地側 境溝	土師器	皿	底部～底部	約15%	底部～口縁部にかけて緩やかに立ち上がる、口縁部 短く、底部～底部にかけて器壁深い、底は回転糸切 り、丁寧なり
766	—	図版52	664	657	Ⅱ区 H7-16	Ⅴ区近所志以下 第9層系堆積土 第11層系堆積土 一部ナデが 土下位含む	屋敷地側 境溝	瓦器	椀	口縁部～底部	約25%	内面ミガキ幅：0.1cm 極めて、外面ミガキ幅： 0.1cm やや、見込文ミガキ幅：0.1cm 連続輪 状、口縁部内面上部に浅く残る

遺物番号	探検番号	写真図説	実測縦横 単位cm	出土位置 単位cm	地区敷上区画	遺構番号・種類 敷上位置	遺構番号・種類 埋没位置	遺物種類	器種	部位	保存率	備考
767	—	図版52	665	656	Ⅱ区 H7-h6	Ⅱ区遺構5以下 第9層系土層 青灰色粘砂層	Ⅱ区遺構5 埋没	瓦葺	板	口縁部～体部	約15%	内面ミガキ幅：0.1～0.15m・底、外面ミガキ幅：0.15m・やや密、口縁部内面上部に粘砂層有り
768	—	図版52	666	659	Ⅱ区 H7-k7 南北西イシ 南面	Ⅱ区遺構5以下 第9層系土層	Ⅱ区遺構5 埋没	瓦葺	小皿	口縁部～底部	約25%	内面ミガキ幅：0.1m・やや密、見込ミガキ幅：0.1～0.15m・ジグザグ状、口縁部はやや内湾みに立ち上がる、底部と口縁部の間目が明確
769	—	図版53	667	627	Ⅱ区 H7-h6、7 西半	Ⅱ区遺構5以下 第9層系土層 第11層系土層	Ⅱ区遺構5 埋没	土師器	小皿	口縁部～底部	約80%	底部～口縁部にかけて内湾みに立ち上がる、底部内面中央部やや密に立ち上がる(内湾ミガキ)、丁寧な作り
770	—	図版53	668	627	Ⅱ区 H7-h6、7 西半	Ⅱ区遺構5以下 第9層系土層 第11層系土層	Ⅱ区遺構5 埋没	土師器	小皿	口縁部～底部	約80%	口縁部強めのヨコナナ、口縁部やや密、内湾丁寧な作り
771	—	図版53	669	627	Ⅱ区 H7-h6、7 西半	Ⅱ区遺構5以下 第9層系土層 第11層系土層	Ⅱ区遺構5 埋没	土師器	小皿	口縁部～底部	約75%	底部～口縁部にかけてやや内湾みに外反して立ち上がる、口縁部と底部の間目が明確でない、丁寧な作り、胎土精良
772	—	図版53	670	655	Ⅱ区 H7-h6 南面	Ⅱ区遺構5 埋没	Ⅱ区遺構5 埋没	土師器	小皿	口縁部～底部	約100%	口縁部強めのヨコナナ、内湾丁寧な作り、底部外面ユビオサエ多数有り未調査
773	—	図版53	671	655	Ⅱ区 H7-h6 南面	Ⅱ区遺構5 埋没	Ⅱ区遺構5 埋没	土師器	小皿	口縁部～底部	100%	口縁部強めのヨコナナ、口縁部内面にスナグナ、内湾丁寧な作り、底部外面中央部に連続ビッチのユビオサエ有り、底部内面中央部やや密に立ち上がる(強いユビオサエ)
774	—	図版53	672	655	Ⅱ区 H7-h6 南面	Ⅱ区遺構5 埋没	Ⅱ区遺構5 埋没	土師器	小皿	口縁部～底部	100%	口縁部強めのヨコナナ、内湾丁寧な作り、底部内面強いユビオサエ有り、口縁部やや密、底部外面中央部に連続ビッチのユビオサエ有り未調査
775	—	図版53	673	655	Ⅱ区 H7-h6 南面	Ⅱ区遺構5 埋没	Ⅱ区遺構5 埋没	土師器	小皿	口縁部～底部	約75%	底部～口縁部にかけてやや内湾みに立ち上がる、内湾丁寧な作り、底部外面中央部に連続ビッチのユビオサエ有り
776	—	図版53	674	655	Ⅱ区 H7-h6 南面	Ⅱ区遺構5 埋没	Ⅱ区遺構5 埋没	土師器	小皿	口縁部～底部	約75%	底部～口縁部にかけてやや内湾みに立ち上がる、口縁部と底部の間目が明確でない、丁寧な作り、底部外面中央部に連続ビッチのユビオサエ有り
777	—	図版53	675	655	Ⅱ区 H7-h6 南面	Ⅱ区遺構5 埋没	Ⅱ区遺構5 埋没	土師器	小皿	口縁部～底部	約80%	底部～口縁部にかけてやや内湾みに立ち上がる、口縁部やや密、内湾丁寧な作り、底部外面中央部に連続ビッチのユビオサエ有り
778	—	図版53	676	655	Ⅱ区 H7-h6 南面	Ⅱ区遺構5 埋没	Ⅱ区遺構5 埋没	土師器	小皿	口縁部～底部	約95%	底部から口縁部にかけてやや内湾みに立ち上がる、底部の胎土がよい丁寧な作り、胎土精良
779	—	図版53	677	627	Ⅱ区 H7-h6、7 西半	Ⅱ区遺構5以下 第9層系土層 第11層系土層	Ⅱ区遺構5 埋没	瓦葺	板	体部～底部 (高台部)	約95%	内面ミガキ幅：0.15m・底、外面ミガキ幅：0.1m以下・やや密、見込ミガキ幅：0.1～0.15m・ウケナナジグザグ状、口縁部はしっかりとした作り付け高台、高台内面粘砂層有り
780	—	図版53	678	627	Ⅱ区 H7-h6、7 西半	Ⅱ区遺構5以下 第9層系土層 第11層系土層	Ⅱ区遺構5 埋没	瓦葺	板	口縁部～体部	約10%	内面ミガキ幅：0.3m・底、外面ミガキ幅：0.4m・底、沈積無し
781	—	図版54	679	631	Ⅱ区 H7-h6、7 東半	Ⅱ区遺構5以下 第9層系土層 第11層系土層 青灰色粘砂層	Ⅱ区遺構5 埋没	土師器	小皿	口縁部～底部	約50%	口縁部強めのヨコナナで外反して立ち上がる、口縁部短い、内湾丁寧な作り、底部外面未調査
782	—	図版54	680	631	Ⅱ区 H7-h6、7 東半	Ⅱ区遺構5以下 第9層系土層 第11層系土層 青灰色粘砂層	Ⅱ区遺構5 埋没	土師器	小皿	口縁部～底部	約30%	口縁部2段のヨコナナ、底部から口縁部にかけてやや内湾みに立ち上がる、丁寧な作り、底は胎土粘砂層有り
783	—	図版54	681	631	Ⅱ区 H7-h6、7 東半	Ⅱ区遺構5以下 第9層系土層 第11層系土層 青灰色粘砂層	Ⅱ区遺構5 埋没	瓦葺	板	口縁部～高台部	約25%	内面ミガキ幅：0.15m・底、外面ミガキ幅：0.1m・やや密、見込ミガキ幅：0.15m・格子状、口縁部は口縁部と底に密着、口縁部はしっかりとした作り付け高台、高台内面粘砂層有り
784	—	図版54	682	631	Ⅱ区 H7-h6、7 東半	Ⅱ区遺構5以下 第9層系土層 第11層系土層 青灰色粘砂層	Ⅱ区遺構5 埋没	瓦葺	板	口縁部～高台部	約10%	内面ミガキ幅：0.1m・やや密、外面ミガキ幅：0.1m・やや密、見込ミガキ幅：0.1m・連続状、口縁部内面に粘砂層有り、口縁部はしっかりとした作り付け高台、高台内面粘砂層有り
785	—	図版54	683	647	Ⅱ区 H7-h6	Ⅱ区遺構5 埋没	Ⅱ区遺構5 埋没	土師器	体部～底部 (高台部)	高台部 100%	内面ミガキ幅：0.1m・密、口縁部～体部欠損のため不明瞭、見込ミガキ幅：0.15m・ジグザグ状、口縁部はしっかりとした作り付け高台、高台内面粘砂層有り	
786	—	図版54	684	647	Ⅱ区 H7-h6	Ⅱ区遺構5 埋没	Ⅱ区遺構5 埋没	土師器	体部～底部 (高台部)	高台部 100%	内面ミガキ幅：0.1～0.15m・やや密、口縁部～体部欠損のため不明瞭、見込ミガキ幅：0.15m・ジグザグ状、口縁部はしっかりとした作り付け高台、高台内面粘砂層有り	
787	—	図版54	685	636	Ⅱ区 H7-h6	Ⅱ区遺構5 埋没	Ⅱ区遺構5 埋没	瓦葺	板	口縁部～体部	約20%	内面ミガキ幅：0.2m・やや密、外面ミガキ幅：0.2m・底、見込ミガキ幅：0.4m・連続状、沈積無し
788	—	図版54	686	663	Ⅱ区 H7-h6	Ⅱ区遺構5 埋没	Ⅱ区遺構5 埋没	土師器	皿	口縁部～底部	約20%	口縁部内湾みに立ち上がる、内湾丁寧な作り、底部外面未調査
789	—	図版54	687	663	Ⅱ区 H7-h6	Ⅱ区遺構5 埋没	Ⅱ区遺構5 埋没	土師器	皿	体部～底部	約25%	底部～口縁部にかけてやや内湾みに立ち上がる、底部中央部口縁部～底に密着、底は胎土粘砂層有り
790	—	図版54	688	663	Ⅱ区 H7-h6	Ⅱ区遺構5 埋没	Ⅱ区遺構5 埋没	土師器	小皿	口縁部～底部	約20%	底部～口縁部にかけてやや内湾みに立ち上がる、口縁部内湾丁寧な作り、胎土精良
791	—	図版54	689	668	Ⅱ区 H7-h6	Ⅱ区遺構5 埋没	Ⅱ区遺構5 埋没	土師器	皿	口縁部～体部	約5%	口縁部やや内湾みに立ち上がる(胎土不明瞭)、丁寧な作り、胎土精良
792	—	図版54	690	668	Ⅱ区 H7-h6	Ⅱ区遺構5 埋没	Ⅱ区遺構5 埋没	土師器	小皿	口縁部～底部	約25%	口縁部内湾みに立ち上がる、内湾丁寧な作り、底部外面内湾ミガキ幅：0.15m・底、外面ミガキ幅：0.2m・底、見込ミガキ幅：0.4m・連続状、沈積無し
793	—	図版54	691	668	Ⅱ区 H7-h6	Ⅱ区遺構5 埋没	Ⅱ区遺構5 埋没	瓦葺	板	体部～底部 (高台部)	高台部 100%	口縁部～体部欠損、見込ミガキ幅：0.25m、貼り付け高台はしっかりしているが内湾した感じに低い
794	—	図版54	692	669	Ⅱ区 H7-h6	Ⅱ区遺構5 埋没	Ⅱ区遺構5 埋没	土師器	皿	口縁部～底部	5%以下	底部～口縁部にかけてやや内湾みに外反して立ち上がる、内湾丁寧な作り、胎土精良
795	—	図版54	693	664	Ⅱ区 H7-h6	Ⅱ区遺構5 埋没	Ⅱ区遺構5 埋没	土師器	皿	口縁部～底部	約5%	口縁部はやや外湾みに立ち上がる、丁寧な作り、胎土精良
796	—	図版54	694	669	Ⅱ区 H7-h6	Ⅱ区遺構5 埋没	Ⅱ区遺構5 埋没	瓦葺	板	口縁部～体部	約15%	内面ミガキ幅：0.3m・やや密、外面ミガキ幅：0.2m・やや密、沈積無し

粉河寺遺跡 出土遺物一覧 I・II・III区

保存率は、主に表示できた部位での割合

No. 23

遺物番号	探検番号	写真図版	実測図版	出土遺物図版番号	地区 取上区分	遺構面 敷地面 地層層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	保存率	備考
797	—	図版54	695	664	Ⅱ区 H7-46	第Ⅴ面 ——	153機脚 腰形北側半部 埋土一括	瓦器	甕	底部 (高台部)	高台部 約40%	見込みが半端、0.15~0.2m、見込みグザグザ線文 か?。しっかりとした貼り付け高台で断面は逆三角 形を呈する
798	—	図版54	696	665	Ⅱ区 H7-g・h6	第Ⅴ面対峙以下 青灰色粗砂礫層	——	土師器	皿	口縁部~底部	約10%	口縁部2段のヨコナデで腰やかに外反して立ち上 がる。腰部に浅めのユビオナズナ有り
799	—	図版54	697	665	Ⅱ区 H7-g・h6	第Ⅴ面対峙以下 青灰色粗砂礫層	——	土師器	皿	口縁部~底部	約5%	口縁部3段のヨコナデで腰やかに立ち上がる。底部 は逆転糸切り
800	—	図版54	698	665	Ⅱ区 H7-g・h6	第Ⅴ面対峙以下 青灰色粗砂礫層	——	土師器	小皿	口縁部~底部	口縁部 約30%	口縁部は外反ぎみに立ち上がる。胎土精良。破片の ため調整不明瞭
801	—	図版54	699	667	Ⅱ区 H7-h6	第Ⅴ面対峙以下 青灰色粗砂礫層	——	土師器	小皿	底部~底部	約30%	口縁部欠損。腰部は丸みを帯びている。内面丁寧な ナデ。胎土や粗

粉河寺遺跡 I・II区出土遺物(金属製品・木製品)一覧

保存率は、表示できた部位での割合

No.

遺物番号	探検番号	写真図版	実測図版	出土遺物図版番号	地区 取上区分	遺構面 敷地面 地層層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	保存率	備考
486	図65	図版55	M1	673	Ⅱ区 H7-46	第Ⅰ層床 竹藪跡埋रण	機械部用時 調査区南壁敷地	金属製品	長刀	完存	100%	全長78.1cm(刃部40.3cm・柄部37.8cm)、刃部最大幅 3.0cm、刃部厚み0.6~0.85cm、背幅4~0.7cm、 鍔、口金に富士土と雲・松の彫刻。刃の反り角 度12°
487	図65	図版55	M3	23	Ⅱ区 H7-48	第Ⅰ面 ——	7土坑一括	金属製品	キセル瓶口	完存	100%	全長8.2cm、断面径1.2cm~0.5cm、瓶口径0.7cm、内 側に木質残存
488	図65	図版55	M2	564	Ⅱ区 H7-e・f6	第Ⅱ面 地層層位	111部基礎 112大走り直下	鉄製品	無形鉄製品	完存	100%	全長15.9cm、断面：0.8×1.3cm~0.6×1.0cm、重量 81g、先端鈍角に尖る。断面長方形。遺存状態不 良
489	—	図版55	M5	78	Ⅱ区 H7-48	——	第4土層床 敷地土	銅銭	——	完存	100%	「皇永通寶」初鑄1038年(北米)、径2.5cm、厚さ0.1 cm・口0.7cm、重量2g。破損のため原本取れず
490	図65	図版55	M6	445	Ⅱ区 H7-46	青灰色粗砂礫層	第Ⅱ面 敷地土	銅銭	——	完存	100%	「皇徳元寶」初鑄1004年(北米)、径2.4cm、厚さ0.1 cm・口0.65cm、外径0.2cm、重量3g。遺存良好
491	図65	図版55	M4	11	Ⅱ区 H7-47	第Ⅰb面 ——	20上部部基礎 高台の部	銅銭	——	完存	100%	「皇永通寶」、径2.5cm、厚さ0.15 cm・口0.65cm、外径0.25cm、重量5g
492	—	図版55	M7	133	Ⅰ区 H7-47	第Ⅱ面 南北サブトレ	61下部部基礎 中込め一括	鉄滓	——	不明	不明	長さ10.3cm、幅5.2cm、厚さ4.9cm、重量306g
493	図66	図版55	W1	350	Ⅱ区 H7-m7	第Ⅴb面 ——	98E柱穴	木製品	門柱柱材	基礎部	不明	全高(23.3cm)、直径16.0×18.4cm、穴幅5.8cm、高 6.8cm、奥行17.5cm、芯部空洞化。縦溝：クリ、表面 に朽蝕の欠。断面ノコギリの痕有り
494	図66	図版55	W2	351	Ⅱ区 H7-m7	第Ⅴb面 ——	98W柱穴	木製品	門柱柱材	基礎部	不明	全高(19.5cm)、直径13.5×15.0cm、穴幅6.2cm、高 1.2cm、奥行13.3cm、芯部一部空洞化。縦溝：クリ、 表面は特に加工痕が観察できない
495	図66	図版55	W3	670	Ⅱ区 H7-46	第Ⅴ面 ——	151機脚	木製品	機脚柱材	下半部	不明	全高(58.0cm)、直径18.4×19.0cm、基部部直径16.0 ×17.0cm、半部直径10.0~4.5cm、長さ2.0~5.0cm、縦 溝：ヒノキ、表面は高さ35cm位まで手で削られて いる。基部はノコギリで切った後半部で切断か
496	図66	図版55	W4	671	Ⅱ区 H7-46	第Ⅴ面 ——	153機脚	木製品	機脚柱材	下半部	不明	全高(68.5cm)、直径18.0×19.0cm、基部部直径17.0 ×17.5cm、半部直径13.3~8.0cm、長さ1.0~5.0cm、縦 溝：ヒノキ、表面は高さ36cm位まで手で削られて いる。木の中心ではなく層を使用
497	—	図版55	W5	603	Ⅱ区 H7-46	第Ⅴ面対峙以下 青灰色粗砂礫層 第Ⅰ層床埋रण 土含む	121~123 遺跡右側直下	木製品	縦溝?	——	100%	直径6.1×短径5.8cm、重量は水分を含むため未計 測。縦溝：不明

(17 頁) 図6 I 区の基本層序1 (H7-t・u8 調査区南壁断面土層) 層序(層名) 記録対応

第1層系表土

1 10YR3/3 暗褐色細砂 φ 0.2～0.5 cmの礫、φ 3～4 cmの礫を少量含む

第2層系整地土

2a-5 2.5Y5/4 黄褐色細砂 φ 3～4 cmの礫を少量含む

第3層系a 整地土 (第3層系整地土上位)

139 (1) 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂 炭化物を僅かに含む、φ 0.2 cm程度の礫を中量、φ 1～3 cmの礫を少量含む

140 (4) 5YR6/6 橙色細砂 炭化物を少量含む、φ 1～2 cmの礫、φ 4 cm程度の礫を極少量含む

141 (13) 5YR4/3 にぶい赤褐色細砂 炭化物及びφ 0.5～0.7 cmの礫を少量含む

161 5YR4/6 赤褐色細砂 φ 2～3 cmの礫を少量含む、堅く締まる

162 5YR5/6 明赤褐色細砂 φ 1～1.5 cm、φ 3～4 cmの礫を少量含む、堅く締まる

163 2.5YR5/8 明赤褐色細砂 粒度はシルトに近い、炭化物を少量、φ 3 cm程度の礫を極少量含む

第3層系b 整地土 (第3層系整地土下位)

164 7.5YR5/8 明褐色細砂 φ 0.5～1.5 cmの礫を中量、φ 2～3 cm礫を少量含む、堅く締まる

111 2.5YR6/6 橙色細砂 2.5YR6/6 橙色シルトをブロック状に少量、φ 0.3～0.5 cmの礫を中量、φ 1～1.5 cmの礫を少量含む

6 2.5YR5/4 にぶい赤褐色細砂 φ 0.5 cm程度の2.5YR5/8 橙色の細砂塊を少量、φ 3 cm程度の礫を極少量含む

第4a層系整地土

143 (23) 2.5YR6/8 橙色細砂 φ 0.1～0.2 cmの礫を少量、5YR6/8 橙色細砂をブロック状に少量含む

144 (8) 10YR5/2 灰黄褐色細砂 φ 0.1～0.5 cmの礫を多量、φ 3～4 cmの礫を少量含む

145 (11) 10YR2/1 黒色炭化物 炭化物から成り、粘性がある

129 5YR6/8 橙色細砂 瓦片を少量、φ 1～1.5 cmの礫を少量含む、堅く締まる

201 5YR7/4 にぶい橙色シルト φ 0.5～1 cmの礫を中量含む

第4a層系整地土

146 (28) 5YR6/8 橙色細砂 φ 0.3～0.5 cmの礫、φ 3～4 cmの礫を少量含む

第7層系a 整地土 (第7層系整地土上位)

147 (7a) 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂 φ 0.5～0.8 cmの礫を少量、φ 1～3 cmの礫を中量含む

148 (7b) 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂 φ 0.5～0.8 cmの礫、φ 1～2 cmの礫を少量含む

149 (7c) 2.5Y5/3 黄褐色粗砂 φ 1～2 cmの礫を僅かに含む

166 (7g) 5YR4/2 灰褐色シルト 10YR6/2 灰黄褐色シルトを少量含む、粘性がある、炭化物・φ 1～3 cmの礫を少量含む

第7層系b 整地土 (第7層系整地土下位)

150 (7f) 2.5YR5/4 にぶい赤褐色細砂 灰黄褐色 (10YR6/2) のシルトを少量含む、粘性がある、炭化物・φ 1～2 cmの礫を少量含む

167 7.5YR6/4 にぶい橙色細砂 φ 2 cm程度の礫を極少量、炭化物を少量含む

134 5YR5/6 明赤褐色細砂 φ 1～2 cmの礫、φ 10～15 cmの礫を極少量含む

8a 5YR6/1 褐色シルト 2.5YR5/8 明赤褐色シルトをブロック状に少量、φ 0.3～0.5 cmの礫を少量含む

151 (37a) 5YR6/2 灰褐色細砂 炭化物・5YR6/2 灰褐色シルトを少量含む、やや粘性がある

第8層系整地土

152 (63) 5YR6/4 にぶい橙色シルト 長さ1 cm程度の炭化木片を少量含む、やや粘性はあるが堅く締まる

168 5YR5/3 にぶい赤褐色細砂 φ 0.8～1 cmの礫を少量、φ 2～3 cmの礫を極少量含む、5YR5/3 にぶい赤褐色シルトを一様に中量含む、粘性がある

169 5YR4/8 赤褐色細砂粗砂 φ 1～1.5 cmの礫を中量、φ 3～4 cmの礫を少量含む、堅く締まる

第9層系堆積土

202 (68a) 10R5/6 赤色細砂 10R5/6 赤色シルトを一様に中量、φ 4 cm程度の礫を少量含む

153 7.5YR6/3 にぶい褐色シルト

154 (68b) 10R3/41 暗青灰色シルト φ 1～2 cmの礫・木片等を少量含む

第11層系堆積土

155 (77b) 10G6/1 緑灰色細砂 水平方向に微妙な色の違いがみられる

(71) 10GY5/1 緑灰色シルト 均質で 10GY 5/1 緑灰色細砂を均一に少量含む、粘性あり

第12層系堆積層

156 (77d) 5R4/1 暗青灰色シルト 炭化物を中量含む

第13層系堆積層

157 (74) 7.5YR6/3 にぶい褐色シルト 7.5YR6/3 にぶい褐色細砂を均一に少量含む、粘性あり

(17 頁) 図7 I 区の基本層序2 (7-0・m7 調査区南壁断面土層) 層序(層名)記録対応

第1層系表土

1 (1a・1b) 10YR3/3 暗褐色細砂 ϕ 0.2~0.5 cmの細礫を少量、 ϕ 3~4 cmの礫を少量含む

第2層系整地土

2a-1 (2a) 2.5Y5/4 黄褐色細砂 ϕ 0.5~0.8 cmの礫を中量、 ϕ 3~4 cmの礫を少量含む

2b (2b) 2.5Y5/3 黄褐色細砂 ϕ 0.3~0.5 cmの礫、 ϕ 3~6 cmの礫を少量含む

第3層系a 整地土(第3層系整地土上位)

2c (3a) 2.5Y5/3 黄褐色細砂 ϕ 1~2 cmの礫、 ϕ 4~6 cmの礫を中量含む、炭化物を含み堅く締まる

3c-2 2.5YR5/4 にぶい橙褐色細砂 2.5Y7/2 灰黄色シルトを斑状に少量含む、 ϕ 1~2 cmの礫を少量、 ϕ 5~8 cmの礫を僅かに含む

3c-1 (3a) 10YR5/6 明黄褐色細砂 ϕ 0.3~1 cmの礫・ ϕ 5~8 cmの礫、炭化物を少量含む

第3層系b 整地土(第3層系整地土下位)

3f-1 (3b) 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂 ϕ 0.5~0.8 cmの礫を少量含む、炭化物を少量含む

3f-2 2.5YR5/6 橙褐色細砂 炭化物・ ϕ 0.5~0.8 cmの礫を少量、 ϕ 1~3 cmの礫を中量含む

3f-3 5YR5/4 にぶい赤褐色細砂 ϕ 1~3 cmの礫を中量含む、非常に堅く締まる

3h 2.5Y5/3 黄褐色細砂 ϕ 0.5~0.8 cmの礫を少量含む、堅く締まる

3i 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂 ϕ 2~3 cmの礫、2.5YR/4 淡灰色シルトをブロック状に中量含む、やや粘性あり、堅く締まる

第4a 層整地土

4 (4) 7.5YR5/3 にぶい褐色粗砂 ϕ 0.5~0.8 cmの礫を中量、 ϕ 3~4 cmの礫を僅かに含む、締まりがなくもろい

5 5YR5/8 橙褐色シルト ϕ 0.5~2 cmの礫を少量、 ϕ 3~5 cmの礫を僅かに含む、粘性があり炭化物を僅かに含む

第4層系b 整地土(第4層系整地土下位)

6 (4b) 7.5YR5/4 にぶい褐色細砂 7.5YR6/2 灰褐色シルトを斑状に少量含む

第5・6層系整地土

7 (7b) 5YR5/4 にぶい褐色細砂 炭化物・ ϕ 1~2 cmの礫を少量含む、やや粘性がある

9a (8) 7.5YR5/4 にぶい褐色細砂 粘性なし、炭化物を少量含む

9b (10) 7.5YR5/4 にぶい褐色細砂 9a層に比べ粒度は小さい、 ϕ 0.3~0.5 cmの礫を少量含む

21 2.5YR5/4 にぶい赤褐色細砂 2.5YR6/2 灰赤色シルトを斑状に中量含む、 ϕ 0.3~0.5 cmの礫を僅かに、 ϕ 0.5~0.8 cmの礫を少量含む

第7層系整地土(西側の区画では第8層系整地土)

9d 7.5YR5/4 にぶい褐色細砂 炭化物を僅かに含む、やや粘性あり、 ϕ 4~5 cmの礫を少量含む

22 (14・16) 5YR5/4 にぶい褐色細砂 炭化物・ ϕ 3 cm程度の礫を少量、 ϕ 10 cm程度の礫を僅かに含む、5YR5/4 にぶい褐色シルトを一塊に中量含む、粘性がある

第8層系整地土

23 (18) 10YR5/3 赤褐色シルト 10YR5/3 赤褐色シルトを一塊に中量含む、 ϕ 0.5~1 cmの礫を僅かに、 ϕ 2~3 cmの礫を少量含む

24 (27) 5BG5/1 青灰色細砂 ϕ 0.3~0.5 cmの礫、 ϕ 3~4 cmの礫を少量含む、やや粘性あり、締まりがない

第9層系堆積土

25 (20a) 5BG5/1 青灰色細砂 水平方向の帯状に比較的粒度の粗い細砂が混入する、炭化物を少量含む

26 (20a) 5BG5/1 青灰色シルト ϕ 0.5 cm程度の礫を少量、 ϕ 5 cm程度の礫を僅かに含む、粘性に富む

第11層系堆積土

27 (22) 第11層系b 堆積土 10R5/1 赤灰色粗砂 10R5/1 赤灰色細砂を中量、 ϕ 1~2 cmの礫を多量に含む、もろく締まりがない

35 第9層系堆積土下位と第11層系堆積土上位が混在 5BG5/1 青灰色細砂 ϕ 5 cm程度の礫を僅かに含む

31 第11層系c 堆積土 5BG2/1 青黒色シルト 土器等の遺物を多く含む、炭化物・ ϕ 3 cm前後の礫を少量含む

第12層系堆積層

29 (24) 5BG6/1 青灰色細砂 植物遺体をわずかに含む均質な細砂。

第13層系堆積層

28 (23) 5BG5/1 青灰色細砂 5BG5/1 青灰色粗砂を少量含む、 ϕ 0.5~1 cmの礫を中量含む

30 (25) 5BG5/1 青灰色粗砂礫 ϕ 2~3 cmの礫を多量に含む

200 5YR2/3 黒褐色シルト 細砂及び粗砂、 ϕ 2~3 cmの礫を中量、木片・有機分を多量を含む

(18 頁) 図 8 II 区の基本層序 (I7-f・g7 調査区南壁断面土層) 層序 (層名) 記録対応

第1層系表土 (第1面以後の表土・盛土)

1a-1 (1a-1) 10YR5/3 に近い黄褐色細砂 木片・砂利等を含み土色は様でない

1a-2 (1a-2) 10YR3/1 黒褐色土 細砂を多量に含む腐植土・竹根等を多く含む

1b (1b) 10YR3/3 暗褐色細砂 竹根が極めて多く入り込む

第2層系整地土

1c 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂 竹根等の影響で土色はやや濁る、瓦片・ ϕ 1.5～2 cm の礫を少量含む、粘性がなくもろい

1k 10YR6/6 明黄褐色細砂 粘性はなく均質な細砂・竹根等の影響で暗く濁る部分が多い、 ϕ 3～5 cm の礫を僅かに、 ϕ 7～8 cm の礫を少量含む

2p 2.5Y7/4 浅黄色細砂 2.5Y 8/2 灰白色シルトを部分的に僅かに、 ϕ 8～9 cm の礫を少量含む、シルトに近くやや粘性あり

2q 2.5Y6/8 明黄褐色細砂 ϕ 0.4～0.5 cm の礫を少量、 ϕ 1.5～3 cm の礫を多量に含む

2r 10YR5/6 黄褐色細砂 ϕ 1～2 cm の礫・瓦片を少量、2.5Y8/2 シルトを斑状に少量含む

第3層系整地土

3a (3a) 2.5Y7/3 浅黄色シルト シルトを主体として細砂・粗砂が混入する、炭化物・ ϕ 3～5 cm の礫を少量含む、やや粘性があり堅く締まる

第4層系 a 整地土

3b-2 (4c) 2.5Y6/4 に近い黄色細砂 炭化物・ ϕ 1 cm 程度の礫を少量含む、やや粘性がある

3 (3) 2.5Y5/1 黄灰色細砂 ϕ 1～2 cm の礫を少量含む、 ϕ 5～10 cm の礫を少量含む

第4a層

4a (4a) 5Y6/2 灰オリーブ色細砂

第5・6層系整地土

27 (道構) 5Y6/3 オリーブ黄色細砂 ϕ 0.3～0.5 cm の礫を少量含む、やや粘性があり堅く締まる

5a (5a) 10YR5/4 に近い黄褐色細砂 炭化物、 ϕ 1～2 cm 礫を少量、 ϕ 4～5 cm の礫を僅かに含む

5b (5b) 2.5Y5/4 黄褐色細砂 炭化物・ ϕ 3～5 cm の礫を少量、 ϕ 0.5～1 cm の礫を中量含む

5c (5c) 2.5Y5/1 黄灰色シルト 細砂を多量に含む、炭化物を多量に含む部分がある、 ϕ 1～2 cm の礫を少量含む、粘性がある

7b (7b) 5R5/1 青灰色粗砂 細砂を中量、 ϕ 5～8 cm の礫を多量に含む

7c 5R5/1 青灰色シルト 均質で ϕ 2～3 cm の礫を少量含む

7e-1 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト

34 2.5Y5/1 黄灰色シルト 細砂を多量、 ϕ 3～4 cm の礫を僅かに含む、粘性があり堅く締まる

第7層系整地土 (第8層系)

26 (6b) 5Y7/3 浅黄色シルト ϕ 3～4 cm の礫を少量、 ϕ 5～8 cm の礫を僅かに含む、やや粘性がある

6c (6c) 10YR5/1 褐灰色細砂 ϕ 7～8 cm の礫を少量、炭化物を僅かに含む、部分的に 5R5/1 青灰色細砂を含む、やや粘性があり堅く締まる

25 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂 ϕ 3 cm 程度の礫を僅かに含む、やや粘性がある

24 2.5Y6/6 明黄褐色細砂 特に粒度の小さい砂粒から成り均質である、炭化物を僅かに含む

6h (6h) 10YR5/4 に近い黄褐色細砂 炭化物を僅かに含む、粗砂・ ϕ 1～2 cm の礫を少量含む、 ϕ 8～10 cm の礫を僅かに含む、やや粘性があり堅く締まる

31 10YR6/2 灰黄褐色粗砂 ϕ 0.5～2 cm、 ϕ 3～4 cm の礫を少量、細砂を少量含む、やや粘性があり堅く締まる

第9層系堆積土

203 10YR6/1 褐灰色粗砂

23 10YR6/1 褐灰色粗砂 均質で、木片を僅かに含む

7e (7e) 5R5/1 青灰色細砂 均質な細砂

第11層系堆積土

22 10YR6/1 褐灰色粗砂 ϕ 1 cm 程度の礫を僅かに含む、均質で、木片を僅かに含む

29 5R5/1 青灰色細砂 礫を多量に含む

28 10R5/1 青灰色細砂 均質な粗砂で、礫を多量に含む

7d (7d) 5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト 有機物を少量含み、粘性に富む

河川堆積層 第12層以下

7n (7n) 5GY4/1 暗オリーブ灰色細砂 均質な細砂

7h (7h) 10R5/1 青灰色粗砂礫 ϕ 1～3 cm の礫・粗砂から成る、 ϕ 4～5 cm の礫を少量含む、もろい



写真 55 南紀補陀落山粉河寺四至伽藍之図 (粉河寺蔵)



図 79 「南紀補陀落山粉河寺四至伽藍之図」トレース図
(原図大高康正氏)
(図中の○番号は、表 9 に対応)

四至伽藍図	参詣要案日本	「粉河寺日記」
1 堂男藤井石①		
2 松井②	松井	
3 風市社③	風市社	
4 風市地④	風市村	
5 伏拝島堂⑤	伏拝赤名島堂	
6 杉原岳⑥	水原岳	
7 南山龍門寺⑦	松右衛門山	
	御成川	
8 鐘廻行宮⑧	鐘廻行宮	
9 鐘所芝⑨		
10 玉里勾欄宮⑩	玉里勾欄宮	
11 安奈見村⑪	見見村	
12 井田村⑫		
13 紀川⑬	紀川	
14 藤嶋⑭		
15 弁才天⑮	大弁天社	
16 東野村⑯	東野邑	
17 若一王子社⑰		
18 水無川⑱		
19 大津坂⑲	大津坂	退転
20 地蔵堂⑳	地蔵堂	退転
21 野馬堂㉑		
22 天海山㉒		焼失後復建(天神社)
23 地蔵堂㉓		
24 廻馬陀山㉔		
25 真福寺㉕		
26 小室井㉖		
27 鐘廻東西村㉗	鐘廻里	
28 千光寺㉘	千光寺・女人礼所	
29 大日堂㉙		
30 祇名寺㉚	祇名院	
31 天照大神宮㉛	伊勢大神宮	焼失後復建
32 中山寺㉜		
33 西川㉝		
34 大門横㉞	大門横	退転(反轉)
35 ワクヤノ井㉟	ワクヤノ井	
36 十穀坊㊱	十穀坊	退転(穀屋・大勢屋)
37 十王堂㊲	十王堂	退転
38 新念仏堂㊳	新念仏堂	焼失後復建
39 經子御所㊴	經子社	焼失後復建
40 大門御所㊵	大門	退転
41 河除庵来寺㊶	極楽寺	
	大門	
42 岸本八王子御所㊷		
43 弘法谷㊸		
44 堂光院㊹		
45 弘法堂㊺		
46 切抜不動堂㊻		
47 猿田山㊼		
48 南山弁才天㊽		
49 菩提谷㊾		
50 真徳坊㊿		
51 地蔵堂㉑		
52 御成院陀堂㉒		退転
53 真徳堂㉓		退転
54 菩提院陀堂㉔	菩提山	
55 粉河㉕	粉河	
56 岩井㉖	岩井	
57 宇原無量寿院㉗	宇原無量寿院	退転
58 赤陀堂㉘		退転
59 唐門㉙	唐門	退転
60 鐘廻㉚	鐘廻堂	退転
61 多宝所㉛	多宝塔	退転
62 重男堂㉜	重男堂	
63 揚徳井㉝	揚徳井	
64 馬蹄石㉞	馬蹄石	
65 御地㉟		
66 出現地㊱	生身菩薩出現地	
67 春日㊲	春日社	退転
68 大弁天㊳	大弁天祠	退転
69 八幡㊴	八幡宮	退転

70 鐘廻㊵		
71 圓華堂㊶	圓華堂	退転
	食堂	焼失後復建
72 香殿㊷		退転(庫裏)
73 土蔵㊸	宝蔵	退転
74 西谷㊹		
75 西光庵㊺		
76 圓華堂㊻	圓華院	
	香蘭陀山	
77 不動堂㊼		退転
78 御供所㊽		退転
79 蓮花院㊾		
80 法花三昧堂㊿		退転(法花堂行堂)
81 常行三昧堂㉑		
82 開眼堂㉒	開眼堂	
83 通靈谷㉓		
84 法花院陀堂㉔		退転
85 中門㉕	中門	退転
86 鐘樓㉖	鐘樓	焼失後復建(鐘樓堂)
	新能井	
87 湯洗板㉗	湯洗板	
88 寄掛板㉘	寄掛板	
89 礼堂㉙	礼堂	焼失後復建
90 東塔㉚	東塔	
91 金堂㉛	金堂	焼残
92 光明地㉜	光明地	
93 孔子古祠㉝		
94 調御井㉞	調御井	
95 羅土地㉟	羅土地	
96 菊之坊㊱		
97 西塔㊲	西塔	退転
98 (井の図像)㊳	山井	
99 丈六阿弥陀㊴		退転(阿弥陀堂)
100 投行者堂㊵	投行者堂	焼失後復建(行者堂)
101 神興會㊶		
102 斎院㊷		
103 見砂門堂㊸	見砂門堂	
104 圓華堂㊹	圓華堂	
105 千手堂㊺	千手堂	焼残
106 宝輝地㊻	宝輝地	
107 神神㊼	多寶祠	焼失後復建(多寶大明神)
	拝殿	退転
	北野大講堂	
	白山大権現	退転(白山権現社)
108 一言主㊽	一言主社	
	拝殿	退転
109 吉野㊾	吉野大権現	退転(六社権現社)
110 熊野㊿	熊野大権現	退転(六社権現社)
111 若一王子㉑	若一王子権現	退転(六社権現社)
112 丹生㉒	丹生大明神	退転(六社権現社)
113 天照大神宮㉓	天照大神	退転(六社権現社)
114 三官余社㉔	三官余社	退転(六社権現社)
115 徳法堂㉕		
116 馬塚山㉖	馬塚山	
117 旧徳法院㉗		
118 彌陀堂㉘	彌陀堂	焼失後復建・半焼残
119 浄土院陀堂㉙		退転(浄土院)
120 菩提院陀堂㉚		退転(菩提院阿弥陀堂)
121 春日社㉛		退転
122 赤陀堂㉜		
123 長束院㉝		退転(長束寺阿弥陀堂)
124 法水院㉞	法水院	
125 千手堂㉟		
	蔵経閣	
126 福寿弁天祠㊱		退転(弁財天社)
127 興濟神社㊲		
128 光尾㊳		
129 月待寺㊴	月待寺	
130 猪狩村㊵	猪狩村	
	藤井	
	大休山見谷	
131 智度庵㊶		
132 矢倉山㊷		
133 気蔵社㊸	気蔵寺八幡宮	
134 中津河村㊹	中津河村	

表9-1 「南紀補陀落山粉河寺四至伽藍之図」トレース図文字注記対応表1
(原表大高康正氏) (表中の○番号は、図9に対応)

135	極楽寺勢陀堂◎		
136	門川井才天佛	大升天	
137	丹生社◎		
138	光仁市院◎		
139	北畠山崎寺◎	五本松	
140	中院谷◎	葛城横恒	
141	遠藤院◎	遠藤院	
142	釈迦堂◎	釈迦堂	
143	北宮院◎		
144	不動堂◎	不動堂	
145	東宮院◎		桃矢後假建（東宮坊）
146	東別所谷◎		
147	下丹生村◎	丹生谷村	
148	三尊寺◎		
149	勢陀堂◎		
150	東門坊◎		
151	中ノ才地蔵堂◎		
152	宝蔵塔◎		
153	雷神◎		
154	上丹生村◎	丹生谷村	
155	護摩堂◎		
156	阿弥陀堂◎		退転
		智書山	
157	丹生社◎	丹生社	
158	光明院◎		退転
159	大升天西佛		退転
160	本山◎		退転
161	御供所◎		退転
162	曾面金剛◎		
163	丹生大明神◎	丹生社	退転（二社内一社假建）
164	八王子社◎		退転
		川原里	
165	権尾◎	権尾	

表 9-2 「南紀補陀落山粉河寺四至伽藍之図」
 トレース図文字注記対応表 2
 （原表大高康正氏）
 （表中の○番号は、図 79 に対応）

【引用・参考文献】

今後の調査の活用に資するために、現時点での既往の調査報告書を中心に粉河寺遺跡に係る文献及び当報告書を作成するに当たり引用並びに参考にした文献を列記しておく。文献一覧は、町域合併以前の那賀郡旧粉河町を主に作成した。

【粉河寺に関する調査報告書・報告】

和歌山県教育委員会 1978.03 『紀の川用水水路予定地内遺跡発掘調査』『紀の川用水建設事業に伴う発掘調査報告書』松下 彰 和歌山県教育委員会

和歌山県教育委員会 1980.03 『紀の川用水建設事業に伴う発掘調査報告書Ⅱ』辻林 浩・松下 彰 和歌山県教育委員会

宗教法人粉河寺 1996.03 『名勝 粉河寺庭園 粉河寺六角堂 史跡名勝建造物緊急修復事業概報』（編集）財団法人和歌山県文化財センター（発行）宗教法人粉河寺

宗教法人粉河寺 2002.09 『重要文化財 粉河寺大門 修理工事報告書』（編集）財団法人和歌山県文化財センター（発行）宗教法人粉河寺

仲原知之 2002.09 『附章 第三節 防災事業に係る発掘調査』『重要文化財 粉河寺大門 修理工事報告書』（編集）財団法人和歌山県文化財センター（発行）宗教法人粉河寺

和歌山県教育委員会 2004.03 「6. 名勝粉河寺庭園／粉河寺遺跡」『和歌山県埋蔵文化財調査年報—平成14年度—』和歌山県教育委員会

和歌山県教育委員会 2005.03 『和歌山県埋蔵文化財調査年報—平成15年度—』和歌山県教育委員会

和歌山県教育委員会 2006.03 「4. 粉河寺遺跡」『和歌山県埋蔵文化財調査年報—平成16年度—』和歌山県教育委員会

（財）和歌山県文化財センター 2006.12.02 「粉河寺遺跡現地説明会資料」

和歌山県教育委員会 2007.03 「5. 粉河寺遺跡」（地点表示のみ）『和歌山県埋蔵文化財調査年報—平成17年度—』和歌山県教育委員会

（財）和歌山県文化財センター 2007.05 「粉河寺遺跡の発掘調査」佐々木宏治『（財）和歌山県文化財センター年報2006（平成18）年度』（財）和歌山県文化財センター

（財）和歌山県文化財センター 2008.02 『粉河寺遺跡 一長屋川砂防環境整備工事に伴う発掘調査報告書—』佐々木宏治（財）和歌山県文化財センター

和歌山県教育委員会 2008.03 「9 粉河寺遺跡」『和歌山県埋蔵文化財調査年報—平成18年度—』和歌山県教育委員会

和歌山県教育委員会 2009.03 『和歌山県埋蔵文化財調査年報—平成19年度—』和歌山県教育委員会

（財）和歌山県文化財センター 2010.06 「粉河寺遺跡の発掘調査」土井孝之『（財）和歌山県文化財センター年報2009』（財）和歌山県文化財センター

土井孝之・寺西朗平 2010.06 「粉河寺遺跡の調査」『地宝のひびき—和歌山県内文化財調査報告会—』資料集（財）和歌山県文化財センター

【論考・報告・その他】

1695 「粉河寺境内絵図写」（元禄8年）『粉河町史 第三巻』

1838 『紀伊国名所図会 第三篇 巻之一』（天保9年）

和歌山県史編纂委員会 1983 『和歌山県史 考古資料』和歌山県

元興寺文化財研究所 1982 『高野山発掘調査報告書 奥之院・宝性院跡・東塔跡・大門』元興寺文化財研究所

- 平凡社 1983.02「粉河寺」『和歌山県の地名』日本歴史地名大系第31巻 株式会社平凡社
- 菅原正明 1989.03「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集 国立歴史民俗博物館
- (財)和歌山県文化財センター 1991.03『西田井遺跡発掘調査報告書—一般国道24号(和歌山バイパス)建設に伴う根発掘調査—』土井孝之・佐伯和也ほか (財)和歌山県文化財センター
- 御坊市遺跡調査会 1991.03『小松原Ⅱ遺跡(湯川氏館跡)発掘調査概報Ⅶ』久貝健ほか 御坊市遺跡調査会
- 水島大二 1993.09「寺を守った城砦群—根来寺と粉河寺—」『摂河泉文化資料』第42・43号 摂河泉文庫
- 高木徳郎 1998「中世粉河寺の寺内組織とその再編—天英本『粉河寺日記』の検討を通じて」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』43—4号
- 和歌山県史編纂委員会 1994『和歌山県史 中世』和歌山県
- 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1995.03『日置荘遺跡 分析・考察編—近畿自動車道松原さみ線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書—』(財)大阪文化財センター
- 水島大二監修 1995.07『定本・和歌山県の城』株式会社郷土出版社
- 粉河町 1998『粉河町史 第三巻』(編集)粉河町史編さん委員会(発行)和歌山県那賀郡粉河町
- 粉河町 2003『粉河町史 第一巻』(編集)粉河町史専門委員会(発行)和歌山県那賀郡粉河町
- 仲原知之 2003.08.21「粉河寺遺跡の発掘調査について—平成13・14年度防災事業に係る調査—」紀伊考古学研究会 例会発表資料
- 仲原知之 2003.08「粉河寺遺跡の遺構・遺物について—平成13・14年度の発掘調査から—」『紀伊考古学研究』第6号 紀伊考古学研究会
- 粉河町教育委員会 2003.12『粉河鉤物—粉河町内に分布する作品—』(編集)粉河町文化財保護審議委員会・粉河町障害学習課
- 仲原知之 2004.08「和歌山県の井戸・埋桶—報告書からの基礎分析—」『紀伊考古学研究』第7号 紀伊考古学研究会
- 岩出町教育委員会 2005.01『根来寺坊院跡—根来公園墓地西駐車場工事に伴う発掘調査報告書』窪田雅秀・西口朗弘 岩出町教育委員会
- 北野隆亮 2005.08「和歌山平野における瓦器の分類と変遷—紀伊型瓦器碗の認識とその評価—」『紀伊考古学研究』第8号 紀伊考古学研究会
- (財)和歌山県文化財センター 2006.12.02「～西国三十三箇所観音霊場 第3番札所 粉河寺を歩く～」『粉河寺遺跡現地説明会—第4回歩いて知るきのくに歴史探訪—』(財)和歌山県文化財センター
- (財)和歌山県文化財センター 2006.12.02「粉河寺遺跡現地説明会資料」(財)和歌山県文化財センター
- 鳴海祥博 2006.12.02「粉河寺 巡礼の造形」『粉河寺遺跡現地説明会—第4回歩いて知るきのくに歴史探訪—』(財)和歌山県文化財センター
- 岩鶴敏治 2006.12.02「粉河寺粉河鉤物」『粉河寺遺跡現地説明会—第4回歩いて知るきのくに歴史探訪—』(財)和歌山県文化財センター
- 高木徳郎 2008『日本中世地域環境史の研究』校倉書房
- 岩鶴敏治 2008.03「粉河鉤物と鉤物師の系譜」平成18年度 文化財研究発表Ⅱ『きのくに文化財』第41号 社団法人和歌山県文化財研究会

- (財)和歌山県文化財センター 2008.03『和歌山城跡—和歌山地方・家庭裁判所増築工事に伴う発掘調査報告書』川崎雅史 (財)和歌山県文化財センター
- 寺西弘弘 2008.07『粉河寺創建に関する史的背景』『和歌山地方史研究』55 和歌山地方史研究会
- 新谷和之 2009.03「11 粉河寺」『和歌山城郭研究』VOL.8「特集Ⅰ 2008年度調査報告 岩出市・紀の川市(北部)・かつらぎ町(旧花園村)の城館跡」和歌山城郭調査研究会
- 海津一朗研究代表 2009.03『中世根来の内と外』平成18～20年度日本学術振興会 科学研究費補助金「中世都市根来寺内周辺における荘園景観の復元研究」(研究代表 海津一朗)課題番号18520496 和歌山大学教育学部海津研究室発行
- 海津一朗 2009.03「序 中世根来における聖地・都市・荘園—地域の中の根来衆—」『中世根来の内と外』平成18～20年度日本学術振興会 科学研究費補助金「中世都市根来寺内周辺における荘園景観の復元研究」(研究代表 海津一朗)課題番号18520496 和歌山大学教育学部海津研究室発行
- (財)和歌山県文化財センター 2010.06『田辺城下町遺跡—元町新庄線外1線道路改良事業に伴う発掘調査報告書』川崎雅史 (財)和歌山県文化財センター
- 〔展示図録・参詣曼陀羅文獻〕
- 和歌山市立博物館 2002.10『参詣曼陀羅と寺社縁起』〃02秋季特別展(第25回特別展)和歌山市立博物館
- 大高康正 2005.12『粉河寺参詣曼陀羅考』『絵解き研究』第19号 絵解き研究会
- 大高康正 2005.12「南紀補陀落山粉河寺四至伽藍之図」トレース図「粉河寺参詣曼陀羅考」『絵解き研究』第19号 絵解き研究会
- 〔陶磁器文獻〕
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1984『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館
- 長崎県窯業試験所 1985.06『波佐見古陶磁文様集』肥前波佐見焼振興会
- 大橋康二・西田宏子監修 1988.10『古伊万里』別冊太陽 日本のこころ63 平凡社
- 大橋康二 1998.03『古伊万里の文様』理工学社
- 大橋康二ほか 2000.02『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』九州近世陶磁学会
- 大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター 2007.02『近世丹波焼の研究』研究報告第3号
- 〔瓦研究文獻〕
- 元興寺文化財研究所 1982『中・近世瓦の研究—元興寺編—』財団法人元興寺文化財研究所
- 織豊期城郭研究会 1994『織豊期城郭の瓦』織豊期城郭資料集成Ⅰ 織豊期城郭研究会
- 市本芳三 1995.02「12. 瓦」『概説 中世の土器・陶磁器』編集:中世土器研究会 発行:真陽社
- (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996.03『木村捷三郎収集瓦図録』編集:(財)京都市埋蔵文化財研究所
- 河内一浩 1998.08「吉備・観音寺の豊雄考—有田郡内古代末から中世瓦の系譜と編年—」『紀伊考古学研究』創刊号 紀伊考古学研究会
- 山崎信二 2000『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊 奈良国立文化財研究所
- 市本芳三 1995「第3章 日置荘遺跡出土瓦の分析」『日置荘遺跡—近畿自動車道松原さき線および府道松原大津線建設に伴う発掘調査報告書—』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 川戸章寛 2000「粉河寺大門の屋根瓦について」『(財)和歌山県文化財センター年報1999』(財)和歌山県文化財センター
- 武内雅人 2002.09「附章 第四節 第一項 粉河寺大門瓦の属性分析」『重要文化財 粉河寺大門 修理工事報告書』(編集)財団法人和歌山県文化財センター (発行)宗教法人粉河寺

山崎信二 2008『近世瓦の研究』奈良文化財研究所学報第78冊 奈良文化財研究所

〔歴史・地理他文献〕

小池洋一・水田義一他 1980.03『歴史の道調査報告書（Ⅱ）－南海道・大和街道他－』（社）和歌山県文化財研究会編集 和歌山県教育委員会発行

中野榮治・額田雅裕他 1996『紀の川－水の歴史街道－』紀の川水の歴史街道編纂委員会編集 建設省近畿地方建設局和歌山工事事務所発行

海津一朗・額田雅裕他 2002『紀ノ川流域堤防井堰等遺跡調査報告書Ⅰ（橋本市・伊都郡編）』和歌山井堰研究会

中野榮治・池田潤治他 2003『定本 紀ノ川・吉野川－母なる川 その悠久の歴史と文化－』郷土出版社

海津一朗・額田雅裕他 2004『紀ノ川流域堤防井堰等遺跡調査報告書Ⅱ（那賀郡編）』和歌山井堰研究会